
Eastern-Cursed-Man **【東の呪われた男】**

Lolo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E a s t e r n - C u r s e d - M a n 【東の呪われた男】

【Nコード】

N 1 1 3 0 T

【作者名】

L o l l o

【あらすじ】

刀を持つことで受けた呪いを解く為に裏社会の巨大組織に身を置く青年の話。

現代チックな舞台で、日本らしき国も登場しますがフィクションでファンタジーなのでお気になさらず……。

【残酷な描写あり】は付けないつもりでやってきたのですが、どうも残酷になってきたので「あらすじ」変更と共に付け加えます。

基本、正義とは程遠いダークヒーロー系です。……最近、丸くなってきた疑惑もあり（苦笑）。とうとう100話を超えてしまいました

た。
まあ、お気軽にどうぞ
www
www
www

戦士昇級試験（前書き）

主人公はレピュスですが、S K Y（拙作）のレピュスとは全く別物ですので……。

戦士昇級試験

「はあ……」

金髪の青年は目の前の豪華な建物……リキニウス公爵邸を見て息を一つ吐いた。民家が一つか二つは悠に入りそうな前庭には春らしく花々が規則正しく咲き誇る。今も庭師が働いている昼下がりの庭園の先に見えるのは大理石がふんだんに使われた白く輝く城のような邸宅。

今日ここで開かれる戦士昇級試験を受ける為、まだ18の青年レピュスはここにやって来た。

身体はあまり大きい方ではないが、その目を見ると本当に18歳か、もう成人しているのでは？ と思えてくる。黒い切れ長の瞳は、簡単に身には付かないような強い、真っ直ぐとした光に満ちていた。

戦士昇級試験は近年取り入れられたシステムであり、その成績で上から一の位、二の位、三の位……そして十の位まで実力が階級付けられる。年齢、性別その他一切関係無いトーナメント戦で模擬試合が行われる。それに勝ち進むほど、試験官に実力をアピールし、高位の等級を受けるチャンスが増える。

邸宅の前には、ざっと100人はくだらない人数が揃っておりレピュスのような若者は、いくら年齢制限が無いとはいえ殆ど見当たらない。試験の常連と思われる、逞しい男達が一堂に会していると云ってもいい。

『来たくなかった……』

これがレピュスの率直な感想である。しかし、やむを得ない事情の

為、そうは云ってられない。その事情というのも、彼の憂鬱の原因の一つなのだが。

『取り敢えず、三の位の等級は得ないと』

「受験者の皆様、入場を開始してください」

時間が来たようで、公爵邸の門が開かれる。

気合いのこもった声があちらこちらから上がり、レピュスは帰ってきた。

広い庭をぞろぞろと受験者が進む。

試験……というか試合は、公爵邸の中庭と裏庭で行われるとのこと。流石はこの街……もしくはこの国一の金持ちの家である。

公爵邸は二棟あり、前庭、南棟、中庭、北棟、裏庭となっている。

公爵邸には彼らの家族と使用人の他、戦い（観る方だが）好きの彼に気に入られた戦士たちが住んでいる。番兵として働く者もいれば、そうでない者もいる。週に一度、その戦士達が中庭で模擬試合を行うのを公爵はいつでも楽しみにしているそうだ。

そんな彼が、優秀な戦士を捜したいが為に作ったとさえいえるこの試験。開始から20年と経っていないが、今や様々な仕事で戦士としての等級は重視されている。

レピュスにはどうしてもしなければならぬ仕事があるのだが、

彼は今、等級を持っていない為その仕事が出来ない。

その仕事の依頼人は三の位以上の実力者を要求しているのだ。

ここで肝心なのが、その仕事はレピュスのやりたい仕事ではなく、やらなければならない……もっと云ってしまえば、不本意の内にやるハメになった仕事だという事だ。

通り抜け出来るようになっていた南棟を抜け、中庭に戦士達が並ぶ。

そこに、品の良い黒のスーツを着た男が現れる。

「戦士の皆様、よくぞお集まりいただきました。

わたくし、試験の進行を公爵より承りました、ロンディーネと申します。

これより皆様には番号をお引きいただきます。

トーナメント表は既に作成しております故、御自分の番号をご確認なさったらA、B、C、Dブロックそれぞれの会場に分かれていただきます。明日、明後日は予選を行い、3日後は各ブロック一位通過者による総当たり戦を行います」

順に、前の方にいた者から大きな正方形の箱の中にある番号が書かれた白い、球体を取っていく。

レピュスも何とか箱まで辿り着き、番号を取った。

「……34番」

自らの気持ちのごとく、半端な番号である。

人の流れを目で追い、トーナメント表とその前に座っている何名かの係員を見付けた。彼らに申告するらしい。

のろのろと、誰かにぶつからないように進むと大方、表が埋まっていた。「こつちの世界」に入って戦線に立つようになってから、まだ数年の自分に見覚えのある名前は少ないと思いつつ、ざっと眺める……と、あった。レピュスだから知っていたのではない。……「こつちの世界」の人間なら誰でも知っているとさえ云える名前だった。

「嘘だ」

小さく口の中で呟いてしまう。

「“殺し屋ロデオ”だって!?”」

今、「こつちの世界」で1、2を争う程有名な殺し屋。人間離れし

た、まるで馬のような脚力を武器とするから殺し屋ロデオ。本名はだれも知らず、ここにも通り名で参戦するようだ。

『Aブロックか……良かった。ブロックが違う』

相手を殺せば失格となる試験だが、死ななければ何をしてもいいのだ。ロデオと戦った日には、大怪我は確実。ブロックの準優勝くらいになれば三の位はかたいという。だから、レピュスはそれを狙う。化け物だらけの決勝戦まで頑張る気など、毛頭ない。

レピュスはCブロックであった。

戦士昇級試験（後書き）

落ちどころを試行錯誤の状態ですが……きちんと完結させようと思いますので。

謎の女

宿泊施設かよ、と突っ込みたくなつたが、公爵邸に受験者は滞在するようにとの事だつた。無料というところがまた、資金力をひけらかしているようで、どうにも好きになれない……などと考えているのはレピュスくらいだろう。多くは無料で、そこらの施設よりよっぽど豪華な部屋に泊まれる事を素直に喜んでいた。

「ま……いいけどさ」

呟いて、ベッドに仰向けになる。

何の素材で出来ているのか不思議に思えるほど柔らかく、寝心地は最高であるかと予想される。

受験者貸し出し用の部屋なので、特に凝ってはいないがテーブルも椅子もカーテンすらも高級感に溢れる空間。レピュスがもし「普通の」青年なら寧ろ落ち着かず、休めなかったかもしれない。

だが彼は――彼自身は金持ちでも何でもないが――こういった光景に慣れていた。彼の仕事上、莫迦らしくなる程の金持ちはよく見かける。そういう人物の味方になった事もあるし、敵になった事もある。

彼は裏社会で最も巨大な組織の戦闘部門の所属なのだった。

防音効果はあまり無いらしく、夕食後1時間くらいか廊下で話し声が聞こえた。

他人の事にはあまり関わらない主義だが、余りにも頭に来る声だったのでよく話を聞いてしまう。

どうやら、参加者男性が参加者女性を口説いているような。

『……何て、ヒマな奴』

「莫迦にしてるのか」

女が初めて口を開く。冷たい、どこか高圧的な声。

「へへっ、気の強い女は好みだぜ？」

ほら、来いよ！」

『酔ってるのか』

レピュスは思った。何しに来てるんだか、あの男。

「2度云わせるな。男の分際で気安く話しかけるな」

「ああっ!？」

少しやばいか、と思うレピュス。

というか、人の部屋の前で何をやってるんだ。
どっか行ってくれ。

そう云ってやろうとドアを開ける。

「あの、すみませんけど」

次の言葉が出なかった。

「悪かったね。煩かった？」

平然とレピュスを見た女の足下には、完全に気を失っている男がいた。

倒れている男は、見るからに筋骨逞しく、肌の色も浅黒いので起きて立ち上がったなら相当な迫力を持つと思われる。だが、女の方は……。

「なあ、君」

ちよっと心配そうに顔をしかめる彼女は男と正反対だった。

レピュスとあまり変わらない背丈に白い肌。ブロンズの髪はかなり長く、背中辺りまである。

「これ、バレたら失格になると思う？
死んでないと思うんだけどなーあ」

何も云えなくなっているレピュスをよそに、女は気絶している大男をひっくり返した。

前が大きくあいたシャツを着ていた男の腹部に妙な形のアザがある。

「……馬蹄？」

そうとしか考えられなかった。しかも、人の足のサイズくらいの……。

「どうかな？」

「……え？」

「だから、こいつ処分した方がいいかな」

「い……いや、放つとけばいいんじゃない、ですか？」

別に、場外乱闘禁止のルールは無かったし」

大真面目で答えるレピュス。

女はにつこりした。……かなり美人だ。さしものレピュスも少しくきつとした。

「良いこと云うな。気に入った。可愛い顔してるし」

否定はしないが、可愛いというのは18にもなった男に失礼ではないか。確かに、潜入等行う時は変装の中でも女装をして、これがなかなか評判だが……。

「何ていうの？」

「……レピュス」

「ブロックは」

「C」

「別ブロックか。あたしはAブロック」

レピュスは瞬時に思い出す。

「ロデオがいるブロック、ですよ」

すると、相手は意味深な笑みを浮かべる。

「ま、あたしがロデオに負ける事は万に一つも無いから！

じゃあね、また」

レピュスは部屋に戻ってから、名前を聞くのを忘れたと気付いた。
『まあ、いいか』

謎の女（後書き）

ロデオは……荒馬を乗りこなす競技の名前ですが、語呂がいいので、意味はあまり考えないただけると幸いです。

試験開始

翌日、朝9時に集合であった。

Cブロックは裏庭の闘技場に通された。何と、そこには何百名が入れそうな客席まで設置されているではないか。

既に半数以上が席を埋めており、これからはじまる試合に期待し、ざわついている。

レピユスの気分は悪くなる一方であった。

別に、緊張屋ではないし、大勢の前で負けたくないだとかそういう誇りも特には無い。

しかし仕事柄か、他人に戦いを見られるのは慣れておらず、どちらかといえば嫌いだつた。公衆の面前で喧嘩して相手を打ちのめし、喜んでいる奴の気が知れないし、知りたくもないといつも思っていた。

仕方がないから、これも仕事の一環と考える事にした。

ボスの命令だと思えば、大抵の事は我慢できる。

この広い裏庭は四区画に区切られ、C、D各ブロックの2組ずつ、4試合が同時に行われる。

レピユスはCブロックの3組目なので、Cブロックの戦いどちらかが終わったら戦う事になる。

別に興味も無いのだが、Cブロックの1組と2組が両方とも見える位置でレピユスは待機していた。

取り敢えず、Cブロック14名の内3回勝ってブロック準優勝を狙う訳だから、1、2組どちらかの勝者とは戦うことになる。見ておいて悪い事はない。

まず1組目の方だが、何の偶然か1人は昨日、女にボロ負けしていた男だった。機嫌が悪そうなのは、昨日の事が頭に残っているからだろう。

その相手だが、対照的に静かな印象。あれは剣か。

審判から試合開始の合図がかかる。

4試合が同時に始まった。

大きな歓声。

「俺は今、機嫌が悪いんだあつ！ 手加減しねーからなつ！」

安っぽい台詞と共に、例の男が手にしたのは巨大な斧。

バトルアックスとも呼ばれるもので、大きすぎて目立つため殺し屋はあまり好まない。傭兵か何かだろうと、ぼんやりレピュスは考えていた。

その斧を剣士が止めた時、レピュスは少し「おっ」と思う。

抜剣速度はなかなか速く、構えに無駄が無い。シールド権などが無いから判らないが、彼は熟練の剣士、と思える。もしかしたら、既に五以上の位を得ているのかもしれない。

まあ、勝負は決まったなと隣を見る。

こちらにも1人は剣士で、もう1人は短槍を使っている。なかなかレベルの高い戦いで、勝敗はちょっと判らない。

互いの隙を探り合いながら、剣が短槍を弾き、その逆もまたあり…。

「余裕みたいだね」

「……誰？」

レピュスは声を掛けてきた相手を見た。

年は……同じくらいか。亜麻色の髪的青年で、その辺りの女性受け

は良さそうだが男性受けはまずしないであろう、甘ったるい顔に甘ったるい笑みを浮かべている。

「昨日エントリーしてるところを見たけど、レピュスだよね？」

「そうだけど」

「僕はジョウ。次の試合、よろしくね」

「わざわざどーも」

ほんの短い会話だったが、その内に1組目の試合が終わった。結果はレピュスの予想通り、アルフという名らしい30代くらいに見える剣士の圧勝だった。

レピュスとジョウが闘技場に立つと、黄色い悲鳴。

「ジョウ様ーっ！！」

「頑張ってくださいーあい！！」

とか、なんとか。

「人気者だな」

疲れたようにレピュス。

「ギヴアップしておく？」

「都合により、三回は勝たないといけないから」

試合、開始。

「さあ行くよ！」

ジョウが剣を抜き放つ。

レピュスは距離を空けたまま、少し様子を見る。

景気よく斬りかかってきた相手をひらりとかわし、黄色い声をガン無視し、地を蹴って距離を空ける。

「逃げてばかりかい？」

連続的に剣を、思う存分振るうジョウ。

レピュスの中で「使う武器」が決定した。

ジョウの剣を、ほんのぎりぎりのところまで引きつけて避けると背後に回った。

「足は速いね！」

すぐ後ろへ、攻撃に入ろうとした相手――の身体が見事に固まった。
「これは……?!」

「悪いけど、華々しく勝つ気は無くても負ける気も無いから。
ギヴアップしてくれないか？」

レピュスの袖口から手の甲を伝い、伸びているのは透明な糸である。
「くっ……このっ」

「暴れても切れないし、逆に締まる。どうする？」

全く、これ以上の攻撃をする気は無かったが手にクナイ――東の国で使われる黒い鉄で出来た刃物――を手にした。
女性陣の悲痛な叫びは、無視の方向で。

「……ギヴアップします」

「勝者、34番！」

男臭い歓声が上がる。

女達には「何？あの金髪」とか、なんとか云われているが気にしない。

別にレピュスは不細工ではない……どころか、かなり見れる顔立ちなのだが昔から「普通の」女受けが悪い。それは自分が「普通」過ぎるからか、逆にそれから外れ過ぎているからなのかはよく判らない。

もつとも、一切気にしていないが。

次の試合は、4組の勝者、短槍使いのバズという男が相手だった

がこれにもレピュスは余裕で勝った。

同じ手は使わず、今度は割と正攻法でまたギヴアップをさせた。

その日は、そこで試合は中断。

明日は3回戦と、ブロック決勝が行われる。

別に、友人となった者もないのですぐ部屋に戻ろうと思っていたと……。

「レピュス君！」

「……ジヨウ、だっけ？」

何だ、恨み言か？ そう思っていると、そうではなかった。

何というか、キラキラしている。

「君の強さには感動したよ！」

「はあ？」

「1回戦負けは正直悔しいけど……応援してるからね！」

君なら優勝だつて狙えるよ」

レピュスは心底困っていた。

こういうケースは今までに無かった。ここで、あんな戦い方は卑怯だと、罵られた方がまだ対応の仕様がある。

「ええつと……別に優勝する気とか、無くて。三の位さえ、貰えれば」

「勿体ない事を云うなあ！

見た目通り、クールなんだね。その黒い瞳……初めて見たけど、どこの国の出身か聞いてもいいのかい？」

「だめ」

「それは残念！　じゃあね」

レピュスの生い立ち、出身国などを知るのはボスだけだ。

それを隠す為、髪まで染めているし、共通語を必死に、訛りなしで
発音出来るようにしたのだから、こんなところで喋ってたまるかと
いうところだった。

第三試合

その翌日。昨日と同じ会場は、4分されていたのが2分に変わっていた。

右側で第一戦、レピユスとアルフ、左側でDグループの第一戦が行われる。

これにさえ勝てば目標は充分果たした事になるので、レピユスは昨日よりいくらか活き活きとしていた。

組織の戦闘部隊の中でも、暗殺を得意とする部隊に所属する彼にとって、陽の当たる戦いはかなり気分が悪かったのだ。

「君は、随分と戦い慣れているようだな」

アルフが試合前に声を掛けてきた。

「あんたもね……」。

見たところ、そうじゃないのは一組目であんたにボロ負けした奴くらいだ」

「確かにそうか。」

では……本気を出してくれよ」

アルフが日焼けした、精悍な顔に小さな笑みを浮かべるものだから、レピユスとしては苦笑する他なかった。

試合開始。

アルフは遠慮する気も、相手の出方を伺う気もさらさら無いようだ。いきなりトップスピードで剣を振り下ろす。

横に飛んでかわしながら、気を引き締めなければならぬと知ったレピユス。

次々に繰り出される攻撃をかわしつつ、レピュスは2本の短刀を抜いた。剣を止める。

「東の武器が多いな」

「よくご存じで」

剣と刀が弾き合い、両者は距離を空ける。

それから始まった斬撃の応酬、そのスピードにギャラリーは言葉を失う。予選の準決勝とは思えぬ戦いだ。

「ほっほう！ あの人……特に若者は素晴らしい！」

洒落た三つ揃いのスーツを着た、警備兵に囲まれている初老の男。リキニウス公爵、その人だ。

「そうは思わんか？」

隣の兵に、嬉しそうに話しかける。

「知人の、自慢の孫が負けたというから見に来てみたが、どう思う？」

「……両名共に、非常に良い腕を持っているかと」

「そうじゃろ、そうじゃろ」

両名共に、という言葉は無視し、リキニウス公爵はレピュスだけ見ていた。

『ロデオくらいが今回の楽しみかと思つとつたが……』

いやはや、彼とロデオの戦いが観てみたいものだ』

そんな戦闘好き老人の考えには構わず、レピュスは相も変わらずこの戦いにさつさと勝って、さつさと帰るつもりだった。

近距離では、いくらテクニクを持っていようと筋力差でそれが詰められてしまう。アルフは強い剣士だ。

彼、レピュスに云わせれば相手の得意分野が活きる距離で戦うのは

唯の莫迦だ。

大きく、剣を刀でそらし地を蹴って背後に飛び、間合いを広げると同時に刀をしまった。

すぐに距離を詰めようとするアルフだったが、動きを止めた。

「何だ？」

とつさの反応で、剣で払ったが、何が自分に襲いかかってきたのか判らない。

それは、次々に飛んでくる。

「むうつ……」

とうとう、さばききれなくなり、肩に頬に、胴に脚にたくさんの切り傷が出来た。刀で斬ったかのように、ぱっくりと割れる傷口。

レピュスの手元を見て、ようやく正体を知る。

「円形の……刃物？」

「そんなところ」

答えると同時にレピュスが左手を大きく払った。何かが陽光に光る。

アルフはまずいと思ったが、遅かった。刃物ばかりに気を取られていて気付けなかったが、既に罠が張られていた。

網のように、幾重にも交差した糸……透明なワイヤーと云いたくなる程に固く、頑丈な糸にジヨウよりも更にきつく縛り上げられた。

「正攻法だけではないのか」

「寧ろそれ、苦手」

アルフは微笑んで云った。

「ギヴアップだ」

大きな歓声。

こんなやり口で歓声が上がるとは思っていなかったので少し驚いた。

次の試合が始まる、少し前の事。

白い薔薇の絵が描かれた豪華な馬車がりキニウス公爵邸の前に止まった。

「お待ちしておりました、ランカスター嬢」

「“彼”の試合は、まだ残っているのでしょうか？」

馬車から降りたのは、眩しいくらいの白いドレスを着た女。

高く結い上げた茶色の髪には薔薇の飾り。

きりつとした瞳のその顔は、ぱっと見は美しいがすぐに内面の高慢さというか、そういうものが見えてくる。

「はい、第四試合を控えているようです」

「さあ、案内してちょうだい！」

リキニウス公爵邸の使用人に一切の遠慮無く、命令する。

このミティア・ランカスターは大貴族の令嬢であり、レピユスの憂鬱を作りだした張本人である。

予定外

レピユスの次の相手は女だった。

身長はかなり低く、体つきも華奢。こんな子供が何故、という答えは彼女の手の中にあつた。

『杖……魔導師かよ』

既にうんざりするレピユス。

このフリルの白いドレス（これにもうんざりしている）の、女の子は魔導師。

魔導師とは知識として魔導を身につけて扱う人間の事を云う。

生まれつき使える種族もいるが、ごくごく少数である。

「よろしくお願いします」

魔導師にしては年が小さすぎる少女は丁寧にあ挨拶した。

レピユスも一応頭を下げておいた。

相手が魔導を使ったら、即ギヴアップすると心に決める。

実は、今朝早くに成績基準が発表されており、それに依れば確実に三の位は得られる事が判ったのだ。

試合開始。

すぐさま杖をレピユスの胸元に向ける少女、ジュリア。

魔導攻撃を受けるのはまっぴらなので集中はする。一発避けて、危機感を持ったと見せかけギヴアップだ。手順決定。

「サンダー！」

高い声が響いた直後、雷が一本の槍のように突き進む。

横転して避けるも、スピードと背後の壁が崩れる音で判った威力の大きさにぞっとする。

観客もざわついている。今がチャンス。

「すいません、ギヴ」

「レピユスーっ！！ 負けちゃダメですわーっ！！」

魔導少女の攻撃よりも、レピユスはぞっとした。この声……。

『マジ勘弁、こうゆーの……』

ミティア・ランカスターが顔を真っ赤にして叫んでいた。

「お友達ですか？」

ジュリアもぼかんとした表情を禁じ得ないでいる。

「いや」

きっぱり、否定。

「あのさ……狙い外して、あいつ撃ってくんない？」

心の底からうんざりした口調でレピユスは云った。

ミティア・ランカスターがどういう訳かレピユスに一目惚れして、彼が自分の護衛でなければ嫌だと我が儘を云ったところから今回の事は始まったのだ。

「依頼主として命令ですわっ！ 勝ちなさい！！」

うるせー、黙ってろ、この脳内スカスカ女っ！！……と云ってやりたいが、性格的に無理だ。

ただし、せめてもの抵抗で『承知しました、ランカスター嬢』は云わなかった。

「本気を出してくださいますか？」

「……判ってた？」

「ええ。どこでやめようか、ばかり考えてましたでしょ？」

レピュスはうんざりしつつ、刀を抜いた。

昨日とは違い、銘のある刀だ。太陽の光を受けて、刀身が紫色に光を反射する。

「おや、“幻刀 紫水”だ」

客席の最上部で見ていたのは、Aブロックの優勝者――レピュスと初日に出会った女――だ。

片膝を立てて姿勢悪く観戦というか、ただ一休憩してますという調子で座っている。

「гентウって何ですかあ？」

その隣、明らかにサイズの合っていないロングコートを着た子供が問いかけた。深く帽子を被っていて、顔立ちは不明だ。

「東大陸の大業物13工の内1つさ。

幻刀紫水……呪われた刀と、有名だけどあの少年はどうなのかな」
女は簡単に説明を聞かせた。

「じゃあ、あの人は強いんですね」

「そうだね。あたしも、真面目にやしないと負けるかもなーあ」

『魔導を使うひまが……ない！』

ジュリアは焦っていた。魔導で作りだした、光そのものの様な剣で刀と斬り結んでいるが、すぐにボロが出ると判っている。

「……あつ」

剣が空中に弾かれた……と思った時には、美しい紫水晶のように光る刃が首の数センチ手前まで迫っていた。

「ギヴアップ……します」

ぺたん、と座り込んでしまった。

そして驚いたのだが、相手は刀をすぐに収めると手を伸ばして立ち上がるのを手伝ってくれた。

「あ、ありがとうございます」

黒く綺麗な瞳が目前に現れて、どきっとしたジュリアだったがレピュスの方は相手が大丈夫と判ると何も云わず即刻退場した。

『すごく、機嫌悪そう？ 何で、勝ったのに……』

レピュスは、拍手もなにもかもが苛立たしかった。

予定が狂いすぎだ。

Aブロックの表を今朝、ちらりと見たが、あのぶんならロデオは決勝リーグに確実に出る。決勝リーグは総当たりだ。否が応でも戦うハメになる。

今日は、馬に蹴り殺される夢を見そうだった……。

決勝リーグ、開戦

「レピュス！ 素晴らしかったですわーっ！！」

飛びついてくるミティアをヒラリとかわす……訳にもいかない。

「あのですね、ランカスター嬢」

「ミティアとお呼びくださいませ」

「いえ、ランカスター嬢」

レピュスは、脳の血管がストレスで切れないか心配だった。

「俺は三の位を得られれば充分なんです。ランカスター殿が提示なさった条件はそれですから」

ランカスター殿、つまりミティアの父親。

仕事を受けるハメとなったのは、ミティアの所為だが三の位以上を得なければならなくなったのはその父親の所為だ。

娘にとことんまで甘い彼だが、流石に有名な組織の一員とはいえ階級も無ければ出身も不明という者に警護を任せるのは認められないと云った。これで話が終われば良かったが、彼が「三の位以上の実力ならば文句は云わない」などと云ったものだから、今に至る。

「だから、あの試合もこれからの試合も勝つ必要は無いんです」

丁寧言い聞かせるも、べつたりレピュスにくつついたままの貴族娘はこれっぽっちも判っていない。

「私は、レピュスが負けるのは嫌ですわ！」

「あのですね……」

レピュスが、もうこの際だから暗殺してやろうかと思っていると明るい声がそれを止めた。

「お兄ちゃん、ちょっといいですか？」

それは、レピュスを知る由もないが、あの女の隣にいた子供。

「え……あ、ああ、ごめんな、待たせて！」

でことで、ランカスター嬢！ お帰りになっては？

さあ行こうか……ははっ

レピュスは少々、びっくりした子供を押すようにしながら、ミティ
アから離れていった……。

「いや、ごめん……。こっちの都合で」

レピュスは大きな溜息をつきつつ、子供に謝った。

「それで？」

「僕、ロデオの従者のクラウスといいます！」

「ロデオの……！？」

てつきり、噂からロデオとは一匹狼かと思っていたがそうでもなかつたらしい。

「はい！ ロデオはレピュスさんとの対戦を楽しみにしています。
是非その……えっと、幻刀？ を近くで見たいと」

「ロデオは武器なんかに、関心は無いのかと思ってた」

すると少年だか少女だか判らないクラウスは、高い笑い声を上げた。

「あの人は、武器大好きですよ。古今東西の武器の情報には、多分、
こっちの世界でも一、二を争う程聡いと思います」

「へえ……噂とは、随分違うんだな」

レピュスは喋りつつ、変な子供だと思った。

性別不明なところが、ではない。そんな者、大人であっても「こっ
ちの世界」にはたくさんいる。現に、レピュスのボスもそうなのだ。
雰囲気、気配が、どう考えてみても子供のそれではないのだ。あ
の強力な魔導を使ったジュリアにも感じなかった、違和感とさえ云
える、強い気配がする。

「ではこれで！」

「え……このためだけに？」

「レピユスさんが棄権して三の位だけもらって帰ってしまうと嫌だから、だと思えますよ？ 念押しと云いますか」

「待てよ……ロデオと俺って、まさか会ってる？」

「はい！ 初日に」

レピユスはクラウドのたった……と可愛らしい足取りで駆けていく背中を見ながらぼーっとしてしまう。

『まさか、あの人がロデオ！？』

そして翌日。

4人が集まった。

レピユスと、初日に一騒動起こしていた女と、未だレピユスは見ただことのない男2人。

「あの……あんたって、まさかロデオだったの？」

レピユスが恐る恐る云うと、彼女はにっこりとした。

「そう。だから云ったでしょ？ 『あたしがロデオに負ける事は有り得ない』ってさ」

それは確かに、そうなのだが……。

「ん、一回戦の発表だ」

一回戦はロデオ対ゴールドと出された。

「俺か……」

ゴールドはどこからどう見ても逞しい男。だが、瞳はどこか理知的なイメージである。計算型の格闘家……もしかしたら、似たもの同士の対決なのかもとレピユス思った。

決勝リーグは中庭の、昨日まで2つに分けていたのを1つに……つまり倍まで広くした闘技場で行われる。

ロデオとゴルドーが闘技場で向き合う。

女性にしては背が高いロデオも、大男というに値するゴルドーの前では小さく見える。

「あんたがロデオだったとはな！」

「女相手じゃやる気でない？」

すると、ゴルドーはにやりと笑った。

「男だの女だのと考えてる奴は生き残っていけねえさ」

「莫迦じゃないみたいだ」

試合開始。

両者共に、長引かせる気はないらしい。

一気に間合いが詰まる。

ゴルドーが気合いのこもった声と共に拳を繰り出す。それは素早く、威力もある攻撃だった……のだが。

「な……に？」

ピタリと拳が止められた。ロデオが平然と右足を伸ばして、拳を受け止めていたのだ。

すぐ拳を引つ込めたゴルドーの大きな手が赤く腫れている。

そのままロデオは空中に飛び出し、回し蹴り。ゴルドーは腕でガードしたが、何と、耐えきれずに何メートルも弾き飛ばされた。

「ギヴアップ？」

「するかよ！」

立ち上がったゴルドーだが、どうも蹴りをくらった右腕は使い物にならないようだ。

ゴルドーは攻め急ぐのをやめたらしい。
目を細めるように相手の出方をうかがう。

ロデオがにやりと笑う。

はっとゴルドーが身構えた時、彼は既に空中に投げ出されていた。
腹部に強烈な蹴りをくらっていた。本当に「いつの間にか」と、誰も
もが思った速度だった。人間技では無い……。

一瞬、誰もが口を利けなかったが、審判がゴルドーの気絶を確認し、
ロデオの勝利を告げるとようやく歓声が上がった。

レピュスは持論を撤回した。

「計算型の格闘家」同士の対決ではなかった。ロデオに計算などあ
りはしないようだ。彼女が作り上げるのは、力だけがものを云う世
界だった……。

見かけに依らず

次は、レピュスとカルロという者の試合だ。

カルロはDブロックの優勝者なので、記憶を辿ったところ、そういえば見た事あるという結論に至った。本当なら決勝リーグに出る予定など無かったから、他ブロックなど気にしておらずどんな戦いをするか、などは見ていなかったが。

カルロは、随分と痩せた男だ。ゴールドを見ていたから、余計そう思えるのかも知れないが。年は20代だろう。人の好きそうな顔をしている。見たところ武器は持っていないが……。

「君の戦い方は見てましたよ」

につこりと、感じの良い笑みをレピュスに向ける。

「汚い手を使う奴だって？」

「いえいえ。共感しました」

「へえ」

2人が闘技場に降りても、歓声はどこか落ち着いていた。多分、闘技場で顔を突き合わせている2人がどちらも戦いへの意欲が無いからだろう。

レピュスの今までの相手は勝とうと必死だったし、さっきのロデオもクールなものだったが戦いが好きなようで楽しんでいた。

しかし、カルロは寧ろレピュスと同じ感情を持っていそうだった。面倒くさい、どこかで上手いことやめられないか……。という戦士にあるまじき感情。

試合開始。

お互いに殆ど動かず、寧ろ距離を空けている。カルロは、レピュ

スの今までのやり口を見ていたなら当然と云えるしレピュスにしても、試合前カル口の使った「共感」という言葉に着目していた。安易に近付いては、危険だと判断した。

妙な緊張感で闘技場が一杯になった時、僅かな音にレピュスは振り返った。

「これ……！」

レピュスが驚きの声を発したのは、いつ以来か。素早くその場を離れた。

地面が割れて、出て来たのは無数の蜘蛛。

「うーん、耳が良いですね」

……確かに、レピュスのような訓練を受けた者でなければ気付けなかっただろう。そして、知らない内に蜘蛛の餌食に。

時間を使うだけ、不利になる。さらには、かなり痛々しい負けかたをする事になる。

ここまで来たら、真面目にやろうと少し吹っ切れていたのでレピュスはすぐさま幻刀を抜く。

客席がざわめいた。昨日のジュリアとの戦いが広まっていたのだろうか。

「あ、意外です」

カルロはそう言って、レピュスの剣をただ避ける。対抗する刃物などは持っていないのか、それも油断を誘う罠か判らない以上あまりにも距離を詰めるのは賢い選択とは云えない。

「でも、後ろ気を付けて」

判っていた。

黒い塊となって、蜘蛛が宙を舞って襲いかかってきた。蜘蛛は何もしていないのに、もう悲鳴が上がっている。

レピュスも、蜘蛛は嫌いなので柄でないが少し頑張る事にした。

幻刀を一端しまうと同時にカル口、それから大人一人分の大きさにはふくれあがっている蜘蛛の塊から距離を取る。一度地を蹴っただけなのに何メートルも移動したことにはカル口も少し感心していた。レピュスは着地も待たず、上着の下から何かを出して放り投げた。

爆発。

煙のようになっていた蜘蛛の群れは全て灰に変わる。

「何だ今の？」

「爆弾？」

「いつ着火したんだ!？」

人々の驚きには構わず、レピュスは刹那的に動きカル口の背後を取った。

「強いですね」

しかし、ここで終わる相手でもなかった。

とうとう、手持ち武器を出した。

鞭。しかも、鉄の。

「あんたつてさ」

「うーん、ドSですよ」

何て清々しい笑顔で云うのだろうか……。

鞭がレピュスの刀を絡め取る。

力比べなどする気はないのだが。しかし、相手は取り敢えず力技で一番厄介な武器を奪ってしまおうという魂胆らしい。

レピュスは、笑みを何とか堪えた。

柄にもなく、何度も驚かされたが今度は自分が驚かす番だ。

「!」

カルロは目を丸くした。

レピュスが刀を絡め取った武器ごと、彼を背負い投げの要領で投げ飛ばした。鞭も刀から解けて一石二鳥。

「舐めてたろ」

「ええ、非力なテクニク重視のぼっちゃんかと」

悪びれずカルロは答える。立ち上がるが、流石にダメージは小さくないらしい。笑みが引きつっている。

レピュスの組織で、戦闘要員……更には暗殺部隊に入るという事は「何でも出来る」という事。スピード、パワー、テクニク、状況判断、その他様々な能力のバランスが、そして総体のレベルの高さが群を抜いていなければならない。一つの能力に突出しているだけでは、足りない。器用貧乏と称される事があるが、違う。強いて云うなら「器用大富豪」だ。

レピュスは、試合を終わらせようとして、しかし立ち止まった。

全く、嫌な敵だ。気付かなかったら、今までの報いを受けるところだった。もしかしたら、カルロは吹っ飛ばされる時、抵抗は諦めて自分が飛ばされる先を調節したのかもしれない。

客席の者は、多分気付いていない。カルロもレピュスが気付いていないと思っていない。

蜘蛛の糸が、巣のように張り巡らされてレピュスとカルロの間を隔てていた。

刀での攻撃はやめ、クナイを取り出し、投げた。やはり、空中で垂れ下がる。

客席がどよめく。何が起きてるのだと。

「おや、気付いたんですか」

「俺に共感したんだろ？」

「ふふ」

レピュスは、今度は蜘蛛を八つ当たりのように灰と化した爆弾より威力も規模も小さい爆弾を放った。

蜘蛛の巣が焼き切れるには充分だった。

そこへ突っ込み、爆煙が晴れた時にはカルロの首にピッタリと幻刀紫水が突きつけられていた。

「動けば怪我してしまいますね？」

「そうだな」

「では、ギヴアップします」

控えめな歓声が上がった。

誰もが、レピュスに称賛の目を向けるといふより畏れの眼差しを向けていた。

レピュスは、ロデオより目立ってしまった事に今更気付いて後悔したのだった……。

レピュスvsロデオ

その次は、レピュスとゴルドーだったが彼が未だ目を覚まさない……どころか医療師の診断では今日中の復帰は無理との事でレピュスの不戦勝となった。

更に、カルロが「もういいや」と棄権したので、次の戦いはロデオの不戦勝……。何と控えめな決勝リーグだろうか。

そしてとうとう、公爵の待ちに待った、レピュスとしては出来れば避けて通りたい一戦。

「君まで、棄権とか無したよ？」

とんでもなく、美しい笑顔で云われてしまう。

「……だめ？」

「うん。あの、カルロは疲れてたけど君は微塵も疲れてないじゃないか」

「気疲れはしてるけど」

試合前、レピュスとロデオが言葉を交わしている光景を見て、ミティアが苛立っていたのは云うまでもない。

「私のレピュスに馴れ馴れしく……っ！ あの女……！」

という感じで。普通の目からみれば、出場者同士が世間話しているようにしか見えないのだが、目にフィルターが掛かっている彼女には別の光景に見えていた。

……もしかしたら、ロデオの美貌は全世界の恋する乙女に危機感を抱かせるには充分だった、のが原因かもしれないが。

「ま、楽しませてよ」

「買いかぶり過ぎだつて」

「だって君、あの組織の者なんでしょ」

レピユスの目は流石に見開かれた。

「何で知ってるんだ？」

「あたしも、昔、あそこにいた事があつて。独立した訳だけど……。ボスとは仲良しだよ？」

その言葉に嘘は無さそうで、自分でも馬鹿馬鹿しいと思いつつレピユスは嫉妬を覚えていた。ボスと仲良しと断言できる者など、組織に1人か2人いるかどうか……なのに。

勿論、レピユスは違う。他の組織員と同様、一方的に尊敬しているだけだ。

試合開始と同時に、レピユスは大きく距離を空けた。自分から仕掛けるつもりは無い。ガードされてから、至近距離でのカウンターを喰らうのがおちだから。

静かな立ち上がりになるかと思つたが、ロデオは早速仕掛けてきた。
「！」

余りに一瞬で距離が詰められたので、何が起きたか理解したのは刀で無意識の内にロデオの足を止めてからだつた。

客席の者は、レピユスは見切つた上で止めたと思つたのだろうか、そうではない。

本当に見えなかった。

少々、力任せに靴底を弾く。……金属音？

そういえば、ロデオの踏み切つた位置を見ると身体のサイズからは考えられない程、地面がえぐられている。何キロもある、鉄底の靴を履いているのか。それであるスピードとは、恐ろしい。

「今回、一発目を止めたのは君が初めてだ」

ロデオが微笑む。

そりゃそうだろうよ、と思うが口には出さない。
それと、ミティアが煩い。誰か暗殺してくれ、と思うがこれも口には出さない。

さて、どうしたものか。

ロデオの方も、可愛らしく首を傾げてレピュス………というかその手にある幻刀を観察していた。余程、関心があるのだろう。
そんな彼女の期待に応えるなどという気はまるで無いが、一番使い慣れたこの武器でないときつそうだった。

というか、気絶しない程度に攻撃を受けて早いところ、ギヴアップに限る。こんな反射でなければ攻撃に反応できないような相手と戦うべきではない。

ロデオが動いた。

身を翻して、膝を何とか避けても、次の瞬間には反対の脚が振り下ろされている。

左肩に、喰らったが計画通り。

骨は折れていないし、受け身を取るためだが飛ばされた振りもしたから、程よいやられっぷり。貴族の娘は無視の方向で。

よし、客は騙せた。だが………相手は騙せていない。

「ほんと、聞いた通りの子だなあ」

ロデオは不満そうだった。

「じゃあない、この際だから云うけど。

あたしの目的の一つは、あんたの本気を見る事なんだ。頼むから真面目にやって」

「………どういう意味だ？」

すると、相手はぞっとするような笑みを浮かべた。

「云う通りにしたら、後で教える」

性格悪つ……と、顔をしかめたレピュスには構わずロデオはゆつくり一歩近付いてきた。

元組織員で、ボスと“仲良し”、この試験の目的は等級を得る事だけではなくレピュスの实力を見る事も含まれている……。幾ら考えても、判らない。

考えるといつても、高速の蹴りを避け続けている今は大して頭も回らない。

冗談ではないが、彼女はこちらが本気を出すまで決定打を出したりギヴアップが自然となる状況を作らないつもりらしい。事実、最初の牽制のような一撃を除いてはパワーもスピードもかなりセーブされている。観戦者の目には、相も変わらず容赦ない怒濤の攻撃に見えているだろうがレピュスには全て認識できていた。

仕方ない。

このまま、じっとしていても疲れるだけだ。

紫水を一度、鞘に戻して大きく距離を開ける。

この幻刀紫水は、抜刀速度に依って効力が変わる。意のままに調節出来るようになるまでは、4年近く掛かったものだ。

ロデオが再び上段の跳び蹴りを加える。それと同時に、紫水を再び抜きはなつた。

「！」

寸でのところで攻撃をやめて、ロデオは何メートルも引き下がった。「それが……？」

幻刀紫水は、今までより遙かに強い紫色の光を放っている。四角形だった鍔が六芒星の形となり、柄の尖端は蛇の頭、柄そのものには鱗のような紋様が現れた。

その気配は命がけの戦闘をしたことがある者なら、一瞬で判り、そ

して避けようとするであろう強すぎる殺気そのものだ。

「君の殺気じゃないね」

「紫水こいづのもの」

しかし、ロデオはこの期に及んで微笑んだ。
嬉しそうに。

「面白い」

期待以上

本当は、紫水の本来の力を出したくはなかった。何故なら……。

『また“呪い”が強まる……』

もう、肩の辺りに痛みを感じ始めていた。説明が面倒だから、“刻印”が手の甲にまで広がる前に戦いを終えなければならない。

「じゃ、あたしも本気で」

「まだあるのかよ」

ロデオは駆け出……さなかった。

レピュスが斬りかかるとそれをかわし、空中を脚で裂いた。空振りではない。

「!？」

刀で何かを弾いた。どう考えても、刃物を弾いた感覚……。

脚で鎌風を起こすなどという芸当は、魔導師でなければ無理。これは何だ。

次々に、謎の鎌風が繰り出される。あまりに数が多く、さばくの必死で間合いが上手く測れない。

仕方ないので、少し無理をする事にした。とにかく、今の状況はまずい。勝敗より深刻な問題がある。

未だ正体不明の攻撃を、半分はくらいながらも強引に距離を詰める。ロデオが軽々と跳び上がって踵落としを繰り出す。その間、0コンマ1秒もあつたらうか。

動きが止まらない程度に避けて容赦なく刀を下から豪快に切り上げた。

鮮血が飛ぶ。

首近くに喰らった踵落とし。上手く避けたはずだったが、ロデオのパワーは予想以上だったらしい。痛みで目の前が霞んできた。

腰の辺りから肩までの切り傷。背後に上手く逃れたと思ったが、レピュスは予想以上に間合いを計算していたらしい。意外と深い傷を負ってしまった。

一時間後、レピュスは医務室で目を覚ました。

「あ、起きましたね！」

誰だ？

「ちよつと待っててください、呼んできますね！」

誰を？

首を回すと、激痛が走ったが医務室を出て行く者の後ろ姿が辛うじて見えた。クラウド。

勝ったのか負けたのか判らない。殆ど同時に倒れたのだが、彼女が意識を失ったかどうかは、当然の事ながら確認出来なかった。あの場合、多分先に気を失った方が負けで判定不能の場合は引き分けか。試合の勝敗が目的ではないのだから引き分けもありのはず。

「悪いね、大人げなかった！」

妙に元気なロデオがレピュスのベッドの傍らに立った。

「効いてないのかよ」

「あれぐらいはね。昔は何百回も大量出血で死にかけたしさ。

ああ、気にしてないと思うけどあたしは意識を失わなかったから、あたしの勝ち」

何てタフなのだろう……。

「しっかし、君の力は期待以上だ。最近、あたしに怪我させた奴は久し振りだよ」

レピュスは痛む首を庇いながら、上体を起こした。

聞かなければならない事は、きちんと覚えている。

「試合中云ってた、あんたの目的って？」

「うん、もう少し先の話になるんだけど。」

あたし、パートナーを捜してたんだ」

余りにも意外な言葉が出て来た。

人生のパートナーではないという事は、云われずとも判っている。

殺し屋を始めとした、“裏社会”の活動家は複数で動く事が多い。

仕事の便宜上というのもあるし、2人以上でなければ雇わないという依頼人も意外と多いからだ。

「何で俺？ てか、組織を抜ける気は……」

「抜ける必要は無いって。」

ただ、こっちの都合で君の力を借りる事が出来る状態にしたいんだ」
クラウドが口を挟む。

「因みに、聞かれる前に云っておきますけどボクは戦いなんて一切出来ないんです。」

ほんとに唯の、従者ですから」

ロデオは続ける。

「あたしは、事情があって西大陸の宝剣8工の7番目、虹の雫……」

この世で一番美しいとされる剣を手に入れないといけない。

で、君のボスから聞いたけど、君の目的も武器集めなんだって？」

レピュスは思わず顔をしかめた。

「ボスは……どこまで話してる？」

「大したことは聞いてない。」

でもさ、思った訳。さっき見たところ、君の実力は申し分ないとい

うか期待以上。目的も似ているから、情報を共有する価値がある。それから、……これはあたしの都合だけどパートナーがいらないのは何かと不便。

てことで、どうかな？」

質問調だが、表情と声色は命令調だった。

断る事もできるが……。

「あんたは、何か12工の情報、持つてるのか？」

「うん。知りたい？」

言葉にはしないが、交換条件だろうとレピュスは考えた。

悪い話ではない。組織とは関係ない情報を買うには自腹をきらなければならぬし、仲間に個人的な事を頼むのは、余程の事でもなければマナー違反。ロデオの申し出は、確かに渡りに船、なのかもしれない。

「判った。いつから？」

ロデオはにっこりとした。

「君の、これからの任務が一段落したらまた連絡するよ。」

あたしも仕事があるしね。あ、その仕事に一の位が必要だったから来たんだけど」

レピュスは些か驚いた。

「一の位が条件の仕事？」

「うん。ローザバーク家の次男、ジュナス・レオ・ローザバークの護衛」

「へえ……」

驚きで、曖昧な声しか出せなかった。

ローザバーク家とは、ランカスター家が可愛く見える程の力を持った大貴族である。だが、その当主であるローザバーク卿は穏やかで謙虚な事で通っている、まれに見る好人物……らしい。

ランカスター家とは大違いだと、レピュス思った。高慢そのも

のの家系……。

そんな家が、外から護衛を雇うというもの意外だったし、ロデオがそんな仕事に関心を持つのが意外だった。彼女の業績を並べると、どう考えてもぶち壊し業ばかりだからだ。隠密の仕事でも、要人暗殺など物騒なものばかり。

「そっいゃ、お姫様が会いたがってたけど？」

ロデオがにやりとする。レピュスは、首のダメージの所為か心理的ダメージの所為か頭がガンガンした。

「パートナーになった記念に、殺して来てくれないかな」

「高いよ。20万ラグジ」

ラグジはこの世界の中でも、最も多くの国で使われる通貨単位。

レピュスは諦めた。一つの仕事で受け取る給料は、平均して1万ラグジ程。どちらかと云えば僥倖家のレピュスも、ぎりぎりやっていけるかどうかというレベル。寝食住が組織に保障されているので特に不便は無いが。

「ま、兎に角あたしは一の位、君は二の位が貰えるってさ。喜ばしいね。」

どんな仕事でも受けられるよ」

「そりゃ良かった」

これからの仕事を思うと、喜ぶべき事も憂鬱の一部と成り果てる。

組織のボスを通じて、また連絡するからと云い、ロデオとクラウスはさっさと公爵邸を後にした。レピュスもすぐさま帰リたかったのだが、身体がそっいゃ訳にもいかず……。

その日は公爵邸に一泊して、リキニウス公爵の質問攻めに遭うハメになった。

聞いたところに依れば、レピュスと最初に戦ったジョウはリキニウス公爵の知人の孫だそうで彼に勝った事からリキニウスはレピュ

スに関心を持っていたという。また、ランカスター家とも例に漏れず、付き合いがあるそう。ひたすら貴族の付き合いの話も聞かされて、やはりレピュスはうんざりした。

お喋りな老人は我が儘な娘の次に苦手である。

一時帰還

リキニウス公爵邸のある街、ガウスからずっと西に行くと大規模な港町に出る。アーシャというその賑やかな町は世界最先端と云われる技術系会社なども進出していて、国どころか世界の経済の中心となっている。港にはずらりと大型船舶が並び、いつでも諸外国との間を行き来する。高層ビルが所狭しと、みっちり並び、それらが日差しをきつく照り返す。

レピュスの所属する「組織」はこんな町にある。組織を隠すなら大都市の中……という訳だ。

とある商社ビルに入ったレピュス。30階建てのオフィスビル。全フロアがガラス張りとなっていて中は非常に明るい。白い床は清潔感に溢れて、大きな照明器具が活発さを感じさせる。

綺麗に化粧した受付嬢に身分証明書を見せると、広いエントランスホールを突っ切って「関係者以外立ち入り禁止」のドアを開ける。そこで待ちかまえていたのは、大柄な警備員2人。黒いスーツを着て、背筋を伸ばして壁のように狭い通路を塞ぐその2人はレピュスを見ると軽く頭を下げたが、

「番号を」

と、確認もする。

「AS614025」

レピュスの答えた番号を手に行っている薄い長方形の機器に打ち込む。その機器から

「認証完了」

との機械音声が聞こえると警備員2人は改めて頭を、今度は深く下げた。

「ボスがお待ちしています」

「判った。今はどこに？」

「はい。書斎にいらつしやるかと」

レピュスは頷いて、2人が空けた道を進んでいく。

長い廊下の果てに、何の変哲もない白い扉がありそれが「組織」の本部への入り口だ。

「組織」本部は、入り口がこの商社の地下を含め町中に全部で15箇所あり総面積はこの広い港町全土に及ぶ。この商社の真下が最もボスの書斎に近く、またこの近辺にある寮が利用出来るのは組織の上部にいる者のみ。レピュスはその中で最も若い。

新入りなどは、町の果てともいえる場所に寮があてがわれるのでボスへの報告を行うだけでも一苦労となってしまう。

扉の先は、何とも不思議な光景だと初めて入った者は思うだろう。まず、地下という事を忘れる程に明るい。膨大な量の電気が使用されて、屋外で朝と昼の時間はそれ相応の明るさが確保されている。また、夜となれば薄明かりの、いかにも地下という光景になる。

地下という事を忘れそうになる理由はもう一つ。大体、地下の3階分がぶち抜かれており等間隔に太い柱がある以外はまるで屋外を歩いているような錯覚を起こす。2階建てほどのマンションとかアパートがところどころにあって、それは組織員の寮である。どれも白い長方形の建物で、中心部のものとなるとそこらの高級マンションと比べても劣らない立派な部屋となる。

レピュスは、自室に戻る前にボスのところへ行くことにした。ボスの書斎とは、丁度この地下街のど真ん中にあって、書斎というより寧ろ図書館というのが正しい。

唯、そこにあるのは膨大な量の任務書類や“仕事”の関係資料のみだが……。

そこに入るにも、更にセキュリティチェックがある。

頑丈な鉄製の扉に、番号のパネルが付いていてそこに入り口で使用

するのは別の暗証番号を打ち込まなければならない。

レピユスが番号を打ち終え、エンターキーを押すと、しばらくして鉄の扉が左右に開く。完全にレピユスが中に入ると、直ちにそれは閉まる。

中は、外とは反対にいつも薄暗い。1階は資料室なので人気はないし、古い資料も多いので鼻につく独特の匂いもある。この匂いが好きな者もいるのだろうが、レピユスはあまり好きではない。さつさと2階に上がる。

2階は1階と打って変わって、オフィスビルそのものの様な空間となる。明るい印象の、ベージュの壁が続き、磨かれた廊下は真っ直ぐ奥まで一本延びている。廊下を歩くと両側にそれぞれ様々な目的の室がある中でボスの部屋は一番奥にある。この位置を定めたのが初代ボスであり、現ボスは遠くて面倒だから1階入り口に移したなどと愚痴っている。

奥の室の前に立つと、いつでも僅かな緊張を覚える。これは、後1年経つても2年経つても……10年経とうとも変わることは無いと思われる。少なくとも、レピユスは。

このドアだけは、ベージュの空間の中で唯一黒となっているが、それ以外は何の変哲もない見た目。

ノックすると、すぐに返事が来た。

「どうぞ」

声では、女性か男性か判別できない。

「失礼します」

まだ緊張したまま、固い声で云ってドアをそつと開けた。

中は薄暗い。大きなシャンデリアのような照明が天井からさがっているものの、それは照明の役割を余り果たしておらず、どちらか

というとインテリアのようだ。薄暗い部屋の中で、健気に空間を照らしているのは壁に掛けられた燭台。様々な最先端機器や電子ロツクに守られた組織のボスの部屋は、かなり古典的な造りである。木製の床には、黒いカーペットがひかれ、その上に小テーブルと幾らかの椅子が乗っている。部屋の奥には、この室の主がいて大きな書類機の向こうに腰掛けている。余り身体の大きくない人物で、机の上に山となっている書類の所為もあり肩から上しか見えない。

その顔は、声と同様、性別がちょっと判らない。とても綺麗な造りの顔なのだが、人間離れしているというか、余り現実味がない。精巧な造りの彫像だが、制作者が最後まで男を創るか女を創るか決められなかったような……。髪にしても、茶色の肩までの髪はまっすぐ曲のない、男女どちらでも有り得る髪型。

「お疲れ様。二の位だつて？」

その、彼だか彼女だか判らないボスは微笑んだ。

「はい。例の任務は予定通り、行えます」

「残念だったねえ」

「……」

ボスは、お見通しに成功したのが嬉しいようであらうと明るく笑った。こうしていると、普通の若者に過ぎないのだが……。

因みに、ボスの名は誰も知らない。初代から、組織のトップに就くと同時にその名前はあらゆることから抹消されてきた。組織員は誰一人の例外なくボスとだけ呼び、よっぽどの事が無い限り有り得ないが、ボスその人が外界にて働く必要がある場合はその度に異なった偽名が使われる。組織名が存在しない事からも判るが、この組織において固有名詞はかなりの場合で疎んじられる。組織員の間でも、余程親密であるか特に用事がある時以外は名前を呼ばない。しかも、任務中はコードネームを利用する。

また、「レピュス」というのも偽名。本当の名前は本人とボスのみ

が知る。

「明日にでも、ランカスターは君に来て欲しいそうだけど……。万全でない状態で組織員を送り出してミスが生じるとウチの沽券に関わる……という事で、君の任地行きは3日後。

問題のオークションが始まる前日だ」

「判りました」

何も言い返さず、素直に頭を下げる。

組織においてはボスの命令が絶対であって、一切の口答えは許されない。そういう規則がある訳でもないが、誰もこの鉄則を破ろうとはしない。それだけ、組織員にしてはボスという人物は絶対的なものなのである。

少なくともこの組織においては、ボスに従っていれば間違いが無いというのは甘えや油断ではなく常識なのだ。

一時帰還（後書き）

現代風の世界観は初挑戦なので緊張します（笑）。

組織本部は大会にあり、リキニウス公爵邸は「古き良き田舎地方」にあると思います。

回線

目の前が、真っ赤だった。暗いというのに、真夜中なのに赤い色がはつきりと見える。

鮮血が遠くから足下まで流れくる。声にならない悲鳴を上げているのは誰か。

闇に溶けていく、命消えゆくあの人が、それとも自分か。

時がそのまま永遠に止まってしまいそうだった。

止まればいい。止まれば、あの人はこのまま死なずに済む。

永遠に痛みが続くのもしれぬが、死なずに済む。

あの人が生きてくれるなら、自分は……。

窓から、人工的な朝日が差す。レピュスは起きて、額の汗を拭いた。思ったよりも昨日は疲れていたようで、換気扇を回すのを忘れていた。ここは地下の一室だから、換気扇を回さないと蒸し風呂状態になるというのに。

部屋が暑いから、嫌な夢を見たのか。嫌な夢を見たから、体感温度が熱く、苦しいのかは判らない。

とにかく……嫌な夢を見た。

あれは、唯の夢ではないのだ。そう、あれは……。

「起きてるかあ？」

のんびりとした、しかし無駄に大きな声がしてレピュスは考え事を止めた。声の主は、面倒くさい奴で好きではないが今は有り難い。余り、思い出したいくない事を考えてしまうところだった。

「ああ、起きてる」

ドアが開けられた。姿を見せたのは、声の通りに大きくのんびりした印象の男。顔立ちがとにかく、眠気を誘う程のんびりしている。身体も太っているのではないが、丸っこい気がする。顔の所為かもしれない。

「ランカスターから連絡が来てるよ」

「だから、嫌だったんだよな」

彼、サツズは組織の通信関係の部署に所属している。戦闘はからきしだがこの、のんびりした印象に似合わず仕事の手際が良いことで評判が高い。

サツズが面倒くさいのではなく、サツズの持つてくる連絡がいつも面倒くさいのだ。部署の中でも、上役である彼は重要人物との情報のやり取りをすることが多い。「重要人物」の大抵は、レピュスの嫌いな貴族である事は云うまでもない。

「何て？」

「いや、それがさあ……お嬢様が君と喋りたいんだってさ」

「……俺、まだ寝てるから。それで、ぶっ叩かれても起きなかったから」

サツズは、人の好きそうな顔に苦笑を浮かべた。

「そう云うと思って、色々、既に云ったけど……きいきい声で叫んでさ。他の通信の妨げになってるんだよ」

レピュスは、やむを得ず立ち上がった。組織の仕事が滞る事があってはいけない。ミティアの所為だが、自分が出て行けば静かになるなら行くしかない。対面する訳ではないから、いいか。

「いやあ、モテるよねえ君って」

「小指の爪の先ほども嬉しくないけど」

「どうなさいましたか、ランカスター嬢」

「もう、他人行儀ですのね！ ミティアとお呼びくださいませ」

今日も明日も明後日も、永久に他人だろうかと内心で突っ込むレピユスだった。

「何故、早くに来てくださらないのです？ ひたすらお待ちしますのよ」

甘ったるい声で云う。

こんな事の為に、組織の回線を一つ使用中にしているのが非常に腹立たしい。

「ボスの命令です。2日後には参りますので」

「ああ、待ちきれませんわあ」

語尾にハートが付いていそうで、レピユスは電話の先の人間を呪い殺す方法を記憶の底に探した。

『今度、呪いの勉強しよう。絶対』

「あのですね、ランカスター嬢。任務中でないからといって、することが無いわけでもありませんので。私用で組織の通信回線を使うというのは望ましい事ではありませんし」

「あら。お忙しいのですか？ 11時まで眠ってらっしゃったのに？」

レピユスは通信室の時計を見た。確かに、11時。

やばい、寝過ぎた。

「兎に角、失礼します」

「ええ、そんなあ」

レピユスは無礼を承知で依頼人の電話を一方的に切った。

「ほんと、ごめん。回線の無駄遣いもいいところだ」

サツズは微笑笑を浮かべた。

「格好いい奴は、それなりの悩みがあるんだねえ」

「いや別に……」

「僕も女の子からの電話で困ってみたいよ」

レピユスは、口には出さず首をたくさん横に振った。
碌なものじゃないから。

「そう、良かったね」

こちらは、自分から私用で組織の回線を使っている者。

ボスである。相手は、ロデオ。

「あなたが目を付けただけあるね、あの子」

レピユスの話をしていた。

「うん。それだけじゃないんだけど……」。

まあ、話すと嫌な顔されるだろうから云わないけど。レピユスも色々ある子だね」

「それは何となく。東の生まれでしょ？ あの武器……。幻刀紫水をこっちで手に入れるのは至難の業だし」

ボスは小さく微笑んだが、電話の相手には見えるはずが無く唯の沈黙となった。

「いつでも、組織に戻ってきていいよ」

最後にボスはそう云う。

笑い声が聞こえて通信が切れた。

彼女は絶対に戻ってこない。居場所を見付けてしまったから。まだ確定した居場所ではないが、今、その居場所を手に入れる為に全力を尽くしている。少し、羨ましい気もしたが何も云わずにいた。

ランカスター家

「お綺麗ですわ。お嬢様」

侍女達がしきりにミティア・ランカスターを褒め称える。

確かに、彼女の性格をうつとおしいと考えない者ならば骨抜きになる程、今日のミティアは美しかった。純白のドレスはさながら花嫁のような輝きで、高く結い上げた髪 of 艶はいつにも増して眩い。既に紅潮した頬、うつとり夢見るような瞳……。

「あとどのくらいなの？」

「一時間少々とのことですよ」

「ああ！ 早く、早くお会いしとうございます、愛しの我が君……！」

流石に、侍女達も苦笑を浮かべた。

恋人でもない、裏組織の青年にベタ惚れになっている高名貴族の長女……。しかも、彼女達の情報網に依れば相手はひたすら迷惑がつているらしい。

「お嬢様、一体どんな殿方ですよ？」

「それはもう、素晴らしいお人よ。武道に優れ、頭脳明晰、それにとっても精悍なお顔をなさってるの。」

品のない戦士達のように無骨でないし。真面目な方だし、うふふ……

……
うつとり……。

侍女達は、ミティアが衣装室から出て行くと早速うわさ話を始める。

「どんな人なのかしら」

「武道に優れてるということは大柄なの？」

「無骨でないって」

「気さくって事かしら」

「年齢はどうなの、誰か知ってる？」

「若いと聞いたけど」

「お嬢様が、21でしょ？ 25とか、その辺りかしら……」

「ミティア様が年下を好まれるとは思えないしね」

出来上がった偽りのレピュス像は、長身痩躯の精悍な顔立ちをした25歳かそこの好青年、というものだった。小柄で細面の優男、19歳、そして腹黒……とはほど遠い結果である。

「お待ちしておりました」

レピュスと、もう2人が組織から派遣された。どちらもレピュスの同僚、つまり戦闘部隊の中でも本来は暗殺を担当する者達。警護任務など、訓練期間を除けば、資料でしか見たことがない。品の良い老執事が一同を案内する。

「わたくし、執事長のルイと申します。遠路遙々、ご苦労様で御座いました。本日はごゆっくりお休みになられてください」

レピュスと仲間2人は、引きつった笑みを浮かべて頷いた。

ボスは何を考えてか、こういう形式張った世界が苦手な3人を派遣した。まあ、レピュスは仕方ないとしてだが。

屋敷は、リキニウス公爵邸とは違って都会にあるというだけあって横よりも縦に広い。まるで高級ホテルのような玄関ホールは、ピカピカ光る大理石。そこを抜けると、エレベータに辿り着く。

「まず、お部屋にご案内させていただきます」

エレベータが5階で止まり、3人の組織員は廊下に出る。

本当に、ホテルのような部屋数。客室用階なのだろう。白い廊下は長く、両側にずらりとドアが並ぶ。

「こちら、501、502、503号室をご使用いただきます」

3名は鍵を渡され、部屋の中まで案内しようとする執事、ルイに帰って貰うと取り敢えず3人で501号室に入って溜息。

「俺、マジこういうの嫌い」

べえつと舌を出したのは、あちこちに跳ね放題の赤髪の男。かなり背が高いが、相当痩せている。長身痩躯というところか。青い瞳は、猫のような吊り目で鋭いが、どこかに茶目っ気があるようにも見える。軽い口調もそうさせている。名は、ラズという。

「ボスも何をお考えになっただけじゃあるのか」

呟いたのは、ウォーレンという者。黒い長髪で、繊細な顔立ち。瞳は黒というより灰色。痩身っぷりはラズと向こうを張っていて、ラズの体型を等倍縮小した感じ。年齢は、3人同じくらい。

「それにしても、お前が好きってどうなのよ、ランカスター嬢。性格知らんの？」

ラズが半笑いで云う。

「嫌われる努力はしてるんだけど」

溜息のレピュス。

「でも、容姿も家系も申し分ないでしょ。レピュス、婚姻で組織に貢献してみてもどう？ ランカスター家の援助を受ければ、今以上の繁栄が望めるよ」

ウォーレンが恐ろしい事を云っている。

「俺は、ボスの為なら何でもする……けど、例外があつてだな。

兎に角、あの小娘とは根本的に合わない！」

「小娘つても、お前より年上だろ？」

「中身がガキなら、ガキだよ。逆に言えば10歳でも中身が大人なら大人だ」

クラウスを思い出していた。10歳なのかどうかは知らないが。

「そういやさ、ミティアの妹はかなり可愛いらしいぜ」

ラズはこういう話題が好きだ。暇さえあれば、こんな情報を漁っていると言えいえる。

「口説いちゃえ」

ウォーレンが勝手に発破をかける。気が無さそうな云い方だが。

「そこは姉の方に」

レピュスは、殆ど熱心に云う。

「えー。俺、ホラ、性格重視だから？」

「この前はフェミニストに殺されそうな事云ってたくせに」
ウォーレンが肩をすくめた。

そこで……。ノック音。

「まさか来たか？」

ラズがにやりとレピュスを見ます。

「今晚、お誘いあるかもよ」

ウォーレンがくすくす笑う。

それらをきつく、きつく睨んでからレピュスは渋々ドアを開けた。

だが、そこには予想外……というかまだ見たことの無い人物がいた。

「あ……お邪魔でしたか」

可愛らしく首を傾げる。レピュスが表情を戻しきっていなかったの
で、怖かったのだらう。慌てて笑顔を取り繕う。

「あ、いえ……何か」

「わたくし、カレン・ランカスターと申します。ミティア姉様がご
挨拶に行くようにと」

若者達は揃ってぽかーんとしてしまった。

無駄話

名前からしても、髪の色からしてもミティアの妹に間違いはない。間違いはないのだが……。

「あんまり似てませんねえ」

ウォーレンが遠慮せず云った。

高慢を絵に描いたような印象を一目で与えるミティアに対し、カレンは清廉潔白という印象。病気のように痩せた身体で、青いドレスは飾り気が無いものの品が良い。真っ直ぐ長い髪は結わかれず、背中に垂れている。

一番違うのが瞳。これでもかという程、大きくぱっちりとした瞳はまだ、さっき見たレピュスの表情に怯えているのか、そもそも男が苦手なのか潤みかけている。きつき、高慢さとは無縁でぞっとするほど澄み切っている青い瞳だった。

「あ……はい」

ウォーレンの言葉に、何故か表情を曇らせたカレン。勘の良いレピュスは何となく察して、さつさと話を変える。

「カレン様は、ミティア様のように……此度のオークションには興味がおありでないのですか？」

「実は、その事で」

話題が変わった安心を明らかに見せて、レピュスを見た。

「わたくしも、その……姉様が行かれるオークションに同行させていただきますたいのです……ご迷惑でしょうか」

「いいえ。かわいいコは大歓迎ですよ」

ラズが軽口を叩いたので、ウォーレンは遠慮無くその頭を引っばたいて黙らせた。

「我々としては、問題はありませんよ。ね、レピュス？」

レピュスも面倒くさいと思いつつ、頷いた。
かわいいコというのは認めるが、仕事が倍になったようなものだ。
しかし、無下にする事も出来ない。

「ウィツグ様はご了承済みで？」

「はい。父上、それから姉上の方から、行くようにと」

3人で呆れた顔を突き合わせた。

裏社会にほいほいと娘を投げ込む親父というのは、どうなのだろう。
全く、頭が軽くて困る……とまで考えていたのは恐らく、レピュス
だけが。

「判りました」

「あ、あの。それから……」

カレンは少し、緊張で頬を染めて云った。

「わたくしはまだ、皆様より年下としますので。唯、カレンとお
呼び下さい」

驚いたが、3人とも頷いた。

「いやゝ可愛いなあっ」

カレンが出て行くと、ラズが嬉しそうに云う。

「控えめで低姿勢な貴族がいるとは思わなかったなあ」
ウォーレンは頷いた。

「てか、あの目」

ラズはぐつとレピュスに顔を寄せた。

「カレンちゃんまで、お前にお熱だったらどうすりゃいいんだ!？」
「知るかよ、そんなん。気になるなら、口説いちゃえば？」

ウォーレンの台詞をテンションもそのままに引用した。

レピュスとしては、どうして暗殺者が3人も揃ってこんな話をしな
ければならないのか、という気持ちだったので席を立った。彼は5
03号室を使うことになっているので、退室した。

夕食は6時30分からというので、それまで寝ていようと思って部屋を開けると……絶句。

「何をしていらつしやるんですか」

機械的に問う。

完全にめかし込んだミティアが待ちかまえていたのだ。

「お待ちしていましたわあ〜！」

青ざめ、自分に割り当てられた部屋から逃げだそうとしたレピユスにしがみつくミティア。

「すぐにお呼びに行こうかとも思いましたの。でも、皆様とお話しなさっているようでしたから、お邪魔してはいけないと思ってえ」
「……」

レピユスを真つ青に出来るのは、才能と云えるかもしれない。

レピユスが、睡眠でもとって潰そうとしていた3時間、全てミティアのお喋りに付き合わされて終わった。取り敢えず毒針を撃たなかった自分を、レピユスは褒めた。

「お夕食のご用意が……あ」

レピユス呼びに来たメイドが口元をわざとらしく手で覆う。

「あ、どうも」

レピユスはさっさと立ち上がって、ミティアを振り解いて外へ。

「レピユス様〜」

追いつがろうとするミティアだが、レピユスの歩く速度には追いつけない。平然と歩いてますと言いたげに、不自然でないギリギリの早足で歩いていたのだ。

その後、メイド達の間

「お嬢様の恋は脈無し」

という、うわさ話が広まったのは云うまでもないだろう。

会場へ

翌日。三台の高級車がずらりとランカスター家の前に揃っていた。リキニウス公爵邸には馬車で登場したのだが、あれはリキニウス公爵邸が田舎地方にあるから出来た事であり、この町を馬車で通ろうと思っただけなら建物はいくらか薙ぎ倒さなければならぬ。

ランカスター姉妹の乗っている車に、暗殺者3名も乗り込む。運転席にはランカスター家の運転手。助手席にウォレン。三列の座席の内、真ん中に警護するべき2人を座らせようとしたのだがミティアの我が儘が勃発し、真ん中にミティアとレピュス、一番後ろにラズとカレンが座る事となった。

レピュスの心の内は、「面倒くさい」の一言に尽きていたというのは云うまでもないだろう。何とか理由を付けて別の車両に乗りたかったと切に思っている。

「会場までは3時間程です」
運転手が云う。

目的地は、暗黒街と称されるサトウラ街。武器を持たず、または武器を持った者を連れずに脚を踏み入れれば間違いなく毎週行われる闇オークションの一品とされてしまう。石を投げれば無法者に当たる街。

そんな暗黒街のオークションに出たいと、ミティアは云ったのだ。それも、彼女が長年探し求めていた世界一美しいとされる宝石、『人魚の涙』が出品されるからだ。後でレピュス達が本人から聞いた話に依れば、カレンは少しも行きたくないのだが、家に閉じこもりがちな妹を姉が無理矢理引っ張り出したという格好だったとい

う。気の毒に。

そして、約3時間車に揺られて辿り着いた暗黒街。もう夕方になってるのだが、それにしても暗い。街灯は殆どなく、陰鬱な雰囲気を通り。暗い壁色の平屋が建ち並び、幾つもの路地が迷路の様に入り組んでいた。

暗殺部隊の3人にとっては、豪華な貴族邸よりも寧ろ居心地が良かったのだがお嬢様2人とお付きの者達はそうはいかない。明らかな怯えを見せながら、車を降りる。

何故車を降りたかと云えば、単に目立たぬ為だ。

「高級車に乗って、貴族達がごろごろ出てくるなんて、この街の連中にとつては鴨が葱背負って、尚かつ鍋まで持ってきたようなもんですから」

つつけんどんにレピュスが説明した。

それを聞いて、顔をしかめるどころかランカスター家に所属するガードマン達は顔色を悪くした。単なる要人暗殺からの警護ならば、慣れたものだったが右も左も全て敵である空間に自ら足を踏み入れる事など今まで無かったからだ。

平然としているのは、こんなもの慣れっところか暗黒街など自分の庭の様なものである暗殺者3名と、その暗殺者が自分を守ってくれると信じて疑わない、おめでたいランカスター家の長女だけだった。残る者は、当然カレンも含め、今からでも引き返したかった。

「大所帯で歩くと目立ちます。悪目立ちは、命取りですから……。俺達3人と、ミティア様、カレン様で動きます。皆さんは、最大でも4人までの組に分かれて、適度に距離を取りながら付いてきてください。」

話しかけられる事は、まずないでしょうが……万が一、何か聞かれ

たら黙秘するよう指示されているとでも答えておいてください。一番安全です」

幾らか、擬装であるが丁寧な調子を取り戻してレピュスは指示を出した。

カレンを除けば、最も若輩なのだが、最も場数をこなしているのは彼なのだった。ラズも、ウォーレンも今回レピュスが取り仕切る事において一切の文句は無い。仕事が減ってラッキーくらいに思っているかも知れない……。

「それから、最後の注意ですが、固有名詞は使わないように。必要な時は、俺の事はレイ、ウォーレンはウィル、ラズはイラスと呼んでください」

最後にして、最も大切な注意である。

3人は、世間一般にしてみればどこぞの若者達だが、裏社会に一步入れば主要組織のメンバーとして赤丸チェックを受ける身分なのだ。

車を止めたところから、バラバラとなって暗黒街に入る。

「必要以上に口を開かないこと」

レピュスの注意を聞き入れ、来るまでは煩かったミティアもきちんと黙っていたので静かな移動だった。すれ違う者達は、少し不思議がるような目を向けるが、令嬢2人はすっぱり顔をフードに覆っている為、妙に目立つ事にはなっていない。

暗く、ごみごみした通りを進む内に、段々人声が聞こえてきた。

騒々しいとも云える、何十……いや何百もの話し声。

「あれが会場です」

先頭を歩いていたウォーレンが、低い声で云った。

ポツカリと開けた場所にある、巨大なテント。中でサーカスでも出来そうな広さである。しかし、その色はともサーカステントとは間違えようもない。中の一切が見えない、黒い布のテントであった。入り口にはもぎりではなく、窮屈そうに黒スーツを着た、大きいと

いうより巨大な男が2人立ち並んでいる。外で、または中で何か問題を起こすものなら彼らに二目と見られない姿にされることは容易に予想できる。

「招待状を」

レピュスがミティアに囁いた。

頷いて、彼女は真つ白な封筒を取り出した。その封筒の白さは、暗く、黒いこの街のこの場所で異常な姿に見えなくもなかった。達筆で宛名と、差し出し名……サトウラ街オークション実行委員の文字が書かれている。この招待状を手にするには、裏組織として世に憚るか、どこから高額で買い取るかだ。ランカスター家は、財力と権力を行使して（レピュスが思うに、それらの“無駄遣い”をして）手に入れた。

2人の男に、封筒を見せるとすぐに相手は頷いた。サングラスを、この暗いというのに掛けていたのでどんな表情で入場許可を出したのかは判らぬ。まあ、フードを被った娘2人だし、レピュス、ウォーレン、ラズもサングラスを掛けて帽子まで被っていたから相手の様子が判らないのはお互い様だったろう。

とにかく、思っていたよりも無事に入場が出来た。

警護の者達も、恐らくは何ら滞りなく入ってくるだろう。5人は、中間当たりの適当な席を取った。列の左端にレピュス、隣にカレン、次にウォーレン、ミティア、そしてラズ。

説明しておく、3人の中で一番の腕利きがレピュスだから何かあったときに一番動きやすい位置に彼がついた。また、長女のミティアの方が狙われる危険性が高いので通路からなるべく引き離れた、といったところ。

オークションは、まず何事もなく開催した。

カレンの生い立ち

順々に、商品が紹介されていき値札が上げられる。

こんなものだと知っているレピュス達にとつては特筆すべきものなど無かったが、カレンは勿論、ミティアはようやく今回の行動を反省したかもしれない。

特に、美しい身なりと顔立ちの娘が取引された時には小さい悲鳴の様なものを上げかけていた。

「……恐ろしいところ」

隣のカレンの呟きをレピュスは聞いた。

真つ青になっており、今にも倒れそうだ。一瞬迷ったが、ミティア所望の品はオークションの後半に出品される。少なくとも、何か起きるとしたらその後だと思ったので

「少し外に出ますか」

と囁くと彼女は小さく頷いた。

レピュスは小声で素早くラズに耳打ちし、彼が頷くと、会場の外へ出た。

「済みませんでした」

「いいですよ」

カレンはじつとレピュスを見た。

「レピュス様は、ああいったものには慣れていらっしゃるのですか？」

レピュスは苦笑した。

「まあ。ああいうのに、いちいち心を痛めてたらやっていけない商売ですしね。」

買い取り人の中に加わる気はありませんけど」

目玉品の『人魚の涙』が出品されるまでは、後、一時間はあった。沈黙を嫌ってか、カレンはこんな話をした。

「お気づきかもしれませんが、わたくしとお姉様は、半分しか血が繋がっていません」

「そうでしたか」

やっぱりな、というのが心情であつた。

似ていない事よりも、それを指摘された時の表情の変化が不自然だった事から予想していた。

「わたくしは……父上の愛人の子供なのです。

表向きは……誰もがわたくしの存在を許していますが、本当は違います」

何となくレピュスが彼女を見やると、今まで気付かなかつたが治りかけの傷が……髪に殆ど隠れてはいるが、頬に付いていた。誰からかは判らないが、暴力を受けているのかもしれない。

「ですから、今回わたくしに、ここへ行くようにと強く勧めたのはわたくしが、お姉様に何かあつた場合の身代わりになればとお考えになつての事なんです」

「……敬語」

「え？」

「使わなくていいですよ。それから、自分に尽くしてくれない相手に敬意を表す必要、ありませんって」

カレンは驚いて、しばらくレピュスを眺めていたが、やがて小さく笑つた。

さっきまでの痛切な表情でも美しいが、笑うと花が咲いたようになる。こんな暗黒街に、こんな真つ白な花があつてもいいのだろうか。彼女はそれから、頷くとまた笑つた。

「なら……レピュスもそうしてくだ……そうして」

「判つた」

言い直したのがおかしくて、笑んでしまった。

「レピュスが、本当に敬意を表したい相手はいるの？」

「俺のボス。今のところ、その人だけかな」

「素敵な人なのね」

「さあ、どうなんだろう……」

レピュスは目を細めた。

「俺は、あの人の事、何も知らない。

だけど……命の恩人で、俺に生きる目的をくれた人だから。一生かけて、恩を返すつもり」

カレンは羨むような瞳でレピュスを見た。

不義の子である彼女は、万が一の為に人目に触れぬよう、触れぬよう育てられてきた。まるで、籠の中の鳥だ。外へ出される時でも足にはしっかりと縄がぐくられている。家族の愛など、知らない。形式的な面倒はみてもらっている。生きる上での不自由は無い。しかし、心はいつでも不自由だった。顔も知らない、母親を呪った事もあったがその無意味さを知ってからはいより一層、閉じこもるようになった。籠を開ける方法は、探せばあるのかもしれないが、探す気力はどうに失せてしまっている。

「生きる目的……素敵ね」

そっと呟いた。

「わたしは、何のために生きてるか、自分でも判らない。気付いたら、生きていた……それだけ」

無責任な事は云えないし、優しい言葉は柄でないレピュスは時計を見て少し早いが

「中に戻ろう」

と云った。

カレンは頷く。

「俺達は、完全に仕事をこなすから」

「……うん」

「さあ、本日の目玉商品!!」

此の世で最も美しいとされる、最高級のピンクダイヤ……。

『人魚の涙』だっ!!」

大歓声と共に、展示ケースの覆い布が引き剥がされる。

涙のような、雫の形を確かにしているそのダイヤは誰もが今までに見たこともないような大きさだった。

次々に値段が叫ばれる中、ランカスター家の者が

「5億!」

と叫ぶ。

オオオツと、感嘆の声。悔しがる声もする……。

「5億! 何と、5億が出ました!!」

さあ、念のために聞いておきましょう……他に誰か?」

しかし、会場はシンと静まりかえった。

「おめでとうございます! 0231番様、落札です!」

「声出しちゃダメですよ」

ウォーレンがすかさず囁かなければ、ミティアは狂喜の歓声を上げていただろう。

頬がすっかり紅潮し、目が輝いていた。

「ああ……世界最高の宝石が私のものに……」

うつとりと呟く。

レピュス達は、すかさず警戒心を強めた。

こんな大金を出せるのは、そしてこんな無駄遣いをするのはランカスター家くらいしかない事は大抵の者は判っている。ボスも耳にしたという、噂に依るとランカスター家は狙われている。もし、この会場にその手の者がいたとしたら今のでランカスター家の者が会場

に
い
る
こ
と
を
確
信
し
た
だ
ろ
う。
妙
な
動
き
を、
見
逃
し
て
は
な
ら
な
い
……。

襲撃

オークションが終了し、ミティアは所望の品を手にした。
何も起こらなかったのか。
それなら、それでいい……誰もがそう思っていた時だった。

爆発音。

続く、銃撃。

「うわああああっ!!」

あちこちから悲鳴が上がり、一目散にテントから逃げ出す人々。始めからテント内に敵は潜んでいたらしい。数十名が半分は銃を乱射し、半分は剣を手にしている。

「早く出るぞ!」

レピュスが云ったのと同時に、5人はぐるりと囲まれた。

「これはこれは……」

ラズがべつと舌を出す。

武装集団の狙いが判ったからか、パニックは落ち着き始め、とにかくこの場を離れる事に誰もが専念し始めた。集団は、その他の者を取り押さえたり、人質とする気は無いらしく、一向に構っていない。数十名が5人との距離を徐々に詰めてくる。

「ラズ、ウォーレン、2人を頼む」

「了解」

レピュスは二本の刀を抜いた。

銃に対してはリーチで不利があるのだが、銃撃戦になればまず護衛

対象は怪我をする。最悪、死。乱発させるのは防がなければならない。

素早く、躊躇いもなく人の群れに突っ込んだレピュス。

銃弾がかすめるも、驚いた事に彼は確実に致命傷を避けている。

何人もの首から鮮血をほとばしらせ、その身体を蹴倒して後ろの者を倒す。

ラズとウォーレンも、ミティア、カレンをガードマン達に任せると銘々、剣を手にする。彼らは、西洋でよく使われる武器を使用している。

3人は次々に刺客を薙ぎ倒し、ランカスター家のガードマン達も優秀な働きを見せている。

だが、数が数……。

背後の悲鳴にレピュスが目をやると、ランカスター家のガードマン達が軒並み倒されていた。

何が起こったのか、誰がやったのかは判らなかったが、考えている暇は無かった。少し離れて戦っていた3人が一斉に駆け寄ろうとした時。

「はい、ストップ」

それぞれの前に、明らかにさっきまで戦っていた者達とは異なるであろう者が現れた。

「邪魔しないでね」

「仕事の邪魔されてるのはコッチだ」

レピュスは正面に立ちほだから、ひょろりと背が高い、黒い仮面の者……声からすると恐らく男……に斬りかかった。

だが、その男は器用に素早い斬撃をかわすと本人も長剣を手にした。双刀と剣が音を立てて交わる。

時に、火花を散らしながらレピュスと男は一步も退かぬ斬り合いを

繰り広げる。ちらりとレピュスは仲間2人に目をやったが、どちらも自分と同じように目の前の相手に対して余裕が無さそうだった。

「連中をやったのは、お前か？」

「うん。俺とあの2人ね」

「狙いは、ランカスター家か」

すると、男は癪な笑い声を上げた。

「教えてあげな〜い」

その時、とうとうラズとウォーレンが突破された。

2人の男が、ランカスターの2人娘を引っさらって行くと思いきや、どちらもミティアには構わずカレンを強引に抱え上げると走り始めた。

「……何？」

レピュスは意外な展開に顔をしかめるも、悩むより先に手を打った。双刀を投げ捨てると、男をかわしてカレンを連れて行こうとする2人に追いつく。

どういう訳か、レピュスの相手をしていた仮面の者は追ってこない。しかし、レピュスに続くラズとウォーレンを1人で止めている。

2人が追いついてくる事は、無い事を思っただけレピュスは大きく出た。

カレンに心の中で謝罪すると、まず彼女を抱えているため動きが僅かに（小柄な少女一人なので、大した問題ではないようだ）動きが鈍っている一人の足下を蹴り上げ、転ばせる。カレンが投げ出されるが、構っている余裕もなく、もう1人の追撃を左手につけた防具でガードする。転ばされた男がもう一度起きあがるので、すかさず右手をシュツと動かして服の袖に仕込んであるロープを伸ばし、その男を両腕ごと縛り上げる。

しかし、カレンは再び捕らわれ、とうとうテントの外にある車両に

押し込まれた。

『仕方ない』

レピュスは強引にそこに飛び込む。

当然ながら、あっという間に包囲されて両手両足縛られて、カレンの横に突き飛ばされた。

「レピュスとカレン嬢が連れてかれた！」

ラズが云うも、2人にはどうしようもなかった。

「どんどん湧いてくるね」

ウォーレンは何名も斬り倒しても、斬り倒しても終わりが来ない上に消耗してきた事に苛立っていた。刺客達は何人も息絶えているが、味方の方も、もはやラズとウォーレン以外は息絶えている状況。どうしたものかと思っていると、2人の耳に知った声が響いた。

「何してる、ガキ共」

だるつとした口調。此の世の全てがどうでもいいと言い出しそうな声色。

しかしラズとウォーレンには今、この状況でこれ以上に喜ばしい声は無かった。

「何でここに!？」

「先輩……」

ラズとウォーレン……そして、今はいないがレピュスの先輩。つまり、組織の暗殺部隊でも特に強い……組織最強と呼ばれる人だった。

銀髪の彼は、ルカという。驚く程、背が高いが寧ろ細い体つき。無表情で冷たい顔は、美しい彫像のようだ。

「お前らは、即刻、組織に連絡とりなさい」

ルカは平然と、背後から飛びかかってきた男の刃物を蹴り弾いて云った。

「ここは全部、俺に任せていいよ」

相変わらず、だるつとした喋り方で刃物を弾いた男の首を手刀で薙いだ。相手はガクリと倒れる。

ラズとウォーレンは目礼して、その場を去った。

掴めぬ意図

刺客達は、一瞬でルカとの彼我の差を感じ取り、恐怖で動けなくなっているミティアを人質としようとした。だがルカは見逃さなかった。

ミティアとその背後の男との間に、刹那的に動いて滑り込むと、長い脚で男のあごを蹴り碎き、横から迫ってきたもう一人には低い姿勢のままナイフを腹部に突き刺した。力任せに抜くと、首を裂いて留めとする。

「たった一人だ、全員でかかれ！」

初めて、刺客達の誰かが声を上げた。

残りはたったの6名にまで減っていた。その6名が一斉に襲いかかってくる。悲鳴を上げるミティアをルカは何と、手荒に投げ飛ばして右手の長剣と左手の鉄のグローブで攻撃を防いだ。

『どうしょ』

素人相手なら多少、無理矢理武器を弾いて攻撃に転じても軽傷で済むが、相手は戦闘の訓練を受けた者だし、1対6。後輩2人を帰したのは失敗だったか。

『でも、いたらいたで邪魔。つか、クソ娘、遠くに行けよ。爆発物使えないし』

心の中で悪態を吐いて、口からは溜息を吐く。
仕方がないから、怪我をする事に決めた。

いきなり、刺客達が予想だにしない力で長剣を振り払う。目の前、右手側の3人がよろける。

姿勢を低くして、1人をまず下から斬り上げた。左手側から剣が迫る。一本はグローブでガードするも、1つ弾き損ない、左肩から血

が噴き上がる。

だがこれくらいは考えの内であり、ひるむこともなくそのままグロ
ーブで1人の側頭部を撃ち、もう1人は即座に抜いた銃で膝をつぶ
した。

『あと3人』

3方向から斬りかかってきた内の、正面の者を剣ごと斬り倒して、
前方へ逃れると2人まとめて横に腹を薙いで倒した。
静寂が戻る。

血を拭って剣をしまい、全員の脈を看て1人の生存を確認した。

「おい」

ルカが物陰に呼びかけると、3名の組織員が現れた。

「コレ、頼むわ」

「はっ」

連れて帰り治療、そして情報を引き出すという訳だ。

「それから小娘」

「こっ……小娘ですって!? 私はもう、成人して……して……」
ミティアは口ごもる。

美しいが、非常に不機嫌そうな顔に睨まれた為か、はたまた別の理
由か。

「あんたの連れ、みんな死んじゃったし。俺が送るけど、文句は」

「あ……ありませんわ」

『おや?』と組織員3名は顔を見合わせたが、ルカに睨まれた為
そそくさと退散。

今日、ルカが可哀想なことにレピュスの肩代わりをするハメにな
ったのだった……。

*

「ごめんなさい、わたしの所為で……」

「別に、謝っても解決しないから」

レピュスは素っ気なく云った。考え事をしていた所為なのだが、完全に怒らせてしまったと思い、カレンはしょんぼりとうなだれた。

『なんで、誘拐？』

あの場で殺す事も出来たはずだ。命が目的ではないのか。

『なんで、ミティア（長女）じゃなくて？』

大して似ていない2人。見違える訳がない。しかし、相手はミティアには見向きもせずカレンを狙った。

レピュスは何度目かになるが質問する。暗い車両の前方座席に座っている犯人達に。

「目的は何だ？ どこに向かつてる？」

だが、またしてもだんまりだった。

行き先の方とはかく、目的は知らされていないのかもしれない。両手両足が縛られ、終始カレンに銃が突きつけられていなければどうにでも仕様があるのだが。

それにしても、もう一つ気になるのが一瞬だけ視界に入った……ル力である。

彼は組織の中でも1、2を争う実力者。単に、援護の為にボスが彼を動かす訳がない。

*

「ガキ2人は帰したよ」

「2人？」

「レピュスは捕まった。てか、捕まった小娘助けに行った。真面目だよ」

携帯電話の向こうのボスは唸る。
暫くの沈黙の後

「お嬢様の両方？」
と。

「いや、可愛い方。俺が、姉の方、送ないとダメ？」

「うん。目的が掴めない以上、そっちも狙われる可能性があるからね」

「判った……。レピュスに、救援送る？」

「いや、彼に任せる。下手に動いて娘さんが殺されたり、相手が身を隠してしまう方が厄介だ。

まあ、あの子なら簡単に壊滅させてくれるでしょ」

ル力は眉をひそめた。

「信用しすぎじゃない？ ガキだよ」

「君の愛弟子だって、ココを出た時はガキだったよ」

「あれは特別。俺が鍛えたし」

ボスは軽く笑ってから、声色を変える。

「連中、だった？」

「あんたの予想通りね……。下っ端の下っ端だったけど。

壊滅とか云ったけど、本部にもし送られたら、命無いよ」

「それは大丈夫だろ。あの連中にとって、本部とボスは聖遺物みたいなものだ。

チビ暗殺者と小娘を連れて行くところじゃない。せいぜい、どっかの小アジトだろうね。そう何人も、強者はいないだろ」

「……そう思う事にする」

まとめぬ意図（後書き）

ルカは120%、わたくしの趣味です。申し訳ありませんでした。レピユスの同僚2人は、これつきり疑惑ですがルカに関しては以後よろしく願います。

呪術師ケイ

「降りろ」

レピュスは、脚を縛る縄だけ解かれて車から降ろされる。頭には、銃が押しつけられている。

「娘はどうしますか」

「……取り敢えず降ろせ。脅しの材料くらいにはなるだろう」

男達のやり取りを聞いて、レピュスは眉間に皺を刻んだ。この云い方、レピュスを捕らえる事がそもその目的だったでもいいのか。だとしたら、更に目的が判らない。

ぼんやりとした明かりの中、鉄の壁が剥き出しとなった寒い地下通路を進む。夜の上、車窓にはスモークが張られていたからここがどこなのかは見当もつかない。

目だけ動かして、周囲を探る。

レピュスに銃を突きつけている者と、上体を縛った縄を持っている者。前後に2人、カレンは銃を突きつけてこそいないがレピュスと同様、縛られている。計五人の敵。流石に、両手が使えない状況でどうこうすることはできない。引き金を引かれれば、それで終わりだし。

大人しく従うしかない。今のところは。

目の前に現れた扉の様子からすると、倉庫か何かだろうと思われる。鉄の扉には、幾重にも渡って施錠されている。先頭の男が、一つ一つ外すとドアを開いた。

湿った、埃くさい匂いの中に踏み込む。全員が入ると、最後の者が電気のスイッチを入れたようだ。天井の小さな電灯が灯った。

古びた長椅子が2つ、テーブルがまず目に入る。床は何も敷かれて

はおらず、埃や靴底の土で汚れている。左手に電話機が一つ、向かい側に長方形のロッカーがある。中身は判らない。

レピュスとカレンは長椅子の方へ押しやられ、座るよう指示された。余程、警戒を促されているのだろうか、まだ銃はしまわれない。「何が目的だ？ 俺なんか捕まえても組織は動かない」「ちよつと待てよ」

どうやら、五人の内では立場が上らしい男が二人の正面の長椅子にドカツと座る。横柄な態度で帽子とサングラスを外した。

「いやあ、お疲れさん。ナニ、取って喰おうって訳じゃねえ。そっちの可愛いお嬢さんには特に用がねえ。こんな年下でどうこうする趣味はねえしな」

肩に届くくらいの黒髪と、切れ長の黒い瞳。横柄な態度を取り除けば、かなり見栄えがするだろう。逞しい身体は無駄な肉が無く、すつきりとしたラインを描く。

「まずは自己紹介だ。俺はケイ。呪術師^{ソーサー}だ。都合上、名前は云えねえけど、所属する組織じゃ結構上の方にいる」

レピュスはその自己紹介を聞いていたかどうか、定かではなかった。男が髪と瞳を顕わにしたときから、それに意識の全てを奪われたといっても過言ではなかった。それに、この訛り……。

「気付いてるな？」

お前さんと俺は、同国人だ。ま、だからって、どうってことはねえんだが？」

カレンは思わず、二人を交互に見た。

「どういう経緯かは知らんが、国を出た気持ちは判るね。全く、しょうもない国だぜ。平和ボケしてるし、法律ガツチガチだし、女は買えねえし」

レピュスは何も云わなかった。棄てた祖国の話で仲良くなって、解放してもらえるなら幾らでも言葉を並べ立てるが、この男はそうい

うタイプではない。初見だが、情などには動かされぬ者のように思える。

「で、お前をお嬢さんを餌にしてまで引っさらったワケだがよ」
ケイは、ずいっと身を乗り出す。

「俺の部下になるか、もしくは幻刀を寄越せ」
「どっちも断る」

レピュスが間髪いれずに答えたので、ケイは口を開けっ放しにして黙る。

「おいおい……状況判ってる？」

「組織を裏切る気は無いし、呪いを解くまでこの刀を手放す事は出来ない」

そう云われると、どうしてかケイが元気を取り戻す。

「やっぱり！ そいつの呪いはホンモノな訳か……」

「呪いがあると知って、欲しがってるのか」

レピュスが目を細めると、ケイは一度背中を椅子の背に戻した。

「云ったろ？ 俺はソーサーだ。呪いと名が付くモノに関しちゃ、一つの例外無く興味がある。」

知識が増えるなら呪われても構わねえ。寧ろ、幻刀の呪いに掛かれるならこれほど、呪術師にとって嬉しい話は無いぜ」

「……ソーサーはみんな、イカレてるって事か」

ケイは、拗ねた子供のように口をすばめる。

「そりゃないぜ。」

俺からしちゃあ、自分の興味・関心以外の事に一生懸命になるって方が酔狂だ。人の為？ 組織の為？ 世界の為？ そんなん、何がおもしれえんだ？」

成る程と思っている自分に、レピュスは気付いた。無茶苦茶なようだ、この男の言い分は全く以て正しい。

「確かに」

「だろ？　じゃあ、理解してくれたところで最初に戻る訳だが」

「それとこれとは別」

また、同じ顔でケイは黙り込んだ。折角端麗な顔が、どこか間抜けに見えてしまうから止めた方が良くとレピュスは老婆心ながら思ったが口にはしない。

「おいおい、何のために俺は自説を披露したってんだよ」

「勝手に喋っただけだろ」

「まあ……確かに」

呪術師ケイ（後書き）

お気に入り登録をしてくださっている方がいるとは驚き、いや、有り難いです。

最初にも書きましたが、かなり手探りです。気長にお付き合いくださいm（．．）m

命がけのブラフ

「ケイさん……」

仲間の一人が何か云いかけると、手で制して頷いた。

「わかってら。」

俺達は、残念ながらお前さんの信条その他に付き合う気はねえ。お前、又は幻刀だけ……。どっちでもいいが、それを引き入れるってのが俺に言い渡された任務なのよ。

組織なんざ、どうでもいい。……だが、俺の好みとこの組織の方針は合致しててな。呪術の研究も思う存分出来るし。追い出されたくはない訳よ」

レピュスは、ケイの提案について考える振りをしてこの場を切り抜ける方法を考えていた。ケイの部下らしい者達は飽きもせず、カレンに銃を向けている。目的に彼女が一切関係無いという事は、下手に動くと彼女はまず殺される。それでは任務失敗だ。

さてよ……。と思う。

ケイは幻刀紫水に並々ならぬ関心があるようだが、呪いの真偽さえ確信していなかった。だったら、どんな呪いなのかも知らないはず。上手いこと騙して、こっちのペースに巻き込めはしないか。

「あんた、この刀の呪いについて……知ってるのか？」

「それが、どこを捜しても資料が無くてよ。」

察しの通り、大っきライな祖国にまで戻って書物を漁ったんだがなあ……。ホラ、あの国、武器の所持について厳しくなってる？ いつからだったか……。その関係で、武器に関する資料も抹消されちゃったらしいのよ」

知らないのか。もしかすると、上手くいくか。

「じゃ、教えとくよ。仮にも欲しがってるみたいだからな」

「そいつあ、嬉しいね」

「まず、持ち主のデメリットだけど。こいつは、力を発揮するごとに持ち主の生命力を吸う。抜刀速度に依って、刀の形状・切れ味や特性が変化するんだけど最高の力を発揮すると……こうなる」

ここまでは真実だ。レピュスはシャツの首もとを引っ張って見せた。顕わになった肩に見えるのは、黒い入れ墨の様な紋様。それは、蛇だった。

「今は、肘くらいまでしかないけど、力を使えば使うほど……時間経つにつれてコレが広がってしまえば全身を覆い尽くす」

「そうすると、死ぬ訳か」

「紋様の蛇に絞め殺されるそうだよ」

これは、口から出任せ。だが、単に絶命するというよりは余程インパクトがある。

カレンが怯えているので、少し申し訳なかったかとも思う。

「それから、こいつの呪いは毒みたいに少しずつ持ち主を侵食する」

「ほう」

この期に及んで、目を輝かせているケイは大したモノだと認めざるを得ない。呪術狂め……と内心で呟いた。

「今この瞬間も、俺の寿命は減ってる。具体的には不明だけど、このまま呪いを解かないと俺は30まで生きられるか判らない」

「その時は、どうやって死ぬんだ？」

「酷いものらしいよ。」

昔コレを使ってた中には俺と同じように暗殺者やってた奴もいるそうだけど、敵に見付かって骨も残らぬほど切り刻まれて殺されたり。無実の罪で火あぶりとか、自分の子供に殺されたとか色々」

「碌な死に方は出来ねえってわけか」

頷き、話を聞きながら、少しも怯えないケイ。

仲間達は、正常な感覚のようでケイに「やめといたほうが……」という視線を送っているし、カレンも真っ青になっている。

さて、嘘はここから。

「それで、あんたが刀を持つためには条件があるんだ」

「条件？ お前、立場判って……」

「そうじゃなくて。紫水を持つのに必要な儀式とでもいうかな」

ケイはじつとレピュスを見た。

「何だ」

「紫水の持ち主を殺す事」

「よし、お前ら、こいつ撃て」

「えっ、えええっ!？」

仲間達が、情けない驚きの声を上げる。

「待った!」

レピュスは云う。

「あんたが、殺さないとダメだ。その人が俺の頭をぶち抜いたとしたら、その人が次の紫水の持ち主。

それと、唯、殺せば良いつて訳じゃない」

これは、かなりの賭けだった。失敗すれば紫水どころか、自身の命まで失う事になる。

「紫水を使って戦う現持ち主を、殺す。つまりは真剣勝負だ」

「呪いの剣にしちゃ、清々しいねえ」

「今の状況では、って事。別に、一対一で戦う必要は無し。何十人で取り囲んでいたぶって、紫水が欲しい奴が留めをさせばそれでもいい。」

そうやって殺された持ち主は多いそうだよ」

ケイは唸って、それから立ち上がった。

「よし、それじゃあ、勝負だクソガキ。」

「お前ら、縄解いてやれ」

「え……ですが」

「ナニ、逃げられやしねえ。ここがどこかも判らん状況に変わりはねえ、だろ？」

レピュスは苦笑して頷いた。

「その代わり、一つ頼んでいいか」

「……ま、いいぜ。一つな」

「結果はどうであれ、俺とあんたの勝負が決まったら、その子を家に帰してやってくれるか」

ケイは、ふふつ、と笑った。

「意外と情に厚いのか」

「任務を失敗したくないだけだ」

「判った。約束してやる。」

残念だぜ。あと3、4年したらかなりイイ女になりそうなのになあ」
軽口を叩くと、ドアの方を向いた。

「広い場所がある。そこで決闘といこうや」

紫水を懸けて

「映像の解析、終了しました。ボス」

技術チームの責任者が、ボスの書斎に入った。レピウスとカレンが連れ去られた夜から、丸一日が過ぎた。

映像とは、コンタクトの要領で目に装着できる映像記録媒体のデータの事。3人の内、これを装着していたのがレピウスでなくウォーレンだったというのは、不幸中の幸いというところだった。

「ルカ殿が到着なさる前に、彼らを手こずらせた相手は退散していたようです。3名……その全員が、黒い仮面で顔を隠していますが、どれも相当な実力者。一人は、レピウスとも肩を並べるようで、ボスは、軽く頷いた。

「その中の者が、彼らを攫った中にいる？」

「いえ。別行動と見えます。少なくとも、先ほど申し上げた強者はレピウスやカレン嬢と共にいないかと思われます」

「ふうん……」

ボスは唸った。

「仮面というのが気になるな。悪いけど、仮面の画像を見せてくれる？」

「はっ、しばしお持ちを」

*

「制限時間無し、ルール無し、デスマッチでいいな？」

ケイは云う。

レピウスとケイは、さっきまでいた部屋より何倍も大きな正方形の部屋で向き合っていた。柱も何もない部屋で、壁も床も鉄が剥き出しになっている寒々しい空間。

「ああ」

幻刀紫水を抜いて、答えたレピウスを眺めるケイ。

「うーん、いいオーラだな。その刀。

痛み、憎しみ、恐怖、殺意……ありとあらゆる負の感情の宝庫だ！
全く、心地良い」

呪術師は、修業に依って並みの者より遙かに強く気配や相手の感情の動きを読み取れるというのが確かにそのようだった。

「あんた、武器は？」

「愚問だな。俺はソーサーだぜ？」

審判は必要無いので、既に戦いは始まっているといえる。だが、どちらも相手の力量はわかったものでないから先に動こうとはしない。適度に距離を取ったまま、レピュスは無表情で、ケイは堪えきれぬ笑みを浮かべて動かずにいる。

レピュスはその直後、ケイは動かなかったのではなく「動く必要がなかった」事を知った。

「！」

足下が急にぬかるむ。慌ててそこから離れようとするも、どんどんぬかるみが広がる。単純な、足下が沼に変わるだけの術だが、タチが悪い。踏みしめようものなら、足下をすくわれる。

「意外と地味な事するな」

「計算的と云ってくれるか？」

ケイは手を空中で斬った。ふと空が光り、鎌風がレピュスに襲いかかった。まさか……と思う。

転がるようにして床に逃れると、頭をかすめた鎌風が背後の壁をばつくりと割った。そのまま横転してぬかるんだ足下から逃れたレピュスに、鎌風が襲いかかり続ける。

紫水を抜いて応戦しながら、思い出した。

『ロデオって、呪術師だったのか！？』

残念ながら、レピュスには呪術の知識が殆ど無い。呪術と魔術の違いもさっぱり分らない。それらに長けた者は、同じくそれらに長けた者の事が相対したただけで判るというが、生憎見ただけでは判らない。

そして、見たところ呪術だけに限定すればケイの方が実力が上だ。威力は勿論、指を動かすだけで巧みに刃物より鋭い風を操っている。大きく飛んで、一発を避けると紫水を一度鞘に戻して、再び抜刀した。

切羽詰まっていようと、そう簡単に最終形にはしない。命は大事だし。

この形は第三型と呼んでいる。

刃の部分から金属の輝きが消え、紫色の石のようになる。ちなみに、これは持ち主に見れば通常の刀の重さしか感じられないが振り下ろされた相手には見た目通りの重量が掛かる。

「おっと！」

ケイは、それを知らなかった訳だから石の刀を今まで通りの速度で振り下ろした事に驚いたようだ。

さっきまでケイが立っていた床が、無惨に砕け散った。

「怖いねえ！」

そう云いながら、嬉しそうに刀を腕で受け止める。

呪術でガードしているのか、何か腕に仕込んでいるのか。

しかし、その防御はすぐにやめて的確に降ってくる剣をかわすようになった。かわしながら、腕から何か引き剥がして投げ捨てる。

やはり、腕に金属鎧のようなものを仕込んでいたらしい。普通の刃物ならば、問題なく防げるが、この、打撃に特化した型の紫水は薄い金属などでは防げない。

「イヤになるねえ！」

ケイが指を鳴らすと、突如彼とレピュスの間で小爆発が起こった。

間一髪、身を引いたが、腕に軽い火傷をした。
イヤになるのはこっちの台詞と云ってやりたかった。

今度こそ、膠着状態になる。

ケイはレピュスに小細工を通じないと知り、レピュスはケイに対して強引に仕掛ける危険を知った。

だが、それも長くない。ケイを倒す算段を立てたレピュスが動き始めた。

呪術は常識違反^ルをやりたい放題なのだから、こちらが道徳違反^ルをしても文句を云われる筋合いはないという訳だ。

斬り込んできたレピュスを、左手を振り上げて発生させた今までで一番広範囲に及ぶ鎌風で止めようとする。案外、レピュスはあっさりと止まったがすぐに姿勢を低くして突っ込んだ。

「短気者め」

ケイがまた、爆発を引き起こす。まともに喰らった……と思いきや。
「いねえ、だと?!」

爆煙の中には、何もない。いや、刀が突き立てられていたのみ。

「まさか」

ケイが振り向いた瞬間、レピュスは彼の視界の外から現れて小刀を投げた。

「クッ」

床を転げるようにして逃れたケイだが、それだけにはせず指を鳴らすと一気にレピュスを凍らせた。

見ていたカレンが思わず悲鳴を上げた程、それは完全な氷の彫刻が出来上がった。

「へへ……」

しかし。

「油断したな」

「！」

「ケイさん……！」

「あいつ、どこから……」

レピュスは、ケイに後ろから首に剣をピッタリと当てていた。

その刀は、今は石ではなく金属の輝きを持つものだった。刃紋は、直刃から乱刃重花丁字へと変わっている。

「殺すか？」

「全部諦めてくれるなら殺さないけど」

答えてから、「仕事じゃないし」と付け加える。

ケイは声を上げて笑い、やがて両手を挙げた。

「降参だ。死にたくはねえや」

紫水を懸けて（後書き）

重花丁字は、刃紋の種類です。適当に格好いい専門用語を突っ込んだだけなので（苦笑）あまり、お気になさらずorz

……舎弟！？

「いやあ、面白い刀だぜ」

本当に「降参」らしく、カレンもようやく銃から解放され、レピュスにも縄が掛けられる事はなかった。

「幾つあるんだ？ その、型っての」

「五。石の姿が第三型、幻を見せて相手の視覚を混乱させるのが第四型」

「最後のか」

ケイは感心したように頷く。

「それでだが」

「まだ、何かあるのか」

レピュスが不機嫌そうに云うと、ケイは「まあまあ」と収めた。

「俺は任務失敗って訳だ。」

どうやっても、お前にや勝てそうにないからな。だが、このまま組織に消されても面白くねえ」

訝しげにしているレピュスに、驚くべき事をケイは云った。

「って事でだ、ここにいる五人……処分決定組はお前に命預けるわ」

「はあっ！？」

あんぐりと口を開けてしまった。

「おいおい、イケメンが台無しだぜ？」

「……あんたには云われたくない。」

てか、あんたらにプライドその他って無いわけか？」

「無し」

ケイはきっぱり云った。後ろの者達は、どうしてもなれと思ってるらしい。口を開かないどころか、明後日の方向を向いて煙草を吸

ったり物思いに耽っている。

「な、連れて帰ってくんな、兄貴」

「ア……」

「俺達、お前の舎弟って感じていくから」

呆れて物も云えないレピユス。ちらりと横目でカレンを見ると、彼女も何か真剣に考えこんでいた。そして、何か腹を決めたように口を開く。

「あの……」

これにはケイも口をあぐりと開けた。

「わたしも、レピユスの組織に連れて行って」

「ま……待てよ。何を考えて……」

「わたしは、このまま帰っても意味がない。また、籠に閉じ込められるだけ……」。

わたしがこの人達に殺された事にすれば、誰も捜さないし」

ケイは、いかにも楽しげに笑った。

「ははっ、家出の機会としては、またとねえってか？ 意外と豪胆な嬢ちゃんだぜ」

レピユスは、カレンの目を見て、説得は無意味と知る。

ケイも、考えを押し通す気は満々らしい。自分の組織に殺される危険性がある以上、裏切りはしないだろう。

「ボスに判断を仰ぐ」

レピユスはそれだけ云った。

「取り敢えず、アーシャまで送ってくれ。交通手段が無いから」

「おうよ、兄貴」

「……やめてくれ」

照れは欠片も無く、ただひたすらに迷惑がって云った。

うんざり

アーシャに入る。既に朝になっていて、清々しい陽光がレピュスの憂鬱な気分と対比される。

「カレンは来ていいけど……あんたらは、そこで待ってる」

「えゝ何でだよ」

「お前の目的が紫水というのはハナからの嘘で、俺を丸め込んで組織の場所を吐かせようとしている危険性があるだろ」

ケイは、やれやれと肩をすくめた。

「重いつて、朝からよ。軽くいこうぜ、軽く！」

俺達もう、兄弟分じゃない」

「俺は認めてない」

レピュスはあつさり云うと、歩き出した。付いてこようとしたケイ達を、一睨みして止める。

「……という訳なんですが」

レピュスは、ボスに事情を説明した。

すると、ボスは愉快そうに笑った。

「舎弟が出来たんだ」

「ボスまで……ほんと、勘弁してください」

「はは。」

で……カレンだけど」

端正な顔にボスは温かい微笑みを浮かべた。緊張の為か、少し顔を硬くするカレン。

「いいよ。ウチに来なさい。」

死亡届けは出してあげるから。ただし、二度と表には戻れないよ？」
「構いません」

きつぱりと答えたカレン。ボスはこういう、意思を強く持った者が好きだというのはレピュスも知っていた。当然、彼女の事は気に入ったのだろう。

「名前も変える事になるからね。この組織のルールだから」

「はい」

「まあ、それは後で。」

それでレピュス……呪術師と部下4人だけだ」

レピュスは居住まいを正した。

「彼らの証言が、今回の襲撃事件で浮き上がってきた疑問の答えをくれるかもしれない。だから、連れてきて。もし裏切る素振りを、僅かでも見せたら始末するけど、異論は無いね」

「ボスの仰せのままに」

低頭したレピュス。

「じゃあ、レピュスは休んでいいよ。ああ、でも何人が例の5人を呼びに行かせて。警備局の誰かでもいい。」

カレンは、少し残って。配属先その他を決めるから、人事局の者を呼ぶ」

カレンはレピュスを真似て低頭した。

*

レピュスはその日、ようやく何事も心配無く眠る事が出来た。

だが、目覚めはなかなか衝撃的だった。

「起きろ」

耳元で、声がする。自分に命令調で話せるのは、数名しかいない。誰だ……。

「早く」

何となく、可愛い喋り方なのだが声は低いしそっけない。

この声と喋り方は……。

レピュスは相手が誰か判った瞬間、条件反射で起きあがってベッドを飛び降り、直立してから一礼した。

「も……申し訳ありませんでした。」

ルカ先輩……」

「別にそういうのいいから」

ルカはちよつと欠伸してから、レピュスのベッドに我が物顔で座った。

「あの……何故」

「鍵、開きっぱなし。声掛けても返事なし。よく寝てたね」

「あ……」

銀髪長身の美青年は本題に入った。

「ロデオと組むんだって？」

「え……はい」

「へえ」

どこか遠くを見るような目付きだ。それに、何となく優しい。彼の目付きとしては、この上なく珍しいものである。

思わずレピュスは尋ねた。

「知り合いなんですか？」

「うん」

答えたきり、彫像のようにじっとしている。

「あの……」

起きたからには顔を洗って着替えて朝食でも食べに行きたいのだが、組織最強の大先輩を前にしてそんな事を言い出せるはずもなく。兎に角、用事があるなら早くしてくれとレピュスは内心で呟いた。その呟きを通じたかのようにルカは再び口を開く。

「何のために試験受けたか、判る？ 彼女」

「確か、ジュナス・レオ・ローザバークの警護任務に必要な資格だからと云ってました」

「判った。ごめんね」

ル力はあっさり立ち上がると、長い脚で颯爽と出て行った。

「……何だっただんだ？」

思わず、独りごちたレピユスだった。

「よお、兄貴」

「こんな年上の弟なんて知らない」

「俺、割と若いぜ？ 24歳」

「仲間内だからって、個人情報はおましくない」

「へーい、気を付けるよ兄貴」

レピユスは、朝からうんざりしていた。組織の本部であるこのアーシャの地下都市ともいえる空間には、立派な食堂……というよりレストランがあり組織員は好きに使える。今は9時で、もう朝食時を過ぎている為、あまり混んではない。それなのにケイは、わざわざレピユスの真正面に座っている。

「てか小食だねー兄貴。」

サラダと水って……ダイエット中の女か？」

「うるさい」

本当に、煩い。余計なお世話だ。どうしても、胃が弱くて朝は殆ど食べられない。というか、目の前で朝からステーキを食べているケイの様な食生活を見ると、すぐさまやられる。彼いわく、体の内側は鍛えられないから仕方ない……らしい。

「てか、何でココに座るんだよ……。あとの4人は？」

「ボスの尋問受けてる。俺は一番最初に終わったの」

レピユスは胡散臭い者を見るような目でケイを見た。

「あ、何でこんな一番信用ならないチャラ男が……」とか思ってるだろ、兄貴。

俺、ああいうタイプには好かれるのよ」

「……ボスは好き嫌いで判断したりしない」

ケイはくいつと眉を上げた。

「そんなに好きか。」

まあ……確かに、とんでもねえ奴だとは思ったな。一目で。相当強いんだろ？」

「多分ね」

レピュスは肩をすくめた。

「ボスが戦つてるところを見たことがある奴はいないから。まあ……ある程度古株の人なら知ってるかもしれないけど」

「そーい、やよ、可愛いカレンちゃんはどうなつたんだ？」

「さあ。ボスが何かしら役職を与えるらしい」

「さあ……って、薄情な奴だぜ、兄貴」

「は？ てか、どうでもいいけど、その兄貴ってやめろよ」

「じゃあないだろ。ボスにも俺らは、兄貴の舎弟って認められちまつたんだからさ」

レピュスは、フォークを取り落としそうになった。

「てことは、お前ら……」

「おう、俺らは暗殺部隊に配属された！ よろしくな、兄貴！」

レピュスは、うんざりした表情で元氣よく肉を並びのいい歯で噛みちぎる、“顔だけ男”を眺めていた。

暗殺任務

「……以上です」

レピュスが本部に帰還してから2日余り、再び新たな任務が告げられた。緊張の為に綺麗な顔を少し紅潮させている、カレンに依って彼女は任務管理、組織実動員への任務伝達などを行う情報局の任務部門に配属されたのだった。

「どうも」

「……」

「……？」

レピュスは、カレンが固まっている理由に気が付いた。

「もう、戻って大丈夫だけど」

「あ、はい。そうでしたか……あの、ごめんなさい」

ペコペコを頭を下げるカレンに思わず苦笑した。

「謝んなくていいよ。慣れてないんだから……」。

あと、言葉遣い正さなくていいから。決まりとか無いし」

カレンは、少し表情を和らげた。

「何だか……暗殺部隊の人は、組織の中でも特に立場が高いつて聞いて……。特にレピュスは、ベテランの人達にも並ぶくらいの権限を持つてゐるって聞いたから」

「そうだけど、偉ぶる気は無いし。ウォーレンとかラズとか、同年代はみんな普通に話すよ」

「ちょっと安心した……」。

あ……そうだ、これからはイリスって呼んで」

「組織用の名前？」

「うん。菖蒲^{あやめ}って意味。信じる者の幸せ……って花言葉。プレゼントだったって」

楽しそうに笑うカレン……いや、イリス。ボスは彼女の境遇を知っ

ていたのかと感心するレピュスだった。

「じゃあ、気を付けて行ってきたね」

可愛らしく微笑んで、イリスは去って行った。

『気を付けて』などと云われるのには慣れていないので、レピュスは驚いた様な顔でしばし固まっていた。

*

今回の任務は、先輩であるラウンと行動を共にする、暗殺任務。

2人行動は楽だし、暗殺任務はそれを行う為の部隊というだけあり得意分野。任務を言い渡された時から、先日までの任務の前より遙かに機嫌が良かった。

「ま、俺とレピュスなら早く終わるね」

ラウンはそう云った。

レピュスより、少しだけ年上に見える彼は相当に実力が高い。レピュスやルカと共に数少ない、幹部と呼ばれる存在だ。しかし、外見からそれは想像出来ないだろう。大きくない……どころか小さい背丈で、一見華奢な体つきというところはレピュスに似ている。だが、顔立ちは随分と違い、焦げ茶の瞳である目は大きくパッチリしている。小さい顔は、少女と間違えそうだ。暗い茶の髪は跳ねたい放題であり、子供っぽさを強調している。

兎に角、この2人は変装などしなくとも、暗殺者には見えない。可愛い顔した、可愛いサイズの青年……くらいにしか認識されないだろう。

移動には、車を使うが運転手を雇ったりはしない。当然ながら無免許（擬装免許を念のために携帯している）であるが、レピュスもラウンも運転が出来る。今回は上下関係でレピュスが運転する。

「舞踏会潜入なんて、研修期間以来だなア」

ラウンは云った。

「俺は1年くらい前に行きました」

「あ、知ってる。女装したんでしょ？ 記念写真見たけど、可愛かったねえ」

レピュスは、むすうつとした。あの時は、仕方がなかったのだ。潜入といっても、今回のように身を潜めていればいいのではなく実際に参加者とコンタクトを取らなくてはならなかったから、招待された事とする必要があった。緻密な、絶対にばれようがない擬装招待状は制作したが、どうしても男女一組という規定を満たす為に背が低い方だったレピュスが女装しなくてはならなかったのだ。

ちなみに、組織にも女性がない訳ではない。暗殺部隊でも、レピュスの先輩に当たる有能な女性組織員がいる。だが、男女よりも実力、依頼主の要請、向き・不向きに重点を置いて任務実行者が選ばれるから女性が必要な時にいない、またはその逆が時たま起こりうるのだった。

今回の任務は、政治家暗殺。アントワープという国の政治家マルク。保守派の考え方を持つ彼が、進めようとしている改革……国の経済の為にと黙認されてきた不法組織の一斉摘発を食い止める為に、その不法組織から多額の金を受け取っている別の政治家がその暗殺を要請した。今回開かれる舞踏会では、マルクが支持者へ演説を行う事となっているのだ。

元より、暗殺を警戒している彼は一步外へ出るのにも警備員を引き連れ、車には完全に防弾加工をしているから移動中の殺害は厳しい。自宅や仕事場も、最新式のセキュリティシステムが入っている。だから今回の舞踏会はまたとない殺害チャンスである。入り口の警備さえ突破してしまえば、アントワープではパーティなどの会場にセキュリティシステムを設置するのが好まれないから楽に身を潜められる。アントワープ国民の風流心に助けられたとも云える。

暗殺任務（後書き）

当然ちゃあ当然ですが、主人公が法律に引っかかる事、たくさんしてる話です（笑）。

よい子も悪い子も決してマネしないでね。ってテロップ流れそうな。

未だ信じず

「で、どうだったの」

「どうも、あの時、会場に侵入した組織は一つだけじゃなかったみたいなんだよね」

「俺達を除き？」

「そう、勿論、除き。」

レピュスとイリスをかつさらって行つたのと、真面目にランカスターの命を狙つたのと組織は別らしい」

「あれ？ レピュス達をかつさらつた連中、ここにいるんじゃないの」

「それがねえ……。彼らもまんまと騙されていたらしいよ。真相を知っていたのは、恐らくそれぞれの組織の上も上……。ボスと君くらの階級の者だけらしいよ」

「あんま高くないね」

「冗談はカットね。真面目な話なんだよ」

「ごめん。」

「……一つじゃない、って云つたよね？ 幾つなの」

「2、もしくは3」

「3……？」

「2つに分けると、さつき分けた通り。」

3つとすると、紫水を狙つてた例の5人と仮面の連中、それから仮面無しの君が蹴散らした連中」

「蹴るとかいう単語聞くと、切なくなるからやめて」

「ごめんね。てか、まだ未練あるの」

「ヒドイ云い方。別に、振られてないし」

「でも、彼女、意中の人がいるんでしょ？」

「……真面目な話なんでしょ」

「そう。脱線してる場合じゃなかった。」

それぞれの目的が問題だよな」

「ランカスター殺しと、紫水と、もう一つあった場合のもう一つ？」
「それ。」

先に何でその他大勢と仮面が別物と考えたか、だけど」

「あの仮面の紋様は、話題の組織では有り得ない」

「見たんだ」

「情報部、行ってきた」

「黒い逆五芒星……。全く反対の紋様だ」

「白い五芒星なら話が早かったのにね」

「全くだよ。」

白い五芒星ならば、それは我々に日頃から因縁つけてくる“アルカナ”の連中なんだけど。しかし、どうにも連中が貴族殺害の仕事をすると名刀強奪の仕事をすることも思えないんだよ。彼らは、我々のやり方を真っ向から否定しているのだからね。それなのに我々と同様の仕事をするとなると、辻褄が合わなくなってしまう」

「全く別物と考えた方がいいのかな」

「そうだね。“アルカナ”が我々の仕事の妨害にやってきたのかと思っただけど、どうやらそれは早計だったらしい……。まだ、我々が出会った事の無い組織が絡んでる」

「あの5人の組織って、何だったの？」

「ダーク・ペガサス」

「ああ、カッコ付け邪教集団」

「そんな云い方は可哀想だよ。本当に、頭っから信じ込んでる奴はたくさんいるんだから。あの呪術師は異端児だったみたいだけどね」
「……」

「どうしたの」

「あんたが、身内を呼び名で呼ばないのは珍しい」

「まだね、身内と認めて安心して居る訳じゃあないんだよ。組織用の名前も、まだ与えてない。所属からなにからなにまで、仮決定とし

てる。

レピュスの下につけたのは、連中が彼の实力を認めて、畏れている事だけは確かだからだ」

「面倒くさいのを連れてきたね、あのガキ」

「仕方がない。それに、レピュスが帰ってこなかった方が、我々にとっては一大事だった」

「そろそろ教えてくれてもいいんじゃない？ あいつで何を企んでいるの」

「君相手でも、それはまだ秘密。でも、悪いようにするつもりじゃないから安心してよ。」

それにしても、イリスが来てくれたのは嬉しい誤算だ」

「？」

「本人が気付いてるかどうかわからないけど、レピュスをつなぎ止める材料が増えた」

「あいつは、あんたに一生を捧げてるんだろ？」

「君の可愛い部下だって、君に一生を捧げてるように見えた」

「……意地悪いんだから」

「それでも、ちゃんと戻って来るように云ってるんだよ？ でも頑固だね。無理だと思う。」

あの子がここに帰ってくるのは、一生」

ル力は大きな溜息をつくと、

「じゃあ、調査続ける」

と云ってボスの書斎を後にした。

ボスはよく、こうしてル力と話す。重大な用件から、雑談、冗談まで。それが出来る相手がル力しかないから……というのが一番大きいのだが、彼を相手に喋りながら頭の中を整理するやり方が好きなのだ。ル力には申し訳ないが、判っている事の半分くらいしか知っているように話さない。残り半分の判っている事……機密情報と不確定要素を掛け合わせて導き出した結論の裏付けを詰まる話と

詰まらない話をしながら整理するのだ。

それは今回も成功した。

すぐに情報部に内部回線を繋げた。

「はい、情報部」

「ダーク・ペガサスの資料を一つ残らず持ってきて」

「了解しました」

切ると、また繋げる。

「はい、人事部」

「元ダーク・ペガサスの5名に、内部密偵をつけて」

「了解」

過去の謎はまず、解ける。それから恐らく放って置いたら起こるであろう“事故”も未然に防げるはずだ。

「失礼します」

段ボールを4人掛かりで持ち込んできた情報部の者達。

「置いておいて」

ボスは新旧も4段階の段ボールの新しいものには目もくれず、最も傷ついた古い段ボール箱を机上に引っ張り上げた。それから、回線のスイッチを切った。緊急以外の連絡はこれで行なくなる。作業に没頭できる。

ボスの計略

レピュスとラユンの任務は、大した障害もなく成功した。現在、帰路である。

「ん……ボス」

ラユンが携帯を開いた。

「どうなさいましたか」

「今、どうなってる？」

「ターゲット殺害に成功、現在アーシャに向かっています」

「レピュスには悪いけど、彼だけ別の者と合流して新任務に当たってもらう事になった。レリークへ行ってくれる？ ラユンは帰ってきていい」

「了解しました」

ラユンはその旨をレピュスに伝えた。

「レリークの支部だって。俺は、そこから自分で運転して戻るから」
「判りました。」

別の者、とは？

「変というか、すごい組み合わせだよ。」

ルカさんと、新入りのえくと、黒髪の……」

「ケイ！？」

レピュスは素っ頓狂な声を上げた。ルカというだけでも、そんな声を上げるに値するというのがケイがそれに付いているとなると、どんな任務か想像もつかない。ルカのみだったら、重要極秘任務と絞られるが……あんな怪しい奴をそんな任務に連れて行けと云うとは思えないし。それに、半端な任務にルカが動員されるはずがない。

『最近、あの人、よく動かされてるよな……。もしかして何か起きてる、のか？』

*

「あんたにしては遠回りだね」

レリークの支部に既に到着していたル力は携帯でボスと話していた。レリークは温暖な気候の街だが、今日は生憎の曇天。うつすらと肌寒いがル力は構わず外に突っ立っている。中にいると、滅多に目に掛かれない本部の重役、しかも超絶美青年に人が集まって、それがうつとうしくてならないからだ。

この建物は、本部のように大がかりな設備ではなく、情報管理部と武器管理部しか無いので警備もそこまで固くはない。地上2階建ての煉瓦造りの建物で壁はレリークの街に多い白塗り。その壁に、スマートな長身を預けてだらしないのに優美に見える格好でル力はい

る。
「そうとも云えるかな。だけど、中々注意が必要な問題ではあるからね……。彼は今、どうしてるの」

「レリーク支部の連中と、すぐ仲良くなっちゃった。

ホントにスパイなら敏腕だよ」

「……声に出さないの。我々が勘付いている事を勘付かれてはいけないよ。彼が聞いていなくとも、彼は監視を受けているかもしれないね」

「判った。……あ、レピュス来た。

まあいずれにせよ、今回で何か判ると思ってるんでしょ?」

「うん。万が一、“結果”がすぐに出たら」

「始末する」

「そう。じゃあよろしく」

ル力はしばらく、通話が終了した携帯を眺めていたが、すぐやってきた黒い車に向き直る。レピュスが降りてくるところだった。

レピュスはル力をすぐ見付けて、深く一礼した。

「中、入る前に話がある」

「はい」

ル力から、任務の詳細とその目的が語られてレピュスは流石に言葉を失った。

「すみません。厄介な奴を……」

「ボスが怒ってないから俺も、何も云わない。

それに……早く、“芽”を摘めるかもしれない。そう考えると、悪い事ばかりじゃない」

レピュスは再び、低頭した。

「おーう、兄貴、よろしくな」

「それ、マジでやめろ」

レピュスが眉をひそめる。

「いいじゃねえの。な、ル力様」

「何だその呼び方は！」

「俺はいいよ。偉そうで好き」

「……そうでしたか」

ダーク・ペガサスという組織

「で、ルカ様、任務つてーのは？」

気軽に聞くケイに、運転していなかったらぶつとばしてやりたいと思うレピュス。彼らは今、レピュスの運転する車でルーシャという農村に向かっている。

「予想、ついてるんじゃないの？ ルーシャで」

「……俺の元実家の調査すか」

「うん正解。案内とか頼むよ。」

あと、今の内にざっと内部事情話して」

レピュスは少し緊張を覚えた。

ルカはボスからダーク・ペガサスの情報はすべからく聞かされているらしい。それと矛盾する内容を、ケイが喋ればそこでアウト。また、巧妙に隠し立てしたらイエローカード。

「内部事情ね……」。

まあ、知っての通り表向きは宗教財団。名前の通り黒い、羽根のある馬がシンボルマーク。

教祖がボス、カリギュラって名乗ってる。結構、信者が多いもんで金はココの組織と向こう張るくらいあるかもねえ。

それと、“教え”に信憑性を持たせる為に呪術師や魔導師をたくさん集めては“奇跡”を可愛い頭の民衆に見せてる。かくいう俺も、そういう仕事をさせられてた事があったねえ。

ほら、髪も眼も黒だからシンボルマークと妙に合致する訳よ、俺のルックス。ルカ様ほどじゃねーけど二枚目だし、俺？」

自分に対してルカを引き合いに出すとは、何と図々しい奴！ とレピュスは呆れた視線を投げた。

「で、頑張つて集めた金で何をしているかというところ、武器やらなんやらを集めて腕利きの殺し屋なんかを引き入れて、裏社会でまづは地位を確立しようとしてる。新興組織だからな。まだ、舐めてかかられる事が多いそうだな。ココじゃそんな心配は皆無なんだろうなえ。」

地位を確立した上で、上層部が何をおつ始めようとしてるかは判らないね。まあ、世界を幸せにするキャラじゃねえってのは確かだ。いや、もしかしたら人類が滅亡したら世界が幸せになるとかマジで考えてる、楽しくない思考を本気で持つてるのかもな」

「人類を滅亡させようとしてるの？」

ルカが、「明日は晴れるの？」くらいのテンションでそう聞き返すからレピュスは、アクセルを急激に踏み込みそうになった。

「そんな事を云つてたんだよなあ。上層部の奴。」

メドウって奴なんだけど。あ、俺に紫水取ってこい、って云つたのもそいつね。カリギュラのパシリなんよ」

「何で、紫水を？」

レピュスは気になっていた事を質問した。

「東大陸の大業物13工を集めたらしいね」

「何……？」

「まだ、一本も確保してないけど。兄貴の持つてる紫水……13工が、他の刀を引き寄せるって噂を聞いて、これはいいぞと思ったらしい」

レピュスは、皮肉に笑った。

「もしそうなら、俺がとづくに揃えてる」

「だよなあ。やっぱ、違うのか」

少しだけ信じていたらしく、がっかりした様子のケイだった。

「西大陸の宝剣とかには興味無いの？」

ルカの質問に、ケイはぐぐつと首を傾げた。

「それは知らないねえ……」

ただ、と付け加える。

「珍しい武器は、人集めのいい手だからな。手に入る有名どころは、何でも手に入れてるだろうねえ」

レピュスはロデオが西大陸の宝剣8工の7番目、虹の雫を探しているという話を思い出した。彼女は、もしもそれを提示されたらダーク・ペガサスにでも入るのだろうか？

「で、どうやって人類滅亡させるの？」

また、天気の話をするようにルカが問いかけた。

流石にケイもそれに突っ込んだ。

「ルカ様、すげーどうでもいい事みたいに思ってたね？」

「うん……ぶっちゃけどうでもいい。俺は殺されないし」

そういう問題ですか！？

だがレピュスは、何となく天変地異が起きても大魔王が降臨してもルカは生きていそうだなと、確かに思った。

「何か、古代兵器つてのを復活させるらしいけど」

「……復活なんていうと、生き物の話みたいだ」

レピュスが云うと、ケイは

「そう、それ！」

と妙に元気になる。もしか、コイツが好きなアレか。

「大昔に封印された邪竜を復活させて、呪術で従わせるんだってよー」

「……可哀想な頭だ」

レピュスは、本気で言った。何が邪竜だ。

「具体的な方法は？」

ルカは、そこまで莫迦にしていらないらしい。……というか、これも恐らくどうでもいいのだろう。

「いやあ、そこまでは知らねえよ。秘密主義的な性質だからね。奴さん達」

「ふうん……」

ルーシャに着いたので、問答は終わった。レピュスは、ケイの答えからルカが何を導き出して、今何を考えているのかは想像できなかった。

ルーシャは、村の中心に黒い教会を置く農村。黒い教会は、当然、ダーク・ペガサスが管理している。カリギュラを教祖とするこの宗教はカルラ教と呼ばれている。ケイの云ったように、呪術、魔導を使って人心を掌握している為このように都会から離れた場所に信者が多い。呪術師や魔導師の存在が、一般にも当たり前となっている都会ではなかなか通じないという訳だ。

「あの教会の地下が、ダーク・ペガサスのルーシャ支部って訳だ。だが、聖職者以外は入れない……って、ルカ様、聞いてる？」

無言ですたすた、教会に向かっていくルカ。

「先輩、どうなさるおつもりで……」

レピュスも慌てて続き、耳打ちすると、けろっとした答えが返ってくる。

「強行突破」

ダーク・ペガサスという組織（後書き）

なんか、どっかで聞いたような名前がたくさんあると思いますが、あまりお気になさらず。感じの良い、語呂の良い名前なんかを引っ張ってるだけですから。

迂闊

「いや、ルカ様、強行突破ってよお」

「お前がね」

「……は？」

「お前はさあ、まだダーク・ペガサスの連中には仲間だと認識されてるんじゃないの？　ウチに寝返ったって情報はどこにも漏らしてないしね。」

「というかその情報を、ダーク・ペガサスが持ってたなら、お前らはまだ元の組織と繋がってるって可能性が出てくるから、楽しい拷問ルーム行きだよ」

ケイは、苦笑した。

「信用ねえな」

「ないよ」

ずばり云うルカ。

「という事で、行つてらっしゃい。先に行つて、ダーク・ペガサスの者だと名乗って見張りに油断を誘いなさい。はい、どうぞ」

「ルカ様と兄貴は」

「見守ってる」

レピュスは、ケイが黒い教会に入っていくとルカにこっそり感嘆の目を向けた。

ケイの反応だけでなく、教会の者の反応から今、ケイが置かれている立場を見極めようという事なのか。

「行くよ」

ルカはそう云つて、正面入り口へケイに続いた……のではなくさつと周囲を見渡すと身軽に教会の屋根へ上り始めた。慌てて続いたレピュス。

これを村人に見付かったら、それだけで大変な事にならないだろうか。いい年した2人が「悪戯です」で通せる訳もない。

「関係者以外立ち入り禁止です」

黒い装束の者がケイを後ろからやんわりと止めた。

「俺、関係者」

「……は？」

ケイは、神父へぐつと顔を近づけた。

「覚えてない？ ケイだ。呪術師の」

そして、ズボンのポケットから黒いペガサスが描かれたカードを取り出した。

「それは……！ はい、唯今、神父を呼んで参りますので」

「ケイがここにいることは知られてない……もしくは、ケイはここに来ると決まっていた」

レピュスが呟くとル力が頷いた。

「神父の反応に任せようか」

そして、少し待っていると奥の方からやはり黒装束の初老の男性が現れた。

「ケイ殿、ご苦勞様です。」

連中についての報告ですか？ 潜入に成功したと聞きましたよ、

お流石です」

ケイは明らかに、「しまった」という顔をした。

『これだから、ジイさんは……あの2人聞いてたか？』

聞いていた。

「ル力先輩……」

「ボスの勘太当たり。」

行こうか。ケイは捕らえるよ。残りは始末する」

「はい」

「……聞いてた？」

ケイは苦笑してレピユスとル力を見た。

「は……まさか」

初老の神父は、小狡いネズミのような顔をひくつかせた。

「そうそう、バレちゃった」

ケイが鼻で笑うとその神父は顔を真っ赤にした。

「な……何故ここまで連れてきたのですっ!!」

「いや、あっちがそう決めたっただけで」

「先に云ってくればいいものを！」

「いやね、あんたも悪いぜ。警戒しろって」

レピユスとル力は思わず顔を見合わせた。こんな時に口喧嘩している、2人に呆れてだ。

「ま、結局、どっちも迂闊だって事でいい？」

ケイは連行、残りは殲滅って命令だから……逆らわないでよ」

ル力は感情無く云った。

「そりゃ、逆らうでしようよ、ル力様……ていうか誤解だつての！
この際だからぶっちゃけると、俺は確かにスパイとしてあんたらの組織に潜入するように命令されてた。だけど、兄貴にボロ負けして惚れ込んで、改心したんだってば！ いや、これ本当」

「そう」

ル力は……笑った。

レピユスは背筋に冷たいものを感じた。ル力が笑う時に、ろくな事は起こらない。

彼はいきなり携帯を取り出すと、電話をかけ始めた。

「ル……ル力様あ？ こんな時に彼女に電話っすかあ？」

「うっん。ボスに電話。」

彼女はいない。募集中。今度紹介して。可愛いコよろしく」
やっつけ的に喋っているのは明らかである。

「あ、もしもしボス？」

空気がピンと張りつめた。

「うん。考えてた通りだよ。」

そっちはどうなったの？ うん、……うん。判った。ジェリーちゃんによるしく云つといて」

レピュスは、そのジェリーという名前にぎくりとした。

組織最強がルカならば、組織“最狂”がジェリーという女性。拷問の担当者だ……。

「お前の子分は、ウチの情報室を乗っ取ろうと焦って、拘束された。今、楽しい拷問室で可愛いジェリーに遊んでもらってるところだつて」

さらつと、とんでもない単語を吐く。ケイの顔色も流石に悪くなる。

「連行された場合、俺もその可愛いジェリーちゃんに会えるって訳か？」

「うん。楽しみに待ってるって。」

お前の子分達、もうすぐで“快く”内部事情と目的を喋ってくれそうだって。そしたら、いずれにせよお前の判りやすい嘘もばれるね

……」

「可愛いコ紹介するから、見逃してくれね？ 好みのタイプは？」

「うーん。」

ブロンドの髪、色白、平均より少し高い身長、気も力も強い事」

「限定し過ぎっす」

「ま、誰連れてきてもダメだけど。命令だし。」

ボスと仲良しなのと、上下関係はまるで別だから」

ケイはまた苦笑して、ほんの少し下がった。

「じゃ、逃げるしかねえか」

「レピュス、ケイはお前が責任取りなさい」

「はい」

「俺は、ここ取り敢えず壊滅させるから」

レピュスは紫水に手を掛け、ルカは黒い手袋を嵌めた。

二の型

「こりゃ、ちよつとヤバいなア」

ケイは唇を軽く舐めた。

「俺は兄貴にや勝てないんだよな……。何かさ、慈悲とか持ち合わせてない？」

「ない」

レピユスの応えは、とてもあっさりしていた。

生け捕りなら、紫水を使うのは若干危険だ。加減を間違えて殺しかねない。

特に銘は無いが愛用している、双刀を手にした。

即座にレピユスは躍りかかった。ケイは、呪術を発動させる間が無かった。今度は距離を置くことに専念すると決めたようだ。教会の外へ飛び出した。

追って外へ出たレピユスに振り向きざま、黒い炎の玉を飛ばすが、レピユスは難なくそれを避ける。

「ちいっ」

今度は、以前もそうしていたようにレピユスの足下を奪おうと地面を泥沼に変える。しかし、もう慣れて驚きはしないレピユスは袖の下から伸びるワイヤーを近くの木に引っかけてそこから一気に抜け出した。

木の上から、すかさずワイヤーをケイに伸ばした。生け捕りの常套手段なのだが、これくらいはやはりかわす相手だ。しかも、ワイヤーをくぐり抜けると同時にレピユスの立っていた木を爆発で倒した。

木が倒れるよりも先に、着地したがどさくさに紛れてケイは姿を

消していた。

『隠れるところは無いはずだ……術か？』

教会の壁に背を当てて、周囲の気配を探った。だが、教会内部でルカが大暴れしているらしい轟音がするのみでケイの気配は一切感じられない。

「……ここから逃げたなんて云うなよ！」

そんな事になったら、ケイを見つけ出して捕らえるまで帰れない。あと、ルカに怒られる。

だが、焦りは禁物と落ち着いて考える。

一つ、試してみる事にした。

しまっていた紫水を抜き放つ。刃というよりも、紫色の炎が揺らめいているかのような姿をしている紫水。これは二の型。攻撃用の型ではない。

レピウスが炎のような紫水で宙を払うようにすると、その紫色の炎が火の粉が舞うようにちらちらと周囲に飛び散った。

そして、その炎は風に流されるでもなく一方向に凝縮されていく……。

『当たり前……』

二の型は、魔導や呪術の力に反応してその元凶を示す。ケイは呪術で姿を消して、不意打ちを狙っていたのか。

しかし、もうレピウスには慎重に動く必要が無かった。

一気に飛び出す。

二の型の炎は、使用者以外に見えない。だから、ケイはレピウスが何かしらで適当に見当を付けて飛び出したのだと思っただろう。紫色の炎の向こうから、雷のような光線が向かってくる。

巧みにそれらをかかわして、あっという間に距離を詰めてしまうと双刀を振り下ろした。

足下の砂が、動いた。やはり、ここにいた……。

双刀を素早くしまつて、ワイヤーを伸ばした。

途端に、目の前の空間が揺らめいてケイが現れた。

「それも紫水の能力か、兄貴？」

「ああ。」

それから、兄貴はやめろ」

「……ちえっ」

レピュスが、もう一段階拘束をきつくした頃、ル力が颯爽と教会から出て来た……瞬間。

大爆発が起こる。

「先輩！？」

「ル力様！？」

奇しくも、レピュスとケイは全く同じ反応をした。

「ボスからの司令は、壊滅だったから」

何でも無さそうに答えた。

「捕まえたの。良くできました」

レピュスは、慌てて頭を下げた。

「じゃあ、早く出ようか。人が集まって来ちゃう。

まあ、こいつに被せればいいんだけど」

ケイをちらつと見た。

「うへへ怖いねえ」

すると、ル力はどこことなく凄味のある笑みを浮かべた。

「ウチに喧嘩売っちゃいけないって、判ったね」

「今更だけどな」

帰りはル力の運転で、レピュスは後ろの座席でケイを縛るワイヤーを持っていてる。

「なあ、もうコレ取ってくれてもいいんじゃない？」

「呪術師は何が出来るか判らないからダメだ」

レピュスは即座に答えた。

「ケイ」

ルカが口を開いた。

「可愛いジェリーの楽しい拷問が厭なら、ここで全部喋りなさい。

ウチに侵入した目的、行きでは誤魔化した組織の目的その他もろもろ」

「話したら解放してくれるのか？」

「まさか。」

只ね、ボスが云うにジェリーのテンションが上がってるからうつかり殺しかねないって。拷問のプロなんだけどさ……時々、加減間違えちゃうから。弘法にも筆の誤り？」

「……誤りで殺されちゃあ、やってらんねえな」

「じゃ、喋る？」

ケイは大きな溜息をついてから頷いた。

「まず、おたくに侵入したのは、あんたらのボスについて調べる必要があったから」

「どういうことだ？」

レピュスが顔をしかめると、ケイはちよつと澄ました顔をした。

「ルカ様、ここで喋っていいんかい？」

「ううん。それだけで判るから、先へ行つて」

「へいへい。」

……で、もう一つがやっぱり兄貴の紫水よ。組織の目的の為にはどうしても必要なんだな、これが。

竜とかいうのは、出任せな。紫水……つつか、東大陸大業物13工を集めて何をしようとしてるかだけど。黒の神殿の封印を解きたいんだ」

「知ってるか？ その神殿の奥にあるといわれる最上大業物、黒竜……。」

そいつを手にした者が、世界の覇者になるそうだ」

「世界の覇者ねえ…… お安い言葉だ」

ル力が、欠伸でもしそうな声色で云った。レピユスも全く同感であった。

世界など手に入れて、何の役に立つのやら。

「まあ、そう云うなって。世界を欲したからこそ、人類の絶え間ない戦争の歴史があるんだぜ？」

俺だってそんなに興味はねえよ。ただ、黒竜つてのを見てみたいってだけさ」

「つまり、東大陸大業物13工とウチのボスの正体がお前達の目的なんだ」

ル力がまとめると、ケイは

「そんなとこだな」

と頷いた。

「……で、良い子に話したからおうちに帰しちゃくれないかなア？」

「ううん。」

やっぱりウチに来てもらう。で、人には云えない色んな実験の被験体にでもなってもらおうかな」

「おいおい、そんなあ。」

悪の組織じゃないんだから」

「そうだったの？」

ル力は本当にきょとんとした様な声音で云って、荒々しい（いつもの）運転で法定速度をまるつきり無視しながらアーシャへ車を飛ばした。

不確定ながら期待すべき情報

ケイの一件はその後、全てルカが引き取ってしまったからレピュスは後日談も何も知らないままであった。帰ってきた後も、幾つかの任務をこなしていたし、気にするヒマが無かったともいえる。

気にしていないどころか、すっかり忘れていた話があったのだが……それは朝一番、情報局のサズに依って思い出させられた。

「レピュス、変わった人から連絡きてるけど」

「……誰？」

まさか、ランカスターではあるまい。

ちらりと耳に挟んだところに依ると、ミティア・ランカスターはすっかりレピュスへの興味は失ってルカに恋いこがれているそうだから。

「殺し屋ロデオ」

「え？ ……ああ！」

そういえば、彼女とはかの試験の時に手を組む約束をしたのだった。非日常的な世界に身を置くレピュスであっても、異常と感じざるを得ないような出来事ばかりに追われていたから忘れかけていた。

「やあ、お久しぶり」

相変わらず、噂しか知らない者が聞いたら驚くような軽い喋り方をする。

「どうも。何か用？」

「そっけないんだから。」

ちよつと手を貸して欲しい話があつてさ……。そうだな、ヒュースつて判る？」

「ここから近いな」

ヒュースは、アーシャから北に一つ小さな農村を越えた先にある町。アーシャのような、ビルが立ち並ぶところではなく閑静な住宅街中心の静かな町だ。

「そのアッシュっていうカフェでいい？ 一番判りやすいと思うんだよね」

「判った」

「あたしが迎えに行くのが筋なんだろうけどさ……顔合わせると厄介な人がいるんだよねエ。」

明日の午後6時」

レピュスはよく判らなかったが、承知して通信を切った。

「いや、ほんとにレピュスは女性と縁があるねエ」
サッズがどうでもいい感想を述べる。

「普通の縁じゃないけど。どれもこれも……」

何となく疲れた声で言い返して、ボスのところへ行く。ロデオはボスと「仲良し」というので、恐らく連絡はもう行っているのだろうが申し出ておくのが礼儀だ。

「失礼します」

「用件は判ってるよ。可愛いコからの呼び出しでしょ？」
ボスがすぐそう云ったので、レピュスは苦笑した。

「一般的な呼び出しだったらどんなに良いか、です」

「興味無いくせに」

ボスは小さく笑みを作った。その隣にいたル力は

「可愛いコって？」
と。

「君には内緒だよ」

「何となく判った」

こころなしか、ぶすつとした表情で云ったル力。そんな表情でも、

変わらず美しく見えるから不思議だ。

翌日、レピュスは正午の頃車で本部を出て待ち合わせ場所に向かった。

『刀の件……ならいいんだけどな』

レピュスにしては珍しく、小さく期待をしていた。任務の前は、期待や逆に不安など行動を鈍らせるような思考は一切持たない事を務めているのだが13工の事となるとどうしてもダメだった。それを目的に生きているようなものだから無理もない。

大体、時間通りにヒュースに着く。判り易いとロデオが云った通り、町に入ってすぐのところはそのカフェはあった。取り立てた特徴もない、穏やかな色彩のこじんまりとしたカフェだ。人は少ないでもないが多いでもない。

中は丁度良い室温に保たれており、コーヒーの良い匂いが店中を漂っていた。

「あー、こっちこっち」

ウェイターがやってくる前に、呼び声が掛かった。

ロデオと、その相棒クラウドスが窓際の席に座っていた。

「悪いね、呼び出して」

初めて会った時の彼女は、ブロンズの髪をそのまま背中に流していたがいまは高く結い上げている。もともと美しく、気高い印象の顔が更に強さを持っているように見える。

「いや、別に」

レピュスのそっけない答えに微笑むと、

「コーヒーでいい？」

と確認してレピュスの分も注文した。それが揃うと、本題。

「まだ、東か西かは判らないし、勿論何工かさえ判らないんだけど……。裏市場を出回った、貴重な武器をここから更に北の町、スフェラに拠点を置く組織が買い取ったんだそうだ」

「武器……アバウトだな。剣でも刀でもない可能性があるんじゃない？」
ロデオは、笑みを作った。

「その心配は無し。」

その裏市場は、剣か刀しか扱わないところだから。行って、奪って見たら貴重な銃器だったなんて事は起こらないよ」

「それならいいけど……」

そこで、黙っていたクラウドスが口を開く。

ちなみに、クラウドスもコーヒーを飲んでいる。しかも、ブラック。

「その組織……クロノスについてはこちらで既に調べ上げておきました。ここでは少し憚られますから、移動中にもお話ししますね」

「移動手段はどうするんだ？」

「車で来たんでしょ？ 運転お願い。あたしも出来ないこともないんだけど、好きじゃなくてさ」

「判った。でも運転が嫌いって……不便じゃないか？」

純粹な疑問として聞く。一人で動くことが多いのだから、自分で車を動かせないとなかなか不都合が生じるのではないか。

「嫌いって、苦手の意味じゃなくて」

苦笑を浮かべた。

「車にまつわる思い出に嫌いなのがあるんだよね」

「……は？」

盗賊団の目的と殺し屋の事情

「今回、十中八九決裂する交渉をしに行くのはルードっていう盗賊団ね」

車に乗り込み、発車するとロデオは話し始めた。

「盗賊団……名刀に何の用なんだ？ 買値より高く、どこかに売りつけるのか？」

レピュスが云うと、助手席のロデオは苦笑を浮かべる。

「それがさ、あたしらにとっては迷惑な話、東大陸大業物13工とか西大陸宝剣8工とかについて、口で任せの楽しい噂が広まってるんだ」

「噂？」

「それそのものが、運を引き寄せるだとか手にした者には巨万の富が約束されるとか……」

「ここに呪われてる奴がいるってのに」
レピュスはぼそりと云った。

「そんなおとぎ話を信じなくとも、信じている連中に……さつき君が云った通りに高く売りつけるだとか、驚いた話、それを神体だとか何だとか云っていかかわしい教えを説き始める奴までいる始末だそうだ」

レピュスは、ケイ……というよりダーク・ペガサスを思い出した。

形は違えど、似たようなものだ。

「調べたところによりますと」

クラウドが後部座席から云う。

「ルードに関する限り、前者と思われます。あくまで、単なる金儲けの手段としてしか見ていません」

「ちなみに、そいつらはいくらで買い取ったんだ？」

「3400万ラグジだそうです。ですが、上手くすればその倍の値

段で買い取る者もいるとか」

「それはそれは……」

おとぎ話に、慎ましく暮らせば一生暮らせる額をつぎ込むとは。

「手に入れた情報に依れば、連中はまだ売りつける相手を選別している最中だそうだ。待てば待つだけ、額がせりあがるという事もあるしね」

ロデオは、そこまで慌てていない理由を説明した。

「十中八九どころか、確実に交渉は決裂するんだろうけど。俺とあんたでどうこうできるものなのか？」

レピュスが云うと、ロデオは凄味のある笑みを浮かべた。

「さつと侵入して、さつと奪って消えればいいさ。」

最初っからあたし達は敵だらけでしょ？」

「一緒にするなよ。俺は結構、隠密に動いてるんだけど」

「じゃあ、敵だらけの世界に御招待」

「……」

ロデオと手を組んだのは、正解だったのだろうかと思いはじめたレピュスだった。

前回会った時、護衛の仕事を受けるだとか云っていたので、多少は丸くなったのかと思っただが……。相も変わらず、ぶち壊し屋は健在らしい。

「そういえば、何であんたは宝剣を？」

レピュスはその後、侵入の手順など話し終わると問いかけた。自分の事情ばかり知られているのは、余り気持ちの良いものではない。

「あー、云ってなかった？」

「聞いてない」

ロデオは、少し目を泳がせたが、観念したように口を開いた。

「あたしさ、この商売、辞めようと思ってるんだ」

「えっ!？」

意外過ぎる言葉に、レピュスは車両事故を起こしかけた。人が歩いていなくて何より。

「それは、何で……」

「事故を起こさないで欲しいんだけど、結婚しようとしてるんだよね」

「へ……へえ」

かなり集中していないと、今度こそ街路樹にぶつかる。

「だ、誰と？」

「この前、云ったジュナス・レオ・ローザバーク」

「はあっ!？」

「あ、切ない片思いとかじゃないから安心して」

「いや、心配してないけど」

それと宝剣とどういう関係が？ と云いたかったところ、彼女はすぐ話を進めた。

「それで、その親父さんがいい人というか、何というか……。

無国籍の無法者のあたしに、チャンスくれたの。それが、宝剣Ⅷの7番目“虹の雫”を、その親父さんの為に手に入れる事。彼、武器コレクターなんだ」

レピュスは何を云えばいいか判らず、微妙な感動詞を口から漏らしただけだった。

「家柄を気にしないどころの騒ぎじゃないな……」

「バルフォア・アーサー・ローザバーク卿は、もともとがロマンチックな方ですから」

クラウスが口を挟む。

「大貴族と、無法者という構図がなかなか魅力的に、彼の目には映っているようです」

「……色々と、規格外って事はよく判った」

凍てつく森の奥

静かであつても、住宅街にして人気の多かつた通りをレピユスの運転する車はとうに抜けている。次第に、目に映るのは北の気候に適した針葉樹の森となり雪雲が遠くに見え始めていた。気温は段々と下がっていき、とうとう暖房を入れなくてはなくなる。呼び出しの時に、ロデオが「厚着で来た方が良い」と云つたのはこういう訳かと理解したのだつた。

「もう少しかな……。正面に森の入り口が見えたら、その先は徒歩じゃないと進めない。雪もちらつき始めるしね」
「判つた」

すぐに、その場所はやってきた。既に、舗装された道路からごつごつした獣道となつていたのがぶつつりと途切れていて、その先には先程まで左右に立ち並んでいたのと同じ木々が行く手を塞ぐように聳えていた。

車を止め、降りると肌を刺すような風が吹き付けてくるのでレピユスは思わず身震いした。雪こそ積もっていないが、あたりは余りにも静けさに満ちており、そして風が無くともその空気は凍りそうな冷たさだつた。

「さ、行こうか。歩かないと凍りそうだし」

ロデオは平気なのだろうか。口でそう云っている割には、平然として様子ですたすたと歩いていく。クラウスも長いコートを着ているから寒がつていない。しかし、厚着が必要とは云つても、北国に行くのではないだろうと高をくくっており、レザージャケットを羽織つたのみのレピユスにはかなり厳しかった。

「目的地は判るのか？　こんな森の中……」

レピュスは寒さを紛らわすのも兼ねて質問した。

「クラウドに任せれば大丈夫」

「え？」

レピュスが驚いている間に、クラウドはちょこちょこ前に出て迷わず歩き始めた。

「ボクは、魔導を少しかじっているんです。人の気配の最も多い場所を探るくらいなら出来ます」

「そうだ、ロデオ……」。

あんたも魔導を？」

レピュスはケイと初めて戦った時を思い出して、問いかけた。

「アレは魔導じゃなくてね」

「魔導と呪術は、要は幻の様なものなんだ。相手の感覚に働き掛けて、実際には起こりえていない事も信じ込ませる事で効果を本物にする。結論から云ってしまつと、「危険」や「恐怖」を知らない赤ん坊に魔導や呪術は効かない。

でも、あたしの……試験の時に使つてた奴はちよつと違う。

極めて現実に近いものなんだ。『念術』つて、使用者達は呼ぶんだけど。この原理は、まだ説明されてなくてね……ある人は人間に本来備わっている能力が研ぎ澄まされたものだ云う。ある人は、超能力的なものだとも云う。またある人は、選ばれた者にだけ与えられた神の贈物^{ギフト}だと云う。

あたしは、判りにくいけど最初のが一番正解に近いと思うんだけどねエ。超能力つて云うと、いかかわしいしそれこそ、魔導や呪術とどう違うか判らない。最後みたいに、特別なものとは思えない。あたしは、教えられて使えるようになったくらいだからね」

ロデオはクラウドの背中をしっかりと見て歩きながら、さらさらと説明した。

「というか、あたし以外が使うところ、見たことないの？」

レピュスにロデオが意外な問い返しをする。

「いや……多分、無い」

「そっか。見せてないんだ」

「うちの組織に、使える人がいるって事か？」

「うん。あたしの師匠ね……。いや、もう師弟関係は解除してたっけ」

「一体、誰の事……」

レピュスの質問は、クラウスの声に止められた。

「この先は、お静かに。人の気配が段々と近付いていますので。連中の拠点は近いようです」

「うん判った」

頷いて、もう喋らないという意思表示のように唇を引き結んだロデオはどこか安心していらしかった。レピュスの、先ほどの質問にはどうしても答えたくなかったようだ。

「あれですね」

クラウスがそう云って止まったのに並ぶと、確かに、木立の奥鉄製の大きい建物があった。コンテナハウスといったところか。

「結構、低コストなんだなア」

ロデオが呟くと、クラウスから

「恐らく、中は相当に入り組んでいますし地下もあります。声がかなり、拡散していますから」

との応え。

「『写視』の術で、内部探れる？」

「やってみます」

写視の術というのは、障害物があろうともその奥や内部の生命体の位置を正確に把握できる術。この術を使うと、生命体は影のようになって認識されるので個人の特定は難しい。

「……やはり、地下があります。人影は上階に、ええと30前後、地下に10。地下にいるのは、単に見張り要員でしょうね。上階は5つの区画に仕切られていて、今、最も北側の区画に人がいません。侵入はそこからするといいかと。地下は2区画。小さな、上階に繋がる区画と大きな区画……倉庫と入り口のエリアというところでしょうね」

ロデオは当たり前のように頷きながら、レピュスは感心したように頷きながらクラウスの説明を聞いた。

「剣だか刀だかの位置は？」

レピュスが問いかけると、クラウスは目を凝らすようにした。

「判りません……が、上階東側の区画にかなり多くの人数が集まっています。勘になります、売りつける先の話し合いでもしているのでは？ 万が一、痛んではコトですから地下倉庫に放り込むような事はしないでしょし……」

「じゃ、それでいこうか」

ロデオがあっさり答えた。

「クラウスはご苦労さん、ここで待ってて」

「はい」

「レピュス、行こうか」

「やっぱり、北側にまわるか？」

「東に決まってるじゃないか！」

強行突破

ロデオは笑顔で正面突破を言い切った。

「……俺、一応暗殺部隊の……」

「さ、行こう」

レピユスの柔らかな反論など聞きもせず、すたすたと、ちょっと散歩くらいの調子で歩き始めた。続くしかないようだった……。

軽い調子とはいえ、建物からは見えない様にぐるっと建物を囲む木々の中からは出ずに移動する。道を完全に外れたものだから、尖った枝や葉をかき分けないと進めない。

「手順は、車で話した通りにね。あたしの心配は一切要らないから。君も大丈夫でしょ？」

「ああ、大丈夫」

なかなかにとんでもない作戦……というより強行突破策なのだが、これくらいは……というのがレピユスの感想であった。今回の策よりとんでもない事は、度々している。

侵入予定の窓には、かなり多くの人影が見える。そんなに広い部屋ではなさそうだったが、5人以上は確実にいるだろう。

レピユスとロデオは窓からは見えないように、建物に接近して壁に身体を押しつけるように待機。

「さあて、そろそろ」

ロデオが小声で云うと、――爆発音。

丁度反対側で待機していたクラウスが、小型で威力は殆ど無いが音と閃光が強い爆弾を爆発させたのだ。

それと同時にロデオが何の躊躇いもなく、窓を蹴破って侵入。レピユスも即座に続く。

「……なん……っ」

爆音に気付いて、ドアの方を見ていた者達は、慌てて振り返る。しかし、半分はロデオにあっという間に蹴倒されて意識を失い、もう半分もレピュスが峰打ちで意識を絶たせた。計8名いたのだが、あっけなかった。

「誰も来ないところを見ると、爆音が効いたかなア」

ロデオは満足そうに云ってからレピュスに

「全員、取り敢えず縛って」
と指示。

レピュスがお得意の（？）ワイヤーで、各人を縛り上げた。

「こいつの身なりが一番、立派かな。こいつを起こして聞き出そうか」

「いや、トップは無駄に強情な事が多いから。二番手くらいのこいつがいいんじゃないか？」

身ぐるみを剥がす相談の様な事を話し合って、二番手（らしい）男を揺すり起こした。

「う……っ」

顔をしかめて、目を開けた男が声を上げて仲間を呼ぼうとしたのでロデオはすかさずナイフを首にぴったり当てる。

「黙って」

「……な、何だお前らは……」

「殺し屋なんだけど、今日は別の用事。」

君らが最近手に入れた、貴重な武器があるはずなんだ。どうなってる？」

鋭い顔つきの男は、ぷいと目を反らした。

「喋るかよ」

しかし、レピュスがトップだろうと、少なくともこの場では一番地位が高いだろうと判断した男に紫水を突きつけると顔色を変えた。

「てめえっ」

「やつぱり、あんたの上司か。どうする？　このまま喋らないなら、スパンといくけど」

男は歯ぎしりした。目の前の、端正な顔つきの青年がどうやら自分と同じ……いや、自分達が可愛く見える程の事をやってのけてきたという事を察していた。スパンといくと云ったら、本当にそうするに当たって何の躊躇いも持たないタイプだろう、と。

更に女の方はナイフをしまつて今は、足先を男の逞しい胸に突きつけている。この女にとって、ナイフよりも足の方がよっぽど恐ろしい凶器であるという事も直感的に判った。ナイフは、始めにインパクトを与えるためだけに用いたのだらう、と。

「……案内する」

下手すれば、全滅だと察せられた。高いだけの武器一つで、助かるならそれでいい。

「どーも」

その部屋を出て、進んでいくと何人かの仲間とすれ違う。その度に「兄貴、そいつらは？」

と質問が来て

「ほっとけ」

と乱暴に答える。機嫌が、大層悪い（無理もないが）と察した仲間達はいそいそと離れていく。

「あの爆発は、何でもありやせんでした。

命知らずのがきんちよの、悪戯かなんかかもしれやせんね。今度見付けたら、一生後悔させてやりませあ」

「……ああ」

爆発は何でもなかったが、爆発と同時に起こった事はとんでもない事だった。

「ここだ」

ある部屋のドアをぱつと開けた男。

「へえ」

ロデオは微笑んだ。

「まあ、あれで済むわけではないか」

レピュスも口の中で呟いた。

室の中には、5人の男が大型の刃物を持って揃い踏み、後ろにも続々と盗賊達が集まっていた。

「作戦変更。全滅させて、勝手に探す」

「ああ、了解」

実際、その方が彼ら向きだったかもしれない。

“紅夜叉”

ほんの数分後。

「どこにある？」

「ふあい、あ、あんふあいしましゅ（はい、あ、案内します）」

峰打ちではあったが、綺麗にぼこぼこにされた半数。女とみくびつていたら、馬の如く強い、命に関わる威力の蹴りを叩き込まれた半数。もう戦意は無かった……。

辛うじて起きていた一人が、にこにこしたロデオに首根っこを掴まれ、歩かされていた。

連れて行かれたのは、1階の中心に当たる部屋。

「さっきみたいな事をしたら、今度こそ、例えじゃなくて全滅だけど？」

ロデオが微笑みながら云うと、可哀想な男は酷くびくつきながら「い、いえ、とんでもありません」

と、侵入者に対して非常に低姿勢であった。

女も、それから青年の方も綺麗な顔して非常に脅し慣れている。

どこの悪徳組織の者だ？ と、盗賊（悪徳組織の者）に思われていた。

男が、ガタガタ震えながらドアを開くとまずレピウスが表情を変えた。それは、剣でなく刀だった。

少し高めのテーブルというより、台に乗せられている刀。鞘は白く、柄は紅い。そして鐔は八芒星の形をしている。紫水よりは短い刀だが、短刀という訳ではない。

「この銘は」

レピユスが幾らか緊張を持って問いかけた。

相手はその緊張を、殺気と勘違いして更に脅えながら

「ひっ……東大陸の大業物13工の一つ、8工紅夜叉ベニヤシャでさ」

レピユスは、進み出て手に取った。

東大陸大業物13工はどれも、銘に色が使われている。8工は、紅色。抜いてみると、刃紋は直刃。柄と同じような色が、光に当たると反射される。

「呪いの刀に引き続き、物騒だね」

調べているらしく、ロデオは云った。

勿論、レピユスも判っていて頷く。

「紫水が持ち主を殺す、呪いの刀ならこれは人殺しの刀……」
それを聞いて、男は思わず興味で恐怖を忘れて質問する。

「なんか特別なモンなんですかい？」

レピユスとロデオは呆れたように顔を見合わせた。

「知らずに持ってたのか？」

「まあ、兄貴達は判ってたかもしれないけど」

「じゃ、兄貴達に云つとけ」

レピユスは紅夜叉を紫水と共に腰に差すと、男を見た。

「金輪際、東大陸大業物13工にも西大陸宝剣8工にも手を出さな
つて」

「へ……へい」

「下っ端だったのか。可哀想な事したねエ」

帰りの車内でロデオは云うが、気持ちはこれっぽっちもこもっていない。

「それにしても、保管はどうするの？」

「組織の保管庫を使う。何本も持ち歩く訳にはいかなし、放ってお

く訳にはもつといかない」

ロデオは頷いて、助手席で伸びをした。

「あゝあ。虹の雫はどこかなあ……」

「見付かる前に、じいさんとばあさんにならないといいな」

「酷い事云うねえ。今回、自分は当たりだったからって」

ロデオは頬を少し膨らませた。

こうしてみると、只、可愛いだけなのだが……。

「ま、近い内にまた手伝わせるから」

レピュスは頷いてから、ボスの伝言を思い出した。

特に大事なものでなさそうだったが。

「ボスがさ」

「……なんだって？」

「一度は顔見せに来たらどうかって云ってた」

ロデオは口を尖らせた。

「自分で云えばいいのに」

「断られるのに疲れたから、だそうだ」

軽く笑ったロデオは、おかしそくに何度か頷いた。

「そつかそつか……。じゃ、お断り回数を更新ね。」

まあ……『あの人がない時なら、行ってもいいけど』って伝えといて」

「あの人って……」

「云えば判る」

どうも、曖昧な事だらけなのだが追求は趣味でないのでレピュスはこれ以上その話を続けようとはしなかった。

*

「良かったね」

ボスはレピュスの持つ紅夜叉を見て、微笑んだ。

「はい」

「ロデオは何か言ってた？」

レピュスは、帰りがけに彼女が言っていたよく判らない言葉を繰り返した。

「『あの人がない時なら』……と言っていました」

すると、ボスは頷いて苦笑した。

「まあ、顔合わせたくないんだろうな。聞いた？ 彼女の意中の人の話」

「ああ、はい。ローザバーグ家の……」

「そうそう」

ボスは何となく、面白がっているようだった。

「ロデオは……何故、ここを離れたんですか？」

話を聞いていると、「あの人」というのに関係がありそうだが……。

「宝剣を探す為だよ。あと1年、ローザバーグと彼女の出会いがずれてたら、君と彼女は“元同僚”だったんだけどねえ」

「5年前までいた、という事ですか」

レピュスが組織に入ったのは4年前である。ボスとの出会いは、それよりも前なのだが。

「うん」

ボスは頷いてから、両肘を机に置いて手を組んだ。これはボスの癖というか、無言のメッセージで「この話はこれで終わり」を意味する。

付き合いの長いレピュスは容易に察して、低頭すると

「では、失礼します」

と部屋を後にした。

行った先は、自室とは反対方向にある保管エリア。

鋼鉄の、真四角の建物の内側全てが厳重な保管庫となっている。

本部の入り口と同様、パスワードを入力して指紋認証システムをク

リアすると中に入る事が出来る。中に入ると、ずらつと扉が並んでいる。その内の一つに、またパスワードを入力して中へ。

その中にはたくさんの武器が並んでいる。共有の保管庫の為、様々な武器が整然と何層にもなっている棚に並んでいる。

空いている場所を見付けて紅夜叉を置き、所有者を示すタグを付けた。ちなみに、そんな事をした者は未だかつていないのだが、所有者以外が持ち出すと警報機が作動する仕組みとなっている。技術者でないレピュスはシステムなど知った事では無かったが。

捕虜返還

「失礼します」

ボスの部屋に、サッズが緊張した面持ちで入ったのはレピュスが帰還してから2日後。

「何かあった？」

「ダーク・ペガサスのトップ……カリギュラを名乗る者から通信がありました」

「用件は」

「我々が確保している、ダーク・ペガサス組織員の返還です」

ボスは数秒考えてから言った。

「ここに繋げて。直接話す」

「はっ」

*

「……という事だから、悪いね。敵に回しても怖くはないんだけど、それを回避できるならその方がいいから」

レピュスはボスから、ケイを含む組織に幽閉されているダーク・ペガサス組織員を迎えの者に引き渡す役を仰せつけられた。ここへ来させるのは危険と考え、アーシャからも離れたラゴンという町を指定した。

「無償で、ですか」

些か、不審そうにレピュスが云うとボスはにやりとした。

「いや、当然ながら条件をつけた。

ウチとダーク・ペガサスは、人質の返還が終了した直後から同盟関係だ」

レピュスは啞然とした。

「なっ……」

「悪い話じゃないんだよ、実は。特に、レピユス、君にとってはね」
「それというのは？」

「彼らは、知つての通り東大陸大業物13工に関心を持っている。
その情報を共有できる」

まだ、眉間から皺が消えないレピユス。

「一度、裏切った相手ですよ」

相手がボスというのは頭にあるが、どうも人の良すぎる決定に思えた。

「まあ、確かに信用は出来ない……というかしない。利用するだけだ。」

ウチで一番、極悪非道の黒魔導師が呪いを掛けてるし」

レピユスの脳裏に、その極悪非道の人物が浮かんだ。昔、“世話になった”事があるから、さしものレピユスでさえ息が止まりそうになった。

「呪いとは……」

「連中が、ここで知り得た事……この場所も含めて口に出せば死ぬ
つていう単純なもの。どうやって死ぬのかは彼、教えてくれなかつ
たなあ。」

というかそれ以前に、ジェリーに痛めつけられてそれが絶大なトラ
ウマになつてから呪いは必要なかったかもと言つてたね」

ジェリーの方は当然、実体験を伴わないが、噂を聞いて知っている。
背筋が冷たくなつてきた。この組織の表に出ないところにいる者達
は、身内でも畏れる程に、とんでもない。

「ま、そういう事だから」

「差し出がましい事を、申し訳ありませんでした」

「ううん、いいよ。そういう疑り深さは好き。信じたら負けの世界
だからね」

レピユスは低頭した。

ボスはそれを見て微笑む。

「だから、あの子はいなくなっただんたろうねえ」

「……ロデオの事ですか」

「うん。大胆不敵に見えるけど、繊細なところあったから」

驚いた顔をするしかなかったレピュス。少なくとも、そういった事を察する機会にはまだ出会っていない。

*

「いやあ、助かったなあ。このまま一生、地味に牢屋暮らしかと思ってたぜ」

ケイは車に乗ると言った。助手席、レピュスの隣にいる。

「お前だけ、元気だな」

「まあね」

後ろにいる、他4名はぐったりしていた。まだ、精神的苦痛から抜け出せていないのだろうか。

「しかし、あのハズスつてのすげーな！ いやあ、この俺もあんなにえげつねえ術、使えねえよ」

ハズスという名前で、後ろの4人が呻いた。

「吐くなよ」

レピュスはさつと忠告した。

「お前つて、そっぴい変態だったな」

「おいおい兄貴、変態は無いぜ。俺はこよなく、呪いその他を愛してやまないだけだ！」

「それを変態と呼んで何が悪い。てか、兄貴やめろ」

ケイは「ちえっ」と、唇を尖らせた。表情が静止していると、黒髪黒目の彼はクールな美青年に見えるがくるくる表情が変わるので、ひょうきんな顔に見えてくる。

「そうだ。黒魔導と呪術はどう違うんだ？」

レピュスはこの際だから、聞いてみた。

まあ、もう敵同士ではないし。

「内容は、かなり似てるね。」

違うのは呪術は技術であって、魔導は知識ってところかね」

どう違うんだ？ という顔をしたレピュス。ケイは説明する。

「呪術は経験が全てって訳だ。俺の話を見ると、俺が今使える呪術はかつて自分がくらった術だ。それで身体が覚える。だからよ、呪術は人を殺さないんだよ」

「イメージと違うな」

ケイは頷いた。

「言葉がいけねえよ。いや、言葉はいい。呪いって素晴らしい言葉への、一般認識がいけねえな」

一人でうんうんと頷いている。

「反対に、魔導は恐ろしいぜ。センスさえあれば、本を読むだけで出来るようになった。だから、黒魔導って分類があり、それを使う事は一般にタブーとされるんだ。黒魔導の本は、そりやおぞましいぜ。一撃で人を殺す魔導から、一生続く悪夢を見せる魔導なんてのもある。」

俺達がハズスに掛けられた、“言霊封じ”の魔導は可愛い方さね」

「……生まれつき、魔導が使える人間がいるって聞いた事があるけど」

するとケイは、軽く笑った。

「そいつは眉唾な。」

何年研究しても、これっぽっちも魔導を使えるようにならないセンス無い連中が、とんでもなくセンスがあって絵本代わりに魔導書を読んで魔導が使えるようになった子供を見て悔し紛れに言った出任せだ」

レピュスは試験に出ていた、魔導を使う少女を思い出していた。彼女が、それに当たるのだろうか。

迎えの者

ダーク・ペガサスの者と落ち合う場所は、ラゴンの中でも寂れた場所。家などは一切なく、ポツン……ポツンと数少ない旅行者を待ちかまえている宿屋があるのみだ。田舎というか、廃墟という表現が似合う。

「誰が来るって？」

ケイが車を降りつつ尋ねた。

「確か、ユウとか……」

すると、ケイは軽く笑った。

「洒落が効いてるなあ、やっぱ」

「は？」

「名前聞いて、わからん？ “俺達の” 同国人だよ」

レピュスは少し目を驚かせたが、口では無感動に

「へえ」

と言ったのみだった。

「あ、来た来た」

ケイが目をやった方向をレピュスも見た。黒髪の……男？ 女？ 遠目では判らない。ただ、髪はやはり黒で瞳も黒。ダーク・ペガサスでは身元を隠したりしないものようだ。黒髪の民族は、非常に限られているから特に西側ではレピュスのように金や、茶色に髪を染める事が多い。

「久し振り〜ユウ」

「……」

声が届く範囲になると、相手は男だというのが判った。ケイが明るく呼びかけても、ユウというらしい彼は目を細めたのみだ。そして、言った。

「莫迦ですか、あなた達」

「いやあ、ははっ」

「笑い事ではありませんよ。上の命令でなければ、放っておくつもりだったのに」

「酷いじゃねえのよ」

ユウはつんと顔を背けた。だが、呆然としていたレピュスにすぐ向き直る。

「こちらにばかり都合の良い条件を飲んでいただき、このどうしようもない莫迦共を返して頂いたこと、感謝いたします」

「い、いや……」

辛辣なのか丁寧なのか判らない。

病気かと疑いたくなる程、痩せている彼は冷徹な第一印象の整った容貌をしていた。切れ長の目は、女性のように大きく、眉は細い。すっとした鼻梁、無駄な肉の一切ついていない顎のラインと全体が美しい。

「あなたが、レピュスさんですか」

レピュスは、少々の警戒を持って頷いた。

そういえばこうなったきっかけは、自分がダーク・ペガサスに攫われた事が原因だと今更思い出した。

「さぞ、我々の目的を馬鹿馬鹿しい事と考えていらっしやるのでしようね」

それはもう！ と言いたいのを何とか押さえたレピュスは無反応で相手の反応を見る。

すると相手はくすりと笑った。

勘弁してほしい。些か、美しすぎる。

「やはり。」

無理ありません。私もそう思いますから」

「おいおいユウくん？」

ケイが驚いたような、非難するような微妙な表情で首を突っ込むも

ユウは気にしない。

「じゃあ、何であんたはそこにいるんだ？」

レピユスがケイには構わず聞くと、ユウも同じくケイには構わず答える。

「恐らく、あなたがその組織にいるのと似た理由ですよ。我々の出身国の者は、義理と人情なんて言葉が好きでしょう？」

また、くすつと小さく笑った。

「……そうなのかもな」

「そういえば」

レピユスはじつと目の前のダーク・ペガサスの者達を見つめた。

「紫水は諦めるって事か？」

「上の方は諦めないでしょうが……私は、手を引くように説得するつもりでいます。あなたの事情の方がよっぽど賢明ですしね。

それに、黒の教会については馬鹿馬鹿しい上に」

「おいおい、ユウ？」

「どうも騙されているだけのような気がするのですよ。

我々ダーク・ペガサスは、神聖を主張して人々を騙している訳ですが」

ケイはもう、突っ込むのを諦めていた。

「黒の教会も、我々を騙して東大陸大業物13工を集めようとしているだけなのではないかと……」

レピユスは少し考えてから、ユウを見た。

「俺に似ていると言った割には、トップに対して冷徹じゃないか？」
ふふ……と笑うユウ。

「トップはどうでもいいのです。ただ、上に恩を感じる相手がいるのでその人の考えと行動に従っているだけ……。似ているのであって、同じではないです」

「……成る程」

よく判らない部分もあるが、それ以上の言及はやめておいた。時間の無駄でもある。ダーク・ペガサスと同盟関係になったとはいえ、恐らくボス中心に上の方が情報のやり取りをするというだけだろうし、特にユウとはこれ以上の関わりを持たないように思える。

「では、これで失礼します。ケイ、運転してくださいね」

「えゝめんどくさ……すいません」

ケイは、一気に絶対零度となったユウの笑顔に負けて瞬間的に謝った。

「じゃあな、兄貴」

「兄貴？」

「おう、色々あって、俺は舎弟なんだ。な、兄貴？」

「さっさと行け。それから、兄貴って言うな」

「嫌がられていますね？」

「兄貴は照れ屋なんだよ」

「兄貴って呼ぶな」

「へゝいへい」

最後までヘラヘラしていたケイの背中に一瞥を投げてから、レピュスは車に乗り込んでエンジンを掛けた。

殺し屋と超有名貴族

「外れだったか。いやあ、残念だな。とうとう虹の雫が拝めるかとワクワクしていたんだがね」

ゆったりしたソファに腰掛けた、品の良い男が笑って言った。言葉ほどがっかりしている風ではない。そんな簡単に済む話ではないと承知しているのだろう。

「相方には、じいさん、ばあさんになる前に見付かるといいな……なあんて言われちゃいましたよ」

肩をすくめたロデオ。

「はははっ。君やジュナスがそうなっている頃には、私はこの世にいないからなあ。それは困る！」

愉快そうに笑っているのは、ローザバーク家当主バルフォア・アーサー・ローザバーク。

ここはローザバーク邸の客間の1つ。ピカピカの石造りの床、何十人かでもゆったりと囲めそうなテーブルが真ん中にあり奥の一人掛けソファにバルフォア、入り口側のソファにロデオが座っている。今日はロデオが、先日の報告に来たのだった。

「実際、どうなのかね」

「というのは？」

「どのくらいで見付かりそうか……見当はつくかい？」

ロデオは首を横に振った。すぐに。

「全く。信頼出来るものから、曖昧なものまで宝剣に関する噂は絶えず流れています……が、だからこそ無駄足だらけなんですよ。この前のように、東大陸大業物とごっちゃになっている事もありますしね」

「成る程……」

バルフォアは、人の好さそうな顔に少し残念そうな色を浮かべた。

「まあ、しかし私は君が頑張っているのは知っているからね」
ちよつと、悪戯小僧の様に微笑んだ。

「そろそろ、経費支払いの代わりにご褒美でも思っているんだが？」

「というのは？」

「君に、ジュナスのガードマンをやってもらおうかな、なんて」

「喜んで」

余りにも、反射神経の良い即答だったのでバルフォアはとうとう噴き出した。

「じゃあ、早速、今日から頼もう……」。

ただし結婚はまだだからね。早まったマネをしてはいけないよ」

今度は、にやりとした超有名貴族。彼がこんな口を利くと知っているのは、身内とごく親しい友人、それからロデオとクラウドだけだ。

「良かったですね、ロデオ！」

クラウドが客間を出るとすぐに言った。

「ほんとに。ガードマンとして、近づく女共を蹴散らせるのは嬉しい限りだ」

笑顔で物騒な物言いのロデオ。

ジュナス関連だからといって、発言が可愛くなったりしないところが良いとクラウドは思っている。恐らく、バルフォアもこの媚びない態度が気に入っているのだろうと。

「あ、ロデオ様！」

“きゃっ、きゃっ”という効果音がピッタリのメイド達にロデオを見付けて駆け寄ってくる。

「お久しぶりですっ」

「どうです？ 何か進展でも？」

この2人にもそうだが、ロデオは（女なのに）メイド達にとってもモ

テている。彼女達の職場では見られないような強さを持った人物だから、珍しいという事もあるのだろう。それから、可愛い見かけと過激な台詞のギャップが良いとか言われてもいたり……。

「ガードマンとして任命された」

ロデオが笑顔で答えると、2人はさも嬉しそうな歓声を上げる。

「何かいいですっ!」

「禁断の恋って感じ!」

とか、訳の判らない事も言っているが。そういうお年頃なんだな、と同年代同性のロデオはクールにそんな2人を眺めていた。

メイド2人が、メイド長に叱られて残念そうに仕事に戻っていくとロデオはようやく目的地へ行き着くことが出来た。

3階建ての建物の2階。廊下の一番奥にある、広い部屋。

この部屋に、ノックもせずに入るのは父親以外では彼女くらいだ。中の人物はだから、前触れ無くドアが開いた時から察していたのだろう。ドアが開いた時には、満面の笑みを浮かべていた。

首の後ろくらいまでの、明るい茶髪で瞳の色は黒に近い茶色。切れ長のその目には、見つめられたら意識が遠のきそうな程の力溢れる美しさがある。鼻、口などのバランスも文句の付けようがない整いよう。自分達がお近づきになる事を望むよりも、ロデオとのツーショットを喜ぶ屋敷の女性陣の気持ちは大いに頷ける。

「よく来たね、…… ロザリア」

ジュナスはゆっくりと、彼女の限られた人しか知らない本当の名前を呼んだ。

「もう、聞いている?」

ロデオ…… ロザリアは部屋に入ってから尋ねた。

「聞いた。父上もなかなか、意地の悪い事をする……。ここまで許可しているなら、もういいだろうにね」

肩をすくめるジュナス。

「まあ、『二度と現れるな』も考えられた訳だから、有り難いとは

思っけど?」

「そういうものかなア」

「父上ご所望の品はどう?」

「あらゆる情報に飛びついてるんだけど、結局、いつも外れ。

どこの誰が持つてるのかなア……。というか、ローザバーク家が言い値での買い取りを表明してるというのに売り手が現れないって事は金目当てで持つてゐるって事じゃないんだろうから。結構、恨まれる事になりそうだな」

ロザリアがソファに座って、天井を「やれやれ」と扇ぎながら言う
とジュナスは軽く笑った。

「恨まれる事は得意なんじゃなかった?」

「まあね」

「まあ、いつまでも待つよ」

「……ありがとう」

それっきり、部屋から声が漏れる事が無くなったため、聞き耳を立てていたメイド達はガツカリしたり想像を膨らませたり、忙しかった。

休息？

それから数日、レピュスは久し振りに通常通りの生活をしていた。自分が連れ込んでしまった邪教集団を結果的に追い払う事ができ、殺伐としているのが常の組織も少しそれが薄まった気がする。殺し屋の美女から連絡が来る事もなく、朝起きたら、組織上層部の恐るべき先達が待ちかまえている事態もここしばらく起きていない。

朝は割と早く目が覚めたのだが、変わった事はせずいつも通り朝食を摂りに行く。

「あ、レピュス？」

「え……」

振り返ると、随分、久し振りに見る顔があった。

ランカスター家の娘であったが、当主の愛人の娘であり立場が低く粗末な扱い……とまではいかなくともかなり心苦しい日々を送っていた少女。元カレン・ランカスター。現在、イリスという名で情報部に所属している。

「久し振り！」

「ああ、久し振り」

思わず、相手をまじまじと見てしまった。

「失礼な言い方だったらごめん。……明るくなった、な？」

レピュスが言うと、相手はにこにこしたまま

「そうかな？」

と。

「毎日、することがあるから、かなあ……。楽しいなんて言ったら、不謹慎なんだろうけど。」

すべき事も、誰かに期待される事もなく過ごしてた時より……変な話だけど、とても楽なの」

そう言うイリスは、とても美しい光を放っているかのようにだった。本当に、生き活きとしている。顔立ちや背丈などがそんなに変わっているはずもないのに、どういう訳かいきなり迷える子供が自我を持った強い大人になって目の前に現れたかのような驚きにレピュスはちよつと反応が出来ずにいた。

「これから朝食？」

「ああ」

「一緒にいい？」

レピュスは頷いた。

2人で席に着くと、互いに思わず笑いそうになった。

示し合わせたのでもないのに、同じもの……しかも変わったものを選んでいたからだ。サラダと水だけ。

「あ、あのね、ダイエットとかじゃないんだよ……？ その、胃が弱くって」

「うん。胃は鍛えられないからしょうがない」

慌てて弁解するイリスにレピュスは大きく頷きつつ言った。

少なくとも、ケイのように彼女が朝ーステーキを食べていなくて良かったと思う。

「仕事は結構、忙しいのか？」

レピュスが聞くと、イリスはちよつと考えてから頷いた。

「ここでの忙しいが、まだ判らないけど……。第7班の班長に任命されちゃったんだ、私なんかが」

苦笑する。

「まあ、事務仕事が生に合ってるみたい」

「ふうん」

仕事が出来ただけでは、特に情報部では班長に任命されない。内外の機密情報を取り扱う立場の為、人間的に信頼出来るか否かが、むしろ仕事の実力よりも重視されるのである。イリスはこの短期間で、

サツズを始めとする情報部のトップ達の信用を得たという事だ。かなり、珍しいケースなのだが彼女は知らないだろう。

「でも明日、休みをくれるって。……だけど、何すればいいか判らないんだよね。」

「どうするものなの？」

レピユスは少し考えて答えた。

「ここから出ない奴も多いけど、例えば外に買い物に出るとか……」

「暗殺部隊の人って、休みとかあるの？」

「てか、任務が渡されない時はいつも休み。俺なんて、ここ数日は連休」

カレンは何か、思い悩んでいる。だが、決心したように顔を上げて、やけに力を入れてレピユスを見た。

「あつ、あのね」

「……？」

「もし、明日も任務が無いなら……そのお顔が赤くなっていく。」

「いつ……い」

「一緒に出掛けるか」

「え！？ うん！」

この上なく嬉しそうにイリスは笑った。

近くに座っていた同僚やらなんやらが、ニヤニヤしてこちらを見ていたが気にしない方向で。レピユスは自分がこういうのは嫌いだと思っていたのに、悪くないと思っているのも不思議だった。言い辛そうだから言っただけだが、こちらが誘った形になってしまったし。

まあ、服でも買うかとぼんやり考えていた。

*

翌日、任務が無いから予定通り出掛けられるというのをレピュスから聞いてイリスは支度に追われていた。

「あんまり、張り切りすぎて引かれちゃうよね……。うん、ミテ
イア姉さんが苦手だったんだもん」

自分で色々と呟いては頷きながら、服を手取る。

自宅からは、何も持ってこられなかったが、寧ろそれで良かった。
動きづらいドレスや、ミティアより目立たないようにと配慮された
かのような暗い色の服は余り好きではなかったし。ボスに持ち物が
一切無い事を……。今から考えると、何と恐れ多いことかと思えるが、
相談すると快く給金を前払いして買物に行かせてくれたのだった。
迷った挙げ句、白いドレスワンピースに黒いボレロを着た。シンプル
だが、彼女によく似合う。金色の長い髪は高いところで1つにまと
め、黒いレースの飾りを付けた。足下には綺麗な赤色のサンダル。
これで、レピュスが昨日のように質素なシャツにワークパンツと
いう格好だったらどうしようと、少し思ったが……。それはそれだ。

「聞いたよ。デートするんでしょ？」

「なんで、ルカ先輩、ご存じなんですか……」

レピュスは驚きを通り越して、ぼーっとした。

「イリスちゃんが同僚に言っつて、その同僚がサッズに言っつて、サッ
ズがボスに言っつて、ボスが俺に教えてくれた」

「そ………そうですか。」

それで、何でここに……」

「ボスの指示」

「は？」

「服のコーディネート」

「はあっ!？」

休息？（後書き）

のほほんとした気持ちで書きました。 のほほんとして読んでくだされば
（笑）

休息？

「……派手すぎじゃないですか？」

「俺からすると、まだ地味。19なんだからさ。はじけちゃえ」

「はあ……」

レピュスは、すっかりルカ好みの格好となっていた。誰かが見たら、ルカのマネかと思うだろう。

黒い長めのシャツ、その上に同じく黒のライダースジャケット。膝下までの黒いレザーパンツに、黒いロングブーツ……要するに、黒づくめな訳だが驚くほどよく似合っている。

「お前、黒好きでしょ？」

「ええと……まあ」

汚れにくくて楽だから、日頃着ているなどとは組織一の洒落男という別名まであるルカの前では言えない。

「あと、サングラスとか……」

「いいです、そこまでしなくて！」

「えー」

レピュスは逃げるように、礼を言って外に出た。

「お待たせ」

やってきたイリスを見て、当初考えていた質素なシャツにワークパンツというスタイルで来なくて本当に良かったと思い、ルカに感謝した。

「格好いい」

「……実は、ルカ先輩に着せられたただけなんだけど」
するとイリスはくすくすと笑う。

「そういう意味だったんだ」

「へ？」

イリスは、驚くべきというか呆れた事を教えてくれた。
「昨日の夜ね、たまたマルカさんに会ったんだけど……」
『明日のレピュスは俺に任せて』って。何の事かと思った」

「行きたいところとか」

「うん。フオーン街って判る？」

知っている。若者向けの洋服店やら、アクセサリーの専門店やらが多く建ち並ぶところ。また、洒落たカフェなども幾つかあるのだった。

「車で30分くらいか」

「仕事以外でも、車って使えるんだ」

「俺は去年、買ったんだよね」

「へえ……」

イリスは、レピュスの意外な一面を見た気がした。そうだったものには興味がないと思っていたが……。

「ふふっ」

「何？」

「男の子だな」と思って

「まあ、……便利だから」

「照れてる？」

*

「いやア、若いっていいねえ。レピュスもイリスも」

ボスは明らかに楽しそうであった。

「そういえば、ボスってさ……何歳？」

ルカがじつと相手を見ながら言っと、ボスは軽く笑った。

「秘密。生年月日、出身、名前、性別、全部秘密……。これが、この組織でボスになる条件だしね」

「前から思ってたんだけどさ」

「君がそんな顔するなんて珍しいな」

ルカは……次の言葉を言うか否か、迷っているようだった。だが、ボスから目を背けると口を開いた。

「その条件って……“人間じゃなくなる”みたいだ」

ちらりと、ルカがボスの顔を伺うとボスは只、微笑んでいるだけだった。

「だからね、その“人間じゃなくなった”みたいなこのボスについて調べようと躍起になる連中がいるんだよ。この前の、邪教集団みた」

*

「お似合いです!」

「ですよ!」

「ビジュアル系って感じですね。格好いい彼氏、羨ましいです」
「彼氏じゃないですよ」

イリスと店員がはしゃいでいる。

男性服の店なのだが、レピュスはイリスの着せ替え人形と化していた。余程、今日のレピュスの格好が好みだったのか……ロックファッション専門店に連れ込まれた。スカルやら十字架やら、チェーンやら。

「じゃあ、これと、これと、これにします!」

「……俺の意見は無視?」

「任せるって言ったでしょ?」

イリスはすっごく良い笑顔なので、逆らうに逆らえず。

まあ、彼女としても自分ばかりが物を買っても悪いという気遣いかなのだらうと考える事にして、特に反抗もせず。

普段、買い物など必需品くらいしか買わないレピュスからすると

目が飛び出るような量の服やらなんやらを購入したイリスはかなり満足げだった。

今はカフェに入って、イリスは幸せそうにケーキを食べている。

「好きなんだ」

「えっ!？」

イリスが変な反応をしたのに首を傾げつつ、レピュスは

「甘い物」

と。何だか、ほっとしたような残念そうな(?)顔でイリスは頷いた。

「レピュスは嫌い?」

「あんまり食べないな」

「コーヒーマもブラックだもんね」

それから、イリスは遠慮がちに言う。

「ボスからちよつと、話聞いたんだけど……」

呪いの事か? と思ったレピュスは、ちよつと拍子抜けした。

「ロデオさんってどんな人?」

「ロデオ? …… どんなつて、うーん、無駄に強いというか無茶苦茶というか」

「女の人なんですよ?」

「そう。初めて見たときは、驚いたけど。」

「一見、フツの…… まあ、美人か」

イリスは頭を斜めにして、レピュスを観察している。

「……?」

「綺麗な人なんだ。」

こつ、恋人とかいるのかな?」

「ああ、結婚考えてる相手がいるとか」

その途端、イリスが一気に肩から息を吐いたので、今度はレピュスの方が首を傾げる事となった。

「ロデオがどうかしたのか?」

「う、ううん、何でもない！」

レピュスがロデオの事を好きだったらどうしようか、心配していたなどとは口が裂けても言えない。

不思議がるようなレピュスの視線を忘れるように、イリスはケーキに集中した。

休息？（後書き）

この2ショットが可愛くて仕方ない（笑）

驚きの事実

「この前は楽しかった？」

「ここの組織は、秘密厳守が基本かと思ってました」

レピュスがぶすつと返すと、ボスはさぞおかしそうに笑った。

「立場も服装も、2代目ル力候補かな？」

「まさか！………というか、ル力先輩が俺より先に死ぬ気がしませんでした」

「ははは、うん。世界が滅びても、多分生きてると思うんだよね、なんて言ってたよ」

「ボスも生きてそうですよ」

「そう？」

今日は、任務で呼ばれたのではない。イリスと出掛けた後、何件か任務を行ったがそのどれかの話でもなさそうというのは判っていた。

「ランカスター襲撃事件、覚えてる？」

「はい……随分前の話ですね」

「やっと、全容が判ったんだ」

ボスは3つのファイルを出した。その内1つは、ダーク・ペガサスと記されている。あと2つの名前については見覚えがなかった。

「ゴート、アルド・ワークス……」

「ゴートの方はまあ、ウチと殆ど同じね。合法から非合法まで、どんな依頼でも請け負ってその報酬で儲けてる。もう一つ、アルド・ワークスの方はちょっと珍しいタイプ」

ボスは、そのアルド・ワークスのファイルを開いた。

「簡単に言えば、裏社会の人材派遣会社ね。ワークスって言うだけあり。アルドってのは、創始者の名前ね………ここ見て」

「ゴートと、契約していますね……。ランカスターが襲われた日の日付だ」

「そう。」

ダーク・ペガサスは、ゴートとだけ手を組んでいた」

「……つまり、ゴートの目的はランカスター殺害でダーク・ペガサスの目的は紫水。それで、その2つが同時に集まる日を狙って、協力して会場に侵入して襲いかかってきた」

「うん」

「しかし、ゴートはダーク・ペガサスに黙ってアルド・ワークスの……社員を借りていた？」

「そういう事。君やラズ、ウォーレンが苦戦した黒い仮面の奴らがアルド・ワークスだ」

レピュスは苦い顔で頷いた。

「相当な実力でした」

素直に言う。

「まあ、十中八九、アルド・ワークスがこの先、敵になる事は無いと思うんだよね。連中は、まさに金儲けしか考えていない……組織というか、会社だから。会社が経営できて、職員に給料が払えれば何一つ不満はない訳。わざわざ、ウチみたいなデカイところに喧嘩売って、損する必要はない」

「……成る程。」

それで、何故俺にこの話を？」

「知りたかったでしょ」

「まあ……え、それだけですか？」

「ううん、まだある」

「ゴートがランカスラー嬢を誘拐しようとした理由が判明した」

「月並みに、強請りですか？」

ボスは頷いた。

「その、強請るものが、なかなか凄くてね……」。

西大陸宝剣8工の7番目、虹の雫だ」

レピュスは息を飲んだ。

「それ……」

「ロデオが探してるもの、でしょ？」

「よくご存じですね」

と言いながら、ボスとロデオが“仲良し”だったという事を思い出した。彼女の方から話していて当然かもしれない。

「この事を、ロデオは？」

「知らないと思う。世間で宝剣やら大業物が有名になってくるよりも前に、大金持ちで金の使い方がちよっとおかしいランカスター家の主人が娘の誕生日プレゼントに闇オークションで買ったものらしい」

「はあ」

「それで、彼らもその価値を知らない可能性が高い。もしくは、ランカスター嬢が大事に大事に壁に飾ってるのかもしれない。どちらにせよ、世間に広くは知られていない話だ」

レピュスは、ボスの表情を伺う。

相変わらず、何も読み取れない。

「この件を、ロデオに話しても？」

「うん。だけど、彼女だけじゃ無理かもね。そこいらの裏組織なら壊滅させても、特に悪評は立たないがランカスター家に侵入して何人も殺したのがばれると、流石に彼女の望みは叶わなくなるんじゃないかな」

「……ローザバークとランカスターは、割と関係が深いですからね
ボスは頷いた。

「手伝ってあげてくれる？」

レピュスは思わず、目を丸くした。

こちらから頼んだのを許可するというならともかく、ボスからそう言われるとは思ってもみなかった。

「勿論です……が……」

「意外なんですよ」

「……はい」

ボスは笑った。

何となく、人間らしい笑い方だった。

「彼女がねえ、ちょっと羨ましいんだよ。だから助けてあげたくな
っちゃう」

『ボスって、もしかして……』

「こんな事、言うからボスって女性か？　なんて思ってる？」

「……！」

あっさり、表情を見破られた。

「そんな簡単に判断しちゃいけない」

それから、レピュスに電話を示した。

「組織に利のない仕事をボスが指示するのは、本来タブーだから。

内緒にしておいて。ここの電話なら、情報部も聞けないから、これ
を使って」

「はい」

レピュスは、ボスが紙にサラサラと書いたロデオの携帯番号に電話
した。

呼び出し

「もしもし？」

ロザリアはローザバーク邸の数多い空き部屋の一室を借りていた。クラウドと、隣同士である。

泊まり込みの警備員用の部屋なので、あまり手が込んでないと言われていたものだが……ロザリアは小さな溜息をついたものだった。文化が違う。いや、もはや文明か。

通常のホテルのワンルームがまるっと2つ入りそうな広さであり正面は大きな窓。ベランダまであって、そこにはジャグジーがある始末。ベッドもナイトテーブルも、椅子1つとっても高級品に違いなかった。クラウドの部屋も同じようなものだったから、ロザリアにはこっそり気を遣ってくれたというのではなさそうであった。……どこが「あまり手が込んでない」だ、というのが率直な感想である。

とにかく、そんないるだけで疲れそうな部屋にも慣れてきた頃、ロザリアのところに久し振りの相手から電話があった。昔のボスである。

ところが、電話の声の主は別人だった。

「レピュスなんだけど」

「え？ ああ、ボスのところから？ わざわざどーしたの」

彼の話を聞く内に、ロザリアの表情がぱっと輝いたのは言うまでもない。

この時の彼女の顔を誰かに見せられなかったのは残念であった。恐らく、彼女が今までその美しい顔で作った表情の中で、一番素晴らしい表情だったろうから。

「明日？ うん、すぐ行く……え」

ロザリアは、レピュスを通じてボスから出された条件に一瞬、息を飲んだが苦笑して

「オーケー。じゃあ、午後6時に」

と答えて電話を切った。

「クラウドスー」

「はい」

パタパタという足音の後、クラウドスがドアを開けた。ロザリアの使っているものと、全く同じ部屋が広がっている。

「明日、アーシャに行くよ」

「……え？」

クラウドスは、驚いた声を出してロザリアを見上げた。フードが取れる……金髪のツインテールの可愛い少女の顔が現れた。大きな瞳は、青色。

ロザリアは、部屋の中に入ってから一通り説明してやった。

「ボスさん、意地悪じゃないですか」

クラウドスは少々、憤慨したように言った。ベッドの上で膝を抱えて座っている姿は、レピュスにやけに大人びた印象を与えた姿とはまるで違って、見かけ通りの年齢を思わせる。

「うーん」

唸り声というか、溜息をついたロザリアはクラウドスに抱きつく。

「確かにそうだね……」

「レピュスさんに事情を話して、待ち合わせ場所を変えてもらいましょうよ」

「……」

「だって、あの人と顔を合わせない為に組織を辞めたんですから」
「……」

「悪い人じゃないのは、僕だって判ってますよ。というか、あの人は……ジュナス殿を除いたら此の世で一番、あなたを大切にしている人だって。でも、その所為で傷つくなんて、ダメです」

ロザリアは、ぼそりと言った。

「クラウドは優しいね。」

でも、考えれば考える程、一番悪いのはあたしなんだ。自由奔放とか、最強とか、無茶苦茶とか色々言われるけど昔からあたしは臆病だ」

「そんな事は……」

「取り敢えず、1つは向き合いなさいって事をボスは言いたいんじゃないかな」

クラウドはまだ不満そうに

「だけど、もうあなたにとって、あの人はボスじゃありませんよ」と言っただが、それ以上の反論はしなかった。

*

組織本部の入り口近くで待っていたレピュスは、すぐに警備員2人と共に地下へ降りてきたロデオを見付けた。

「やあ」

「……どうかしたのか？」

ロデオの顔に、何となくいつもの余裕綽々とした雰囲気なかった。寧ろ、その影が彼女を更に美しく見せていた。

また、隣の少女にレピュスは首を傾げた。

「あ、顔を見せるのは初めてでした。僕ですよ、クラウドです」

「マジか……」

声からしても、間違えようがない。フードをすれば、格好もレピュスのよく知るものとなる。

「ボスがお呼びなんだっけ？」

「あ、ああ。ちょっと話したいって」

「うん」

レピュスがボスの部屋の前で立ち去ろうとすると、ロデオはそれを

引き留めた。

「追い出されるかもだけど、取り敢えずいて。面倒を回避できるかもしれない」

「……??」

レピュスがこう、一日の内に何回も顔に疑問符を浮かべるといふのはそうそうない。

どうしようもない

「どうも」

「失礼します」

ロデオ、クラウド、その後ろからレピュスが入る。ボスはまず、ロデオを見て微笑んだ。

「お帰り」

「……帰ってきた訳じゃありませんよ」

「はは、ごめんね。じゃあ、いらっしやい。クラウドもね」

「……お久しぶりです」

レピュスは、何となく張りつめた空気を感じ取り、ボスが出て行ってくれと言うのを待ちわびた。ボスとロデオは“仲良し”なのではなかったのか？

「悪いけど、レピュスはちょっと出ててね。それから、クラウドも」

「待ってください、僕は……」

「クラウド、従おう？ もう、“客人”なんだし」

「……判りました」

揃って出て行く途中、クラウドはレピュスに囁いた。

「時間があるので、ちょっと説明しますね」

*

「……『あの人』は、ルカ先輩？」

「そうです。ロデオの強さは全て、あの人のお陰なんです。ちなみに、僕に魔導を勧めたのも彼です」

レピュスは首を傾げる。

「単なる、恩人で割り切れない理由でも？」

「はい」

クラウスは子供らしくない、沈痛な表情を浮かべた。

「綺麗なトライアングルが出来てるんです」

*

「じゃ、選手交代ね」

「あ……」

ボスは立ち上がった。

「防音効果の高い、隣の書斎に行ってるから」

ロデオは、ポツンとボスの第一書斎に取り残された。

このまま走り去って、クラウスとレピュスを連れて猛スピードでここを出て行こうかと思ったが、彼女の冷静な部分が逃げても仕方ないと教えた。逃げていれば、相手は追ってこない事は確かだから物理的距離は一生開いたままだろうが、恐らく自分の精神のいくらかの部分は一生ここに留まる事となるだろう。

ノック音が聞こえた。

「どうぞ」

カラっとした調子で答えようとしたが、口の中が乾燥しきっていた。

*

「綺麗なトライアングル……で、つまり」

「ロデオとルカさんは、もう10年も前からの知り合いです。出会った時はロデオは15歳、ルカさんは19歳でした。その時からルカさんはもう、組織の重役であり新人を鍛える役を任されていました」

「……聞いたことあるな」

レピュスは頷いた。

この組織にある役職の1つである。腕を買われて……ではなく、言うなればイリスのような事情を持ってこの組織に入った者が戦闘のセンスに恵まれていると判断されるとその役職の者のところへ回される。1対1で、いわば師弟のような関係となつて戦闘技術を叩き込むというわけだ。

「3年で、ロデオはもう現在と殆ど同じ強さを手に入れていました。だから、師弟関係はその辺りで解除されました……」

レピュスは、何となく話が読めてきた。

「師弟関係が男女関係になつたとか、そういうパターン？」

「そこまでいかずに終わりました」

クラウスは、深く溜息をついた。

「ロデオは5年前に、ジュナス殿と出会つた訳ですが」

「ああ……それが組織を辞めたきっかけ、だっけ？」

「微妙に違うんですよ。それもあるんですが、殆ど同時期にロデオはルカさんから思いを打ち明けられました。それを受け止められず、返事もせぬまま逃亡……これが事実です。僕は、……今は余計な話なので言いませんが、ロデオとは昔から一緒にいました。僕には全て話してくれました。だから僕は、これからもロデオと一緒にいようと決めて、共にここを出たんです」

*

「いなくなった、て事はどういう意味かは判つてるよ」

「……」

ロデオは、相手の目を見ようとしては諦めてを繰り返していた。銀髪、長身瘦躯でゴシック服を着ている彼は5年経っても変わっていないかのようだった。

そう思っているのは、お互い様であつたが。

「20歳だっけ。いなくなつたの」

ルカは目を細めてロデオを見た。どことなく、寂しそうに見える。

「そうかな、うん」

髪を掻き上げながら呟くように応えた。ルカはじっと、暫く相手を見ていたが手を伸ばして軽く頬に触れた。

「綺麗になった」

「先輩程、綺麗じゃないですよ」

苦笑するロデオだが、実際、どちらの方がより美しいかは決めるのが無い。強いて云えば、まだ20代も前半のロデオよりルカの方が大人の色気というようなものが強いだけ。

「ジュナス・レオ・ローザバーク……」

ルカが口に出した名前に、ロデオはギクリとした。それから曖昧に笑う。

「どこで聞いたんです？」

「先輩の情報網をナメるもんじゃないよ」

それから、不意に、クールを絵に描いたような瞳に熱を込めた。

「もう、戻ってこないの？」

ロデオは瞳に驚きを宿したが、あっさりと頷いた。

「決めた事ですから」

「……強引に繋ぎ留めたら、俺の事、嫌いになるのかな」

「そうですね」

きっぱりとした口調だった。何かが吹っ切れたというより、必死で強さを取り繕っているような雰囲気である。だが、それだけに彼女が悩み抜いた末に行き着いた、強固な意志の下の返答である事が判る。

「じゃあ、大人しく、忘れる」

ルカは気持ちうなだれて云った。

「……すみませんでした」

「報われないのが、俺の人生だから」

哀しそうに笑うルカだった。ロデオは、自身を密かに罵った。ルカ

に……大切な恩師に、こんな顔をさせた自身に怒りを覚えた。しかし、どうしようもないのもまた、事実だった。

「まあ、貴族生活が嫌になったら、いつでもおいで」

ル力はぎゅっとロデオを抱きしめると、さっさと出て行った。

ロデオは、酷く安心している自分に気が付いた。

『こんな事しても、嫌われたくないと思ってたなんてなあ、あたし。ほんと、どうしようもない』

行動開始

「お待たせ。ごめんね、個人的な事情に付き合わせて」

ロデオがそう言って、誰から聞いたのかレピュスとクラウドスが待機していた資料室の一室に入ってきた。彼女の顔にはもう、先ほどまでの憂いというか迷いはない。いつも通りのサバサバした表情である。

「大丈夫でしたか？」

「何の心配してるの、クラウドス」

ロデオは駆け寄ってきたクラウドスを高く抱き上げた。そのまま、ついでにぐるりと回るとレピュスに向き直った。

「手伝ってくれるんだね」

「そういう約束だし」

「じゃあ、行こうか」

「もしかして、クラウドス、喋った？」

車を走らせ始め、しばらくしてからロデオは助手席からクラウドスを振り返る。

「はい」

「ま、いいけどね」

ロデオは姿勢を正すと苦笑した。

「ルカ先輩とねえ、よくこうやって出掛けたんだあ」

「……だから、か」

レピュスは先日の「車が苦手」という話を思い出した。

「でも、もう平気そうだな。うん」

何があったのかは、レピュスの知るところではないが……いわゆる「吹っ切れた」というやつだろう。

どんなものであれ、“過去”を消化したというのは羨ましい事であ

った。

「こんな形でまた、ランカスターと関わるなんてな」

しばらくすると、レピュスはうつかり心情を口から漏らした。

「ああ、そういえばお嬢さんが君のファンだったね」

「今は……ルカ先輩に鞍替えしたらしいけど」

「あはは！　なにそれ、面食いなの？」

「100%そう」

今度は、クラウドが笑った。

「レピュスさん、自分が格好いいって認めましたね？」

「あ、いや」

「大丈夫ですよ、誰も否定しませんから」

「……クラウド、マジで幾つ？」

「秘密です」

年上にかかわれているような気分になってくるのだった。

「セキュリティシステムの解除法は既に調べてるから、屋敷内への侵入は容易い……」と思う。ただ、恐らくその宝剣はミディアの私室にあるとみて間違いはないから」

「お嬢さんを起こさないように、起こしたとしてもこちらの顔を知られる事、それから相手を傷つける事なく片を付ける……か。めんどくさいな、もう」

ロデオは拗ねたような顔をした。隠密活動は性に合わないのだろう。

「で、これは質問なんだけど」

レピュスは赤信号であったし、ちょっとクラウドを振り返った。

「魔導で、周囲の者との具体的な距離だとかは判るのか？」

「はい。半径……そうですね、50メートル前後ならまず狂いはないと思います」

「じゃあ、クラウドにも来てもらうか」

「判りました」

屋敷内であれば、50メートルで充分である。とんでもなく広い屋敷ではあったが、都会にあるため、寧ろ縦に大きいものだったから。「一度、行った事があるんだね？」

ロデオにレピュスは頷く。

「入り口からの経路や、内部の構造はだいたい頭に入れてる」

レピュスはかなり、空間認識能力に優れている方に入るのだった。

「じゃあ、移動は任せる。警備員やらなんやらに関しては、任せて」「いや、でも……」

蹴り殺されて……いや、殺されていなくとも侵入者が足技で警備員を蹴散らしたとなると犯人としてロデオが容易に想像されてしまう。「大丈夫。この前、説明したの覚えてる？」

「“念術”……？」

「よく覚えてました。アレ、色々とバラエティに富んでるから。凶器不明の傷なんて簡単に作れる」

「恐ろしいな」

ロデオはにやりとした。

「紫水使いに言われたくはないなあ。あの時、斬られたところの傷、まだ消えないんだけど？」

「あ、悪い。あれ、一生消えないと思う」

「ええっ！？ 酷くない？」

蠢く影

ランカスターの屋敷がある通りから、一本外れたところに車を停めた。

「決行は、午前2時。事前の調べに依ると、この時間がミティアの寝室のある7階の警備が最も手薄になる。交替の時間とは被ってないから、うっかり倍の数に出くわす事もない」

レピュスは何回も確認したので、既に覚えている内容を伝えた。

「深夜に潜入なんて久し振りだなア」

ロデオが言う。ちよっと、わくわくしている風である。

「白昼堂々侵入して、ぶち壊してばっかなんだっけ？」

レピュスが言うと、彼女はにやりとした。

「ねえ、今更なんだけどさあ」

ロデオはもうしばらく、侵入開始の時間まであるのでレピュスに思った事を言った。

「レピュスか……もしくは、ルカ先輩の色仕掛けでお嬢様を落とす、とかできない？」

「俺の事はもう、コロっと忘れてるだろうし。ルカ先輩は……判ってるんじゃないか？ 意外と、あの人って正直者だろ」

「顔に出るか」

「確実に。あと、ミティアみたいなタイプは嫌いらしい。」

……五月蠅いと、老若男女問わず殺したくなるって言うてた」

「ホントにやりそうだからなア、あの人が言う」と

それはレピュスも全くもって同感だった。

深夜2時。3つの影がランカスター家の高層ビルのような屋敷に

潜入した。しかし、誰一人として気付いていない。セキュリティシステムの解除ロックの番号をハックしている彼らは常勤の警備員の如く入り口のパネルに番号を入力し自動ドアから悠々と侵入したのだった。

先頭を歩くのは、道順が判っているレピュス。その後ろに、人の位置を魔力で把握できるクラウス。一番後ろにロデオが控え、誰か現れて見付かったならば彼女がどうにかすると宣言していた。

初めて、ランカスターの屋敷に入った時には全ての床に毛足の長い絨毯が敷かれているのが金の無駄遣いに思えてならなかったが、足音を吸収してくれるそれとは、今の状況でかなり有り難いものだった。

*

「あの組織の者と、ロデオならば確実にランカスター家から宝剣を運び出してくれるだろう」

頷きながら言う者。

「ああ、成る程！ 流石、ゴートは考える事が違う。せこいったら黒い仮面の者が、莫迦にしたように言った。

「そうだよなあ。あんたらじゃ、無事にランカスター家に忍び込んで、お嬢様のお部屋から宝剣を盗み出す事なんて出来ないもんな。それに、俺らに頼んだところで俺らが持ち逃げした場合為す術がない。

難儀なもんだねえ、仕事が出来ないって！」

「黙っている！ お前らはあくまでも雇われの身という事を忘れるな」

「はいよ、申し訳ありませんでした、お客様！」

ランカスターの屋敷の真向かい。同じ高さのビルで、6人の者達が暗視レンズを用いてランカスター家の周辺を観察していた。

「先輩、楽しそうっすね」

黒い仮面の1人が、さっきまで陽気に喋っていた者に声を掛けた。恐らく、この場で一番の大柄だ。

「ん……まあね。金髪黒目少年と戦えたら面白いかもなって思ってた」

「仕事なんですからね」

反対に、一番小柄な仮面の者が諭すように言う。

「ルーちゃん、厳しい事言わないの!」
「……」

*

屋敷内を3人が歩いていると、クラウドが小さな声で注意を促す。
「この先に、活動中の人間がいます。2人……恐らく、警備員でしょう」

「やり過ぎす事は……」

レピュスは周囲を軽く見渡しながら、そっと呟いた。

目に、明らかに寝室として使われていないと思われる無骨な扉が映った。倉庫か何かか……。

「クラウドス、この中に人は？」

「いません」

「鍵が閉まってるけど？」

ロデオが言うと、レピュスは暗がりの為、2人の同行者には判らなかったが口元で微笑んだ。

「ちよつと、そこどいて」

「……？」

レピュスは上着から、小さな箱を取り出した。中には、細い工具が……。

「そついうキャラなんだ」

ロデオがちよつと呆れたように言う。

ピッキング開始から、1分も経たずにその扉の鍵は開いた。3人は中へ滑り込む。真つ暗な室内だが、覚えのある二オイがする。古い、書物の二オイだ。

「書庫かなんか、か」

「念のため、こちらへやって来る連中が通り過ぎるまで物陰に入りましょう」

クラウスの言うことは最もであつた。本棚の影や、机の向こう側に一同は取り敢えず身を潜めた。念のため、内側から鍵は掛け直した。ピッキングの痕も残っていないはず。鍵の確認で通り過ぎるのが精々だろうと思われる。

「来ました」

クラウスの本当に小さな声が聞こえた。ガチャ、ガチャと何度かドアの鍵が確認されたがその後はレピュスにも去っていく足音が何となく聞こえた。

ほっと、3人は息を吐いた。

「もう大丈夫です」

音を立てないように鍵を開け、扉を開き、再び歩き始めた。目的地はもうすぐである。

予定外

「この部屋だ」

レピュスは言った。暗いので判りにくいだが、無駄に豪華な金装飾だらけのドアの前に一同は並んだ。

躊躇いもせずドアを押し開けた。中は、驚くほどに広い。右手奥にベッドが置かれており、今はミティア・ランカスターが一切の警戒なく眠っている。さつと全体に目を走らせると、剣が見えた。この暗闇にあつて尚、その美しさは尋常ではなかった。室内の、僅かな明かりを受けて刀身が七色に光る。上質のパールに光を当てたような、そんな輝きだ。その剣は、ミティアの左手側の壁に掛けられている。どうしても、そこまでは行かなくてはならない。

クラウドが、短く口のなかで呪文を唱える。

「これで、少なくとも数時間、彼女は目を覚まさないでしょう。近付いても大丈夫です」

彼女は、そんなに凄腕の魔導師という訳ではない。だから、起きている者を眠りにつかせる魔導は生憎使用できないのだが、眠っている者の眠りを更に深くすることなら可能である。ミティアはもう、枕元で足音がしようと話し声が聞こえようと時間が経つまで目を覚ましはしない。

「ロデオ、行つてこいよ」

「……そうだね」

レピュスに外の警戒は任せ、ロザリアは慎重にミティアのベッドの方へ向かった。

感慨に耽っているヒマなど無いのだが、宝剣を壁から外して自らの腰に一端さした時には溜息を漏らしてしまった。鞘に収められた宝剣は、先ほどのように光り輝くことは無いものの鞘と柄でさえ恐

ろしい程精密に作られている。鞘には、まさに虹の雫と言いたくなるような、7色の宝石が散りばめられており柄には刃のごとく7色に光る石が埋め込まれている。

確かにこれは、紛れもなく「宝」剣であった。戦う為のものではない。剣技も軽やかじっているロザリアは、見かけだけでなく重さなどからも実戦で使われることを考えてつくられた剣ではないと容易に判った。苦笑せざるを得ないが、ミティア・ランカスターは正しい宝剣の使い方をしていたという訳だ。

「行こう」

ロザリアはレピュスとクラウドに並んだ。

「廊下の窓から飛び降りると早い」

レピュスは平然と言った。ロザリアも平然と頷く。

「クラウドはあたしに掴まりな」

「はい」

窓は、レピュスとクラウドを背中に乗せたロザリアが並んで棧に足をかけても全く問題のない大きさである。そして、何の未練もなく3人は地上5階から飛び降りたのだった。

レピュスはワイヤーを近くの木に引っかけて落下の勢いを殺すとゆっくり地上に降りる。ロザリアは念術だろうか、ほとんど彼女の落下スピードは空中で遅くなっていきとうとう、数十センチのところにから飛び降りたくらいの気安さで彼女は地面に足を着けた。

「便利だな、それ」

「レピュスもできると思うけどな」

ロザリアは、微かに笑って言い、さっき飛び降りてきた窓を見上げた。

「閉めた方がいいか」

「じゃあ、僕がやります」

クラウドが頷いて、窓の方を指さすと窓は横にスライドしてピタリ

と閉まった。

「鍵はまあ、閉め忘れで警備員の方々が怒られる、で済むでしょう」
細かなコントロールはできないということか。

「鍵よりも、もっと重大な事で怒られるはずだけど」

レピュスはロザリアの持つ宝剣に目をやってから言った。

「じゃ、あたしらは自力で帰るから。送ってもらうのも悪いし」

「判った」

「それと、君の目的が達成されるまで、手伝うよ。今回は殆ど、君のお陰だったわけだし……あ、それと」

「？」

「ローザバーク卿が、君の東大陸大業物探し、手伝ってくれるそうだよ」

「えっ……なん、で？」

有り難い話ではある。ローザバーク卿ほど力のある貴族が探し物を手伝ってくれるという事はすなわち、表社会に気を配る必要が一切なくなる、のと同義だ。

「人類としては、珍しい程の良い人だから、あの人」

ロザリアが言うと、クラウドも大きく頷いている。

まあ、身分を気にせず殺し屋と令息の結婚を認めるところからして良い人というのは判る。

レピュスと、ロザリア、クラウドが別れようとしたところで突然3人は囲まれた。

「ちょっと待ってくんない？」

レピュスは、その声に聞き覚えがあった。

「アルドワークス……」

「お、もう調べついてたんだ。流石、“あの組織”。

宝剣、持ってきてくれてアリガトさん」

「誰も、あんたらに渡すとは言ってないけど？」

ロザリアが特に感情も込めずぐると、黒い仮面の3人と仮面を付

けずにスーツを着た3人を見渡した。

「まあ、そう言わず！」

和やかな声で喋っていた黒い仮面の男だが、急に声を冷たくした。

「死にたくないっしょ？」

対峙

「狙いは宝剣か……困るなア」

ロザリアはそう言つて、一步下がった。全体を見回す。

「ロデオ」

レピュスが、背中合わせの状態で小声で囁く。

「仮面以外は、ザコだ。先に片付けよう」

「そだね」

レピュスとロザリアは殆ど同時に飛び出した。

「来た来た！　って、無視！？」

レピュスは、まずさつきから喋っていた男の脇を一縷の心残りなく走り抜けると仮面無しのスーツ姿の男を切り払った。

「うわっ！」

案の定、素人らしい悲鳴と共にその男はあっさり後ろに倒れてしまった。

ロザリアも、仮面の者をさつとかわしてスーツの者に強烈な跳び蹴りを食らわせた。ロザリアにしては、スピードに乗り切っていない攻撃であつたが相手はかわせず、暗闇に吸い込まれるように吹き飛んでいった。

その背後から、黒い仮面の者が剣を振り下ろしたのだがロザリアは上手く身を引いて間を空ける。その近くでは、クラウスが身軽に相手の攻撃を避けている。戦いは専門でなくとも、自分の身を守るくらいはできるのでロザリアも逃げるように指示しなかったのだ。

反対側では、既にレピュスがもう1人の仮面無しを斬り捨てていた。紫水の光が、暗闇で不気味な影を作りだしている。

「やっぱ、お前、面白そうだ！」

良く喋る仮面の男が、嬉しそうに云つて仮面とフードを取った。

月明かりに、それと同じ銀色の髪が舞った。

『……銀髪？』

レピュスは思わず、顔をしかめた。

本日はやたらと話題に上った、組織の最強である先輩と同じ髪色である。……どちらも染めているのだから、偶然とも考えられる。しかし、顔を見ると果たして偶然なのか自信がなくなった。ルカは決して見せる事のない、ふてぶてしい印象の笑みを浮かべているがその顔は意外な程に美しい。澄ました顔をすれば、それは彫刻のように見えるだろう。

「似合うと思うか？ 最近、染めてみたんだけどさー。」

アイツ見かけて、いいなって思ったから」
確定した。

この男は、ルカと何かしら関係がある。

「お前、……誰だ」

「ヨナ。ま、よろしく。」

さあ！ 楽しく“喧嘩”しようぜ？」

「あのバ……ヨナさんが、金髪君と戦いたいと我が儘を言うので申し訳ありませんが私達2人であなを始末させていただきます」

「これはどうも、ご丁寧に」

ロザリアは皮肉を込めて返した。クラウドは、宝剣を預けてからもうとつくに下がらせている。恐らく、彼らもスーツの3人を邪魔だと思っていたのか先程のロザリアやレピュスの行為を本気で止めようとはしていなかった。しかし、今や仮面の3人は本気と見える。もう、クラウドには危険な状況となってしまった。

ヨナというらしい人物が、仮面を取ったから残りの2人もそれに続くことにしたのだろう。ロザリアに慇懃無礼ともとれる挨拶をした女と、その隣で一言も発せずには大柄な男も仮面を外した。

女の方は、ロザリアと同年代くらいだろうか。身長は低めだが、きりっとした茶色の瞳が放つ冷静さはかなりの場数をこなしていそ

うだった。くしゃつとした、肩にかかる位の茶髪は青いリボンで飾られている。男の方は、恐らく3人の内で一番の年上だろう。30代中頃くらいか。身体の影響を裏切らない、獣を思わせる鋭い顔立ち。だが、青い瞳だけは全身の雰囲気反して静かで落ち着いた印象。

「有名な殺し屋ロデオを打ち取ったとなれば、我らの名声も上がるでしょう」

と、女は凄味のある笑みを浮かべて言った。

「そう、勝つ気満々てか。それにしても、名乗れば？」

ロザリアは相手の、自分達が勝つこと前提の発言に苛ついたのか、当たりの強い口調で言った。

「失礼しました」

女はまた、慇懃無礼な一礼をした。

「私はエレミヤ。彼はダニエルです」

窮地の気配

「ほっほう！ 強いねえ、オイ！

この前は本気じゃなかった？」

ヨナは、相当に戦いを楽しんでいるようであった。未だ、レピユスの刀は相手に届かずヨナの方は武器なども持たず遊ぶようにはね回って攻撃を避けているだけだ。

「俺とロデオを殺して、さっさと宝剣を奪いたいんじゃないのか」
一向に、真面目に殺し合おうとしない相手にレピユスは思わず云った。苛つくなど、感情的にはならないが……妙だとは思った。

「それは、エレミヤとダニエルがやるっしょ！ 俺は今回、お前と楽しく戦うってのが第一目標なんよ」

「……」

付いていけないタイプである。ルカに容姿が似ているのだが、人物としてはケイに近い。つまり、相当レピユスにとってうざったい。

ロザリアは、大体、2人の相手について判ってきていた。見かけに依らず、攻撃でも素早さでも防御でもレベルが高いのは女、エレミヤの方である。自分の事もあるから、驚きはしないが。方針が決まる。

敵は弱者から消すのが王道だ。

エレミヤは2本の細身の剣を巧みに操って、ロザリアの大きな動きを封じる。防戦に気を取られたロザリアに大男、ダニエルが一気に距離を詰めて鋼のグローブによる打撃を撃ち込もうとする。これが様々な応用系で行われているだけだ。恐らく、個々人の能力はとも高いのであるが連携に慣れていない。だが、どちらかが手を引く気はないようだ。組織としての成功よりも、個人の成功を重視する組織……いや、会社なのだろうとロザリアは判断した。だとしたら、この、お世辞にも上手いと言えぬ連携を止めて未知数だが恐らく、

より厄介な個人戦に持ち込まれることはないだろう。

「素早いんですね。馬というより、ウサギのよう」

エレミヤが言う。苛ついているのか、感心しているのか逃げてばかりのロザリアにがっかりしているのかは判らない。

「ありがとう。馬よりウサギの方が好きだ」

ロザリアは、にっこり微笑みながら――何の前触れもなく振り返ると同時に、身をかがめて背後に音もなく回ったダニエルの、低い位置にある頭に踵を突き落とした。

「――！」

それで手、いや足を休める事はせず身体を捻って反対の足で腹部を蹴り上げた。足がその時、暗闇の中、銀色に光った。冗談のように、空高く突き上げられる大男。味方の危険には構いもせず、エレミヤは逆に今が好機、待っていましたとばかりにロザリアへ素早く斬りかかった。

流石に反応が遅れたロザリア。しかし、間一髪のところでは振り下ろされる剣が止まった。一瞬であったが、それだけでロザリアが地を蹴って相手と距離に開けるには充分だった。

「クラウス、ありがとう！」

「魔導師……」

エレミヤは、獲った、と思ったのだろう。とうとう苛立ちという感情を声に乗せた。

「ダニエルが負けたか。んじゃ、俺も働きますか」

「……！」

レピュスは、さっとヨナから離れた。ヨナは口元に笑みを浮かべたまま、背中の長剣を抜きはなった。

「宝剣8工の6番目“雷電の牙”ってんだけどな」

その剣は、虹の雫と同じ『宝剣』という分類であっても随分違った。その刀身は、金色に光っているもののスマートな刀身で柄などには余計な飾り付けはない。

「雷の直線的な攻撃力を表現したんだってよ。宝剣で唯一、攻撃に特化した剣だ」

それを構えるヨナの姿勢は独特であった。我流なのか、レピュスの知らぬ流派のものなのかは不明だが。腰を大きく折って、飛び上がる前の猫のような姿勢となって剣を持っているほうの右肩を大きく後ろに引いている。

奇妙な構えもそうだが、このヨナという男、驚くほどの腕力を持っているという事もレピュスの気を引いた。これだけ大きな剣を片手で操るとするのは、普通有り得ない。刀工も両手剣のつもりで創ったはずだ。

「行こうか」

その刹那だった。

『……ほんとうに』

この男、猫のようだ。いや、もっと強い……豹のようだ。

レピュスも相当に拳動スピードが早い方であるが、ヨナはそれを遙かにしのいでいた。居合い勝負であれば、惨敗は必至であると素直に認めなければならない。

今は、言葉の前に発せられた僅かな殺気に反応して動き始めがレピュスの方が早かったというのが功を奏した。

「止めるか」

「……ただのお喋りじゃなかったんだな」

「ククツ、喧嘩を楽しめるのは強者だけだからな」

まさに、雷のような剣さばきにレピュスはついていくのがやっとであった。いつか均衡が崩れるかもしれない。パワーは相手の方が上スピードもそう。唯一、互角なのが戦闘^{カン}本能だけだった。

強者の背中

「……まさか、さっきまで手を抜いていたの？」

エレミヤはもう、感情を押し殺した仕事人という雰囲気をかなぐり捨てていた。彼女の目も、口調も荒々しい戦士のそれである。こちらが本性なのだろう。

「いや、あんたらみたいな強いのと2対1だったからね。慎重にやらせてもらってたワケ」

ロザリアは何と脚で、剣の刃を受け止めていた。

エレミヤの感じる手応えは、鉄かなにかを斬ったような……皮膚と肉を通り越して骨を直接切ったような固いものだった。トリックは判らない。彼女が服の下に防具を仕込んでいるのかと勘ぐったが、剣撃で切れた部分からは肌が見えている。

「何をしたの」

「あたしの情報、持っていないの？」

ロザリアは逆に問い返す。

相手は表情を歪めた。

「まさか念術……でも、あなたの力はてっきり攻撃用かと……」

「万能なんだよねえ、これが！」

剣が、瞬間、弾き上げられた。

「くっ」

一本が宙を舞っている間に、一気に距離を詰めて懐に潜り込むロザリア。もう片方、左手の剣でロザリアの腹を薙ごうとしたがロザリアは軽々と地面を蹴って前方宙返りをしながら脚をエレミヤの左肩に叩き落とした。

剣を落としてしまったエレミヤ。すかさずロザリアは着地して剣を暗闇の彼方に蹴り飛ばす。

もう一本の、近くに落ちている剣を慌てて取ろうとしたエレミヤで

あつたがこの焦りが命取りとなった。ロザリアに背を向けてしまったのだ。

「バイバイ」

「あつ」

エレミヤは、横っ腹に激痛を感じると同時に何メートル、いや十何メートル吹き飛ばされて壁にぶち当たった。受け身を取れず、頭を打ったので意識はもう無い。

「クラウス、あと1人？」

「はい。レピュスさんは苦戦しているようです」

ロザリアは少し眉を上げた。

「彼が苦戦……？ 余程強いんだな。手を出そう」

「あつちです」

「クラウスはここにいな」

ロザリアはクラウスの指さした方向へ駆けだした。

レピュスとヨナの剣戟はいつまでも続くように思われた。しかし、ヨナの方はまだ楽しむ余地を残している反面、レピュスは珍しいほどに必死の形相であった。一歩間違えれば、あつという間に死が待っていた。

「まだ甘いんだな」

「……」

余計なお世話だと言ってやりたいところだが、生憎、口に余計な神経を裂いてはいられない。

そこへ、足音。

「エレミヤまでやられたんか」

ヨナはちよつと間を空けた。レピュスは、顔には出さなかったが心底ほつとして自分もかなり距離を空けた。

「大変そうだね。加勢しようか」

「……頼む」

ロザリアはレピュスに言うてから、相手をよく見た。

「何だか、意味ありげな奴だなあ」

言いたいことはよく判る。

「それに、宝剣使いか」

「おうおう詳しいな」

ヨナの方も、ロザリアの観察を終えたらしい。

「へーえ、俺は宝剣よりお前が欲しいなあ」

「うんゴメンね。予約済みなんだ」あ

にこにこと喋っているが、2人とも皮一枚下は殺氣。

そして、全くといって良いほど同時に動いた。

ヨナが振り下ろした剣をロザリアは受け止めようとしない。避けて、身をかがめて反撃を狙うが相手は剣でその脚を弾く。2人の戦いに見とれかけていたが、レピュスはすぐ氣を取り直して付け入る隙を
探す……が、見当たらない。

ロザリアとヨナは一瞬も動きを止めないし、流れの中でレピュスが入っていったとしてもロザリアの集中を邪魔してしまう事になるかもしれない。また、この状況でもヨナはレピュスの攻撃を避けられるのだと殆ど確信めいたものが感じられた。

数秒なのか、数分なのか……時間の感覚が狂うような凄まじい戦いが一度止まる。

「いいねえ、お前」

「そりやどうも」

ヨナはにっこりと笑う。

だが、何を思ったか剣をしまった。

「その宝剣は持って帰れよ」

「……は？」

思わず、レピュスは声を出してしまった。

「ダニエルとエレミヤのミスって事にすつから。」

ほら、だってよロデオが金髪君を助けに来ないで宝剣を持って逃走
って事も考えられたんだし？ あいつらが先に負けた事を考えれば」

「それは……」

「あんたなら、あたしとレピュスを両方とも殺して宝剣持つていくこともできるはずだ」

ロザリアの言葉に、思わずレピュスは彼女を見た。

負けを認めたという事だ。

ヨナは声を小さく立てて笑った。

「いやあ、ちよつと楽しみなんだわ。

このまま生かしておけば、強くなったお前らとまた喧嘩出来そうだと思うてな。あと、俺の強さについて知ってもらえれば、今度は相
当に強いのが送られてくるかも。

あいつとかな」

レピュスは、そこで思い出した。

「お前、ルカ先輩を知ってるのか」

「本人に聞いてみな」。

秘密のお話しとか、趣味じゃねえし。じゃあな」

悠然と歩き去っていくヨナ。レピュスもロザリアも追おうとしなかった。寧ろ、いなくなってくれた事にほっとしていた。

「……帰ろつか、あたしらも」

「ああ……」

報告と気掛かり（前書き）

少々、改訂しました。

報告と気掛かり

既に、夜が明けた頃に1人組織本部に戻ったレピュス。ボスに、今回の経緯を報告した。無感情を装うも、恐らくヨナに歯が立たなかつた件を語る時の悔しさはバレていたと思つた。

「レピュス、怪我は？」

「え……それは、ありませんが……」

「なら、ちよつとここで待機」

ボスは携帯をとつた。

「ルカ？ どこにいる……うん、すぐに来て」

10秒もない通話の後、再びレピュスを見た。

「ルカにもう一度、そのヨナという者の説明をしてくれる？」

「判りました」

実を言えば、願つてもない事である。名前こそ出さなかつたヨナであるが、どう考えてもルカと関わりがあるとみて間違いない。また、ボスもまるつきり同感のようだった。既に黙つて何か、考え込んでいる。

1分とせずに、ルカが現れた。朝に弱い人である。どこかぼんやりした様子でボスとレピュスを眺めた。

「どうしたの？」

「ご存じの通り、俺はロデオとランカスターの屋敷に虹の雫を奪いに行きました。

その情報がどうやら、筒抜けていたらしく……アルド・ワークスの社員が待ち構えていました」

レピュスが話している間に、ぐつたりと椅子に座つていたルカは顔を上げた。目を細めて、次の言葉を待っている。

「回りくどい言い方は止めます。ヨナという男をご存じですか？

恐らく、アルド・ワークスの重役であり西大陸宝剣8工の6番目、

雷電の牙を使っていました。容姿がその……」

「俺にそっくりだった？」

レピュスは、はっとして相手を見た。

ル力はもう、眠たげな表情ではない。やはり、思うところがあったのだらう。鋭い瞳で考えを巡らせているようだった。

「うん……よく知ってる。」

ああ、双子の弟とか、ベタな展開じゃないから安心してね」

「一体……」

「見かけが似てるのは、血筋とかじゃなくって偶然ね。いるでしょう？ 何の関係もないけどそっくりな奴って」

レピュスは曖昧に頷いておいた。

「ボス、ちよつと規律に違反するけど黙認してね」

「やむを得ないからね」

「俺、この組織に来たのがええと…… 15の時かな。それまで、別の…… やっぱ裏組織で育てられてたの。それが、アルド・ワークス」

「……え」

「ここまで大きな組織じゃなかったし、ワケの判らない仮面とか昔は使ってたから始めは気付かなかったんだけどね。」

ヨナは、俺と同じ孤児院から連れ出された。血のつながりはないって言ったけど、まあ、育ち方は双子みたいなもんだったかなあ。

強かったでしょ、ヨナ？ 負けたんじゃない？」

レピュスは、苦い顔で頷いた。

「アルド・ワークスは、5歳以上は入団させないの」

「どういうことですか……？」

「つまり、全員、一から育てる事にこだわりの持った。戦闘技術から道徳観念から、何からなにまで」

アルド・ワークスには精鋭しかない、と…… そいう事だらう。

「ですが、ヨナは異常な強さのようでしたよ。ロデオは、1人で他の2人を打ち負かしてました」

「だろうね。ヨナは規格外だと思う。多分ねえ……俺でもあつさは勝てない」

あつさりでなければ勝てるのか。

こんな言い方をされると、ヨナの強さがどの程度か判りづらいではないか……と突っ込むに突っ込めない。

「レピュス、お前、紅夜叉、手に入れたでしょ？」

「はい……」

「紫水の持つ攻撃力だと、お前が死なない限りあれに勝てない。紅夜叉を使えるようになっておいた方がいいよ」

「俺が、また……ヨナと戦う事になるかもしれない、そういうことですか？」

「十中八九、そうだね。2回もお前の前に現れたって事は、相当、興味持たれてる」

嬉しくも何ともない。

「あいつはねえ、昔っから異端児だったから。傀儡人形みたいに、会社に忠実な他のと違って、仕事より自分の興味を優先させるとか、やりかねない」

「……そんなばっかですね」

ケイも確か、そんな事を言っていた。だが、よく考えればケイは口では組織はどうでもいいと言っておきながら組織の目的を軸として動いていたから……少し違うのかもしれないが。

「それで、虹の雫はロデオが？」

ボスの確認にレピュスは頷いた。

「何を考えているのか判りませんでした……やられた2人の所為にするから剣はくれてやると」

「自由だねえ。君の幼なじみは」

ボスの呼び方に、ル力は迷惑そうな顔をしたが黙っていた。

「まあ、アルド・ワークスはあくまでも虹の雫を欲しがる組織のサポートをしていたワケだからね。例えば任務失敗でも、それほど困った事にはならないんだろ。顧客が1つ減るくらい」

「戦力不足の組織は山ほどあるから、食い扶持には困らないんだろうな」

ル力がぼんやりといった調子で付け加えた。

「ただ、虹の雫をああまでして狙う組織があつたというのがなあ。確かに、最も有名で芸術的価値の高い宝剣だけど、わざわざ人を借りて何度も挑戦する程の魅力があるかというところ……。いや、魅力はあるんだろうけど」

「まあ、兎に角……虹の雫はもういいや。もともと、必要だった仕事じゃないしね。」

ただ、アルド・ワークスについて調べておいたほうが良い気がしてきた」

ボスはそう、独り言のように締めくくった。

黒い憂鬱

「ほう、これが……」

バルフォアは目をキラキラさせて、宝剣8工の7番目、虹の雫を眺める。まるで長年欲しかったプレゼントをもらった子供のような無邪気さにロザリアとクラウスは笑みを堪えきれない。

「素晴らしい！ まさに虹の輝きだな……美しい！」

「そう喜んでいただけると、持ってきたかがありますよ」

ロザリアは笑って言った。

「お……おっと、年端もなく大騒ぎしてしまったね。いや、恥ずかしい」

若者のような仕草で頭に手をやる老紳士。

いつもは高貴な印象の彼が、やけに可愛く見えた。

「さて、それで約束の件だが」

ロザリアは、待っていましたとばかりにバルフォアをじっと見た。

「当然ながら、約束は守る。……だが、もう少し待ってほしい」

「それは？」

「つまりだね、ランカスター家から虹の雫が何者かによって奪われた……この事件のほとぼりが冷めるまで待つて欲しいという事だ。

理由は判るね？」

「まあ、大体」

バルフォアは頷いて、自ら確認するように話す。

「例え次男であっても、ジュナスはローザバーク家の息子だ。それが……殺し屋である事はあの手この手で隠すとしても身分は愚か、国籍さえ持たない者と結婚する、それを私が正式に認めたとなると誰もが訝しむ。その中で、この剣の話が流れては困るのだよ」

ロザリアは苦笑した。

「単に絶交じゃ済みませんよね」

「うん。ローザバークの名前は地に堕ちてしまう」

「判りました、当分、大人しく待機してます」

「済まないと思ってるよ。まあ、そんなに長くは掛からないだろう。彼……ランカスター氏の事は良く知っている方だ。娘さんも父親によく似ているようだし。無くなったものを追いかけるより、目新しいものを引っ張り出す方が好きなんだ」

ロザリアは、娘についてのレピュスによる話を思い出して妙に納得した。

「それで、東大陸大業物については何か？」

ロザリアは問いかける。

「いや、まだ何も。しかし、目が飛び出るような価格で買い取ると公にしておいた。

ま、武器コレクターの老いばれがそんな無駄遣いしても誰も不思議がるまいよ」

ローザバーク卿の性格を理解しているロザリアだから、面白がって笑うが、彼を知らない者だったら大層戸惑ったことだろう。

「前回の盗賊組織みたいなのが所持してたら、売ってくるでしょうね」

ロザリアが言う。

「まあ……それで全てが揃ってしまふような刀ではないんだろ？」

「ええ、金以外の目的で所持している可能性は宝剣以上に高い。様々な因果を持つ刀達ですからねえ」

「中でも幻刀紫水はとびっきりのようだがね」

「そうですね。アレの使い手に出会う時が来るとは思ってませんでしたよ。

驚いたのなんの。彼が例の組織の者じゃなければ、生い立ちを詳しく聞いてみたいくらいです」

バルフォアは大儀そうに頷く。

「会ってみたいものだな」

「東大陸大業物が手に入ったと聞いたら、一秒も惜しんで駆けつけてくると思いますよ」

*

レピュスがベッドから起きあがったのは、30回以上の寝返りを打った後だった。眠いのではない。目は寧ろ、冴え渡っている。任務から帰還した後、2日経った今は体調も上々。

起きあがれないのは気持ちの所為だ。

「行くしか……無いんだよなあ」

いつもは、その年からすると驚くような落ち着きと冷徹さを持つている彼は今日、これから向かう先を考えると気の弱い少女のように頭から毛布をかぶって震えたいような気持ちになるのだった。

レピュスは今日、ボスの提案で組織一の極悪人と名高い黒魔術師ハズスの元へ行く。彼はどういう事か、紅夜叉……東大陸大業物13工の8番目について詳しいそうなのだ。

「まあ、世界中探しても人殺しって言葉があの人より似合う奴はいないんだろうしな」

紅夜叉には、人殺しの刀という異名があるのだった。

目的地に行きたくない気持ちが強すぎて、そちらへ進む歩調はいつもの半分以下の速度となる。宿舎を出てから、地下都市とも呼べるこの組織本部を北へ北へと歩いていくとその果てに魔術舎がある。魔術舎というのが正式名称であるが、そこで行われる事とその住人の殆どの為に拷問舎と呼ばれる事が殆どである。

目に飛び込んできた。上から下まで真っ黒の建物。その黒もまた、禍々しい。窓1つ無く、ドアは1階正面の1つだけ。そのドアも、

辛うじて銀色に鈍く光る取っ手があるから確認できるものの、もしも取っ手まで黒であつたらドアを探して何分か目を凝らすハメになるだろう。

レピュスは、父親に怒られる前の子供のように身を小さくしてそつとドアを押す。

中は、蠟燭の炎が揺らめいている。壁も天井も黒く、床さえ黒いの更に黒い絨毯が敷かれている。ぼんやり蠟燭の炎が宙に浮かんでいるように見えるのは、燭台がやはり黒く塗り込められているからだ。ハズスがこの建物の管理者になるずっと前からこうだったらしいが、この陰鬱で一歩踏み込んだ瞬間に身の危険を感じて動物的本能で引き返したくなる空間こそ、ハズスそのものだ。レピュスは思う。

美しき悪魔

「レピユスですか」

「……うわっ」

思わず大声を上げた事を恥じながら、声のした方を見やる。黒い世界にぼんやり浮かぶ、黒いローブの人物。

「何を怖がってるんです」

苦笑した人物を確認すると、レピユスの肩から取り敢えず緊張が取れた。悪魔本人ではない。しかし、悪魔の忠実な僕だが。^{しもへ}

黒い世界の中でやけに目立つ、白い肌の男。血管が透けていないのが不思議な程、白い。切れ長のアーモンド型の目は茶色で、髪も同じ色。茶色く長い髪は、そのはつとするほど美しい目のうち左目をすっきりと覆い隠している。また、後ろ髪は高い位置でまとめられていて、さながら美しい貴婦人のようだ。

「ノエル……ハズス殿は？」

「いらつしゃいますよ。ボスから既に話が通されていますので、お出迎えに上がったのです」

それなら、外で待っているだとか、驚きの少ない方法で出迎えて欲しかった。

ノエルの後ろに続いて歩くが、彼は漆黒のローブを纏っている上に相当に痩せぎすの為、背景と今にも一体化してしまっただけで見えなくなりそうだった。だが、上層部の者と魔導師以外は案内なくしてこの建物を歩けない。普段から、出来れば避ける場所である為、内部構造を覚える暇がないのだ。

歩いていると、不意に耳をつんざく叫び声が聞こえた。

「……これって？」

「煩わしくて申し訳ないですね」

「いや、そういう問題じゃなくて……」

ちよつと振り返ったノエルは、本当にレピユスの反応が理解出来ないように綺麗な顔をきよとんとさせて首を傾げる。彼が魔界の者なら、大半の人間はこの辺りで魂を抜き取られるはずだ。

「ちよつとした……我が組織に刃向かう愚かな組織の何名かを捕らえたんです。昨日から、叫び続けていまして。肝心な事は喋らないし、困ったものです」

ノエルの冷酷な発言こそ、一般常識から考えると困ったものだ。

レピユスが必死に様々な悲鳴を無視している間に、目的地へ辿り着いたらしい。ノエルが立ち止まった。

「ノエルです。レピユスを連れて参りました」

「うん、中へ」

ハズスという人間……いや、悪魔を知らない者がこの声を聞いたら心地よいテノールだとか、耳に優しい声だとか表現するだろう。しかし、そこに僅かでも彼についての知識が入り込むとその声は正真正銘悪魔の声となる。

「失礼致します」

周りの壁の色とこれっぽっちも変わらないドアが開かれると、そこは、さっきまで暗闇に慣れていた瞳が思わず閉じられる程に明るい空間であった。

しかし、明るく温かい空間ではない。室温は低いし、暖色はやはり一切使われていない。そこは、銀色の世界である。

天井から床、それから全ての家具が銀一色。その中で、黒いローブを着ている者がぼつん……という風に見える。相当に小柄で、座っているのだが立ってみるとレピユスと変わらないどころか彼より低い可能性もある。髪は絹糸のようにさらさらと流れる金色で、瞳は青。ぱつと見はどこか、少年めいた若々しさがあるのに、じつと見るとそれが間違いであると気付く。見かけはやはり、若く美しいのだが……少年がこのような禍々しい気配を纏っているという事は誰

にも想像できない。ちなみに、彼の年はボスでさえ知らないと言われている。

「黙って突っ立っていないで、前においで」

今にも、陸上選手も吃驚のスタートダッシュで逃げ出しそうな顔をしているレピュスに美しき悪魔の彫像は微笑みかけた。

機械仕掛けの人形のようにぎこちなくレピュスが前に進み出る様を、まるで……本人がそう意図していなかったとしても……獲物の到着を待ちわびる肉食獣のような瞳でじいっと見つめていた。

どんなに鍛え上げられたランナーでも、人間である限り野生の王者には敵わない。

「久し振りだねえ。相変わらずの草食動物っぷりだ」

青い瞳がすつと細められる。上から下までじっと眺められると、視線が当たった部分に寒気が走った。

「……お久し振りです」

「紅夜叉の件だってね」

ハズスが立ち上がったので、レピュスは一步後退った。相手は、くすくすと笑う。

「見てよノエル、この顔。可愛いよねえ」

無言で低頭するだけのノエル。出来る事なら、冗談か何かで場を和ませて欲しいがそれをノエルに求めるのは間違っている。

「良いよ、知ってる事を教えてあげようね。」

だけど、タダじゃなあ。

ちよつと、実験体になって黒魔導で1ヶ月くらい寝込んでくれない？ 悪夢で精神を破壊する実験をしてるんだけど、精神力が弱い人間で試しても効力が上手く測れなくてね」

「そ……それは、新手の冗談ですか？」

そうじゃないと困る。

「ワタシが冗談を言う訳無いじゃないか。ねえ、ノエル？」

またもや、何ともなさそうな顔で低頭した悪魔の配下。

「ノエルだったら喜んで頷いてくれるんだけど」

「はい、ハズ様の仰せのままに」

呆れる程、固い主従関係である。ノエルが絵に描いたような美男だから、あらぬ噂が流れていたりもするが怖いので本人達の耳に入る範囲で囁く者は決していない。

「ま、それはいいとして」

さんざん怖がらせたり、呆れさせておいて何という言い種かとレピユスは危うく突っ込みそうになった。

「紅夜叉を上手く扱うには」

その後、発せられた言葉にレピユスは度肝を抜かれたというか意味をそのままに取りすぎて震えた。

「死んでもらわないとね」

美しき悪魔（後書き）

ええ、美しいモノが大好きですよ、はい。
イケ●ラも吃驚ですね。済みません（反省なし）。

魔の刀と大魔王

「……死ぬんですか？」

「うん、死ぬよ」

ハズスにはやりと笑う。心臓が凍りそうな気持ちになってくる。

「紅夜叉というのは、とっても解りやすい刀なんだよ」

ハズスが立ち上がったものだから、レピュスはドアのところまで下がってしまった。相手は明らかに、楽しそうに笑っている。

「紅夜叉を持つてきなさい」

「え……」

「ノエル、付いていつてあげて」

「承知致しました」

レピュスは意外な展開に驚きつつ、ノエルに従って部屋の外へ一旦出る。

まさか、ハズスが剣術のご指導ご鞭撻をしてくださる訳では……ないだろう。華奢な見た目に反して、とんでもなく武術・剣術に優れている者もいるのはよく判っている事だが、その意味では、ハズスというのは見た目通りの者である。黒魔導の力は恐ろしいものがある一方で、それ以外に彼の特技というと思ひ浮かばない。依って、彼が紅夜叉の扱いを具体的に教えてくれるという考えは捨てた方が良さそうだった。

レピュスとノエルが魔術舎から出てくると、誰もが驚いた顔をずる。レピュスが魔術舎から出て来た驚き、そして深窓の佳人（男だけど）であるノエルが組織内とはいえ外に出て来た事への驚き。

また、保管庫は事務系統の仕事が行われる舎にある為、相対的に女性が多い。なので、その中に入るとノエルがやって来た事をどこ

から聞いたか、今がチャンスとばかりに目の保養の為、集まってくる。

「珍しいですね。どうなさったんですか？」

勇気を出して話しかけてきた職員に

「ものを取りに来ただけですよ」

と微笑むノエル。

うーん、罪だなアとレピュスは思う。

こんなに愛想よく、優しい笑みを与えられたら相手は誤解してしまうかもしれないではないか。

保管庫からレピュスが出てくると、ノエルはかなり紅夜叉に興味を奪われたようだ。魔導師は何か、特別に感じるものがあるのだろうか。

「成る程、人殺しの刀……」

「何か判るのか？」

「ええ。恐怖と絶望、そして死の気配がこびりついていますよ」

……笑顔で言う事じゃなからう。

「紫水とは、また違うのか？」

ノエルは頷く。

「そうですね……説明がし辛いのですが。

紫水が精神的な恐怖を負っているとするれば、紅夜叉が負っているのはより具体的な恐怖。肉体的な痛み」

「……へえ」

詳しい説明は聞きたくない。

ノエルは上品で丁寧な者だというのは判っている。しかし、平気でハズスと接するだけあり恐怖の感覚がおかしい。幽霊やとんでもない怪物が出て来ても、「おやおや」と微笑むタイプだろう。一緒にお茶を飲み始めるかもしれない。

そんな彼が使う言葉は時に、どんな荒っぽい言葉より恐ろしいという訳だ。

*

「大魔王のところに行ってるんだ」

ボスの話を聞いて、ル力は少し面白がるように呟いた。

「大魔王ってハゾスの事？」

「そんな感じじゃない？」

というか、レピユスって何であんなに怖がってるの？ 大魔王ハゾス」

すると、ボスは決まり悪そうな顔をする。

「イヤア、ちよつと昔に悪いことをしちゃってねえ」

「あんたが？」

「いやね、紫水が呪われた刀って事で……ハゾスなら詳しいんじゃないかと思って紹介したんだ。

まだ、真っ白な心のレピユスを大魔王に」

「詳しくったの？」

「いや、結局はハゾスも何も知らなくてね。でも、散々怖い思いをしたようだよ。

骨折り損のくたびれもつけ……で、本当に骨折って全治数週間」

「何されたの」

「聞きたいの？」

「……やめとく。昼飯まだだから」

「賢明だね」

「それでだ」

ボスは本題に入る。

「働いてもらうよ」

ほんと投げ渡された資料を検め、ル力はじとつと相手を見た。

「面倒くさい」

「拒否権無し」

「じゃあ理由」

「説明するよ」

何か、酷く嫌がっているルカを笑いを含んだ目で見るとボスは話し始めた。

「君も知ってるだろうけど、その子がこっちの世界でもあっちの世界でも一番の情報屋だ」

「情報屋？ 詐欺師まがいの占い師の間違いでしょ」

「嫌いだねえ」

「……嫌いというか、合わない」

とうとう、声に出して笑うボス。ルカはどんどん不機嫌そうなしめつ面になる。

「それでも、彼女の情報は誤る事ない。自分の目より信じられるモノがあるとしたら、報酬金を保障された時の彼女の言葉だ」

「幾ら持つてくの？」

ボスは資料に挟まっていた封筒を指さす。

「……ここ？」

薄い封筒だが……。

開けて、ルカは驚きというか呆れた表情でボスを見やった。入っていたのは、黒いカード。

「際限なし？」

「うん。それだけの意味がある情報だからね。家でも国でも好きなモノを買えばいいさ」

今度は、ルカが笑う。

「彼女が一番買いたいのは、あんたの秘密じゃないのかな」

「それは幾ら積まれてもダメだなあ」

「プライスレス？」

「プライスレス」

*

「ただいま戻りました、ハゾス様」

ノエルが丁寧な声を掛けて、再びハゾスの部屋のドアを開いた。

「やあ、取ってきたね」

少々、悪魔は嬉しそうだった。紅夜叉を見つめ、口元を緩めている。やはり、この男はノエルの言ったようなおぞましい気配がお気に召しているのだろうか……。

「懐かしい」

「……え？」

「ワタシは、その刀を持っていた事があるんだよ」

「！？」

レピュスはいよいよ、口をポカンと開けてしまった。

吸血の刀

レピユスが、最後に魔術塔に入ってから3日が過ぎようとしている。彼が魔術塔に入った事を知り、更にレピユスが刀の呪いを受けている事を流れの噂で知っている者達はどうとう、レピユスがハゾスの実験体にされたのではないかとまことしやかに囁き始めた、今日この頃。

とうの本人は、（精神以外は）ぴんぴんしていた。

「レピユス、食事をどうですか？」

優美な仕草で、真つ黒な扉を押し開けて広い空間に踏み込んだノエルが少し声を張った。

部屋の中は暗闇。今はドアが開いたおかげで、その闇も薄まっているが閉めてしまえばそこは目を閉じたような暗闇となる事だろう。

その中では、奇妙な……というか、おぞましい音が立て続けに聞こえてくる。

まず、刃物がぶつかりあう音。肉が切り裂かれる音、何かが倒れる音。そして、どうも人間のものとは思えない悲鳴……。猿の立てる鳴き声に近い甲高さがあるものの、随分と太い。

どさりと……と、ノエルの足下にその音の正体が転がった。特に顔をしかめるでもなく、ノエルが無感情に見下ろしたのは大猿だった。しかし、こんなに大きな猿が存在するとは思えない。

その、汚らしいごわついた毛が茶色である事から大型の類人猿の代表格といえるゴリラでない事は明らか。だが、オランウータンでもなさそうだ。顔までがすっかり毛に覆われていて、赤いどう猛な目がぎらついている。長い前足には猿とは思えぬ、ナイフのような爪があつて後ろ足もそれと同様。

これらは全て、ノエル達魔術塔の魔導師が作ったものだ。

黒魔導を使った、生体実験、その結果生じた化け物である。まだ、本来の猿にすら及ばぬ知能しか持たない為、レピュスに斬られ紅夜叉の満足を満たす為の道具として使われているだけだがいずれは、人に並ぶまではいかないにせよ、忠実に命令を実行する駒として任務に利用したいとハゾスは考えているのだった。

ちなみに、これらが昔は何だったのかは……ハゾスと制作総指揮官のノエルしか知らない。

「今行く」

レピュスの返事が聞こえたと同時に、全ての動きが止まった。ノエルが、扉のすぐ脇にあるスイッチを入れたのだが、これによって化け物達が動きを止めるように調教されている音が鳴り響く。とはいっても、これは人間には聞こえぬ低周波なので、実際には何も起こっていないかのようだ。

出て来たレピュスは、刀を持っていない。ハゾスのアドバイスにより、死体を積み重ねたところに紅夜叉は突き刺したままにしているのだ。

『どんどん血を吸うから』

嬉しそうに、ハゾスはそう言ったものだが……。その真偽の程は判らないにせよ、どうもレピュスには紅夜叉の刀身がこの3日で初めて見た時よりもずっと紅く、血の色に近付いてきたように思えるのだ。

「……そういえば、ノエル」

「はい」

「紅夜叉は“人殺しの刀”って言うけど……。人の血じゃなくてもいいんだな？」

それに対しては、ノエルは微笑んだだけだ。

「血が吸えればいいのでしょう。吸血鬼のようにね」

「……あんたがそれだと言われても、俺は驚かない」

「おや」

くすくすと笑うノエル。

「確かに、ガーリックは匂いが気になるので嫌いですが。陽に当たるのも、十字架に触れるのも大丈夫です。血も、飲ませた事はあっても飲んだ事はありません」

レピュスは危うく、口に入れた物を吐き出しそうになって何とか堪えた。

血なまぐさい会話に、この3日で随分と慣れて食事中にそんな話しをしても食欲が失せないまでに適応を始めていたが……。流石にこれには、……引く。ドン引きだ。

何に、何の血を飲ませたのか気になるが、聞かないでおいだ。きちんと栄養をとらないと、午後のメニューが終わらず、どんどん魔術塔滞在期間が延びる。ハズスは時間を気にするなど、大らかにも仰ったが、一分一秒でもこんなところに長くいるのはゴメンだ。

午後遅く、レピュスは真つ暗闇の中で目を閉じて立っている。視覚が一切役に立たない空間では、目を閉じて聴覚を研ぎ澄ませるのに集中していた方が余程安全だ。

甲高い鳴き声と同時に、レピュスの背後から暗闇でも目が見える大猿が飛びかかってきた。レピュスはすぐさま反応し、振り向きざま正確にそれを横に大きく切り払う。紅夜叉を扱うのに慣れてきたからか、紅夜叉の特殊な性質なのか判らないが、付けた傷が命を奪ったか否かが瞬時に判る。今は上手く一撃で斃せたらしい。だが、この大猿は頑丈で余程、上手くしなければ深手を負ってもより狂暴になって再び向かってくるのだ。最初の内は骨を折りかけたり、流血沙汰になったがノエルが魔導でその度に治療をしてくれるので部屋を出れば無傷だった。至れり尽くせりなのかもしれないが、早く帰りたいといつでも思っただった。

高級住宅街の変人宅

ハゾスは徐に立ち上がると、レピユスの真正面まで来た。彼が歩いている姿というのは、実は相当に珍しい。この建物から出た彼の姿を見ると、呪われるという都市（組織）伝説？ がある程だ。

「その痛々しい、毒気に満ち満ちたオーラに惹かれたんだけど。ワタシは知つての通り、刀を上手く扱えなくてね。宝の持ち腐れかなという事で、別の魔導師に売ってしまったんだよ。

再会するとは思わなかった」

レピユスの手の中にある紅夜叉に触れるハゾス。一切の抵抗は見せず、レピユスは刀を渡した。もし、返せと言われたら……逆らえる気がしない、どうしようと考えていたがあっけなくハゾスは刀をレピユスの手に押し戻した。

「やはり、その刀も少しでも多く血を吸わせてくれる持ち主を望むようだね」

恐ろしい事を……。

「あ……あの」

緊張で震えないように気を付けながら、レピユスは気になる本題に入る。

「俺は、どうすれば……？ 死ぬ、というのは……」

背筋を張って、堂々と質問したいところだが腰が引けた状態でしどろもどろ質問する結果となった。

「アハハ、本気にしたの？」

「……へ？」

「大丈夫、安心なさい。その一歩手前だから」

安心できるもんか、というのがレピユスの率直な感想だった。

「簡単な話だからね。手を組むに値する持ち主だと証明するため、

紅夜叉の刀身を鮮血で染め上げればいいの」

「戦えと……しかし、相手は」

それには、にっこりと微笑んだノエルが答える。

「既に用意しておきました。今日にでもご案内できましょう」

まるで何か、平和的な依頼を承ったかのように何でも無さそうに言っているが……。

何でも無いわけがない。

だが、悩んでいる訳にもいかない。

「……なら、頼むよ」

「こちらへ」

優雅に退室したノエルに続いて、銀色の冷たい部屋から真つ暗……否、明かりにぼんやり照らされた真つ黒の世界に再び戻った。

*

レピュスが、ハズスの元を訪ねた日から5日が経った。

航空機まで乗り継いで、組織一の暗殺者が向かった先はアーシャと向こうを張る大都市、ロルカ。アーシャとの違いは、この都市は海に面していないところ。広い内陸都市で、新興的なアーシャに対して古き良き……という言葉が当てはまる。そんな都市。

数が多く、賑わっているがどこか上品なショッピングモールや高層マンションの立ち並ぶ通りを外れると一気に違った雰囲気が見れる。

美しく、静かで、しかし豪華な住宅街だ。貴族やその遠縁の者、大企業の経営者やら重役達でなければここに邸宅を構えることは敵わない。依って、普通の者が歩くと、どうも……同じ人間なのに浮き上がってしまうところ、ルカにはその心配が無かった。育ちが良いとはお世辞にも言えないのだが、周囲の目など一切、意に介さない威風堂々とした足並み、そしてモデルかと思うような完全な容姿。

身につけている物も高価に見える（実際、組織一の伊達男は服へ掛ける金に糸目を付けない）。

ここに、ルカは遊びに来たのでは当然ない。ボスの命令で、この住宅街に住む占い師を訪ねに来た。占い師と、表向きには名乗っているが裏では催眠術を駆使する情報屋で名が通っている。そう意識している者も意識していない者も、彼女の手足となつて365日、昼夜問わずあらゆる情報を集めてくる。彼女はそれを管理し、裏組織に高値で売りさばいているのだ。

守銭奴の異名さえある、この占い師兼情報屋はヴィレナという。もはや珍しい話ではないが、これが本名なのかどうか知っているのは彼女自身だけ。

ルカが立ち止まった家は、周りの豪邸に少しも引け目を感じさせない邸宅。ただし、少し変わっている。まず、壁の色は目にも鮮やかなマリンブルー。ちなみに、ほぼ月一単位でヴィレナは家の外壁を塗り替えるので彼女の家を説明するにあたって、壁の色は参考にならない。3階建てで、ルカの記憶が正しければ……客人が通されることはまずないが地下への階段があつた。門は綺麗に磨かれた銀色で、あまり趣味が良いとは言えないが、ガーゴイル像が両脇で睨みを利かせている。門と邸宅の間に広がる庭は、綺麗に整えられていてガーゴイル像とは打って変わった印象の美しい季節の花々が咲き誇っている。

門の横に付いている呼び鈴を鳴らすと、ベルの音から3秒と待たせず

「はい、どちら様でしょう」

との応答。占いの館でもあるから、お客という可能性も考えられる為、素早く対応が出来るようにしているのだろう。

「ルカ」

「ルカ様……で？ ええと」

「ヴィレナちゃんに言えば判るから」

「少々お待ちを」

それから1分と経たず、マリンブルーの家の純白の扉が開かれた。ちなみに、ドアは両開きで1階分の高さがある。取っ手は金色で、やはりガーゴイルの飾りがついている。ルカは、彼女が守り神としてガーゴイルを好いているのを思い出した。

「お待たせ致して大変、申し訳ございません。ただいま開門致します」

白髪、黒い背広を着こなす老執事が低いがよく通る声で言うと門の方へやってきた。

東方魔術……刀の秘密

「やあ、来たねルカ坊」

ニヒルな笑いを浮かべてルカを迎えた、奇抜な家の主。ここは、ヴィレナの仕事部屋である。正方形の部屋の真ん中に丸い黒テーブルがあつて、その上に水晶玉が安置されている。向き合うように置かれた2脚の椅子は、繊細な彫り物が施された木製の高級感あるもの。天井には、不気味な青い光を発するシャンデリア。

「まあ座れよ」

「……どうも」

ルカは思わず相手をじつと見た。

黒い無地の、一切飾り気無いロングワンピを着た彼女は20代そこらにしか見えない。軀のラインがくつきり出る服を着ていて痩せ形なのに艶めかしい印象を与える体型。髪は長い金髪で、頭頂部の辺りで黒いレースを使ってまとめられている。また、肘までの黒手袋を着けた手は骨にそのまま皮を張ったかのように細く、少し不格好である。

だが、欠点というとその骸骨のような手しか見当たらない程に美しい女性だ。鼻梁は高く、女性にしては薄い唇に塗られている真紅のルージュがとてもよく似合っている。鋭く相手を射止めるような輝きを放つ大きな瞳は、少々つり上がったアーモンド型。長い睫は合わせれば音がしそうである。

彼女が著名人や貴族にも有名な、腕の立つ占い師であるというのはまあいいとしても、裏社会の全てに顔が利く凄腕の情報屋であつて、同じくらい守銭奴として有名な女性であるというのは見かけだけでは少し想像に難いかもしれない。

「何が欲しいんだい？ で、何をくれる？」

依頼内容と同時に見返り内容を尋ねるのは、彼女くらいだとルカは思う。

「アルド・ワークスの情報の全てと、ダーク・ペガサスの目的……黒の教会についての情報。」

報酬はこれ」

ルカは軽く、封筒を投げ渡した。

それを開けたヴィレナは、口元だけで微笑んで頷いた。

「いいだろう。黒の教会については、今日で全て話せるけどアルド・ワークスの件は1日、時間をもらうよ。私の知る事が全てと言えるかどうか、確認をするからな」

「判った」

「ウチに泊まってく？ 綺麗なあんたなら大歓迎だけど」

口元だけで笑うヴィレナ。彼女の目が笑うところを、ヴィレナの通常の客よりもずっと長い付き合いであるルカも見ることがない。

「悪夢見そうだからやめておく。近所でホテル探すから」

「ハズス坊と同じ扱いか？」

「俺は同類だと思ってる」

クク、と今度は声を出したヴィレナ。

「それに、宿泊料とるでしょ？ 高級ホテルも吃驚なくらい」

「ちえ、判ってるな。じゃあ、明日のこの時間にまた来いよ。2つ纏めて教える」

「判った」

*

同じ頃、レピュスはとうとう魔術塔を出る事になった。ハズスが、紅夜叉を見て大層満足そうに、もう充分だと言ったのだ。紅夜叉の刀身は、もはや血の色そのもの。光に当たれば金属反射をするが、それにしてもおぞましい色合いであり、もしも相手を切り裂いてもどこが血で汚れたか判別出来ないかもしれない。

「あの……」

レピュスは、どうしても気になるからハゾスに、最後に質問した。

「どう見ても、紅夜叉は元の姿と変化していますよね。……どうしてこんな事が」

すると、ハゾスはにっと笑う。

「おや、知らないの。紫水の使い手なのに」

「……？」

「紫水は、唯の仕込み刀だと思ってるの？」

レピュスは、はっとした表情で相手を見た。

「まさか」

「紫水も、その紅夜叉も……それどころか東大陸大業物13工は全て、東方魔術を利用して作られている」

「東方魔術とは」

ハゾスの言葉を、ノエルが引き継ぎ、詳しく説明をする。

「ハゾス様や私達が使用する魔導、それから呪術とは全く異なる系統の術です。何かを生み出したり、生き物に直接影響を与える事はしません。魔術は、モノに奇怪な……と言つと語弊がありますが、信じがたいような力を与えます」

レピュスは、少々、眉をしかめた。

「ええと、つまり……。紅夜叉は、魔術で、血を浴びる程変化するようにされていて紫水は、同じく魔術で抜刀速度により姿が変化するようにされている……？」

ノエルは頷いた。

「気付いてると思うけど、刀の切れ味は随分増しているはずだよ」ハゾスの言葉に、レピュスは首肯する。

始めの内は、幾重にも斬りつけなければあの猿を斃す事は出来なかったのに最後にはたったの一撃で、易々と斬り倒してしまった。

「ソレが人殺しの刀と呼ばれているのは、……まあ伝承だけど、その刀の初めの持ち主が刀の秘密を知り、力を得る為に誰構わず人を

殺し続けたからだと言われている。だけどね」

そこで、につこりとレピユスに笑いかけた。

危うく、レピユスは凄まじい勢いで逃げるところだった。

「血を得た刀は、満たされる事を知らなかった。だが、その持ち主の周りには殺すための人も動物も何もいなくなってしまうんだ…

…。どうなったと思う？」

「……」

「飢えた刀は、持ち主を殺してその血を吸い尽くしたんだって。君も気を付けた方がいいよ」

愛すべきは金と情報

「まずは、黒の教会」

ヴィレナはルカが明くる日、戻ってくると挨拶もそこそこに語り始めた。

「教会と名は付いているけど、これは信仰の場所じゃない。教会という当たり障り無い名前を借りた、機密倉庫というのが正しいかな。黒龍という剣もまた、その教会に納められている」

「封印されてるって、連中は言ってたけど？」

ルカの言葉を聞いてヴィレナは、少々首を傾げた。

「そんな情報はない。」

恐らく、出任せを言ったのか教会側に奴らが騙されているのか。教会の経営者には、呪術、魔導、それから東方魔術……そのどれにも関わっている人間がいない。また、君やロデオのように力技タイプでも私のようなココ」

と、自分の頭を指さす。

「を強化するタイプでも、念術を使う者だっていない。だから、封印とか無理だ」

「じゃあ、ダーク・ペガサスは騙されて東大陸大業物を集めてるんだ」

「そうだね。だから、それらに何か仕掛けられるのが面倒なら直接黒の教会を叩いて黒龍と13工の無関係性を証明してしまえばいいよ」

「……伝えておく」

どんな時でもヴィレナは、一手先を読んでいる。それはルカ相手でも、あのボスが相手でもそうだ。

「で、黒龍の話だけだ。」

世界を制する力だとか、勝手に怪しげな噂がついて回っているけれど、そういう類の力じゃない。アレに備わっているのは。寧ろ、私が好むような類のものだ」

「……？」

「現在は、誰一人として使う事の出来ない、まさに伝説の魔導がある。相手の記憶を根こそぎ奪い、本人が忘れている事でさえ映像的に見てしまえる便利だけど使われた事を考えるとなかなかにぞっとしない魔導」

「それが、黒龍に備わってるの？」

「そういう事だ。黒龍では、何一つ傷つける事が出来ない。しかし、その剣先がちょっとでも触れれば」

言うと同時にヴィレナは、突然取り出したナイフを投げた。ル力でさえ、頬に擦る。誰か別の者がここにいたなら、絶命は免れなかったはずだ。

「その相手の記憶が“見える”。すごいだろ？ 世界中の情報屋が、全財産投げ打つてでも手に入れたいと願うよ。もしかしたら、ダイク・ペガサスもこの正体を知って欲しがっているかもしれないし。そうじゃないかもしれないけど。」

ただ、東大陸大業物13工は関係ない。魔導と東方魔術だから、全くもって畑違いだよ。

黒の教会は恐らく、もっと現実的なモノ……極東のニホンコクに眠っている古代戦艦を狙っていると思う」

「……は？」

「あの国は、武力を持たないのを自慢にしていなかった？」

「外面と内情はいつでも、どこでも違うものさ。あの国は恐らく、“持っているだけ”の軍事力ならば、世界のベスト3に悠々と入る。ただ、“気付いていない”んだ。まあ、何世代前かは知らないけどあの国の武力を取り払った時のトップはまあまあ気が利いていたようだね。大業物13工の情報も、その古代戦艦の情報も全て始末し

てしまった。また、その事を知っていた国の上層部を根こそぎ処刑した。だから、ニホンコクの人々は自らの国に、それが機動さえすれば全世界が震撼するような武力が眠っているとは一切知らないわけ。

どうやってか、黒の教会がそれを知り得たと私は推測する。と、連中が東大陸大業物13工を、嘘を吐いて集める理由が出てくる。その戦艦を機動させるには、13のエンジンキーが必要なんだよね」

「それが、13本の刀……」

「うん」

「ダーク・ペガサスに真実を伝えようとしなのは、その武力をダーク・ペガサスが欲すると面倒だから」

「そういうこと。お利口さん」

一息ついて、ヴィレナは奇妙な青い茶を飲む。ちなみに、ルカにも同じものが品の良い老執事からふるまわれているが、どうしても口を付ける気にはなれない。

「黒の教会の住所はコレ。人物リストもある」

2枚の紙を、無造作に渡したヴィレナは話を移す。

「次に、アルド・ワークス。」

組織の概要に関しては、君が知っている事と大差ないから飛ばすね。入団基準も、変わってない。

まず、連中の武力だけど。宝剣使いが4人。大業物使いが3人いて、この7人が組織の戦力の中心だ。1人は、君と仲良しのヨナね」

「……仲良しじゃないけど」

ルカの訂正には構わず、ヴィレナは続ける。

「そして、これは私も昨日知ったんだが。君の知ってる、5代目アルドが去年、死んでる」

「……！」

「そして、大幅に組織の性格が変わりつつある。以前は、必要に応じて自らの社員を貸し出すレンタル・ショップみたいなものだった

けど、今は自分達の目的も持っているみたいだ。私からすれば、金稼ぎより真つ当で楽しい目的はないと思うんだけどねえ」
ちなみに、ヴィレナが此の世で一番嫌いな言葉はボランティア、無償奉仕だ。

取り締まる者

「それから、話をダーク・ペガサスに戻すけど報酬が良かったからついでに、ちょっと面白い話をするよ」

少し、楽しそうに前置いた。

「ダーク・ペガサスの組織構造は、なかなか複雑。例えば、君の組織は……というが大抵の組織は形であれ何であれ一番のトップ、全てを統括する存在がいる。ところが、ダーク・ペガサスにはそれがない。言うなれば、連立政権とかそんな感じか。3人の、同等の力を持った者が組織を取り仕切ってる。それぞれが部下を個別に持ち、仕事は協力して行いが自分の上司以外に従う義務は無い。唯、同じ目的の下、3つの組織が手を組んでいるという見方が最も適当なのかもしれないね」

「よく分裂しないねえ」

ル力は、流石に喉が渴いたので意を決しておかしな色の茶を口に含んだ。甘い、すつきりとした飲み口で香りからするとハーブテイーの一種と思われる。独特の味だが、嫌いではなかった。

「思うでしょ？ そう、近い内に分裂騒動が起こりそうなんだ」

「……へえ」

「君達が一度捕らえた、ケイとかいう呪術師のいる……グループとでもしようか。同一の力を持っているとはいっても、完全なるイコールじゃなくてね。暗黙の了解として、最も意見を優遇されるのがそのグループのトップ、カリギュラ。実際に、優秀な人材だよ。もう、壮年に近いが、戦っても強いしなかなか商売つけが強いもんで、ダーク・ペガサスの活動資金は彼を中心に集まっている。どこの世界でも、金を集められる奴は優遇されるんだ。」

そのカリギュラがどうも、他2名に先駆けて黒の教会と密約を交わしたらしい。13工が全て集まった暁に、黒龍使用の全権をカリギ

ユラのグループに与えるというね。そして更には、残る2つのグループをとんでもなく困難な東大陸大業物集めの仕事に駆り立てて潰してしまおうとしているようだ。

それに気付いたのが、ルシエルという少女」

「……少女？」

「その子も、歴としたトップなんだよ。ユウという男が右腕とされている。

彼女はまた、聡明でね。初めから、黒の教会については疑って掛かっていたみたいで、最近その信憑性を裏付けるものが1つとして見当たらない事を確信した。

で、カリギユラの思惑にも気が付いたと。また、賢い腹心ユウのアドバイスもあって……彼女は組織内乱を企てているみたいだ。カリギユラを討つて、そのグループを追放。自らがダーク・ペガサスの全権を握ると」

「彼女はそれでどうしたいの？」

「それがね、ここから更に面白いんだ。

ルシエルは、元々、自分の利の為にダーク・ペガサスに入った訳じゃない」

「……つまり？」

「彼女とそのグループは、“裏を取り締まる者”^{ファントム}なんだよ」

ルカの目が、きょとんと大きくなった。

「実在してたの。その、組織」

「してるよ。君らも知るように、裏社会には裏社会の掟がある。解りやすい1つが、表社会に必要な以上の武力をもつて関与らない事……。黒の教会と、ダーク・ペガサスのカリギユラの考えている事が実行されれば、その掟が破られる。だから、彼女は早い内からダーク・ペガサスに潜入してカリギユラを討つ為、もう一つのグループを協力させる大義名分を捜していたみたい。その大義名分が、カリギユラが他のグループを騙しておいしいところ取りをしようとしてるって話というわけだ。

当然、おいしいところ取りなんて彼女達には関係ないけど、もう一つの、真面目に裏社会的活動をしてるグループには一大事」

ル力が少々、考え込んだのを見てヴィレナは口元だけで笑う。そして、読み取ったかのように言う。

「当然、ルシエルにとって一番困るのは、名目上であれ同盟関係である君の組織とカリギュラが手を組む事だろう。何かしら、働きかけてくるかもね」

取り締まる者（後書き）

自分でも何がしたいか解らなくなってきた今日この頃orz
これだから、見切り発車は……

ルシエル女公爵

アイリスという国の首都、カトレア。気候が安定する事の少ないこの街らしく、今日も曇り空が時折雨水を滴らせる。カトレア南部にアレクシル家の町屋敷がある。タウンハウスアレクシル家の当主は現在14歳の少女、ルシエル・アレクシル女公爵。早くに父母を亡くした彼女は、周囲の反対を押し切り父の爵位を継ぐと、数年の内にまるで何十年とそれに携わってきたかのようにあらゆる仕事をこなすようになった。表の仕事も、裏の仕事も。

「ユウ」

この屋敷を一切仕切る執事は、目立つ美しい容姿をした東方の人である。

「はい。ルシエル様」

優雅な微笑みを宿して、ユウは女主人を振り返った。

14歳のルシエルの姿は、まだ中性的なものである。服も、日常では女性らしいものを好まず、今もきつちりとしたワイシャツにチエック柄のベスト、黒地のロングパンツを着用している。茶色の髪も貴族令嬢が多くそうするように巻いたり、豪華な髪飾りでまとめ上げる事をせずまっすぐ背中に垂らしている。

「カリギユラの事だが」

「……どうなさるお積もりで？」

ユウは、声を低めて囁くように主に問いかけた。

「みすみす、やられはしない。」

あの狸、我々を鍵を開ける捨て駒にするつもりだ。そして何より、近い内にルール違反を起こす。

……僕は、先手必勝を信じるのだが」

ルシエルの言わんとする事を察し、ユエは微笑んだ。

人形のように美しい青い瞳の顔を持ちながら抜け目なく、時に荒々しいこの小さき女主人がユウは好きなのである。

「あの組織の立場をまず確認する。ユウ、手配を」

「承知致しました。」

お召し物はどうなさいますか？」

「任せる。選んでおけ」

「かしこまりました」

女公爵としてのルシエル、そしてダーク・ペガサス幹部としてのルシエル、どちらも知るのはユウだけである。屋敷では、有能な執事として裏社会では強力な護衛として常に彼女の傍らに寄り添っている。

彼は早速ルシエルの命令に従い始めた。向かった先はルシエルの執務室。ここで彼女は、表の仕事……様々な企業経営の全てをこなす。ここには盗聴防止機能のついた回線が通っている。また、目的の「組織」の回線番号は掴んでいた。

『もしも、あの金髪の同国人と手を組む事となったら……。それもまた一興、かな』

ユウはそつと考えながら、回線を繋いだのだった。

*

それから、3日後。

アーシャのとあるビルの前に、一台の高級車が止まった。中から、警備員の服装をした2人の男が出迎える。

「お名前を」

「ルシエル・アレクシルだ。こちらの代表者の方にお目に掛かりに来た。連絡は行っていると思う」

「はい。伺っております……。恐れながら、証明を」

「ユウ」

短く呼ばれた、黒い燕尾服の東洋風の男が身分証明書を見せた。警備員の2人は、組織の情報部所属の者である。偽装身分証明書など、見ただけで解る経験者達だ。そんな彼らが本物であると確認して頷く。

「ご案内します、こちらへ」

「これはこれは。想像以上に可愛らしいお客様だ」

ボスはルシエルを見て微笑んだ。ぴったり、影のように寄り添うユウはその言葉に当然だという風に頷く。ルシエルはユエの選んだ、黒いドレスを着ている。柔らかい絹のドレスで、袖や裾はレースで美しく飾られている。若い令嬢だからこそ許される、短い、膝までの丈のドレスで黒いストッキングも抜かりなく繊細な薔薇の模様が入っている。髪は二つに結わかれ、服に合わせた黒いリボンで飾られる。彼女の中性的美貌と相まって、人形のような完全な美しさだ。彼女を額縁に飾ったら、目の飛び出るような金額をはたいて手に入れようとする者も少なくないはずだ。

そんな、若すぎる美しい令嬢は丁寧に挨拶した。

「お初にお目に掛かります。名の無き御方。」

私はご存じの通り、アレクシル家当主でありダーク・ペガサス幹部のルシエル・アレクシルと申します。そして、これはユウ。私の直属の部下です。

この度は突然にして勝手極まる訪問をお許し頂き、感謝しています。ボスはにこやかに頷くと、促した。

「さて、何の話がしたいの？」

「……あなたの様な御方に言葉を飾る事は無意味と判断し、率直に話を進めさせていただきます。」

我々は時期に、事実上トップの捨て駒として殺される事になります。しかし、それは我々の望むところではありません。

ですから、私は内紛を企てております」

「気の強いお嬢様だ」

ボスの声に、馬鹿にしたような響きはない。ユエは取り敢えず、この大組織のトップは自らの主に好感を持つてくれたと判断して一安心をした。

「ですから、その場合、ダーク・ペガサスと同盟を結んだあなた方に動かれると困るのです。

不干渉を貫いていただきたい」

「支援は求めないの？」

ルシエルは頷いた。

「これは、我々の問題です。それに、私が独力でカリギュラを叩きたい理由があるのです」

「君の家のお仕事だね？」

「ご存じでしたか、やはり」

ボスはしかし、何やら考え込んでいる。

「質問をいいかな？」

「お答え出来る事であれば」

「大した事じゃない。ダーク・ペガサスは東大陸大業物を何か所有しているか、聞きたくてね」

ルシエルは少し警戒するように相手を見るが、立場は自分達の方が下だから素直に答える。

「ユウが四工の白炎びやくえんを所持しています」

ボスは「成る程」と言つて、ユウが佩はいている純白の鞘の刀に目をやった。

「やはり、東大陸の刀とは東大陸の人間が繋がるのかな」

「……これが何か？」

ルシエルとユウを交互に見てからボスは言う。

「中立を約束する条件を出しても良いかな」

「それが、この刀ですか」

「そう。部下の1人に、どうしても東大陸大業物13工を集めなければならぬのがある。いずれ、奪いに行く事になるし……穏便にどうか？」

「レピュス殿ですね」

ユウは、任務失敗したケイを送り届けてきた金髪の少年を思い出した。

「私としては構いません」

ルシエルは、その言葉を聞くと頷いた。だが、すんなりと約束するつもりは無いようだ。

「最終的に、白炎をお渡しする事に異存はありません……が、それは全て片付いた後として頂きたい」

「白炎が人質か」

ボスは軽く笑った。

外交上手は嫌いでない。

「そうしよう。これで利害は一致したね」

ルシエルとユウは丁寧に頭を下げた。

情報提供料

レピュスは、魔術塔から戻りようやく何事も心配無く眠る事が出来た。

だが、目覚めはなかなか衝撃的だった。

「起きろ」

耳元で、声がする。自分に命令調で話せるのは、数名しかいない。誰だ……。

「早く」

何となく、可愛らしい喋り方なのだが声は低いしそっけない。

この声と喋り方は……。

というかこれ、前にもあったぞ。

レピュスは相手が誰か判った瞬間、条件反射で起きあがってベッドを飛び降り、直立してから一礼した。

「も……申し訳ありませんでした。」

ル力先輩……」

「別にそういうのいいから」

ル力はちよっと欠伸してから、レピュスのベッドに我が物顔で座った。

「あの……何故」

「鍵、開きっぱなし。声掛けても返事なし。よく寝てたね」

「あ……」

「懲りないねー。襲われたらどうするの?」

「それでね」

ル力は欠伸しながら本題に入った。

「13工の情報欲しい?」

「何かご存じなんですか!？」

レピュスは身を乗り出して大声を出した。

「うん。じゃあ、交換条件。何でもする?」

ルカの冷たい表情を見て、息を飲んだレピュスだが頷く。

13工が揃えられなければ、遠くない将来に必ず寿命をまっとうせ
ずに死ぬのだ。

そして、ルカが条件を口にした……。

翌日。

「お待たせっ!」

初夏なので、青いミニワンピースを着て髪を高く結び上げて綺麗な白い
サンダルを履いたイリスが駆けてきた。嬉しそうに頬を紅く染めて
いる。

「急にごめん」

レピュスの笑みはどこか引きつっているが、イリスは気にしていな
い。

「ううん! サツズさんがいきなり、上から命令があつたから明日
は休みだよ……なんて言うから吃驚したんだけど。レピュスもお休
みだったんだね」

「まあ、あはは」

ダメージゾーンズに、この前イリスが買い物カゴに容赦なく放り込
んだロックテイストのシャツを着ているレピュスは昨日のルカの言
葉を頭の中で反芻した。

『じゃあ、明日、可愛いイリスちゃんとデートしてあげなさい』

*

「失恋した君がキューピッドになるなんてね」

からかうようにボスが言うと、ルカはふくれっ面をした。

「あんなデブの小僧にはなりたくない」

「そんな事、言ってるから彼女出来ないんだよ」

「あんたにだけは言われたくないな」

「しょうがないでしょ。性別不詳が売りなんだから」

「アルド・ワークスが3本も所有してるとは。流石ヴィレナだね」
ボスが話を変えると、ふくれっ面をやめてルカは頷いた。

「レピュスには長期休暇をあげないといけないだろうね。ウチにアルド・ワークスを敵に回す理由は今のところ無いから」
すると、ボスは笑った。

「あるよ、敵対理由」

「……？」

「ウチの部下に手を出した」

「そんな些細な事……」

「そんな些細な事で、たくさんの組織が今までつぶし合ってきた。
たくさんの方が戦争をしてきた」

「どうしてもレピュスを組織から離さず、更に13工を早い内に集めさせたいんだ？」

ボスはじつとルカを見た。ルカも恐れげなく見返す。

やめたのはルカの方が先だった。

「君にも、手伝ってもらおうよ。」

この組織の念願の為にね」

「組織員はその為にいるんですよ」

ボスはただ微笑んだ。

「イリスと出掛けさせたのは、暫く、外で動く事になるから？」

「それもあるけど。イリスが、彼が戻ってくる理由の1つになればいいと思って」

「前にも言ってたけど……あいつが進んで、あんたの元を離れるなんて事があるの」

「我々は何も判らない事しか、判ってないんだよ、ル力。特に、自分以外の誰かに関してはね。

信じていた者に、明日は殺されるかもしれない。昨日愛を誓った相手を殺す事情が次の日に出来るかもしれない。その逆もまたしかり。敵対していた相手を、助ける必要が出来るかもしれない。そういうところに我々は生きていると、思ってるんだけどね」

ル力は、仕事内容でもなくボスがこんなにも饒舌になるのは珍しいから、少し驚いていた。だから、少し答えを期待して、突っ込んだ質問をした。

「あんたは、単数の一人称を使わないよね」

「誰でもないからね」

「……そう」

どうしてか、ボスが「自己消失」を示すとル力は妙な気分になる。

足下が遠くなるような、違和感。心臓を掴まれたかのような不快感。

それが彼の記憶の為である事は、彼もまだ知らない。

*

自分の一步前を楽しそうに歩いているイリスを見ると、彼女は虹の雫の件を知っているのだろうかと少し考えた。元とはいえ……どんなに苦い記憶しかなかったとはいえ、彼女の実家である。あまりいい気はしないのではないだろうか。

「どうかした？」

「いや……何でもない」

「そればかり。まあ、任務の事ならしょうがないか。黙秘義務が厳しいもんね……聞いてごめん」

「そういうわけじゃ……」

思わず言ったが、これが失敗だった。

場所は、コーヒーショップであり2つのマグカップを挟んで向かい合っているに過ぎないのだが法廷に立たされたらこんな気分なのかと、レピュスは考えてしまった。

「……この前、ロデオの手伝いをして」

「して？」

さつとイリスの顔が強張った。

『まさか、情報部も虹の雫の在りかを……』

レピュスはそう、イリスの表情を読み取ったのだが、大間違い。

『まさか、何かあったっていうの！？ でもでも、ロデオさんには婚約者がいるんだし！ 年上だし……でも、レピュス大人っぽいから上は30くらいまでいけそう……ヤダ！ 何考えてるの私！ はしたないっ』

乙女チックなパニックに陥っていたのだ。それを押し隠して、この苦い表情。

「いや、その……。ロデオとは前から約束してたし」

『そんなっ』

レピュスの言葉を誤解し続けるイリス。

「俺も、世話になったから最後まで付き合う義務があったし」

『ツキアウ！？ それって、えええっ』

「だから、仕方なかったんだ」

「……そうよね……」

「ランカスター家に不法侵入するのは」

「え？」

ぽっかーん、としたイリス。予定外の言葉が出て来た。

レピュスも、この反応は予想外だった。なら、イリスは何故、今まで苦い顔を？

「ま、待って、どういう事なの！？」

「だから、本当に悪いと思ってる。ロデオの探し物の、虹の雫がランカスター家にあったから、それを取りに行ったんだ。判ってたか

ら怖い顔してたんじゃないのか」

「や、やだっ、怖い顔してた！？　じゃあ、あの、ロデオさんとは

……」

「は？」

「ロデオさんは今どこに！？」

レピュスは奇妙な質問だなと思いつつも答える。

「知らないけど……多分、婚約者のところかな」

イリスがほっつと息をついて肩を下ろしたので、レピュスはますます首を傾げた。

それからは、やけに上機嫌でハイテンションのイリスに引っぱり回されて任務に負けじとくたびれたレピュスだった。

求める者

翌日の夕方。レピユスはルカに呼び出されて、ボスの執務室へ行った。

「失礼します」

「昨日は楽しかった？」

「からかうように言うボス。」

「……」

「照れてる」

と、ルカ。

「照れてません！ それより、13工の情報は……」

「教えてあげるから、座んなさい」

そう言うルカは、ボスの書類机の上に座っている。

「俺は、お前がハズスに遊ばれてる間、情報屋のどこに行つたの」

ハズスに“遊ばれている”という表現は、全力で否定してしまいたいものだったが、もしかしたら遊ばれているだけだったのかもしれないという懸念が捨てきれず、曖昧に頷いた。

「その情報屋が、という事ですか」

「うん。」

アルド・ワークスが3本所有してるんだよ」

「3本も……!!」

「第六工、瑠璃虹^{るりにじ}。第十工、灰骨^{はいぼね}。第十一工、緑月^{りよくげつ}」

ルカが名を挙げ連ねた。

「所有者は、いずれも会社の上層部。」

六工の所有者はヨシユア。生まれてすぐに、アルド・ワークスに入れた社員の子供。現在18歳。若いけど、お前と同じくらいの

実力と功績はあるね。

十一工はイザヤ。4歳で拾われた女。現在、26歳。残忍なやり口で、一度、裏社会さえ追放されかけたけど社長の権威で免れた。

十一工はユダ。5歳で自ら進んで入社した」

「ちよつと待つてくさい、5歳の子供が進んで……！？」

レピユスの驚きは当然だから、ルカも特に話を止められて不満そうな顔はしなかった。

頷いて、ヴィレナの話を繰り返す。

「何でも、緑月は彼の父親が持っていた刀らしい。緑月の持つ力は“知識”に関するものでね。父親はどうやらその力を理解していなかったようだ。泣き叫ぶ自分の子供をうっとうしく思い、刀を振り下ろしたんだけど」

「……！」

「刀はユダの命を奪うどころか、彼に刀の持つ“知識”を与えた。

そして、父親は死んだ。

ユダに殺されたわけ」

レピユスの顔がさつと青ざめた。

――――親殺し

それを道徳的に非難する心は、特にレピユスは持ち合わせていない。自分を殺そうとした者を殺したという図式に人間関係や、その他、「道徳的精神」の入り込む余地は無いと思っている。

しかし、そういう問題ではなく、彼にとって「親殺し」というものは耳にしたくない言葉の1つなのである。それは、彼がここにいる理由であり、呪いの刀を手にした理由なのだ。

「最大の恐怖に反応した緑月は最大の力を発揮したみたいだね。

知識を与えるだけでなく、使い方と、使う能力まで与えたみたい。そして、緑月はユダのものになった。ヴィレナのちよつと面白い推測によれば、緑月が選んだのは最初からユダの父親ではなく、まだこの世に生命体として成立する以前のユダの遺伝子だったのではないかとね」

この、確かに興味を駆られるような説もレピユスの耳に入っていたことかどうか。

「それで、我々はアルド・ワークスに抗議と宣戦布告を行う」
ボスの言葉に、レピユスはようやく我を取り戻した。

「……！ 何故……」

「アルド・ワークスのやり方は、裏社会の法に逆らっている部分があるんだ」

「そんな事を今更……」

「だけど、13工、欲しいでしょ？」

それを聞いてレピユスは反射的に頷きながらも、疑問を口から発していた。

「失礼ながら俺の為としては、やり過ぎでしょう。ボスも……13工を集める理由がおりなのですか」

問いかけてから、しまった、と思ったが相手を怒らせてはいなかった。ボスはいつものように、非人間的な、機械的な微笑みを浮かべているだけだ。

「他言してはいけないよ」

「……はい」

「そう、探している。だけど、君の敵にはならない。

君が13工を集め、目的を果たした後でなければ寧ろ、意味がない。呪いを解き終えても、君が13工を保持したいと願うなら戦う事になるけどね……」

レピユスにとって、13工を集めるのは自分の呪いを解く為ではない。だから、すぐに答えた。

「呪いが解けたなら、必ずお渡しします」

「ありがとうございます」

レピユスは驚いた。

……もしかしたら、ボスに礼を言われたのはこれが始めてだったかもしれない。忘れているだけかもしれないが……珍しい事には変わりない。

それだけ、ボスにとって重要な事柄だという訳だ。

「俺の呪いを解くのを待ってくださいとさるというなら、むしろ13工を集める事でボスのお役に立てる事を嬉しく思います」

ボスが目を細めた理由は、判らなかつた。多分、一生判る事はないだろう。

独白（前書き）

物語の進展はありません。
そして、暗いです。

独白

「また……」

恐らく、昨日、ルカから聞いたユダという者の話の所為だろう。また、夢を見た。

額の汗が鬱陶しい。暑いわけではないのに。

カタカタと鳴る奥歯が五月蠅い。寒いわけではないのに。

未だに悩む。

何人もの人を殺め、数え切れない人を傷つけ、傷つけられてきた今でも思う。

あの時、自分はどうして「あの人」を殺したのかと。使ったのは紫水だった。「あの人」の望みでもあった。「あの人」は殺せと懇願した。

だが……それは、その言葉に従ったのは正しかったのか。

正義感ではない。それは確かである。

この上なく、利己的な心から、この事を思っただけで悩んでいる。

「あの人」がいなくなって、それは自分の所為なのに……胸に巨大な、二度と塞がらぬ穴が空いたような気がするのだ。呪いを解いて、人並みの寿命を取り戻したとしても……。この穴は埋まらないだろう。

それでも、求めなくては生きていけない。

生きることには理由が要る。何でも良いのだ。高尚である必要は全くない。

愛する者の為でも良い、金の為でも良い、夢の為でも良い、名誉の為でも良い。数多ある理由の中から、自分は「呪いを解く為」という言葉を選んだだけだ。それは、愛する者がおらず、金があっても使い方を知らず、夢も持てず、名誉などあっても仕方のない身だったからだ。

誰かを素直に愛せる者が羨ましい。

素直に金があれば幸せと言える者を尊敬する。
夢を持つて生きる事は素晴らしいのだろう。
名誉を求める者の向上心に感服する。

「俺は……生きるためにしか生きられなくなつたんだな」

だが、自分のような者が長く生きてどうするか。

何も求められない者が生きて、呼吸する回数が増えるだけだ。心臓が多く脈打つただけだ。迎える憂鬱な朝が増えるだけだ。

――殺して。私を殺すのよ、――。そう、その刀……その刀を、あなたのものに……。――何を躊躇っているの？ 早くしない、早く殺すのよ……。そうしなければ、終わってしまうのよ。

自分はその時、終わるのが怖かった。

何が終わるのかは結局、「あの人」は言わなかったけれど。

ただ、終わる事が怖かった。

それなのに、「あの人」を自分の手で終わらせたというのは、笑えない皮肉だ。

あの時、「あの人」の言葉を聞かず、共に終わっていたら？

自分はどうなっていたのだろう。

確実に、ここにはいないだろうし、きっと生きてはいなかった。

だが、夢を見る度にこうして虚無感に打ちひしがれる事もなかったはずだ。

何が正しかったのか、何が正しいのかは判らない。

だが、どういう訳か……自分の呪いが解ける日が近付くと思うと、気分が晴れる。

きっと、強い強い自己暗示。

そうしなければ、生きてはいけないだろうから。

防衛本能で、自分は喜び、笑っている。

そしてきっと、次にまた呪いの解ける日に近付いた時、今、思っている事が脳裏をかすめることさえないのだろう。人間など、そういうものだ。

「人間、ね」

人間とは何だろう。

考える動物というのが定義だと、どこかの誰かが言っていたっけ。

だが、本当に考えるだけで人間として在る事が出来るのか。自信が無い。

*

ルカは、部屋の明かりも点けずに膝を立ててベッドにただ座っていた。

「5代目アルドが死んだ……」

これは、彼にとって悲しむべき事ではありはしない。

寧ろ、喜ぶべき事なのだ。

彼がアルド・ワークスを出るきっかけとなり、彼から最も大切なものを奪った、5代目アルド。

そして、彼は今度のボスの「要求」をアルド・ワークスが守り、謝罪と共に東大陸大業物の全てを寄越さなければ始まる事になる。「戦争」に参加する事になる。

ルカにとっては寧ろ、そうなた方が良い。

アルド・ワークスを壊し、失ったものを取り戻したい。もう一度、この手に……。

身体時計が狂わぬよう、地上の日の出と同時に組織本部の明かりは灯されていく。この光量は恐らく、朝の5時程度。もうすぐ、明るくなる。夜明け前というものだ。

毎日、日が昇れば夜明けとなるが彼に夜明けは訪れない。

取り戻すまで。

挑発への返答（前書き）

この辺りからを「対アルド・ワークス篇」とでも名付けましょう。
この話での主人公はもしかしたらルカになるかもしれませんが……
いえ、レピュスとの二重主人公でしょうか。

挑発への返答

その日、ボスの手元には一通の封書が届いていた。アルド・ワークス本社からである。社長のみが使用を許される、ALDの文字が記されている。

「さて、どうかな」

独白してから封書を開く。

「ダメだった」

ルカを呼び、すぐにボスはそう言った。

「俺にとつては願ってもみない事だな……」

アルド・ワークスとの交渉は決裂した。

更には、

「互いの存在は互いのためにならないと、存じ上げる」

などという節の言葉が入っていた事から、向こうにも戦意があると判る。

「大っぴらにやると、ルシエル嬢に取り締まれる。あくまでも、密かに……息の根を止める」

「乗り込むの？ 出方を伺うの？」

「君は、行つて確かめたい事があるんでしょ？」

「……」

「だけど、こちらからは動かない。余程の事が無い限り。」

決着がつかなかった場合、その方が有利だからね。今の所、我々には挑発的な文書を送ったという事しか非はない。向こうの社員を殺害したのは、単独行動中のロデオだしね。ウチはこれで2回、任務

の妨げをされた事になる。それに、今のアルドは表に関わり過ぎている。

それから……アルド・ワークスはニホンコクの政府とコネクションがある」

ルカは頷いた。

ヴィレナが語った事だから、当然彼も詳しく判っている。

アルド・ワークスは「国家」を作ろうとしているのだ。

「これが、ルシエル嬢たち、ファントムの言うところの【秩序無き世界における秩序】に対する反逆行為である事は明らかだ。6代目アルドの欠点を突くに当たって、これが一番の理由となる。【「正式の法」に乗っ取って生きる者達の領域を、「この法」に乗っ取って生きる者は侵犯してはならない】という法に引掛かるわけだ。それと、さっき言った通り【宣戦布告なしに他組織員を襲撃する事は、外部からの依頼があった場合、明らかに襲撃を受けた場合を除き禁ずる】という法にも引掛かる。

アルド・ワークスに対してウチが攻勢に出るきっかけを作ったのはゴートが宝剣の奪取のサポートを依頼するに当たって『邪魔者は消せ』と命令していなかった事だ」

「……性格悪い」

「何を今更。外交なんてこんなものだよ、ルカ」

「それからね」

ボスは、不敵な笑みを浮かべた。

「必ず、相手は向こうからこちらへ攻めてくる」

「それは？」

「連中が国家建設を目論むであろう土地がココだからだよ」

「アーシャ、って事？」

「そう。この都市は知っての通り、世界有数の貿易都市で地下全て

が我が組織の本部となっている。アーシャを手に入れ、自由都市化し、最終的には独立国家とする。言うほど簡単じゃないが、やろうとして出来ない事じゃない。

これを考えているなら、我々からの挑発を連中は“好機”と考えるだろう」

「対策は？」

「人質とされる可能性があるから、情報局その他、非戦闘員は近以内にアーシャを離れさせる。多分、どれだけ警戒しても連中は地下へ押し入ってくる事が出来るはず。というか、そんな事も出来なかつたらウチを潰したり国家建設するのなんて夢のまた夢だから」

「……だろうね」

「アルドの社員はおよそ二千八百。例の方針のお陰で精鋭揃いだ、人数は少ない。

社員の中には当然、幼少から育てられたって喧嘩には向いてない者が山ほどいて、そういうのは事務職に回されている。数はだいたい五百。

社長アルドの下に20名の幹部がいて、その下に幹部候補生が350。これらが上位社員と呼ばれ、下に中位社員が400、下位社員が1500というところ。その全てをウチの攻略に回すような馬鹿はしないだろう。こっちの方がずっと人数が多いから、カラになったアルド社を乗っ取るくらい赤子の手を捻るレベルで可能だからね。半分から6割……そう考えていいと思う。ここに回されるのは。

幹部も全員出勤とはいかないだろうね。幹部の20人は、1級幹部から5級幹部にまでランク付けが更になされているけど、4と5は恐るるに足りない。5なんて、ロデオが数分で2人同時に片した」

「1が2人、2が1人、3が1人、4が7人で5が9人……それで今、5が7人に減った」

「そういう話だ。1は君の御友人のヨナと、ユダ。2にイザヤ、3にヨシユア……警戒すべき4人だよこれが」

「誰が来ると思っの？」

「……残すなら、1人だろうね。素直に考えれば、1のどちらかを残すのだろうけど……… 確実性を狙って2人投入してくる可能性もある。その場合、2の1人を残すんだろう。1と2の力は拮抗しているから戦力的に大きな差は無いだろうね」

「どっちでも一緒って事か」

「そういう事。」

ウチは人数が多いけど、実は安心して全部任せられる実力者は君とレピユスと……… 辛うじてラウン、ジャンニアくらいなんだよね。という事で、レピユス、ラウン、ジャンニアと話すから君は下がっていいよ」

「うん」

行儀悪くボスのデスクに座っていたルカは軽く飛び降りると、すぐに出て行った。

本の虫（前書き）

作者も本の虫ですが（笑）。

本の虫

ボスの内線でつかまった、つまり自室にいたのはレピュスとラウンだけだったので、2人で現在ジャンニアを探している……が、大方予想はついていた。

「書庫かな」

「恐らくは」

ボスの書斎の下階にあるものとはまた別に、大きめの書庫が組織本部にはあつて組織員は余程の事が無い限りこちらを使う。用が無い限り、または呼び出されない限りボスの書斎には近づくものではないというのが暗黙のルールなのである。

今、2人が探しているジャンニアという女性幹部は暗殺部隊の女性の中では最年少でロデオの後輩に当たるが、その実力は組織員達に流石ロデオの後輩と言わしめる。だが、ロデオのような近接戦闘よりも武器を使った中・遠距離戦闘に長ける。

そんな彼女は、誰もが知るほどに本を好む。そういった嗜好の上、眼鏡をかけ、髪を三つ編みにしているからエリート女学生みたいだと言われて、言った相手を半殺しにしかけたという噂がある。

書庫、というより図書館と呼べる建物は平たく床面積が広い構造になっている。蔵書数は誰も数えたことがないが古今東西のあらゆる出版物があらかた放り込まれている。その、膨大な書の半分近くをまだ20になったばかりのジャンニアは読んだと言われ、彼女を暗殺部隊から図書館の司書に転職させてはどうかという討議が一度、真剣になされたほどだ。

レピュスとラウンは、正直、余り本は好まない。任務先について軽く情報収集をするくらいだ。だから、本棚で視界を埋め尽くされた空間において1人の人物を捜すのは相当に困難であろうと思われる。

「……どの辺にいるかな」

レピュスよりも年上なのに、子供っぽい印象のラウンは首をぐつと傾けた。

「図書館の中、大声で話していたらジャンニアに殺されかけたって逸話が存在するからなあ」

「ああ、聞いた事あります……」

仕方なく、かなり時代の最先端に行く技術で作られた組織本部で彼らは実に昔ながらの、徒歩で捜索を行う事に決めた。

「ボスと呼ばれてるんだから、早くしないといけないのになあ」

ラウンがぼやいた時だった。

「あ」

レピュスはとうとう見付けた。間違えようのないシルエット。自分の左右に読み終わった本、これから読む本を山と重ねて積み上げている人物。きつちり2つに分けられた黒より紺に近い色合いの髪は三つ編みにされている。

「ジャンニアさん」

「……何だ」

物凄く迷惑そうに振り返った、眼鏡の女性。

目は大きいがきつくつり上がっているし、飾り気の無い銀縁の眼鏡を掛けているから可愛らしさとは無縁だ。背丈はラウンと同じくらい。小柄なレピュスとそれより小さいラウン、それと同じくらいのジャンニアが3人揃い踏みしても、誰もこれがボスの言う戦場を「安心して任せられる」者達だとは思わないだろう……。

「ボスがお呼びだよ。重要な話があるみたい」

ラウンに対して無言で頷いたジャンニア。

「失礼致します」

ラウンを先頭に3人が入ると、ボスは軽く頷いて迎えた。

「レピュスは大体予想がついているんだろうけど」

ボスが言うと、ラウンは驚いたように、ジャンニアは不愉快そうにレピュスを見た。

「我々は、アルド・ワークスと戦争をする事になる。軽く挑発したら、思いの外、あっさりと乗ってきた。もとより戦意があつたのだろうね」

「失礼ながら」

ジャンニアが言った。

「そのような大規模な戦いを行うにあたって、我らが得る物とは一体？」

これは、平和主義的発想から来ているのではなく、好奇心と彼女の理論主義から来ていると誰もが判っている。彼女は、無意味な行いが嫌いである。求めるところが金ではないという点以外は、もしかしたらヴィレナと似たところがあるのかもしれない。

「東大陸大業物13工。それと、危険な芽を詰むという意味もある。情報屋ヴィレナが言うには、5代目アルドの後継者となった息子、6代目アルドは野心に燃える人物で、国家建設を夢見ているそうだ。その夢を現実にする道具の1つが、今、君達も立っているこの土地」
「成る程。アーシャ全域を網羅しているこの空間を支配してしまえば、陸上の支配も時間の問題。そしてアーシャは貿易産業に栄え、科学技術系の工場も多く進出している為、経済的に非常に安定しており自治都市となれる可能性が高いというわけですね。確かに合理的です」

ボスは軽く微笑んだ。

「レピュス、ラウン、細かい説明は今、ジャンニアが全部してくれた」

ボスとの人間関係の結果、ボスの話に口を挟めるようになったのがル力ならば、ボスの代弁者として口を挟めるようになったのがジャンニアである。

「それで、我々から乗り込む事はしない」

「完全に受け身という事ですか？」

ラウンが少し心配そうに言うが、ボスは意見を覆す気は全くないと見える。

「まあ、そうとも言えるけれど、こちらに地の利がある状況で戦えるわけだ。それに、さっき言った理由から彼らはいずれ、この地下空間を手に入れようとするから……その為には侵攻をしてくる。2日後には、戦闘要員以外は外へ出してしまおうと考えている。今のところ、アーシャでも地上は安全だろうけれど人質に取られるとなにかと面倒だから何組かに分け、同盟組織に押しつける」

今のところ、この組織に逆らえる同盟組織は無い。ダーク・ペガサスとは対等な関係を一応結んでいるが、いつ内紛が始めるか判らない組織に身内を預ける気は全くない。

「そして、連中が攻めてくるのは近い内だと推測している。ヴィレナの言うところ、アルド・ワークス本社に続々と社員が集まっているそうだから」

「それで、君達を呼んだわけだけど。簡単に言つと、ル力と共に組織の者達の指揮を任せる……。ああ、間違えた。ル力には最初、一通り働いてもらったら自由行動をしてもらう。これが、彼を一番活かせるやり方だからね」

それに関して、誰も反対意見を持っていなかった。むしろ、真面目に部下達に指示を出して戦いを指揮するル力など考えただけで違和感の固まりだ。

「天上天下唯我独尊ですからね、あの人」

ラウンが、非難ではなく感嘆を込めて言った。

「だから、大雑把に分けるとラウンが指揮官、レピュスが副官、ジャンニアが参謀って感じかな。当然ジャンニアにも戦ってもらうけど」

3人は了解を示した。

「あと、レピュス、君にも自由行動を許しておく。多分、必要になるから……」

「判りました」

寧ろ、有り難い事である。下っ端を相手にしていて、大業物使用を取り逃がしたら何の為に戦うのか判らない。

ボスと3人の幹部は作戦会議へと移った。

解説1 “組織”（前書き）

この時点までの「組織」の解説です。色々判りづらくなっ たな…
… と思い、作ってみました。

曖昧で判らん！… というところが御座いましたら、感想欄にでも
ちよこつと書いてくださればお答えします。まあ、この時点で言え
る限り、となりますが。

他組織などの解説も作る予定です。

解説1 “組織”

概要

裏社会に存在する組織の中で、最大の規模、長い歴史と高い実力を持つ組織。組織に名前はなく、組織員は「ウチ」または「ウチの組織」と呼び、他の者は「あの組織」と呼ぶ事が多い。ボスには名前がなく、出身、性別、生年月日の全てが隠されている。組織の者は「ボス」と呼び、形式にこだわる他組織の者はよく「名の無き御方」と呼ぶ。

組織のルール・上下関係・部署

【ルール】

組織員は、入団と同時に過去のプロフィールを全て捨てる事となり、名前もボスから与えられたものを公私問わず使用することになる。どんなによく知った者同士でも、組織員の間では個人情報にまつわる話は忌避される。

正式な手続を踏めば、組織を出ることも可能だが組織に入った時点で表社会での存在は抹消されている為、よほどの事が無い限り組織を離れる事はない。また、規律に違反した者や責任を果たさなかった上級組織員（幹部、準幹部、三級幹部）は辞めさせられる。

【上下関係】

トップが「ボス」でその下に7人の幹部（一級幹部）、18人の

準幹部（二級幹部）、40人の三級幹部がいる。それぞれ幹部に暗殺部門4名、情報局1名、魔導塔管理者1名、拷問責任者1名。準幹部に暗殺部門8名、情報局8名、魔導塔管理補佐1名、拷問準責任者1名。三級幹部にはそれぞれ16人、16人、4人、4人となっている。

幹部はボスからの直接命令で動き、大規模作戦以外は個人の判断で任務を行う事が許されている。大規模作戦では指揮官となる。準幹部は幹部の命令に従い、状況に応じて三級以下を動かす。三級幹部は準幹部の指示に従い、それより下の者を動かす。

【部署】

大きく、5つの役職に組織員は分けられている。その中で最も地位が高いのが暗殺部隊であり、暗殺以外にも戦闘能力を必要とする全ての任務（護衛など）にも駆り出される。最も、多忙。

次に、情報局と呼ばれる役所があり、ここでは依頼の管理や裏社会情勢の調査が行われている。仕事に危険は一切ないが、やはり多忙な役所である。

次に、魔導塔職員。責任者ハズスの下で動き、魔導の実験やそれを利用した尋問・拷問を主な役目とする。また、医療士もこの職員が兼任している（魔導医療士）。

次に、拷問塔職員。責任者ジュリーに仕事は一任されている。魔導を使わぬ尋問・拷問を行い、拷問塔からは昼夜悲鳴が途絶える事が無いという。

最後に、生活関係役所。これはいわゆる下働きで、清掃業務から

地下照明の管理、各セキュリティシステムの管理、その他日用品の調達などが仕事。幹部はいない。

【人物】

レピュス：暗殺部隊幹部の最年少。幻刀紫水と呼ばれる、東大陸大業物13工の13番目の刀を使うが、その呪いを受けてもいる。呪いを解くため、組織の活動をしながらも残りの12工を集めている。

ボスが直接組織に連れ込んだ珍しいケース。詳細は彼らしか知らないが、「あの人」を殺した事とどうやら関係があるらしい。また、ボスは最近、自分の目的にも13工が必要だがレピュスの敵にはならないと断言した。

瞳の色、使用武器、それから「同国人」の証言により東の出身という事が判るも、詳細は不明。

レピュスに助けられた事をきっかけに組織に入った同じ年頃の情報局準幹部であるイリス（カレン）の想いには何となく気が付いているが自分の生きる道に「愛」など存在しえないと考えている。

ボス：真名、出身、生年月日、性別などの個人情報全てが不明。ボスになった瞬間に、全て抹消されている。奇人・変人も少ない組織員達の信頼を一切のぶれなく集め、物事への対処は非人間的なまでに冷静。しかし、時折、「奇妙な」表情を見せる。これが何を示しているのかは、無論、誰にも判らない。

戦ったら強い、と言われるが組織のボスが直接戦うという事はまず無いのでその真偽は不明。

謎だらけの組織ボスの情報は、裏社会の他組織の者であれば誰でもあっても欲しがる為、それを目的に侵入を試みた組織もある（ダーク・ペガサス）。

最近、東大陸大業物13工を求めている事を、レピュスに対し、

明らかにしたが彼と取り合いを演じるつもりは無いらしい。

ルカ：暗殺部隊幹部の中でも、抜きん出て実力と権力が高い。ボスに対してため口をきく唯一の組織員。扱えぬ武器は無く、格闘術にも優れる。

15歳までアルド・ワークスに在籍していたが、「事情」によりそこを離れて組織に入って今に至る。今やすっかり組織の重役なわけであるがアルド・ワークスに何やら未練がある様子。

イリス（カレン）：ランカスターという大貴族家の娘であつたが、当主の愛人の娘であり非常に立場が悪かった。そんな彼女は、姉の身代わりの意味も込められて闇オークションに同行させられて案の定、ダーク・ペガサスに誘拐される。それを助けに飛び込んだレピユスのお陰もあつて生還し、そのまま組織員となる事を志願。ボスはそれに快く応じ、彼女の「不幸」であつた今までを思つてか「幸せ」を花言葉に持つ菖蒲、イリスを名前として与えた。

レピユスに対して人並みならぬ想いを抱いているようだが、レピユスが壁を作っているため積極的になることも出来ずにいる。

ラウン：暗殺部隊幹部。年齢はレピユスより上なのだが、背丈が低く、持ち前の雰囲気も子供っぽいところがある。だが、見かけに依らずその戦力は幹部として十分なものである。

ジャンニア：暗殺部隊幹部。一見、真面目な女学生のようなだがその戦闘能力はルカ、レピユスに続いてナンバー3。ロデオの後輩にあたり、「流石最強の殺し屋の元後輩……」と誰にも言わしめる。だが、近接戦闘よりも、銃を使った遠距離戦闘の方がより得意である。

誰もが認める「本の虫」であり、任務がある時以外の9割は図書館で過ごす。管理者のいない、放りっぱなしの書庫状態の司書の職

に彼女を就かせようかという議論が一度、真剣になされたという噂もある。

ハズス：魔導塔管理者。見かけはどう見ても、20代かせいぜい30前半であるが雰囲気・魔導の知識量からすると40にはなっていないとおかしい。武器は魔導のみだが、その魔導が恐ろしくて上級組織員であつても、顔を見ただけで逃げ出しそうになる者が多い。倫理とか道徳はとくの昔に焼却炉に投げ込んでおり、拷問と黒魔導の実験、生体実験が三度の飯より好き。

ノエル：魔導塔管理補佐。人間を誘惑して地獄へ連れ込む悪魔ではないかと噂される、恐ろしささえある美貌。ハズスに向ける忠誠心が度を超えており、良からぬ噂も流れているが、本人達が怖いので誰も面と向かつては口にしない。

医療魔導の心得もあるため、ハズスよりは他の組織員との関わりも多い。

その他：【拷問塔責任者】ジュリー、【拷問塔準責任者】ドルチエ、【情報局幹部】サズ、【暗殺部隊準幹部】ウォーレン、ラズ、シユタツヘル、エピヌ、クライヴ、アクラス、ルネア【暗殺部隊3級幹部】ディアナ、ドライグ e t c . . .

未登場の人物もありますが、細かい人物像については登場するまでのお楽しみに。

痛み（前書き）

短いですが、重いです。

……最近そんなばっかですか。

痛み

朝もまだ早い時間。レピュスの部屋のドアが叩かれた。

「どうぞ」

珍しく、早く起きていた彼がそう答えると躊躇い勝ちに顔を出したのはイリスだった。

「お早う。ごめんね朝早く」

「ああ……お早う。何かあったのか？ 任務？」

情報局の彼女が朝一で任務を伝えに来たのかと思ったのだが、違った。

「違うの……ええと、その。」

私、これからすぐにここを出て、アルド・ワークスとの戦いが終わるまで戻ってこれないから……。

気を付けて、って言うておきたかったの」

レピュスは少し、意外そうな顔をしてから困ったように笑った。

「大丈夫だって」

「……」

イリスは何やら躊躇っていたが、真っ直ぐにレピュスを見た。

「あのね、お節介かもしれないけど。時々、私、凄く心配になるの。」

どうしてか判らないけど、……目の前にいても、レピュスってどこか遠くにいるような気がして。それで、本当に、どこか遠くに行っちゃうんじゃないか、心配になるの」

レピュスは苦笑して頭をかいた。

「俺は、そんな複雑な人間じゃないって。死ぬ以外で俺がここからいなくなる事なんてないし」

「……自分でも、それ、信じてないでしょ？」

少し厳しい顔をして言うイリスに、ぎくりとした。

「だから、お願いしてもいい？」

「……何？」

「レピュスが自分を信じてなくても、私がレピュスを信じてるから裏切らないでほしいの。」

それだけ、お願い」

思わず、呆然とイリスを見つめてしまった。華やかな、真正正銘の金髪に美しい青い瞳、誰からでも愛されるべき存在であつたのに、愛されなかつた存在。そんな彼女が見付けた、愛する者の正体がレピュスには何となくだが判つた。だが、信じたくなかつた。そんな事があつてはいけない。

「俺は……」

もう、彼女の目を見ることは当分出来そうにない。

「そんな風に思ってもらう資格なんて無いんだ」

何かを再び言いかけたイリスであつたが、苦しそうに微笑んだ。

「ごめんね、余計な事言つて……。」

じゃあ、ほんとに気を付けてね」

「あつ……」

「またね」

逃げるように、イリスは出て行つた。いや、入ってもいなかったのだから出て行つたは適切ではない。入りもせずに、去つていった。彼女は、入れなかつたのだ。

「ダメだ、俺……最低だ」

何を今更という自分もそこにはいる。

これで、正しかったのだ。必要以上に、誰かとの距離を縮めてはいけない。きっと、何らかの形で傷つけてしまうから。イリスを……「カレン」を傷つけたくなかった。ところが、彼女が去っていく姿はとても、痛ましかった。その痛みはレピユスの胸部も酷く侵食している。

「俺が、求めるのは……」

東大陸大業物13工を全て集め、自身の呪いを解く事。それだけだ。それだけでなくてはならない。

決して……多くを求める事は、許されない。多くを求める権利など、「あの人」を殺した時から既に失っていたはずだ。

愛など、求めてはいけない

進む道に愛などありはしない

戦いたくない

「侵入方法は、君達2人に任せる」

アーシャから航空機で半日程の距離。メテロという都市に、アルド本社は建てられている。全国展開している会社ではあるが、主要幹部は必ず仕事からここに戻る。メテロはアーシャとは随分と性格の違う都市であり、高層ビルの類はあまり多くない。その中で、アルド社は一際目を引く高層ビルである。その最上階のオフィスを独占するのが、社長の6代目アルド。本名、シモン・テラフィムは公開されているものの大体が“社長”または“6代目”と呼ぶ。

6代目アルドは、口が裂けても社員は言えないものの容姿の点では実に凡庸。彼の前で今、社長よりも堂々とした様子で話を聞いているヨナの方がトップに見えそうだ。この、中肉中背であり一見普通な6代目アルドであるが彼の秘めたる野心は少しも凡庸ではない。そして、それを実現しうるだけの手腕を持っているのも確かだが、それは上層部の社員……直接的に彼の指示を受ける社員達でなければ知るところではない。5代目の息子であるシモンは、実力ではなく5代目の情けで社長になったのではという噂さえ飛び交う始末であるがシモンはそれには構わないでいる。凡庸と思われておいたほうがトップとしてやりやすい事もしばしばあるし、必要以上の才覚を求められた時にそれに応じる事が出来ないというのも判っていたから、誰もが必要以上を自分に求めないように上手く振る舞っている。

「全くよ、随分さっぱりした司令だね」

ヨナが話かけたのは、さつき共に司令を受けた若い男。ユダである。肉付きの薄い、血色の悪い顔で、青い瞳の色は冷たく、深い。赤毛ともいえる明るい色の髪であるが、その顔の所為でくすんだ色に見え、同時に手入れなどせず伸ばしているだけだから艶などないのも原因であろう。薄い印象の顔立ちは、写真で見たとしたら特に印象も受けないようであるが、実際に対面すると多くの者は異様な感銘を受ける。だが、その感銘は好ましいものではなく寧ろ、不快感に通ずるものだ。標準の背丈で、異常に痩せて、痩けた頬でありながら瞳だけが異常な存在感を放つ、アンバランスさ。それが、彼の精神的なアンバランスさを象徴しているようなのである。

「彼は、自身の才覚を隠したがるきらいがある」

声もまた、澁刺という言葉にはほど遠い陰気なものだ。それほど低くない、寧ろ男性の中では高いと思われる声がまた喋り方との奇妙なアンバランスさを感じさせる。

「というより、最近はどうでもいいんだろうさ。俺達の事なんてよもしかしたら、理想の国家建設も今のところ頭にないのかもな！

父親からかすめ取った若く麗しい愛人……っと正妻だった、に夢中だからな。全く、ル力がいなくて良かったぜ。5代目アルドだから生きてたが、今なら社長の首は無かったな。ははっ」

全部冗談、という風に笑いながら喋るヨナの横顔を黙って見ていたユダは口を開く。

「あなたは今でもル力が好きなのか」

「は？ 俺、そんな趣味じゃねえぞ！」

「はぐらかすな……。そういう話ではない。

あんな風に組織を離れ、今、他組織の重役となって悠々と生きている彼を気に掛けるとは随分と人が好いように思った」

ヨナは顔をしかめたが、肩をすくめた。

「ま、同じ“姉”を持つ“兄弟”としてな」

「……これは唯の興味だが。あなたは、その“姉”の境遇を何とも思わないのか」

「馬鹿言え」

ヨナは、途端に陽気な印象をかなぐり捨て暗ささえその目に宿した。「どうして、平気でいられる？　だがなユダ。俺達あ、社長に逆らえねえ。逆らったら、ルカの二の舞だ。奴は上手いこと生き延びてるが……下手したら、裏社会でしか生存できない俺らが表社会にほっぽりだされてそのまま野垂れ死ぬ事だって考えられる。俺あ現実主義者だからな。逆らっちゃいけねえもんには逆らわん。それに何も、“姉貴”は殺された訳じゃねえ。

よく考えれば、我慢してココに残った方がましだった。別に、面会を禁止される訳でもないから、会いたければ今でも会える。それなのに、……ルカは、求めすぎたんだよ」

「それで結局、何一つ報われなかった？」

ユダの辛辣な言葉にヨナの肩が軽く震えたが、いつも通りの口調に戻って答えた。

「そう。報われないのが、あいつの人生って訳さ。

恐らく、あいつ自身も自覚してんだろ」

ヨナは、ユダと別れたあと、このビルの中階に位置するプライベートルームの中、一つの部屋に入った。

「入るぜ、“姉貴”」

「ヨナ……いらっしゃい」

につこりと、彼を迎えたのは背中までありそうな真っ直ぐで美しいブロンドの髪を持った女性。ほっそりした身体に飾り気の少ない白いワンピースを纏っている。肩に掛けた柔らかそうな薄い紫色のスクarfがとてもよく似合っている。

非常に、美しい女性だ。白磁のような肌、薄い茶色の瞳は繊細さを

越えて儂げであり彼女の美しさに一種の哀愁めいたものを加えている。

この女性は、エリエルザ。ヨナとルカが“姉”と呼ぶ者であり、昨年まで5代目アルドの愛人でって、現在は6代目アルドの正妻である人だ。

「何を悩んでるの？」

「……ちえ、いつまで経っても“姉貴”に隠し事は出来ないってわけか」

ヨナは不服そうに、しかしどこか嬉しそうに言うと言と無遠慮に“姉”の部屋の椅子に座った。一切咎めず、紅茶を淹れ始めたエリエルザの背に語りかける。

「……多分、約束、破る」

「……約束なんて、1つしかしてないわね」

「その1つがどうやら、守れないみてーなんだわ。いつそ、あそこでルカが死んでおけば……」

「ヨナ」

その声は、特に大きい訳でも鋭い訳でもなかったがもう20代も後半になる会社の1級幹部を、叱られた少年のようにしゅんとさせる力を持っていた。

「ごめん」

「……いいわ。」

“兄弟”喧嘩、することになるのね？……私も、だいたい知ってるわ。あの組織にはルカがいるのだね。此の世で、あなたに勝てるのはルカくらいでしょうから。組織のボスはルカに、あなたと戦うように命じるのかしら」

「おいおい、ちょっと大袈裟だけど……。まあな。」

でも、1つ違うと思うぜ」

ヨナはエリエルザの淹れた紅茶を少し飲んでから言う。

「あいつは恐らく、ボスの命令なんて碌に聞かないだろうよ……」。

そんでもって、ボスの方もルカに命令するなんて面倒な事はしないだろ。あいつに命令する事の面倒くさを判ってないようじゃ、組織のボスもそれまで、って感じた。ルカが俺と戦う事になるとしたら、偶然鉢合わせるか、あいつが俺と戦う事を望むかのどちらかだ」

「あなたの方から、戦おうとは思わないの？」

ヨナは、すぐに頷いた。

「俺は、あいつとだけは戦いたくない」

解説2 ダーク・ペガサス（前書き）

ダーク・ペガサスの現時点までの解説です。
酷い名前だなあと、今更思ってます。

その時は凄く良いと思ったんですけどねえ……。

解説2 ダーク・ペガサス

概要

割と新しい組織。宗教を利用して資金を集めている“教主”カリギュラの率いるグループと、ダーク・ペガサスを取り締まる目的で潜入した『秩序無き世界の秩序を守る者』『ファントム』の“ルシエル”のグループ、そしてこの2者に組織の運営を任せてその位置に満足しているだけのガレリアのグループが存在し、3トップに地位の差はない（これは建前で、資金の多くを集め、管理しているカリギュラのグループがやはり大きな権力を握っている）。連立政権、と情報屋ヴィレナは称した。

組織の目標は、東大陸大業物13工を全て揃えて黒の教会の封印を解き、黒龍という刀を手に入れる事であるが、黒龍は彼らの信じているような世界を掌握する力を持つ刀ではなく、相手の記憶を読み取るという能力を持った刀である事が情報屋ヴィレナの証言で“組織”の者は知った。

ルシエルは、黒の教会の矛盾とカリギュラの裏社会の法への違反を指摘し、近い内に“ファントム”として肅正を行う予定である。その為にルシエルは、現在、同盟関係である“組織”に干渉を頼んだ。

組織のルール、上下関係、部署

合計で3つのグループがある。それぞれが協力関係にありながらも、別のグループへの指揮権はないが、そのグループのトップの了解があれば手を貸す場合もある。（ex・カリギュラがルシエルの

部下に命令する事は出来ないが、ルシエルが許可した場合その仕事を行う)

各トップは4～5名の主力を抱えており、その部下達を中心に活動を行う。(ex・カリギュラのグループのケイ、ルシエルのグループのユウ)。カリギュラのグループが最大で、千名近い組員を持つ。その次がルシエルのグループで、最後にガレリアのグループとなる。

最も経済的に優れているのがカリギュラのグループ。ダーク・ペガサスの代名詞でもある、宗教的活動を行っているのはカリギュラとガレリアのみ。カリギュラが、「カルラ教」の教主となっている。ルシエルは宗教的活動には一切関与せず、宗教に関しないところで2つのグループのサポートを行うという形をとりながら監視している。

ルシエルの正体はアレクシル家の女公爵であり、代々「取り締まる者^{トム}」として裏社会の「秩序無き世界の秩序」を乱す者達を取り締まっている。ダーク・ペガサスのカリギュラはその対象となった。

人物

ケイ：初めて、レピュスの前に現れたダーク・ペガサス組織員。紫水を狙い、レピュスを捕らえる為にカレンを人質にとったが、レピュスの策略に乗って紫水を懸けた勝負を行い、敗北。作戦を変えて、組織に潜入して今度は組織ボスの正体を探ろうと試みるも、あっさりとばれて再度捕縛される。しかし、彼らのトップであるカリギュラが行った組織との同盟交渉により、返還された。

東の国の生まれであり、それを隠そうとしない。レピュスとは同国人であるという。祖国を嫌っているらしい。

呪術師であり、それを除いた戦闘能力はあまり高くない。一度、手の内を明かした相手には極端に弱くなる。

カリギユラ：ダーク・ペガサス3トップの1人。情報屋ヴィレナも認める「商才」の持ち主で、宗教を利用して金銭を集める。また、戦っても強いらしい。

ルシエル（ルシエル・アレクシル女公爵）：アレクシル家の当主。まだ少女と呼べる年頃であるが、早くに亡くなった父親の事業を全て受け継ぎ、更なる発展さえさせた。ファントムの仕事の為にダーク・ペガサスに潜入、幹部となってカリギユラ達を見張るが、取り締まる事を決定し現在、「内紛」を計画中。そこへ同盟関係の「組織」が絡むと厄介であるため、腹心ユウの持つ東大陸大業物13工の1つ、白炎を渡すのを条件として不干渉を求め、成立させた。

ユウ：ルシエルの腹心であり、アレクシル家の執事長。東大陸大業物13工の白炎を所有する事から、戦闘能力は高いと思われるが、未知数。公私両面でルシエルを影のように支える。

ケイ、レピュスと同国人である事を明らかにした。

ガレリア：トップの1人であるが、積極性に欠け、発言力とカリスマ性の高いカリギユラに半ば喰われている。

侵入（前書き）

ようやくと、話が動き始めました。

侵入

深夜の零時を回った頃。組織の本部入り口を内部に持つ商社の前に立つ警備員は、組織の者に代えられていた。

「侵入して来るったって、どうするつもりかね」

退屈そうにしながら隣の者に話しかけた男。暗殺部隊の下位組織員である。隣の者も同様。彼らは、ボタン一つでボスへの直通電話を行える携帯を持っており、いざというときはそれで連絡する事になる。

「さあな。俺達を破ったとしても、暗証番号を知らなきゃ入り口のロックさえ開けられず、強行突破したところで警備会社の連中がやって来て面倒な事になる」

「これで引き下がるような事は無いだろうと、仰ってたが……あれ」
1人が目を凝らした。

「どうした」

隣の者も同じ方向を見る。

「何か、光ったような……」

その先には続かなかった。

「おいっ!？」

崩れ落ちた相方を見て、慌てて内部へ連絡しようとした男も……崩れ落ちた。背後には2人の男がいた。1人は銀髪、長身の男……ヨナ。もう1人は、20代くらいと思われるこれまた背の高いスキンヘッドの男。ふてぶてしい笑みを浮かべている。容貌の所為もあって、どこか陽気な印象がある。これが、ヨシユアである。東大陸大業物13工の瑠璃虹を持つ。

「軽いつすねえ、ヨナさん」

「まー、下っ端の下っ端だからな。おい、ユダ。頼んだぜ」

2人の呼ぶ方へやってきたユダは東大陸大業物13工、緑月を抜いた。刀身がスウツと緑色の光をまとう。無言で躊躇いもせず、彼が倒れている内の1人の額に刃を押し当てた。それに力を込める……も、怪しげな緑色の光に包まれた刀身に貫かれた額から血が流れる事はなく、何かを受けたように顔をしかめたのはむしろユダの方だった。

「どうだ、盗めたか？」

ヨナの問いかけにユダは頷いた。

「下っ端の下っ端であろうとも、解錠コードは知らされているらしい」

緑月の用途は3通りある。1つが今、ユダが行ったものである。記憶の搾取。黒龍の力と同じように聞こえるが、大きく違う点がある。黒龍の場合は本人が自然にでも強制的にでも忘れていようと、その記憶を盗み見る事が出来る。これは「見る」だけであって、「見」られた方はその記憶を喪う事はない。しかし緑月は記憶を盗み「見る」のではなく盗み「取る」から、緑月の刃に掛かったものは奪われた記憶を喪う。また、盗み取れる記憶は本人も覚えているものに限られる。彼が上手く扱えなかった頃は、全ての「覚えている記憶」を搾取してしまい相手をいつでも廃人にしていたが今では求める記憶内容のみを搾取する事が出来る。今回は、商社ビルの入り口、それから組織本部入り口のロックを解くコードだけを奪った。ちなみにこれは、東大陸大業物13工のうちどれかを持っている相手には通じない。

もう1つが、過去、ユダ本人が受けたもの。知らずのうちに彼の父親が発動させた緑月の力。使用者の記憶・知識の授与である。これは、その時の緑月使用者の記憶・知識だけでなく緑月に魔力を込められた日からの、「緑月の記憶・知識」。これが3つめに通じるものであるが、3つめというのは「何の変哲もない」戦い。しかし、緑月の2つめの力により過去百年以上、何十、もしかすると何百と

いう持ち主の戦闘経験を有する事になるわけだから、これだけで大抵の相手は、敵わない。更にユダは幼少時からアルド・ワークスにて鍛えられているため、ヨナの言葉を借りると、「馬鹿馬鹿しいほどに強い」のである。

ユダは、何一つ問題なくオートロックの解除コードを入力する。その間、ヨナは携帯で残りの部隊を呼んでいた。集まったのは、総勢700名前後。だいたい4分の一を幹部候補生が占め、4級幹部が3名、5級幹部が4名含まれている。

「じゃ、堂々と侵入するかね」

ヨナは後ろを見て笑うと、ユダがロックを外した為、何の問題もなく開くようになった自動ドアを通して商社ビルに入っていく。それに約700名の大所帯が続く様は、誰かが見たなら目を疑って、もしかしたら問い合わせくらいはしたかもしれないが幸い、ここは住宅地などではなく昼間は賑やかでも夜にはカラッポとなるオフィスビル群の真っ直中。彼らがばらばらに集まった事もあり、この大所帯を目にして腰を抜かした者はいないのだった。

*

ルカは、殆ど反射的にナイフや銃、小型爆弾やその他様々な仕込み武器が入っている上着を羽織ると自室を飛び出した。ナニかが彼の直感に働きかけた。

と、同時に警報が鳴る。

「侵入者有り。数、およそ700。アルド・ワークスと思われる。全員、直ちに迎撃態勢を整えるように」

耳障りな警報音と、耳障りなアナウンスが響き渡る。

途端に、あちこちから人が飛び出してくるのが判る。全てを無視するように廊下を突き進んでいく。

「ルカ先輩」

どうやら、レピュスも彼と同じように一足早く出て来ていたらしい。ルカが建物の外へ出ると鉢合わせた。

「ボスはその後、何て？」

「ルカ先輩には、思うように動いて貰う……と」

ルカは軽く頷いた。

「お前は？」

「ラユン先輩、ジャンニアさんと指揮に加わります。自由行動は作戦もなにも無くなってからと言われています」

ルカは、まだ見えぬ敵が来るはずの方向をじっと見ていた。

地下は広く、侵入されたが攻撃を受けたと同義にはならないのだ。

入り口から、幹部陣のプライベート・ルームのある区画までは数キロ離れている。また、ボスの書斎までとなると更に遠い。

「……俺もしばらく、お前達と様子見する」

「！……判りました」

レピュスは意外に思ったようだったが、すぐに頷いた。

ボスは、ルカに命令を与えるのを無意味だと思い、更に面倒くさいと嫌うから彼に自由行動の権限を与える事が多い。それに、今回は迎え撃つ側であるから作戦もなにもあまりない。これが襲撃ならば、ルカにも多少……いや、かなりの役割が与えられるのだろうが。

だから別に、ルカは他の者達と敢えて戦いを共にしたい訳ではないがそれを厭うわけではない。今回のアルド・ワークスの出方についての予測が立っていない事もあり、勝手に動くのは状況を確認してからにすると決めたのだった。

解説3 アルド・ワークス（前書き）

現時点までのアルド・ワークスの解説です。

この名前にした理由は…… 忘れました（笑）。多分、ノリ。

ヨナ・ルカ・エリエルザのお話しは本編で存分に扱いますゆえ。あと、イザヤに関しても出て来てみてのお楽しみに、と。

解説3 アルド・ワークス

概要

裏社会の会社組織。本社はメテロという都市にある。5代目までは、裏社会組織に人材を派遣するだけの会社であったが6代目に変わってから、新たな国家建設という目標を持って動き始めた。人材の教育に対し、非常に熱心でこだわりを持っていて5歳以上は入団させないという方針を持っている。幼少期の道德観念から、会社色に染め上げる為である。

この方針のため、会社を離れる者は今までいなかったがとある出来事をきっかけに現在“組織”の重役であるルカがアルド・ワークスを離れている。

組織のルール、上下関係、部署

トップは社長、または〱代目（現在は6代目）と呼ばれる。その下に20名の幹部、約350名の幹部候補生、約400名の中級社員、約1500名の下級社員、約500名の事務系社員がいる。総勢がやく2800。全国各地に支部があるものの、殆どが出張時の滞在地として使われるのみで大抵の社員はアルド本社にいる。

社長の命令は絶対であり、逆らった者は殆どの場合問答無用で他の社員達に殺される事となる。それ以外のルールは特に無い。ちなみに、殆どの社員が会社から与えられた名前を公私共に使っている。組織とは違って、物心着く前からその名前を使っていた者ばかりなので違和感を感じる者はいないようだ。

人物

シモン・テラフィム（6代目社長）：5代目の息子。一見、凡庸な人物であるが国家建設の野望を持ち、それを実行に移すため地下組織ごとアーシャを乗っ取るうと考えることから意外と豪胆な人物であると思われる。

ヨナの密かな反発を買っているが、彼とルカが“姉”と呼ぶかつての5代目の愛人エリエルザを正妻に迎えている。

ヨナ：1級幹部。唯一、攻撃用に作られた宝剣、雷電の牙を所有している凄腕の戦士。ルカとは幼なじみのような関係であり、共にアルド社に引き取られた。詳細は不明だが、エリエルザを“姉”と呼び、ヨナは一方的にルカを“兄弟”と呼ぶ。容姿までそっくりなのだが、血のつながりは一切ないようだ。

戦闘狂で、時折、会社に反抗的な一面も見せるが基本的には社長の意には従う現実主義者。お調子者で自由奔放な言動があるもののエリエルザには頭が上がない。

ユダ：1級幹部。東大陸大業物11工の「緑月」を所有している。明るさ、逞しさとは無縁の陰鬱な男であるが戦闘能力はヨナと組織一の座を争う。5歳の時に自分を殺そうとした父親を殺し、緑月を手に入れると自らアルド社に向かった。幹部では最年少。

ヨシユア：3級幹部。東大陸大業物6工の「瑠璃虹」を持つ。同じ大業物使いでも、ユダと正反対の印象を持つ、全体として明るい男。年齢などは余り気にしない性格であり、1級幹部のユダは彼よりも年下だが何も気にせず丁寧に話す。

イザヤ：2級幹部。東大陸大業物10工の「灰骨」を持つ。残忍な手口が有名な女。

エレミア、ダニエル：ロザリアに敗北した5級幹部。

エリエルザ：清楚・高貴な印象の女性。シモンの妻であり、ヨナは“姉”と呼ぶが血のつながりはない。ヨナの“兄弟”であり、彼女の“弟”であるルカの事を今でも心配しておりヨナの“兄弟喧嘩”するという言葉に胸を痛めている。

解説4 その他

? ランカスター家

大貴族と称される家系であり、都会に巨大なビルのような家を建てている。娘にとことん甘い当主は、ミティアが欲しいというものは何でも買い与え、彼女が求めるのであれば高額の報酬金を払って“組織”のボディガードを雇って裏オークションに行かせる事も厭わない。このため、レピュスと2人の同僚はミティアのお守りをする羽目になった。そして更に、その仕事には戦士昇級試験の三の位以上が必要だったため、公の場で戦う事を忌避するレピュスが試験を受ける羽目になった。

ランカスター家の例外とも言える人物が、カレン。現在、“組織”に籍を置いている彼女はランカスター家当主の愛人の娘でありミティアに比べると憐れなほどの扱いを受けていた。レピュスと共にダーク・ペガサスの陰謀に巻き込まれたのをきっかけに家を出た。また、娘の欲しいものには糸目を付けないランカスター家当主はかなり昔に宝剣、虹の雫を娘にプレゼントしていて、それをレピュスと殺し屋ロデオは奪いに侵入した。

? バーフォンハイム家

ランカスター家と肩を並べる、大貴族。しかし、当主の性格は天と地程も違い、高慢さとはかけ離れた人物である。ただ、武器コレクターであって宝剣に御執心。とあるきっかけで恋に落ちた次男のジュナスと殺し屋ロデオ、本名ロザリアの結婚を認める代わりに宝剣、虹の雫を探すように言った。

? リキニウス家

田舎に邸宅を構える、大貴族。リキニウス公爵は、強い戦士を見るのが何よりも好きで、強い戦士を集めるためだけに「戦士昇級試験」を作った。試験はリキニウス公爵邸で行われ、今やこれを依頼人が相手を選ぶ基準ともなるから毎回、猛者が集まる。ランカスター家とは仲がよい。

？ アレクシル家

ダーク・ペガサスの3トップの1人であり、「ファントム」であるルシエル・アレクシル女公爵が現当主。ルシエルは未だ14歳であるが、驚くべき手腕で父親の企業経営の全てを引き継ぎ、成功させてダーク・ペガサスにおいてもカリギュラに喰われないように非常に上手く立ち回っている。裏社会の法を守る者として、カリギュラを危険視しており忠実な執事であり副官のユウと共に内紛の計画を立てている。

その際、ダーク・ペガサスと同盟関係である“組織”に出向き、不干渉の約束を求め、ユウの持つ東大陸大業物の1つと引き替えに締結させた。14歳にして、“組織”のボスに一目置かせる油断の無い聡明な指導者。

その他

？ 殺し屋ロデオ

現在は、殺し屋稼業から足を洗って、「ロザリア」という本名で生きている。昔、組織に属しておりその任務の関係で出会ったローザーク家の次男、ジュナスと恋に落ちて組織を離れる決心をした。組織を離れながらも、単独の殺し屋として闇を動き、バルフォアから息子との結婚の条件として提示された宝剣、虹の雫を探していた。

その過程でレピュスと出会い、しばらくの間、協力関係を結んで彼女は宝剣、レピュスは大業物を探していたが、最近、ついにそれを見付けて手に入れた。

自分の目的は達成したものの、レピュスのお陰で虹の雫を手に入れたという事もあって、まだ刀の情報集めを続けている。あくまで表から、だが。

？情報屋ヴィレナ

ロルカという大都市に住む占い師兼情報屋。占い師稼業の方では、様々な企業のトップや有名人が訪れる人気占い師であり、情報屋稼業の方では裏社会に名を馳せる。月一単位で壁の色を塗り替えたり、ガーゴイルを守り神といって家に置いたり、変人つぶりを発揮する。

組織のボスやルカとは古い付き合いらしい。

彼女の言葉から推測すれば、頭脳強化型の念術を扱えるようで、それも利用して情報の管理をしているようだ。また、世界中の表裏に部下を潜入させて蜘蛛の糸の如く情報網を張り巡らしている。彼女の元には秒単位で最新の情報が届いてくる。

特別な能力

？魔導：書物化された魔法文字を詠唱する事で、様々な現象を引き起こす。炎、雷、氷など自然現象を発現させるものから、体の組織の治癒能力を高めるもの。中には黒魔導と呼ばれる、多くは拷問に使用されるものなど幅広い。扱いは極めて困難であり、何年経っても素質の無い者は初級魔導さえ扱えない。

？呪術：扱えるようになるには呪文と共に、「体験」が必要となる。だから、魔導とは違い、人を殺す、または再起不能にする呪術は存在しない。魔導よりも扱いが比較的容易で、ある程度の素質と経験があれば大抵は実戦レベルまで上達する。

？東方魔術：発現方法は魔導と同じであるが、無から有を作り出す事は出来ず、モノに力を与える術。東大陸大業物13工は全て、東方魔術によって様々な特質を与えられている。修得には極めて時間が掛かる。

？念術：不明な点が多い力。呪文を必要としない魔導と解釈するのが最も近いが個人によって、扱える力は一種類である。殆どの者は一生掛かっても扱えるようにならないからその存在を知る者は非常に少ない。現時点で確認されている使用者は、自らの身体を強化させるロザリア、具体的な事は不明なルカ、ヴィレナ。

戦闘開始

「敵は一斉攻撃を受けるのを防ぐため、散開したようだ。

主力は恐らく、こちらへ真っ直ぐ向かってくる約150。監視塔データによれば、その中の1人の容姿的特徴が1級幹部、ヨナと一致している」

ジャンニアが無線の情報を伝えた。

「幹部が1人って事はないだろうね。刀を所持している者は？」

ラユンの問いかけにジャンニアは頷く。

「確認する」

幾らか言葉を交わした後、

「東ブロックと南西ブロックの集団の先頭にそれぞれ確認された。

様子からすると、指揮をする立場にいるものだそうだ。幹部の可能性が高い。各個撃破に出た方がいいだろう」

と言う。

「判った。レピュスは600名とここに待機、俺が南西に行くからジャンニアは東に」

「南西と東、どっちが多いの？」

ルカが口を挟む。ジャンニアがすかさず

「東」

と応じる。

「なら、ラユンとジャンニアで東に行きな。俺が南西に行く。連れはいらない」

「……では、お任せします」

ラユンはすぐ頷いた。

「なら、人数割を変更。

ここに半数残り、半数が俺とジャンニアに付いてきて。準幹部は事前に決めた通りに別れるように。移動しつつ、他の場所の対策に当たる。

レピュス、この近辺の事は任せていいよね」

「はい」

彼らは素早く3手に別れた。

「敵さんは幾つに別れてるんだ？」

レピュスに、ラズが問いかけた。

「方向としてはさっき、ジャンニアさんが言った3方向だけど……中央の150ではない2つのまとまりが、さっきそれぞれ2手に別れた。背後にも注意を払うように言ってきたくれ」

「了解」

準幹部のラズをレピュスは補佐に任命したのだった。

レピュスは、いつになく不安を感じていた。

ヨナの強さを、よく知っているから。紅夜叉という、あの時には無かった新しい力を手に入れたが、それで補える程、彼我の差は浅くなかったように思えてくる。レピュスの後ろには今、ル力が誰一人として連れて行かなかったから結局1500もの下位から上位までの組織員がいる。普通に考えれば、これだけの人数差があつて、敗北する事は有り得ない。

だが、ヨナは普通ではない。百を超える相手達を1人で相手取ると宣言したル力と恐らく、同種なのだ。彼に恐らく、人数は意味がない……。そこまで考え、レピュスは念には念を入れておく事にした。

「ラズ」

「はいよ」

「お前が三級幹部の3分の一と下級の半分を連れて、ボスのところへ続く通路を封鎖してくれ」

ラズは些か驚いたらしい。

「だって、1500いるんだぜ？」

「……ヨナを止められる奴がここにはいないかもしれない。あれが1人通つたら、もう、終わりだ」

魔導部隊も控えてはいるが、もとより数は少ないし人数を分けて配

置している。魔導による防御――シールドというらしい――は非常に強力だが、絶対的なものではないとノエルに言われた。つまり、それを信頼するわけにはいかない。

「……了解」

ラズはすぐに動き始めた。

「よお、たくさん連れてるなア」

悠然と……そんな雰囲気、ヨナはレピュスに声を掛けた。ここはあくまで地下なので、大規模な攻撃……例えば、爆破は敵だけでなく己の安全にも関わるから、どうしても白兵戦になる。互いに、相手達が見えていたが、だからこそ声が届く距離まで行動を起こさずにいた。

「人数の多さだけが取り柄だからな」

にこりともせずにレピュスは答えた。その目は既にヨナの攻撃に備え、相手の指一本の動きでも見逃すまいとしているようだ。

「そいつあ、あんまりですぜ。レピュスさん」

レピュスの隣に控えている、いかついスキンヘッドの中年男が言った。準幹部のシュタツヘル。見た目通りの年齢である。

「いや、その通りだろう」

ジャンニアよろしく、無表情で無感情的に言い切るのはシュタツヘルよりは若い女。背が高く、筋肉質の身体。既に片手に持っている長い棒が彼女の武器。準幹部のエピヌだ。

「で、どうすんだ？」

ヨナは腕を組み、スマートな長身を見せつけるがごとく軽く胸を反らして立っている。

「お前は俺が止める的な？」

「そうしたくないのは山々だけど」

これがレピユスの本音らしい。

「多分、俺以外だと数秒も止められないからな」

紫水を抜きはなった。ヨナはにっとする。

「待ってたぜ。」

じゃ、お前らー、好き勝手やれ！ 金髪クンが言うにやあ残りはず
コみてえだしなあ」

レピユスの背後の組織員が一斉にいきり立つ。レピユスは敢えて冷静になれとは言わなかった。彼らが頼りにならないと言ったのは自分であるし、結局ヨナ以外は他の者に任せるしかない。

それに、いくら別格的な幹部達に並ばないといっても、この組織の暗殺部隊である。並みの組織の幹部くらいの實力なら一人一人が十分に持っている。恐らく、アルドの幹部でなければ1対3から5くらいまでいけるだろうと思われる。余り心配していなかった……自分がヨナに敵うかどうか、以外は。

「ジャンニア、そっち頼むよ」

ラユニに無言で頷いたジャンニアはまた半分を連れて、北側に抜ける。既にここでは戦いが始まっていたが、実力的にも人数としてもラユニ達が有利であって彼らが見逃したアルドの連中を追撃する余裕が生まれていた。

『あいつがなかなか動かないな』

ラユニの唯一の懸念は、それであった。今やはっきり姿の見える、赤毛といえる明るい茶髪を無造作に伸ばした不健康そうな顔をしたガリガリの男。それが恐らく、1級幹部のユダであろう事がラユニには言われずとも判った。

今までに見たことのないタイプであった。
強いて言えば……そう。

『あいつとレピユス……似てるな』

同じ、大業物使いだからだろうか。とも思ったが、どうやらそれだけではない気がする。

そして、前方から襲いかかってくるアルド社員を2本のナイフで曲芸のように軽々といなし、喉などの急所を一撃で斬り去っているうちに距離が詰まってきて……判った。

血まみれの世界で生きる彼、ラウンでさえおぞましいと表現したくなるような、血の気配がするのだ。

ユダの青い目とレピユスの黒い目の奥にある光は、同種のようにだった。

「ん？ 1人かよ」

どこからともなく……つまり、完全に気配を消したにも拘わらず堂々と真正面に現れるという矛盾した行為をした男をヨシユアは目を細めて見やった。

「この人数差だ。諦めてどいてくんね？ ヨナさんとユダさんに比べると、ちょーっと進行が遅れて困ってんだわ」

つるつるの頭をかきながら言うヨシユアに、ル力は可愛らしく……とさえ言える様子で首を傾げた。

「何で？」

「何でってあんた……てか、俺を誘惑しようとしてんのか？ 無理無理！ 俺、そっちじゃないから！」

「俺もそっちは願い下げ。」

そっじゃなくって。後ろ見てみて。何もしないから」

「は？」

これで振り返ったヨシユアはつくづく人がよろしい。まあ、ル力には元から何か仕掛け始めるつもりもなかった。既に仕掛けていたのだから。

「……あんだ、ルカか」

ヨシユアは振り返って、苦い表情を浮かべた。

彼の背後のアルド社員達は、1人として立ち上がれはしなかった。

「何したよ？」

「忘れた。多分、蹴ったか殴ったか……斬ったかも」

ヨシユアは刀を抜いた。

一気に刀身が瑠璃色の光に染まる。

「1対多数より、判りやすくていいわ」

「馬鹿だね」

ルカ vs ヨシユア

「行くぜ」

「元氣だね」

ヨシユアは、ルカも少し「へえ」と思ったくらいの速度で距離を詰め、瑠璃虹を振るった。間一髪のところでは確実にかわし、カウンタ―としてナイフを投げたルカ。これくらいなら、ヨシユアにとって避ける事は難しくない。そして、最初の特攻が嘘のようにあっさり身を引いた。

……ルカの様子が少し、おかしかった。

「何したの？」

相変わらず、ゆったりとした喋り方にヨシユアの方が苦笑した。

「あんた、危機感ねーの？ 何も見えないはずだぜ」

「うん。真っ暗」

「あのなー。まったく、張り合いねーぜ。」

『くっそ、視力を奪うだと？！ 貴様、どうやってっ！？』くらい、やってくれねーと」

「ごめん、覚えきれなかった。もう1回言って」

「別に無理して言わなくていいよっ！！」

ま、教えてやるよ、あんたの状況」

「別にいい」

「言わせてっ！？」

「手早くね」

何故、視界を不意に奪われた者に仕掛けた側が翻弄されているのだろうか……。

「あんたは瑠璃虹の攻撃は避けたが、ぎりぎりまで引きつけて避けたもんだから光には当たったんだよな。この青い光…… ったって、

見えてねえか。これに当たると瑠璃虹の影響を受ける。でもって、視力が奪われるのさ」

「ふうん」

「あのなあ」

その時、ル力は反射的に身体を捻った。風の音と共に、髪が一房切り落とされた。

ヨシユアは動いていない。

彼が瑠璃虹を振るった時、青い光が刃物のような威力を持って放たれたのだ。

「よく避けたなあ」

敵の事ながら感心しているヨシユア。手まで叩いている。

「あんた、ホントに人間か？」

「そう思ってるんだけどね」

「変な奴だぜ、あんた」

「あんまり褒めないで」

「褒めてねえよっ」

いまいち、ペースが掴めないヨシユアであつた。寧ろ、視力を奪っているくせに逆に相手のペースに巻き込まれ欠けている……。

「やけになつたか？」

「ううん。割と真面目」

ル力は目を閉じていた。見えないのだから開けていても仕方がないのだが、敵前で目を閉じるといふ行為には普通、かなりの抵抗が生まれるはずだ。

「おいでよ」

「けっ、知らないぜ！」

ヨシユアは今度は容赦なく、幾度も剣を振るって幾筋もの光の刃を差し向ける。

「は？」

啞然とした。

ル力は手持ちの短いナイフで余すところ無く光の斬撃を弾いたのだ。怪我一つ無い。そのまま、的確な狙いでナイフを投げた。ヨシユアはかわしたものの、相当に動揺していた。視力を奪った相手が、視覚以外で動きを把握する事が殆ど困難な遠距離攻撃を避けた事、そして当てずっぽうではなく恐らく狙って自分へ攻撃を仕掛けた事……。

更にル力は動き始めた。両脚にある二本の短刀を抜き、ヨシユアとの距離を詰めにかかる。

「何で見えないのに!？」

ヨシユアは目を丸くし、至近距離で瑠璃虹本体を使って短刀を受け止める。ル力の動きは滑らかで、的確で……どうしても目が見えているとしか思えない。

「くそっ」

両者の動きが一旦止まる。肩で息をしているのはヨシユアだった。

「おい、ル力さんよ……参考までに聞いて良いか？ 何で、そうまとともに戦える？」

「……勘？」

「そんなアホなっ!？」

ヨシユアの中で、ル力は人外として登録された。

だが、驚いたりしている時間は、本当に無い。再び、人外の攻撃が始まる。刃渡りは40センチ程度であって、相当に近付かなければならない。長刀である瑠璃虹を相手にするには向いていないと思えるのに……彼はまるで一切の怪我を恐れていないような思いきりの良い戦いぶりだ。

「怖くないのかよ？」

「俺は死なないからね」

「ホントくせえな」

兎に角、このままではいけないと思ったヨシユアは体勢を立て直

す為に、後ろへ跳びずさつて距離を開けた。その動きをしながら、光の刃を叩き込む。その相手をしているルカの背後に、驚嘆すべき速度で回り込んで瑠璃虹を振り下ろした……。

『避けられねえだろ！』

気配も消した。音も立てていない。

それなのに。

「甘い」

「なっ!？」

高い音と共に、瑠璃虹が宙を舞った。そしてヨシユアは右肩、左肩の双方から一気に十字型に袈裟斬りされ、尚かつ2本の傷が交わるところを蹴り飛ばされた。

激痛で意識が遠のくの、1秒と必要なかった……。

「お見事でしたね」

「見てるなら手伝ってくれても良かったのに。あ、視力戻った」
ルカが振り返ったところにいたのは……ノエルだった。

相変わらず、女性と見違ふ艶めかしい笑みを浮かべて立っている。

ヨシユアは最後まで知ることは無かったが、後方で倒れているアルド・ワークス社員達を一掃した事に関して、半分はノエルの功績である。それを裏付けるように、倒れ伏しつつ冷や汗をかいて寝言で

「助けてくれ」

「もう嫌だ」

「いつそ殺してくれ」

などと呻いている。

「半分、助かった」

「全く。ハズ様以外に顎で使われたのは初めてですよ」

ノエルは「やれやれ」と首を振った。可愛らしく（返り血で染まっ

て、可愛らしくもなにもないのだが）首を傾げたルカ。

「不満？」

「無駄に疲れました」

「お姫様抱っこしてあげようか」

「お断りします」

ノエルはぴしゃりと言った。

「ハズス様以外に触れられるなど、不本意ですので」

「そんな事言ってるから、お前と大魔王はゴシップネタになるんだよ」

ノエルは美しく整った細い眉をくいと上げたが追求はしなかった。

……あるいは、ゴシップは事実なのかもしれない。

ルカvsヨシュア（後書き）

色々と眩しい回になりました（笑）。ルカ、ノエルの美貌とヨシュアの頭（爆）。

邂逅

『そろそろ片付く……』

ラウンがそう思った時に事態は動いた。

突然に、ユダが動きはじめた。緑月を抜き放つと、軽くその刀身を振る。一瞬で刀身が鮮やかなのに毒々しい、見る者に恐怖をそれだけで与える緑色の光を帯びた。

「ユダ……さん」

苦しげに味方が彼を見遣った。

「もういいな」

確認というより、言い切りの調子で言ったユダに一同はうなだれた。ラウンは首を傾げなくなる。あの男が戦場に立つと、味方にも何か問題が起こるのか……？

その答はすぐさま現れた。

一斉に退いたアルド社員の隙間を縫うように、一撃で確実に組織員の命を奪い、何人に囲まれようと芸術的にさえ見える動きで相手を断ち切る。

彼が戦えば、他の者が存在意義を失うというわけだ。

「さがれ」

ユダは短く、部下に命じた。

「この先は来ても仕方ない」

余りに静かな存在否定にアルド社員達はうなだれ、ラウンは一抹の驚きを覚えた。

「さて、どうしようかな」

ラウンはこっそり舌を出した。恐らく、相手の方が自分より強い。まだ、準幹部が3人無傷で後ろにいるが……束になって掛かっても効果は無さそうだ。

「まずウォーレン」

ラウンは隣に立っている小柄な青年を見た。この2人が並んでも迫力は微塵もない事は言うまでもない。

「レピュスに現状と、ボスのところへ繋がる通路を本格的に封鎖するようにという事を伝えて。それと、赤毛の大業物使いがそっちに行く、ごめんって」

「判りました」

ウォーレンは一切の質問を挟まず頷いた。彼も、全く同じ事が必要だし、起こりうると考えていたものだった。

「で、ルネアとドライグは残ってる部下をまとめて、大業物使い以外を片付けて。俺がああ赤毛をまあ、数分止めとくから」

「えっ、ラウンさんが敵わないんですか!？」

驚いたような声を上げた準幹部ルネアは、まだ少女と呼べる年頃である。オレンジ色に近い金の短髪に囲まれた顔にはそばかすが目立つ。どちらかというと可愛い顔つきでまたしても小柄な人物。

「うん。だから、手を出さないこと」

「確かにやばそうな奴ですね」

顎に手を当てて赤毛の大業物使いを見やった男はこの場で唯一ともいえる、戦闘向きの容姿を持つドライグ。背が高く、筋肉で引き締まった身体を持つ中年の男で、浅黒い肌。黒に近い髪色は灰掛かり始めているようだ。

「じゃあ、死なないように」

ラウンの消極的な言葉を受けて3人は動き始めた。

「まだお前、俺に勝てそうにないな」

ヨナは雷電の牙を振り上げた。

すっかり痺れた腕で受けきれるか、自信が無いもののレピュスも紅夜叉を上げ……た時。

「来ちまった」

「!？」

ヨナの頭が何かを避けたように素早く動いた……そして、レピュスも視認できた。

「ルカ先輩……」

どうやら彼は、ナイフを投げたらしい。地面にそれが突き刺さっている。無感情に歩み寄ってきたルカはレピュスを見た。

「ラユンのところ、多分、ユダに突破された。そっち追って」

「……はい」

そこへヨナが割り込む。

「おいおい、水差すかよ!」

その不満そうな主張に、ルカは彼とレピュスの間に滑り込む事で応えた。走り去っていくレピュス。

「……チッ。」

「しゃあねえ。“兄弟喧嘩”でもするか」

「そうだね」

ラユンに先程、無線で確認したところユダはボスのところへ向か

っているようだ。ラyunは怪我が重く、動けないらしい。

ラyunとレピユスの実力差は、あまりない。最近、レピユスの方が少し強いと思われるくらい。そのラyunをあっさり突破した者を止めるとなると、やはり紅夜叉では駄目だろう。

文字通り、生命を使わなければ……。

移動中に、少し体力が回復してきた。ヨナの豪快な攻撃で痛んだ腕も、使い物になるだろう。

だんだんレピユスの目には、倒れ伏す組織員が映るようになってきた。ボスの元への通路封鎖に駆り出された組織員達が軒並みやられているらしい。

ラyunのいたエリアからボスの書斎へと続く通路に躍り出た。

ちょうどそこに、赤毛の男がいた。

「紫水に紅夜叉……レピユス」

情報はある程度、知れているらしい。その男は冷たい、青の瞳でレピユスを見た。

「お前がユダか」

「ああ」

不思議なほど、恐怖という嫌悪感を抱かせる青い瞳でユダは既に抜刀されている紫水に注目しながら、彼も刀を抜いた。

一言も発さず、2人は同時に斬り合いを開始した。

レピュスVSユダ

ユダの刀の扱いは驚くほど巧みだった。最小限の無駄のない動きで、決して隙を見せない。レピュスの紫水を時に緑月で止め、とんでもない反応能力で身を捻って避け、攻撃を受けない。しかし防戦一方ではなく、防御をしつつ相手の急所を的確に狙う技術も持つ。

高い音を立て、一旦、刀同士がぶつかって止まった。どちらも、刃を引いて反撃に転じるタイミングを掴めずそのまま固まる。先に決めたのはレピュスで、彼は半ば力任せに緑月を跳ね上げると大きく距離を空けた。

身長も体格もあまりかわらないが、どうやら力はレピュスの方が強い。スピードは互角。しかし、ユダはまるで何十年も戦ってきたかのように戦闘の経験的能力が高い。

全体としてアンバランスな力である。

それも、自壊してしまいそうな不完全ではなく……誰構わず傷つけてしまうような。

初めて対面したところで、じわじわとレピュスの内を侵食する感情……。それは紛れもない恐怖。

まるで、鏡を見ているようで、そう思ったところで、更に身震いしそうになった。この男と自分は……。

「同じらしいな。俺とお前は」

ユダが口にしたから更に一步、退がってしまった。

「違う……俺は……」

最後にいつ、ここまで動揺した？

ユダの無表情と無感情が恐ろしい。青い目の冷たさに、背筋が凍る。
『厭だ、……これ以上……！』

この青い目にさらされていたくない。

すぐに、全てを見すかすような光を消したい。

その衝動がレピュスから慎重さを一瞬にして奪った。

攻撃特化の第三型 - 石の大刀に紫水を変化させ、叩きつける。

自分にそれを受けきる腕力がない事が判っているユダは大きく退いて避けると、その上でカウンターを狙う……が。

見た目に惑わされ、再び振り上げるのに掛かる時間を長く見積もり過ぎた。第三型の重量による負荷を持ち主が受ける事はないのである。レピュスは第一型（特色のない通常の型）の紫水を扱う時と同じ様子でユダを迎え撃ち、緑月と紫水がまともにぶつかりユダは刀ごと飛ばされた。空中で無防備なユダを追うレピュス。大振りや遠慮なく紫水を叩きつけた。驚いた事にユダは空中で身を捻り、ガードしたが右腕は - 折れたはずである。それなのに、今度はレピュスが不意打ちを喰らった。痛みに顔をしかめる事もなくユダが左腕で緑月を下から上へと振るい、狙いはズレたもののレピュスの左肩を切り裂いた。

レピュスの驚きは2つある。1つは、ユダが両手効きであったという事。それはまだいい。

「……何で」

あの右腕は何ともないのだ。

「腕を折ったと、思ったか？」

何が起こったか理解出来ずにいるレピュスに淡々とユダは言った。そして、レピュスはユダの近くに転がっていたものに気づいた。白いくすんだ色の……骨で出来たような色の鞘だ。当然、緑月の。

ユダはあの体勢で、しかも瞬間的な動きの中で鞘を腰から引き抜いて盾にするという曲芸をやつてのけた。刀を持ち替えたなら、恐らくは間に合わなかった。そうでなくとも、鞘がそうなっているように折れていた可能性が大きい。そこまでの判断もあの一瞬でしていた事となる。考えて、その場で思いついて間に合う事ではない。まるで、既に同じ展開を経験していたとも思いたくなる。

「何で…」

繰り返してしまった。

「緑月が知っていたただけだ」

丁寧とは断じて言えぬ説明だが、レピュスは以前聞いたユダの…緑月の話を思い出した。

緑月は、記憶を伝えるらしい。とすると彼を緑月で傷つけようとした父親の記憶なのか。

だが、途中で断絶した一人の人生とまだ20代を抜けてはいないであろう一人の人生を足してもあれだけの経験を得るのは不可能。

「お前、一体、何人の記憶を…？」

「さあな。」

今まで緑月に触れた者の数だけ」

また感じた恐ろしさ。それは、違和感の正体。

ユダは若いといえる年齢で、人生を幾度も経験しているようなものなのだ。しかも、緑月に関わった者の人生。東大陸大業物13工を手にした者が平和な人生を送ったという噂は聞いたこともない。

「そんな顔をしているが、俺とお前は殆ど変わらないはずだ。

お前も殺しから、人生が始まったんだろ」

ユダの口調は機械的で素っ気ない。表情の変化にも乏しい。

だが、レピュスは声を荒げた。

「何が判る！ 俺とお前は違うつ」

すると、相手の声は、表情などは変わらないものの大層意外という

心情が込められて響いた。

「どこが？」

「それは……」

何も言い返せず、手が無意味に震える。それらを紛らわすにはきつく紫水を握りしめるしか無かった。手の平に血が滲む程強く握り、無理矢理に頭を働かせる。

ユダには数え切れない「記憶」という武器がある。戦闘経験の「記憶」は何にも増す武器である。しかし……。

『あいつは、第三型の特徴を知らなかった。つまり』

紫水使いと戦った「記憶」を持つてはいない。

真っ向からぶつかって、勝ち目はない。

次に仕掛けるなら……。

『四、だ』

紫水の万能性を知らないならば、幻術への対処が出来ないはず。呪術士のケイも騙した第四型の幻術。

ただし、ユダは「記憶」に頼っているだけの剣士ではない。「記憶」を応用し、最良の対応をする冷静な頭脳を持つ。恐らく、効くのは一度だ。最良のタイミングを計らねばならない。

紫水の型が変わった。銀色の直刃が鈍く光る。最初のもの、第一型。ただしここから既に、第四型の幻術である。

地を蹴り、あつという間に距離を縮めると至近から刃を伸ばす。緑月で巧に受け流すユダ。互いの刃が滑り合い、時に火花を上げて跳ねると重い一撃を狙って振り下ろされる。絶え間無い一連の動きとなり、レピュスもユダも呼吸を忘れて、一種の華麗さすらもって命懸けの舞いを行う。

均衡が破れた。

一瞬、バランスを崩したレピュスの心臓に緑月が突き刺さる。

しかし、ユダでさえ低い驚きの声を上げた。

レピュスの姿が消えた。

そして

「！」

後ろから繰り出された一撃をユダは辛うじて止めたが、足がついていかず後ろにのけ反った。

そこへ、紫色の光を放つ刃が襲い掛かった。避ける術なく、何とか緑月を持ち上げたユダであるが……。

高い金属音が上がり、緑月は真つ二つになって弾け飛んだ。

レピュスの最終手段、第五型である。刃は、今までよりずっと強烈な紫色の光を放つ。鐔は六芒星の形となり、柄の尖端は蛇の頭の形に。柄そのものには鱗のような紋様が現れる。刀の切れ味は他の型の比べものにならない。試した事はないが、恐らくダイヤでも斬れる。

禍々しい殺気に溢れた光はユダではなくレピュスの右手に流れ、本人も鋭い痛みを感じた。心臓が内側から焼かれるような、命削られる感覚。

無防備になったユダを切り裂いた時にレピュスが上げた声は、力を発するための気合いの声なのか痛みによる悲鳴なのか自分でも判断がつかなかった。

焼け付くような痛みを右腕全てに感じる。

思わず、見た自分の腕は……もう手の甲にまで青紫の痣のような、入れ墨のような呪いの紋様が広がっていた。もうすぐ、蛇の尾までが完成する。

レピュスとユダの戦いが始まった頃、ルカとヨナは何者もついてはいけぬ戦いを繰り広げていた。宝剣、雷電の牙を自在に操るヨナ。その動きはまるで豹のようなしなやかさである。ルカの方は、武器に拘らないものだが長剣を使わなければやはりこの相手は出来ないようだった。

「なあルカ」

「……なに」

2人は、不思議なほどぴつたりと同じタイミングで攻撃を中断した。
「お前、何やってんだよ」

ヨナは彼らしくもない、痛切な声で顔をしかめた。今にも泣き出しそうに、ルカを見る。あっさりとした声で、ルカはヨナの方を見ずに答えた。

「好きにやってる」

「嘘つくなっ！」

ルカは俯いたまま動かない。

「自分を造って、着飾って、何もかもを誤魔化してるだけだろうが。自分が何を本当は考えてるのか、全部、自分に誤魔化してるんだろ

!？」

「……」

「答えろよ。おい。」

お前は昔っからそうだよな！ 無口で無愛想で、思ってる事の半分も言わねえんだ！」

ヨナは齒を噛み締めて、きつくル力を睨む。肩が震えて唇が歪んでいる。

やっと、顔を上げたル力は小さく問いかけた。

「姉さん、元気？」

まるで子供のような優しい声と、それに合わぬ哀しみに充ちた表情。

それに込められた全てを理解したヨナは……涙を流した。

「んなわけ、あるかよ。」

あの日から……俺にだって、本当に幸せそうに笑ってくれた事なんてねえよ」

あの日……。

それは、ルカが15になる年の一日。彼の、そしてヨナ、エリエルザの心が“不完全”になった日の事である。

名の無き少年達（前書き）

昔話編？

名の無き少年達

その孤児院は、特殊であつた。運営しているのは国ではなく、会社……アルド・ワークス。そして、孤児院の子供は5歳になるまで名前をつけられる事がない。会社の調査団が目付け、会社へと連れて行った子供には5歳になつていなくとも、アルド・ワークス社から名前が授けられる。それ以外は、5歳になると孤児院の職員によつて名付けられてそのまま成長する。

今日は孤児院に調査団が来ていた。

「2人とも、いらつしゃい」

中年の、優しいおばさん、といった印象の職員が部屋の隅で眠っていた子供とその隣で、眠っている子供を起こそうと躍起になっている子供の2人を呼んだ。

「せんせーが呼んでるぞ！ 起きろよ！」

「あらあら、また寝てるの？ ほら、アルド・ワークスの人が来るんだから。しゃんとする！」

目を覚ました子供は、じつと職員を見た。

「せんせー達と、ばいばい？」

子供は賢い……特に、この孤児院の子供達は。そう、彼女は思うのだ。

この、天使のように可愛らしい顔をした名のない男の子もそう。その子とそっくりでいながら血のつながりは一切無いという不思議な関係の男の子もそう……。噛んで含めるような説明などいらず、すぐに理解してしまう。

「多分、そうね」

「わかったー」

声を揃えて返事する2人には、あまり表情の変化が見られない。ここで育つ子供は大抵、そうなる。名前を呼ばれる事も無いのだから当たり前だろう。

「この2人ですか」

「双子？」

黒いスーツをきっちりと着た、2人の男。アルド・ワークスの事務社員。

「いえ、そういう事では無いようです。性格も全く違いますし」
扱いについての苦勞を少しでも減らす為に会社へ引き渡す子供の性格などを伝えるのも孤児院の職員の務めだ。

「この子は、とても大人しいんです。人見知りもありますけど……でも、良い子には変わりませんわ。対応に困る事はないと思います」
先に背中を押されて前に出た男の子。

黒い髪で、目は青い。目の色は、この国でよくある色だし、黒髪も少ないが奇妙というほどでもない。

「こつちの子は逆ですね。明るくて、私達にもよく話しかけてくれました。人なつっこいので、すぐ会社の人にも慣れるはずです」

「2人は一緒にしておいたほうが良いでしょうか？」

男の質問に答えたのは、職員ではなく『明るい』と紹介された男の子だった。

「だって、俺達、キョーダイなんだから！」

『大人しい』と紹介された方はというと、きゅつと『明るい』男の子のそでを握っている。この2人の姿があまりにも……白い羽が生えていないのが不思議なほどに愛らしい為、普通は無感情で職務にあたる2人の社員も思わず微笑んで、あまり別々にならないように気を付けると約束した。

会社に連れてこられた2人は、社員の低年齢部へと連れてこられた。ここには、10歳以下の子供が生活しており、世話係が何名か配属されている。世話係の殆どが引退した事務社員である。

今日やってきた2人には共有の部屋が与えられて、世話係は初老の女性に決まった。

「ねーねー」

『明るい』少年は、子供用スーツに着替えさせられたあと、なつっこく世話係に話しかけた。

「俺達、名前、もらえるんでしょ？」

「そうよ。誰が決めるかは判らないけど……低年齢部の中での年上、9歳や10歳の子供がつけるのが多いわね」

この会社の教育は、完全に向き・不向きによって分けられていく。始めの内は、すべからく「授業」を経験するが7歳にもなると戦闘員になる者と事務員になる者にきっぱり分けられる。時折、入れ替わる場合があるものの大抵はそのままだ。

戦闘員になる予定となった者には、早くも基礎的な戦闘術、暗殺術などが仕込まれ、事務員になる者には大量の知識が詰め込まれる。「名付け」を行うのは、その事務員グループの子供なので、箸にも棒にもかからない名前を付けられる羽目になった者は今のところいない。

その日の夜。

「だから寝るなって！ 今日、名前付けてもらえるんだぞ？」

「うん……」

本当は『明るい』男の子も、起きているのがしんどかったが、名前

をもらえるという喜びで我慢が出来ていた。楽しみであった。

ノックの音がした。

「はい」

『明るい』男の子がドアにぱたぱたと駆け寄って開ける……と。

「こんばんは」

姿を見せたのは、綺麗な女の子だった。2人よりも年上なのは間違いない。

「エリエルザっていうの」

珍しく、『大人しい』男の子も、エリエルザの優しい空気に引かれるようにふらふらと近付いた。

「こんばんは」

2人で挨拶した子供を、笑顔で見た。

「ほんとにそっくり！ 可愛いなあ」

エリエルザは部屋の中に入って、ベッドに座ると子供2人を手招きした。ちょこんと、エリエルザの両側に座った2人。選ぶ余地がなくて、隣同士に座らなかつたのはこれが初めてだった。

「名前、だいたい決めてたんだけど」

ふふ、と優しく笑う。

「何？ 何？」

「君は、ヨナ」

まず『明るい』男の子の頭を撫でて言った。

「ヨ……ナ？」

「そう、ヨナ。

それで」

今度は、少し緊張しているのか不安そうに自分をみつめている『大人しい』男の子を見た。

「君は、ルカ」

同じように頭を撫でてやる。

「ルカ？」

「うん、ルカ。

よろしくね」

ヨナは大きな声でよろしくと返し、ルカは照れたようにエリエルザに抱きついた。

この日、ルカとヨナはエリエルザに名前をもらった。

名の無き少年達（後書き）

小ルカと小ヨナが可愛くって仕方ないです（まさに親馬鹿）

幸せだった頃（前書き）

昔話編？。

過去形なのがやらしいですね……

幸せだった頃

まだ5歳になったばかりの2人にはまず、読み書きの訓練が始められた。ヨナはすぐに飽きるし、ルカはすぐに寝てしまうし、揃って教師泣かせであった。

困り果てた教員が、2人が驚くほどに懐いているらしいエリエルザに相談したところ、彼女が面倒を見るのが1番良さそうだったということになった。エリエルザが教えるようになった途端、優等生になったヨナとルカは判りやすいというか……。

また、エリエルザは毎晩、2人の可愛い生徒に本を読んでやっていた。

「まーたルカ寝てらあ」

ヨナは、エリエルザにもたれて寝息を立てるルカを見た。

「折角、姉さんが本読んでるのにさ」

だが、エリエルザの方は悪くも何とも思っていない。優しく笑うと本を閉じて、天使の様な寝顔のルカをベッドの中に入れてやった。

ヨナもルカも、エリエルザを自然に「姉さん」と呼んでいるのだが、本当に彼女は2人の姉の様である。

「もう遅いから、ヨナも寝た方がいいね」

「じゃあさ、寝るまでいて」

可愛いおねだりに、思わずエリエルザはヨナを抱きしめた。

「いいよ。おやすみ」

「おやすみ、姉さん」

寝るまでいてと言いながら、ヨナは1分もせずに寝付いてしまった。エリエルザは微笑んで、電気を消した。

「ヨナ、ルカ、良い夢を」

*

ルカとヨナが7歳になり、エリエルザが11歳になった年。低年齢部を離れてからも、エリエルザはヒマさえできれば可愛い2人の“弟”のところに会いに行っていた。

また、2人の少年は揃って、戦闘員向けの教育を受ける事に決められた。

アルド社の子供達にも誕生日はある。孤児院に引き取られた日であったり、正確な誕生日であったりと様々であるが。その日はエリエルザの誕生日であった。

2人の“弟”は、年に数度しかもらえない外出許可をもらって散々困った挙げ句に花を買ってきた。

「姉さんは薔薇が好きだよ！ こっちの方が喜ぶね」

ヨナがそう言えば

「姉さんは薔薇じゃなくて百合」

と主張するルカ。

真っ赤な花束と真っ白な花束を持っている2人はこのまま結婚式にでも列席させたいくらいに可愛い。

そして、2人はエリエルザに花を手渡した。エリエルザがどっちを先に受け取るかで、1時間以上の言い合いをしていたのだが……。

「ありがとうっ！」

どちらの予想も大ハズレで、“姉”は2つの花束を持ち主ごと一気に抱きしめた。

驚いた少年2人は結局、照れ笑いを交わし合って和解したのだった。

実際、エリエルザに薔薇と百合のどちらが似合うかは非常に難しい問題だった。既に腰に届きそうな長くて艶やかなブロンズの髪を持つ大人っぽい少女。薔薇のように、はっと人目を引く美貌であり百合のような高潔さも持ち合わせている。この3人が笑い合っている光景は、5種類の美しい花があるようなものだった。

＊

ルカとヨナは10歳にもなると、教官達にも「何十、否、何百年に1人の逸材が2人揃った」と言わしめる才能を見せ始めた。ルカは武道、剣術、その他様々な武器の扱いどれも欠ける事なく標準を遙かに超えた成績を収め、ヨナの方はバランスもありつつ剣術の才能が傑出していた。

そんな2人はライバルというか、兎に角2人でないと落ち着かない……本物の双子のようにいつでも共に訓練をしていたから他の者が追いつく余地が無かったというのも言える。

この2年後に再び、驚くような才能を持った5歳児が“自ら”入社してきた為に社員達は寧ろ不安になったという話は、詳しく触れずにおく。

「なールカあ」

休憩中、ヨナはふと言った。現在、剣の訓練をしていた。両者ともへとへとである。

「何？」

「俺達つてさ。どんなに強くなっても、自分の為には戦えないんだろ？ この前聞いた、会社のシステムに従うとさあ」

ルカはタオルで丁寧に顔を拭きながら身を起こした。

「ヨナは嫌？」

「嫌……つてのじゃねえけどさ」

ヨナの方は雑に腕で汗を拭って同じく身を起こす。

「俺達は、こっから出されたら居場所無いしな。逆らおうなんて考えねえさ。」

「だけど、変な感じしねえ？ 自分じゃなくて、誰かの都合で身体鍛えて、強くなるんだぜ？」

「うん……」

ル力があまり喋らないのはいつもの事だが、今日は、何となく相手の意見が聞きたくなったヨナは問いかける。

「お前はどうよ、ル力？」

「俺……姉さんの為がいい」

ぽっかーんとヨナは口を開けた。

当然、ヨナもル力に負けぬ程エリエルザが大好きである。もう少し、彼らが幼かったら……そして普通の環境で育っていたらどちらがエリエルザと将来結婚するか、で数時間もめるくらいはしていただろう。しかし、会社の方針にまでエリエルザをねじ込むというのは驚きだった。ヨナはこのころから既に、現実主義だったのかも知れない。

「そりゃ、そりゃあ……俺だってその方がいいけどよ。顔もよく覚えられてない社長なんかの為じゃなくてさ」

入社した時に、社長とは一度会ったきりだ。

「だけど、俺達、社員だぜ？」

10歳の子供がこんな事を言うには違和感があるが、事実である。それに対し、ル力はぽつりと言った。

「でも俺、姉さんの為なら、社長だって殺すと思う」

後にヨナは、余りにも苦々しい体験の中でこの、ルカの言葉を思い出す事となる……。

*

13歳になった、ルカとヨナ。もはや、幹部達にも並ぶ能力を示し始めた2人はすぐに外での仕事に出されるようになった。

当然、人を殺すのは生まれて初めてである。

ヨナは、まだ平気であった。現実主義的なヨナは大人びていると思われる事が多かったが……寧ろ、想像力や感情は年相応である。任務の成功に、寧ろ浮き足立っていた。

「……でさ、あの時、俺凄かっただろ？」

「……うん」

「お前もやっぱ凄いやルカ！俺達ならさ、あっという間に幹部だぜ？そしたらさあ……ルカ？」

ヨナは首を傾げた。

相棒が俯いて、動かない。

「怪我してたのか？」

「うつん無傷」

「病気か？」

「元氣」

「じゃあどうしたよ？」

「気持ち悪い」

本当に困ってしまったヨナは、ルカを1人にするのも心配だったが彼をそのまま待たせてエリエルザを呼びに行った。

ヨナが事情を話すと、エリエルザはどうやら、すぐに理解したよう

だった。逆に

「ヨナは大丈夫なんだね。……まあ、良かった」
と言われ、何が何やらだった。

「ヨナ、ちよつと外で待ってて」

「……判った」

少し拗ねたように言ったが、素直に従うヨナ。17歳になって、もはや美しい「女性」であるエリエルザにはますます逆らえなくなってきた。

「ルカ？」

エリエルザの呼びかけに、ルカはやつと顔を上げた。目が少し腫れていた。

「大丈夫……じゃないね」

「姉さん」

「なあに？」

「俺、弱い」

既に、エリエルザより背が高いルカだが膝を抱えて座り込んでいるから相当に小さく見える。

隣に腰掛けたエリエルザはそつと、肩に手を回してあげた。

「殺すのが、怖かった」

「うん」

「仕事なのに、凄く嫌だった」

「……うん」

「前まで、殺すのなんて、全然平気だと思ってた」

「……」

「だけど、気持ち悪くなって、こっちまで、死んじやいそうで……怖くて」

エリエルザは優しく言った。

「ル力は優しい子だものね」

「優しくない」

「何で？」

ル力はやつとエリエルザを見る。

「だって、人殺しだ」

「でも、嫌なんでしょう？　そういう人はね、優しいの。弱いんじゃないわ」

「でもヨナは……平気そうだった」

エリエルザはくすつと笑った。不思議そうにするル力。

「ヨナはね、まだ子供なの。大人みたいな事ばかり言ってるけど、ル力も少し笑った。

「頭は」

と、ル力の頭を撫でる。

「ヨナの方が大人かもしれないけど、ここは」

とんとん、と胸を叩いた。

「ル力の方が大人なのよ。ちつとも、恥ずかしい事じゃない。悪い事じゃない。

ただ、やめてしまいなさいとは言えないの」

切なげに言うエリエルザに、ル力は頷く。

「この会社は……戦わない戦闘員を助けてはくれないから、でしょう？」

「そう。

それだけじゃないの」

ル力は首を傾げた。

「私は、とっても、駄目な人間だから」

「何言ってるの！」

ル力は驚きと、少々 of 怒りさえ込めて言った。エリエルザを侮辱される事には耐えられないし、彼女が自分を悪く言うのさえ嫌いなのだ。

エリエルザは、苦笑した。

「聞いて。」

だからね、私は、あなたがきつとこれから殺す事になる何百、何千という人達よりも」

「……」

「あなた、ルカとそれからヨナの方がずっと、ずっと大事なの。」

殺さなければ、殺されてしまうなら……殺して、それでも生きて欲しい」

「……嫌いにならない？」

エリエルザはルカの正面に回って、抱きしめてやった。

「世界があなたとヨナの敵になっても、私だけが一番の味方だからね。大好きだよ。ずっと、ね」

「ありがとう……」

ルカが泣きやむまで、エリエルザはずっとそうしてやっていた。姉というよりも、母親のように……ずっと「大好き」と言いながら。

崩壊（前書き）

昔話？。

ルカとヨナには可哀想な事してます。ごめんね

崩壊

「ずっとここにいたの？」

エリエルザが驚いて、笑うとヨナは唇を尖らせた。

「ここ、俺の部屋でもあるし」

まだ、ルカとヨナの部屋は共用なのだ。

「ごめん、ごめん」

「別にいいけどさ。……寒かったけどね」

現在、秋も終わりに差し掛かった頃である。

「で、ルカは？」

「もう大丈夫……だと思う。あんまり、仕事の話はしないであげて」

「？ まあ、そうするよ。姉貴はいつでも正しいからな」

「随分、高く買われちゃってる」

少し笑ってからエリエルザは戻って行った。

「ルカ？ 大丈夫なのかよ」

「うん」

応えた相方を見て、ヨナは苦笑した。

「ガキかつつの」

夜の7時、夕食さえ食べていないというのにルカは毛布にくるまっていた。

「ま、寝れるなら心配ないわな。お前は」

「そうかな」

「そうだろ」

「うん。おやすみヨナ」

「おーう、寝ろ、寝ろ。寝坊介め」

ヨナの言い方には確かに愛情がこもっていた。

*

それから1年。ルカとヨナは14歳。仕事に慣れた事もあるが、ルカもヨナと同じように仕事前も仕事後もけろりとしているようになった。ただ、更に無口になったようにヨナとエリエルザには思えた。他の誰も気付かないようなちよつとした変化だったが。

「なールカ、姉貴んとこにメシ食いに行こうぜ」

「うん」

泊まり込みで仕事に行く事が多くなった2人は、本社にいる時は必ずエリエルザと食事をとっていた。それが、彼らの人生最大の楽しみといっても過言でない。

「いらつしやい」

エリエルザはいつでも笑顔で迎えてくれる。そんな笑顔を見て、ヨナは肩をすくめる。

「あーあ、俺は心配だぜ」

「何の事？」

「姉貴がこんな美人になっちまってさ！」

「姉さんは昔から美人」

と、ルカ。

「いや、でもそれにも限度があつたら？ 今は留まる所が無いし」

「何よそれ」

軽やかに笑う彼女は、確かに美しい。

本当に、女神のようだった。すらりとした優美なシルエット、春の陽射しを思わせるような眩しいながら優しい微笑み。瞳の色は、空を切り取ったようである。動く度にさらさらと揺れる髪はブロンズ。そのどれか一つでも欠けていたら全く違っていたのではと思われるほど、彼女が持つ全てのものは完全な調和を果たしている。

「姉貴、来年19だろ？ この国、19から結婚できるだろ？」

姉貴がどこぞの馬の骨に捕まったらと思うと、俺は心配でよお！」

「その時は俺がこつそり消しておく」

エリエルザが食事の支度が整うまでに、と淹れてくれた紅茶を大人しく飲んでいたルカがさっぱりと言った。エリエルザの瞳が空ならルカの瞳は海。どこか冷たく、そして深い。ヨナは黒い髪を伸ばしているが、ルカは短くしている。こうでないと見分けがつかないと同僚に文句を言われたという事もあるし、ルカはアルド社員にしては珍しく、ファッションが好き。ころころと髪型を変えている。

「じゃあ、私は結婚出来ないじゃない！」

エリエルザが笑うと、ヨナがにやりとした。

「俺なんかどう？」

「だめ」

「ルカ、何でお前が答えるのっ!？」

「うーん、4つも年下はなあ」

「40年上よりはいいだろ？」

「何それ！」

他愛もない話だった。

この話題を振ったヨナにも、「馬の骨」を消すと宣言したルカにも当然、深い考えなどなかった……。

*

エリエルザの、19歳の誕生日であった。その日、ルカとヨナはいつもの倍速で仕事を片付けて同行した事情を知らない同僚に感謝されたが、その感謝に答えるヒマもなく即刻、本社に戻る。

「今、何時だルカ？」

「午後6時半」

「今日、間に合わなかったらアホだろ、俺ら！」

「うん」

7時にエリエルザと待ち合わせて、折角得た外出許可を使って何週間か掛けて探したエリエルザが氣に入るであろうレストランで食事

する。かなり高い店だが……15歳で既に正社員、しかも幹部クラスの仕事を行なっている2人には問題ない。

会社に着く。10分前。大慌てでルカとヨナは血などで汚れたスーツを清潔なものに変える。

「ルカ、髪整えてる場合じゃねえよっ！」

「30秒」

「だあっ」

確かに30秒で首の後ろまでの髪を櫛で整えたルカ。スタートダッシュの体制を取っていたヨナと同時に部屋を飛び出す。正社員の部屋はオートロックであるから振り返りもせずに、駆け抜ける。

「姉貴っ！」

「姉さん！」

2人でエリエルザの部屋に飛び込む。ちなみに、この3人は互いに合鍵を持っている。

「ルカ、ヨナ……」

エリエルザの微笑みは、困惑していた。その理由は、考えるまでもなかった。

そこには、数人の事務系職員の幹部がいた。

「お前ら、姉貴に何か用かよ」

ヨナが突っかかると、1人が振り返った。

「控えろ」

「何だと!？」

「ヨナ、待つて!」

相手の首根っこを掴もうとしたヨナをエリエルザが止めた。

「覚えてないわね。こちらは……社長よ」

振り返らなかつた男。5代目アルド。名は、カナン・テラフイム。

ヨナは啞然とし、ルカは眉間に皺を寄せた。

「……何の話？」

静かに問いかけたルカに、残りの1人、社長秘書が答えた。

「本日より、エリエルザは5代目社長の元に引き取られる事に決まつた」

「養子縁組か何かか？　んな事、取り敢えず今はどうでもいいだろ。姉貴は俺らと食事に行くんだ」

ヨナの主張は、さらりと受け流される。

「養子ではない」

振り返つたカナン。

妙な程に、相手を威圧する茶色の瞳を持った長身の男。年齢は、初老と言つて差し支えない。若い頃はきつと、相当に端正な容貌を持つていただろう。その名残が見える。

「私の愛人になつてもらふ事にした。公のな」

しばし、言葉を失つていた2人だがヨナは怒りをぶちまける。

「っざけんなよっ!？」

おい、今、何世紀だと思つてんだ!？　公の認める愛人があつて堪るか！

狂つてる!!　社長なら何やつてもいいのかよっ!？　俺らが黙つてると思つてるのか」

「知らないのも無理はないな」

対して、5代目アルドは驚くほど静かだつた。

「これは、初代からずっと行われてきた事だ。

お前が言つた通り、社長ならば何をしても許されるのがこの会社だ。お前はまさか、表社会の法規に縛られた潔白な会社に属していると

でも思っていたか」

「好き勝手つてわけか、のやるっ……」

激昂するヨナを、カナンはもう見ていなかった。その少し後ろで、憎しみの炎でカナンを焼こうとしているかのような瞳のル力を見て、笑った。

「奪われた、と思うなら。取り返してみればいい」

これは、ル力の性質を一目で見極めた上での挑発であった。

「行くぞ」

「姉貴……嫌じゃねえのかよ」

「ヨナ……だつて、しょうがないの」

ぎうつと、怒り狂った後、独特の静けさに充ちたヨナを抱きしめたエリエルザはル力を見た。

「ル力、怒らないで。今生の別れじゃないのよ、ね？」

同じように抱きしめて、去って行った。

「ヨナ」

「何だよ」

「俺が昔、言つた事、覚えてる？」

ヨナははっとして相棒を見た。

「その通りにする」

ル力は、そう宣言して空っぽになったエリエルザの部屋から出た。ヨナは喉を詰まらせたように立ちつくしたが、すぐに後を追った。

憎しみの先の転落（前書き）

昔話？

暗いタイトルばかり……。

憎しみの先の転落

「ルカ、おい、落ち着けよ」

「……」

「姉貴、言つたろ？ 今生の別れじゃないって。それはホントだぜ？！」

でも、お前が社長に逆らって……殺そうとなんてしてみろ、それこそ自分から今生の別れに突き進む事になるんだ」

「3人で……」

「え？」

「3人で、ここを出よう。金ならある」

ルカの瞳は、もはや不動だった。何か、彼にしか見えぬ全ての憎しみの対象、そしてこれはヨナにも判る……奪われた、愛する者が映っていた。

「やめろよ、ルカ……」

「嫌だ」

ヨナは立ちつくした。

「俺が、全部やるから。ヨナは待っててくれればいい」

「そんな事……」

「奪われたものを、取り返すだけだよ」

「やっぱ駄目だ！」

ヨナはがっちりとルカの、彼より細い肩を掴んだ。

「もう一度言っけどよ、会おうと思えば、これからでも会える！」

今日がもう、駄目なだけだ。明日でも、明後日でもいいだろ？ 壊すなよ……」

「もう、壊れた」

言い返す言葉を、ヨナは持ち合わせていなかった。

ルカがいなければ、ヨナもきつと、この相棒と同じ事をしていたから。これ以上、引き留める言葉を持たなかった。だが、肩の手は離せない。

「離して」

「駄目だ」

「……」

次の、ルカの行動はヨナの予想を裏切った。ルカは、ナイフを突きつけた。自分の首に。

ヨナの首にナイフを突きつけるなど、出来なかった事もあるし、これが一番効果があるのを知っていたのだ。

「行かせてくれないなら、ここで死ぬ」

本気のような。

確認など要らない。

ルカが死ぬのは嫌だ。

ずるりと、ヨナの手がルカの肩を滑り落ちた。

駆け去って行くルカ。廊下の真ん中にうずくまったヨナ。

「エリエルザ」

「……はい」

真つ青な顔のエリエルザは、カナンの顔を見ずに応じた。

「あれの名は何だ？」

「ヨナ？」

「黙っていた方だ」

「……ルカです」

途端に、エリエルザは目に涙を一杯浮かべた。

「どうか、どうか……先程の無礼をお許してください！　まだ、子供なんです。私の事を、姉と呼んでくれているんです、……どうか、処罰などは……」

カナンは、穏やかとさえ言える笑みを浮かべた。

「ここへ来ると思うか？」

「……え」

「ルカは」

冷笑を浮かべて、自分の剣と部下達を見た。

その時、彼らの耳に扉の外から絶叫が聞こえた。助けを求め、喘ぐ声が響き渡る。

「来たな」

「そんなまさか！」

エリエルザの悲鳴にも近い声には構わず、社長の側近である戦闘員達がドアの前に揃い踏んだ。

ドアが乱暴に開け放たれる。

返り血で真っ赤になった……悪魔のように美しい少年がそこにはいた。深海の瞳に、海よりも深い怒りを秘めて、むしろ静かに部屋に入った少年。ルカ。

「ルカ、駄目っ……！」

エリエルザが叫んだ直後、彼女は社長側近の2人に引き摺るように部屋の奥に連れて行かれ、残りがルカにそれぞれの武器で襲いかかった。

しかし。

「ほう、ほう」

カナンはここに来て、落ち着いた、感心の声を出した。

ルカは殆ど一瞬のうちに、社長側近、重役を軒並み斬り殺してしまった。

「ルカ……っ」

「姉さん、俺とヨナと、逃げよう？」

死神は天使のように微笑んだ。

「ルカ……」

エリエルザの心は、大きく動いた。

可能かも知れないと、希望を持った。

ルカなら、全ての社員を倒して自分をここから連れ出してくれるかもしれない。ヨナと一緒にあって、守ってくれるのではないか。

3人で、誰にも邪魔されず……生きていけるのではないか。

仄かな希望が胸に溢れ、涙が溢れた。

それを邪魔するように、とうとう、カナンが立ち上がった。

「ルカというのか」

「……」

「ふふ、口も効きたくないか？」

「……」

「私を殺せたのなら、好きにするといい」

「そのつもり」

ルカが踏み出した。エリエルザは両手を固く握った。

だが……。

「動けるか、これでも？」

カナンがピストルを向けたのは、ルカへではなかった。

エリエルザの頭に、銃口が突きつけられた。

効果は絶大であった。

あつという間に、警報を聞きつけた集まってきた文武共々の社員達に銃を向け、包囲されたルカ。

「連れて行け。」

好きにしてい……が、まだ殺すな。

私の優秀な社員を軒並み殺した罰は受けてもらわねばならん」
そこへ、ヨナが飛び込んだ。

「ルカ……っ」

「邪魔だどけ」

「おい、おい……っ、ルカをどうするつもりだよっ!？」

「殺さぬ程度に痛めつけるだけだ」

「てめえら、ふざけんな……」

「ヨナ!」

エリエルザが、悲鳴にも近い声で叫ぶ。

「やめて。……もう、やめて。」

お願い。……傷つかないで」

ヨナは、ルカを連れて行く者達に押しのけられ、ドアにしたたかに背中を打ち付けてそのまま滑るように床に座り込んだ。

「馬鹿……やろっ」

*

「何日目だ？」

「さあな。4日か5日か。社長が、まだやってろって言うからな」

「いい加減、こっちも吐きそうなんだが」

「やむを得まい。社長命令だ」

「しかし、このガキ、傷の治りがやけに早くないか？」

「気のせいだろ。教育プログラムに魔導は無いぜ」

「だろうな」

ルカは両手をロープで縛られ、吊り下げられていた。全身からひたひたと、血が流れ続けている。

翌日。ルカは雑に、床に下ろされた。体力も、思考もすっかり剥ぎ落とされて、カナンへの憎しみさえ消えかけていた。ただ、エリエルザに、ヨナに会いたかった。それだけでも良かった。

ヨナに従わなかった自分を、死ぬほど憎んだ。

結果的に、双子……というよりも兄のように思ってきたヨナと名前をくれた優しき姉を、傷つけた。

求めすぎた。全てを。

傷ついた精神（ココロ）と身体（カラダ）（前書き）

昔話？

暗い、辛い、酷い、etc・・・

傷ついた精神（ココロ）と身体（カラダ）

「今日、どうするか聞いたか？」

「？ 知ってるのか」

「ああ。秘書官殿からな。えぐいね、全く。

俺はこいつが可哀相になってきたぜ」

肩から溜息をつく男。

「今更、何言ってるんだ」

「まあなあ……。体罰とどっちが嫌かつつと……。俺はこっちのが嫌だな」

その詳細を聞く前にルカは社長のプライベートルームに押し込まれた。

「ルカ……何で……」

「ね、さん？」

喋るにも顔の傷が痛む。ルカの言葉はそのせいでたどたどしい。

「罰を与えると云ったろう？」

カナンが現れた。

明らかに見下した態度でルカを見据えた。

「お前達、それを縛って置いておけ」

物のような扱いにエリエルザが怒りを見せる。

「そんな言い方はやめてください！」

カナンは微笑むと、エリエルザの頬を叩いた。ルカが唸り声を上げて、飛び掛からんばかりに身を動かすが数人にガツチリと抑えこまれ、床に倒れ伏した。

「顔を臥せさせるなよ。目を閉じたら、殺さない限り何をしても構わない」

残酷な笑みでそう云ったカナンは、ルカの心を見事と言えるほどに

理解していた。

ルカの目の前で、エリエルザもまた最大の屈辱を負わされた。

どんなに辛い訓練でも、人を殺して泣いた時もととうそうしなかったが、ルカは吐いた。

胃はからっぽだったから、出て来たのは唾内を噛み締めたために流れた血と、喉を焼き払わんばかりの胃液だけだったが。

「もう、殺せ」

全て終わった時にカナンはそう告げた。

「嫌っ！！やめてえっ！！」

身体が痛むのも忘れてエリエルザが絶叫した。

「殺さないで、お願いっ、お願い……」

彼女が、余りにも憐れで……。カナンの忠実な部下達さえ、彼の命令却下をしばし待った。しかし、彼らに掛けられたのは

「何をしている」

という冷たい言葉のみだった。

「嫌か？なら、私がやろう」

カナンはゆったり立ち上がると、部下の一人から剣を奪った。そして……。

エリエルザは気を失った。

カナンは躊躇いなく、精神を完全に衰弱させた少年の左胸を剣で貫いた。

「棄ててこい。」

ゴミ棄て場でいい。ゴミには違いない」

不思議な事に……ルカはこの言葉をきちんと聞き、理解していた。

痛みは酷いが死ぬ気は全く起こらない。声を出せず、身動きも出来ないが意識をしっかりと保っていた。

「おい、まだ生きてるぞ」

社長の非道な命令に、ほんの少し反して、部下達はアルド社から離れた空地にル力を横たえた。

「なに、もうすぐさ。」

これ以上傷付けてやる意味もあるまい」

「……そうだな」

自分の動悸がやけに強く聞こえた。心臓は、力強く脈打っているらしい。

ル力自身もよく判らなかつた。

この心臓は確かに、貫かれた。

死んで然るべき状態である。いや、生きているのがおかしい。

これで生きていたら、人間とは言えない。

では……

「俺は……」

人間では無かつたのか？

頭の前から足の先にまで、力が戻ってくる。もうすぐ立ち上がれそうだ。

心臓を貫かれたのに？

痛みは残るが、流血が止まっていた。

これだけ、内も外も傷付いて。死んだ方が楽なのに。

「……死なないんだ」

やはり、何よりも自身が憎い。どうなっているのか判らないが、死ぬことさえ出来ぬ。

たった1つ……“姉”と“兄”と共に生きる事を望んだだけなのに。それだけで、求めすぎだったというのか。

昔、エリエルザが読んでくれた。

太陽に憧れ、近付きすぎて蠟の羽が溶け、海に落ちて死んだ男の話。彼は、しかし……夢を見ながら死んだのだ。太陽に触れる夢を見ながら、永久の眠りににつき、目覚めから解放された。

『俺は……』

死ぬことも出来ないのか。大切な人と共に生きる夢を見続ける事も出来ないのか。目覚めから逃げる事が出来ず、このままずっと朝を恐れ続けるのだろうか。

*

明くる日、そのまま空き地に倒れ伏していたルカを見下ろす者があつた。

「おはよう」

「……誰？」

すっかり傷は癒えていたが、動く気力など無かった。

このまま、動かず、水も食物も摂らずにいれば流石に死ねるだろう
と置いていたところだ。

ル力を見下ろす人物は、男か女が判らなかった。とても、美しい
が人間離れしている。どこが、というと上手く説明は出来そうにな
いが。

「とある組織の重役なんだが」

「あんたが？」

「うん。来る？」

「……ここで死ぬつもりだから」

美しい人は、冷たく笑った。

意識的に冷たく笑っているのではない。温かい微笑みを作った事が
無いか、そういった微笑みの作り方を忘れているのだ。そんな気が
した。

「死んで、どうするの？」

「死ぬだけだよ」

「君には、いると思うんだけどね」

君が死んだら嘆く人間が」

ル力の瞳に、光が戻った。

まず戻ってきた感情は、憤りだ。

「あんたに何が判る」

体力が残っていない事が呪わしい。声が弱々しいままだ。

「いるんだね」

それから、不思議だと思っている事はない？」

ル力は、ぎくりとした。

そんな彼を見て、美しい人はまた笑うとル力の左胸を軽く突いた。

「刺されたね？　だけど、ピンピンしてる」

一緒に来れば、その疑問の答えをあげよう」

相手を、まじまじと見るル力。

おかしな者だ。

訳が判らない。

この者への興味が、怒り、その他を越えてしまった。恐らく、一晩中、嘆き、怒って……。その感情を持つことを彼の心が止めてしまったのだろう。もう、疲れたようだ。

「どうして、俺を連れて行きたいの？」

「君の“才能”に興味がある。それを、活かしてあげられる。あとね」

ル力をじつと見る。

「君とは似ていると思うんだ」

「あんたが？」

「うん」

また、おかしなところを見付けてしまった。この人は、自称代名詞を使わない。

「君も知ってるはずだ。“組織”とだけ呼ばれている、裏社会一の規模を持つところ」

「まさか……」

「ボスと呼んで。“名の無き人”と呼ぶ者もいるけど、長くて面倒だろう？ 君の名は？」

「俺は……」

名前。

もう、持ち物はそれだけだ。

愛する人と自分を繋ぐものは、それだけだ。

「ル力」

「そつ、ル力。ではよろしく。……着いておいで」

この日、どうして都合良くボスが通りかかったのかルカは知らない。だが、こうしてルカはアルド社員の裏切り者から一転、“組織”員となった。

それから、たくさんの仕事をこなし、たくさんの者に会っても……。彼は、いつまでも寂しかった。いつでも失われた2人を求めている。

トラジェディ（前書き）

昔話終了。ルカVSヨナに戻ります。
もう、書いてるこっちが泣きたい。

トラジエディ

「なあ、1つ答えるよ」

ヨナは、深呼吸をして気を落ち着けてから尋ねた。

「どうやって、生き延びた？ お前が生きてる事は、お前がいなくなった半年後に知ったんだがよ。姉貴の話だと……どう考えても、殺されたとは思えなかったそうじゃねえか」

「念術……知ってる？」

ル力は素直に答え始めた。

「ああ、ロデオとか使ってるやつな。……あれで？」

「うん。俺の、ちよつと変で。」

ボスが言うには、自然治癒が俺の能力だって」

「それってよ」

「……俺は、死ねない」

ヨナはしばらく黙っていたが、やがて剣を構えた。

「もう、駄目だろうな。」

お前、ここを裏切る気は無いだろ？ 俺も、どーしようもねえ会社

だが、裏切る気はねえ。

俺はお前を殺すぜ」

そこまで言うのに、ヨナがどれだけの気力を使ったか、ル力には判った。

だからもう、何も言わなかった。今更、懇願する事もない。

「判った。」

「ただ、俺は死なない」

「勝手に言っただけだ！」

ヨナは豹のように身をかがめて、凄まじい勢いでル力に斬りかかっ

た。ルカも、長剣を抜いて攻撃をいなす。剣術はしかし、ヨナの方が少しだけ上手い。

このままでは、押し切られる事は目に見えていた。

ルカはヨナを殺すのが、嫌だった。

しかし、ヨナはもう、ルカを殺そうとしていた。

恐らくそれは、ルカを救うためだ。

それを判らないルカではない。

だが、死ぬつもりは無かった。

例え、ヨナを殺す事になっても……。

ひたすらに続く攻防の行く末を変えたのはルカである。彼は、剣での戦いを棄てた。敵うわけが無いのである。ずっと昔から、剣だけではヨナに敵わなかった。だが、剣以外を使えば、勝てる。それに……彼は怪我を恐れない。ルカは思い切り剣を振り上げ、それが雷電の牙に当たって砕かれた直後投げ捨て、ヨナの懷に飛び込んだ。即座に身を引くヨナであるが、ルカの蹴りは素早く相手を捕らえた。狙いは顎であったが、それは外れ、胸の上部を蹴り飛ばす事になった。

咳き込むヨナ。攻撃を休む事なく、無数のナイフを投げる。

「手品師に転職でもすんのか、え!？」

ヨナは全て、剣で払い落とす。

ナイフを投げたのと一瞬の差でルカは動き始めており、既にヨナの

背後を獲っていた。

「のやろうつ!!」

振り返りざま、雷電の牙を力一杯振り下ろしたヨナ。ルカの肩が裂け、血しぶきが上がる。

そこで……ヨナは動揺した。

傷つけるつもりで剣を振り下ろしたのに、ルカが傷ついて、動揺してしまった。その瞬間に、ルカはヨナの顎を蹴り上げた。何メートルも飛ばされて、倒れ込んだヨナ。だが、起きあがる。

「やっぱ、俺とお前は違うな、ルカ」

「……うん」

「今まではよ、……お前が、いなくなっただけから。お前の事、双子の弟みたいに思ってたんだぜ」

「……」

「だけど、もう駄目だわ」

ヨナは姿勢を正して、剣を構えた。

「お前は求め過ぎて、俺は諦め過ぎた。

その結果がこれって訳だ」

地を蹴ったヨナ。

余りにも速く、ルカは斬られた瞬間に、ヨナが目の前まで来た事に気付いた。

倒れる、ルカ。

「……死ねないか？」

問いかけたヨナの言葉に込められた感情は、余りにも複雑であったが……恐らく、憐れみという言葉が一番近かっただろう。

ヨナはルカに近付き、雷電の牙を振り上げた。

「首、斬れば死ねるだろ？」

ヨナは、言ってから腑がよじれるような不快感と心臓を深く抉る痛みに襲われた。

だが、全て押さえ込み、振り下ろす。

『姉貴、すまねえ……』

ルカは、それを、避けた。

だが、避ける方向を誤り、致命傷となる傷を背中に負った。しかし、それでも立ち上がる。

「お前、ほんとに……」

「俺は、死なない」

哀しみを込めてルカは言った。

そして、……。

ヨナの身体に深々と剣が突き刺さった。

「……何で、避けなかったの」

どう考えても、ヨナは敢えて、ルカの剣を避けなかった。

「はっ……どうせ……死ぬ、なら」

笑ったヨナ。

「可愛い弟に、殺されて、やる……さ」

おかしい話だと。滑稽な笑い話だと自覚していたが、ルカはヨナの傍らに跪いた。泣き崩れた。

「……ごめん、ヨナ」

「姉貴を、頼むぜ、
ルカ」きょうだい

静かな慟哭により、長年続いた悲劇の幕は閉じた。

トラジエディ（後書き）

矛盾と葛藤。伝わったでしょうか。

解放（前書き）

当然、前向きな意味の解放ではありません。

解放

地面に放り出されたユダは……微笑んだ。レピュスは目を大きく開いてしまう。

ここまで、同じだとは思わなかった。

「折角だ。殺してくれるか」

何と、自然な口調だろう。本気で望んでいるのは明らかである。

「死にたいのか」

「ずっと……疲れてた」

レピュスに話しているのか独白なのかは判らない。

「知らない記憶ばかりを頼って生きるのにも。殺さなければ生きていけないのにも。」

良い機会だ」

左胸から右の脇腹にかけて、骨さえ切り裂くような斬撃を受けたというのに。絶え間なく血が流れているというのに。ユダは恐ろしく静かだった。

一歩、踏み出そうとしたレピュスは、止まった。

「どうしたんだ」

「……」

別に、相手を殺すことに躊躇いはない。

しかし何故、ユダを「殺してやる」必要がある？

生より死を望む敵の命を絶ってやってどうするというのだ。それに……。

「許さない」

レピュスは思わず、口走った。

「俺より先に、“ここ”から出るなんて許さない。俺に、お前を救ってやる義理はない」

同じだから。

ユダと自分は、同じだから。

彼の言った通り、人を……此の世で一番大切だと思っていた人を殺した時からレピユスの人生は始まった。そして、何一つ生きる理由もないまま殺し続ける日々。強くなればなるほど苦しみは増し、今や此の世の誰よりも自分が恐ろしい。死後の世界への信心はない。死の先は「無」であると思っている。これも恐らくユダと同じだ。何もかも、無くしたいのだ。

「レピユス……殺してくれ」

初めて、ユダの声に感情がこもった。懇願である。最後の力を込めて、身を起こした。

「俺は……絶対に……」

レピユスは強固な否定の言葉を発する。

その時だ。

絶望したような表情であったユダは、……笑った。

レピユスは言葉を失った。

ユダは最後に言った。

「ありがとう」

「ルカ」

柄まで深く深く、ユダの薄い左胸に短剣が突き刺さっていた。彼は力を失って背後の……自分の命を絶った人物にもたれかかるようにして、念願の絶命を果たした。

状況が飲み込めたレピユスは、全身を締め付けるような疲労と今までにない、長引く火傷のごとく酷い紋様の痛み、きつく殴られたよ

うな頭の痛みを一瞬忘れた。

「何故……」

どう考えてもユダのものだけではない返り血に染まった、ル力を見た。

彼はいつものように無表情であった。しかし、何か……痛みに耐えているように見えた。

「何故、ユダを“救った”んですか」

その問いに対する返答はあっさりしたものだった。

「殺したただだよ」

だが、レピユスには判っていた。

ル力が、あそこでユダを殺す意味を判っていなかったはずはないと。彼は全て理解して、そしてユダを“殺してやった”のだ。

「依頼するなら、お前も“殺してあげる”よ」

それは冗談にしては冷酷で、真実にしては皮肉めいて聞こえた。

また、これが限界であった。これ以上、問答する体力も気力もレピユスには残っておらず、音を立てて前へ倒れた。

ル力はどこか丁寧にユダの身体を地面に横たえたと、レピユスを肩へ抱え上げた。無線のスイッチを入れた。

「侵入したアルドの幹部は全滅」

「生存者は全て縛り上げる。ジェリー殿へ預ける」

ジャンニアの指示で、まだ息のあるアルド社員は残らず縛り上げられて拷問塔へ運ばれた。

重症を負ったラウン、意識を失ったレピュス、ボスへ報告に向かったルカの3人分を代行して彼女が組織員の生存確認を行わなければならなくなったので準幹部も動ける者はすべからく集められ、そのサポートにあたる。

「ジャンニアさん！」

息を切らして、ラズが走ってきた。

「どうした」

「アルド幹部の、ヨシユアという男……まだ息があったようです。ノエルさんが魔導で動きを封じていて……そうでなくても動けない状況ですが」

「幹部か……。なら、生かせ。」

最低限の治療をして、ボスのところへ明日には連れて行く」
「伝えます」

「これ、よろしく」

「は、はい！ ル力殿は」

医務室所属の者達は、戸惑ったようにル力を見る。彼の服は血でぐっしょりと濡れているのだ。

「治ってる」

「……そんな、まさか」

ル力は、業務上の務めの為に必死で反駁する医療員達を見ると仕方なく上半身のシャツを脱いでみせた。彼の肌は確かに血まみれなのに……傷は1つとして見当たらなかった。

「言っただでしょ？」

自他の血でびしょ濡れのシャツを着るのがもう厭なようで、それを

くるくるまともに床に投げた。

「も……申し訳ありません」

「別にいいよ。レピユスよろしく」

彼が、同じ幹部とはいえ他人事を気に掛けたのにも驚いた医療員達はルカが出て行くまで固まっていた。

「あの、先輩」

レピユスを診ていた若い医療員が、年配の者を呼んだ。

「これは、一体……」

怪我を確認する為に顕わにされた右手……そこにはあと5、6センチ書き進めれば完成するであろうという中途半端な蛇の紋様が描かれていた。ここに入って長い、初老の男性医は多少の事を知っていたからそれには応えず

「今は、治療だ」

とだけ言った。

「は……はい」

「様子は？」

「怪我よりも、心配なのが熱です。もうすぐ、40度になります」

「レピユス殿を個室に移さない」

「は、判りました」

ボスに詳しい話を聞かなければならないなと思った、初老の医師である。

解放（後書き）

VSアルド編は、これでようやく前編が終了です。

早く終わらせて、小指の爪ほども明るい話を書きたい……。 p1

ot段階では、ここまで作者本人へのダメージがかい予定は無かったんですが。ユダ愛に目覚めてしまい（ファンクラブ希望者歓迎

（笑））辛いこと甚だしい。

ルカの頼み事

「1級の2名は死亡、3級のヨシユアは捕獲。4級の3名、5級の4名も死亡です」

ボスのところへ、ウォーレンが業務連絡に行っていた。

「誰がやったか判る？」

「1級ヨナは、ルカ殿が。ユダはレピユスが追いつめ、ルカ殿が留めを差したそうです。3級もまたルカ殿が」

「大活躍だね」

ボスは笑う。だが、口元しか笑っていない。

事情を知る者だから。

「それで？」

「あ、はい。4は全てジャンニア殿が、5は準幹部が中心になって仕留めました」

「レピユスとラユンは？」

ここへ来る前、病室に寄ってきたウォーレンは正確に述べる。

「レピユスは怪我の治療は大方済んでいるようですが、まだ熱が下がらないようです。ラユン殿の怪我はかなり重いそうですが……魔導による治療も組み合わせれば、一週間以内に完治するそうです」

ボスは頷いて、しばし考えていたようだが結局何も言わず

「ご苦労様。ジャンニアを呼んで」

とだけ言った。黙って頭を下げ、ウォーレンは退室した。

「ボスの仰る通り、アルドを完全に潰すなら、現在はまたとないチャンスでしょう」

ジャンニアはボスの考えを聞いた後、すぐに答えた。

「ただし、少なくともレピュスカラウン、どちらかの復帰を待つ必要があります」

「うん。そう思ってる。」

それからルカの精神状態が少し気になる。あれ以降、見た？」

「……とても話しかけられる様子ではありませんでしたので。故意に関わるうとはしませんでした。」

心の機微というのは私の苦手分野ですので」

ボスはそれを聞いて苦笑した。

こんな者ばかりである。

「扱いは慎重に。というか、本人に任せるしかない。」

だが、アルドを潰すような大がかりな仕事をするならルカの力は必要」

「仰る通りでしょう」

「アルドもしばらくは動けないだろうから。休戦つてところかな」

「はい。レピュス、ラウン……そしてルカ殿の回復待ちというところでしょうか」

「そういう事。」

準備が整ったら、すぐだ。情報室の者が明日には戻ってくるから、共に侵入作戦を立ててもらいたい」

「お任せを」

ジャンニアはたのもしく応じると、低頭して出て行った。

*

「ああ、起きましたか！」

レピュスの耳に、柔らかな男の声がした。まだ頭がぼうつとするが、何とか首を動かすと初老の医者が見えた。ロベルグという彼には、昔から世話になっている。レピュスの呪いの事を知っている唯一の医者だから、という事も大きい。昔は第五型に変形させなくても、

前触れ無く気を失うほどに右腕が痛み、その後に高熱を発するような事が幾度かあった。だから、ボスは彼にだけ説明したのだった。

「久しぶりでしたね」

「……はい」

レピュスも、この人には頭が上がらない。にこにことしている、優しい医療士である。

「ですが、熱はまだ下がってませんから。大人しくしてもらいますよ。」

この症状には解熱剤が効きませんからねえ……」

「ご迷惑を」

「なに、構いませんよ。」

それより、目が覚めたら教えるようにとルカ殿に言われているのですけどね。もう大丈夫そうですか？」

「ルカ先輩……？」

よく判らないが……。

「大丈夫、です」

ルカは、病室に入るとロベルグに2人にしてくれと頼んだ。ロベルグが従うとまず、

「体調は？」

と。

「ロベルグさんが言うには熱があるそうですけど。大分良いです」

「長話平気？」

「……はい」

ルカの長話とは、何だろうか。

あの時……ユダを殺した時の光景が、レピュスの目の奥に蘇ってきた。その話か。

だとすれば、病み上がりにも悪い事、この上ない。
しかし、違った。

それはレピュスの予想を全て裏切ったものだった。

「考えたんだけどね」

と、ルカはレピュスの方は見ぬままぼつりと言った。

「お前にしか頼めなくなってる」

「……？」

酷く、驚いた。

当然、ルカの頼みなら最大限応えるつもりだが。こんな事を、言われる日が来るとは思ってもみなかったのだ。

「その前に、愚痴、聞いてくれる？」

「えっ……は、はい」

呆然としたレピュスにルカは、自分の生い立ち、アルド・ワークスに入ってから的事……ヨナ、エリエルザとの関係を長々と話した。愚痴というより、一種の告白であった。

「だからね、俺は兄さんを殺したようなもんなの」

当然、レピュスは応える言葉を持たない。

「本当なら、姉さんには顔向け出来ない。だけど……今度こそ、あの人を助け出してやりたい」

夢中で語っている。一気にアルド・ワークスを離れた時の年齢に戻ったような、愚かさという名の若さを声、表情に出していた。

「あ、あの」

非常な躊躇いがあったが、レピュスは何とか口を挟む。

「そんなことをどうして、俺に……」

「俺に何かあったら、姉さんを宜しくって言ったら怒る？」

「……え？」

今、何と言った？

2つの信じられぬ言葉がある。

レピュスにしてみれば自分が無事でルカに何かある、というケースは信じがたい。また、どうしてそんなに大切な人を……。

「何故……」

「嫌な予感がね、ずっとしてるんだよ」

「そんな……」

「あと」

ルカは笑った。

レピュスはこんな笑みを浮かべるルカを知らなかった。

……天使が微笑んだら、こうなるのだろうか。

「お前って、優しい奴でしょ？」

放心したように、相手を見るしかなかった。皮肉でもなく、最後にこの言葉を掛けてくれたのは誰だったろう。……きっと、「あの人」。深く呼吸して、気持ちを落ち着けなければならなかった。こんなに動揺させられて。熱がまた上がるかもしれない。

兎に角、だがルカの頼みには応えたい。

「わかりました。必ず」

「ありがとう」

ルカはもう一度笑うと、退出しようとして……止まった。

「そっだ……」。

頼んだからには、俺がヴィレナから聞いた、姉さんの現状……説明する」

ルカの瞳は暗転した。

1つだけ

時系列は少し戻る。

ボスの命令により、ルカはヴィレナの元へ情報買いに行った。
その時。

「……一つ、いい？」

ルカは、ヴィレナがアルド・ワークスの話を終えると口を挟んだ。
想定内、という風にあっさり頷くヴィレナ。

ルカは落ち着かないように手元のグラスをいじりながら口を開いた。

「……エリエルザは、どうなった？」

5代目アルドの……妾、の」

ルカは、言って、唇を強く噛み締めた。その言葉を発した己の口を
許せないとでもいうように。

「生きてるよ」

あっさり応えるヴィレナ。

「どんなふうに」

「6代目の正妻として」

ルカの手の中で、グラスが砕けた。

ヴィレナは驚きもしない。予想のできた範囲の反応である。

「可哀想にね。」

彼女を心から忘れる為に他の者を愛しさえしたのにね。ああ、愛す
努力で終わったのかな」

ヴィレナは返事の無い事を予想しながら、静かに言った。
言ってみただけなのに、ルカは応えた。

「忘れるためなんかじゃない。忘れたくない。
俺が……彼女を、愛したのは……」

カクンとルカの首は下を向いた。

「まだ、人間でいたかったから。――人間として生きるため」

応えそのものには、ヴィレナは一切驚いたり、感銘を受けたりはしていないが、ルカが自分にここまで話したというのが意外だった。

『まあ……私は“客観的事実”にしか興味がない事を判ってるから
か』

弱みとして、誰が誰を大切にしているのか知りたがる依頼人はいるが、その理由にまで関わる者はいない。金になる可能性のない事柄は記憶しないのがヴィレナだ。

*

ルカはこの事を、「彼女」の件は抜いて、レピウスに話した。

「だから俺は、6代目アルドを殺す事に全力を尽くすから。それが成功した場合はいいけど、失敗……もしくは、くだらない同士討ちにでもなったら。お前に姉さんの事、任せたいんだけど」

レピウスは、ただ頷くしか無かった。

ただ1つ、彼の「経験」上、言うべき事があった。

「先輩」

「何？」

「1つだけ、余計な事を言っても？」

「いいよ」

レピウスは、再度、躊躇ったが、言う。

「もし、6代目アルドを殺せなくてもエリエルザさんを連れ出せる状況に行き着けなくても。一度、会ったのなら2度とエリエルザさ

んの世界から消えては駄目だと思います」

ル力は、珍しく、驚いた顔をした。そして、それからゆったり笑った。

「死ぬなって事？」

「死ぬかも知れない、と仰っているように聞こえました」

「……うん。判った。」

でも、お前がこんな事言うなんて意外」

レピュスは、苦笑した。

「昔、いたんですよ」

思いを馳せた。

「相手にとって、自分がどれほど大切かを理解せず……死を選んだ者がね」

「……そう」

これだけ、たくさんを話したル力に申し訳ない気持ちもあるが、レピュスは何も詳しく話すつもりはなかった。恐らく、聞く側よりも語る側の自分が崩壊してしまうだろうから、話せないだろうとも思う。

侵入計画（前書き）

アルド・ワークス編、後編突入。

数少ないお気に入り登録者数が減ってきている（笑）。何か悪い事したかな？（心当たりがありすぎるなー）。

侵入計画

「ご迷惑をお掛けしました」

レピュスは、熱が下がってロベルグの許可を得るとすぐにボスのところへ行った。

「構わないよ。君の回復待ちの間、再度、情報収集に時間を充てる事が出来たしね。」

アルド本社に乗り込むよ」

「……はい」

「敵地に大勢で乗り込んで行って、罠に引っかけられるアルド社員の真似をする事はない。幹部、準幹部のみで向かい速やかに上層部を占拠してもらいたい。平社員についてはノエルが笑顔で、悪夢でも見せておくって言うてたから。それに任せて良いと思うよ」

ボスにはっこりしたが、レピュスの笑みは引きつっていた。

ハズスほどではないが、ノエルにも何となく恐怖イメージがある。

「計画の詳細は今日の午後、ジャンニアに説明してもらってからその時に」

午後遅く、ジャンニアの説明があった。聞くだけでは相当にシンブルな作戦だが、情報部の苦勞が裏にある事は明らかだ。暗殺部隊や情報収集部門がまさに不眠で働いて、大量に設置されているオーロックの解除ナンバーやら、詳細な内部地図やらを入手している。「作戦メンバーは最小限に絞った。暗殺部隊幹部と、暗殺部隊準幹部、三級幹部全員の28名が暗殺部隊の動員数」

僅かなざわめきがあった。

「ノエルを中心とした魔導部隊も動くから、人数のカバーはそれで

十分。寧ろ、多勢で動く方が困難であり危険とボスは判断された。魔導部隊に、下層部を抑えてもらい暗殺部隊は速やかに」

モニターに映写されているアルド社内部図の真ん中より少し上の一室を指した。

「社長室を目指す。用心すべきが、東大陸大業物十工の灰骨を持つイザヤという2級幹部だが。幹部3名のうち誰かが相手にする。むしろ、それ以外が出会った場合、逃げる。無駄な犠牲だ」
齒に衣を着せないジャンニア。

その後、更に詳細が説明されたがジャンニアは取り敢えず解散とした。

「暗殺部隊の実行メンバーのみ残るように」

「先日捕らえた、ヨシユアから灰骨の情報を聞き出す事にジェリ―殿が成功した」

誰もが、敵ながらヨシユアという者に同情を抱いたのは明らかだった。

「形状がかなり特殊なようで、刃の部分が関節のような……連結式になっているという」

「曲がるってこと？」

ルカに、ジャンニアは頷いた。

「刺殺、斬殺だけでなく絞殺や撲殺も可能な刀らしい。手数が多いと考えてくれればいい。」

また、……私は大業物使いではないから判らないが。力を解放すれば、伸縮も自在になるという」

何となく、レピュスを見て言うジャンニア。

説明を求められたと理解してレピュスは説明……というか、自説の披露をする。

「解放というのは要するに、刀に込められている魔力……東方魔術を発動させるという事で、発動条件は刀によって変わりますが。多くは、抜刀するだけで刀がその銘に応じた色の光を纏います。それが、解放……」

「今回はルカ殿には自由な行動を慎んでいただきます。これは、ボスの意思ですので」

ルカにきっぱりと……伝達であれ、命令を告げられるのはボスを除けばジャンニアだけだろうなと思う一同。

彼が困ったように、軽く顔をしかめた理由がレピウスには判った。単独で、一刻も早くエリエルザ救出に向かいたかったのだろう……。

『まさか……』

ボスは、それを判っていて珍しくルカの行動に制限をつけたのか。とすると……ルカであっても、単独で6代目アルドに立ち向かうのは危険という事か？

*

レピウスは、ルカに気安く「あげる」と渡された瑠璃虹、そしてユダの緑月を保管庫に入れた。瑠璃虹はともかく緑月は……必要の日が来るまで、見たくもなかった。

うなされて起きる夢がまた1つ、増えるかも知れない。

恐らく、これから先も紫水と紅夜叉を中心として使用する事になるだろう。しかし、紫水の第五型を使うのはもう、無理である。正確な事は判らないが第五型を使用する度に、右腕の紋様が書き進められていく上に、発熱などの発作が出る事を考えると一番命を縮める行為であり、蛇が完成した時が恐らく、呪いが完了する時だから。

まだ、死ぬわけにはいかない。

おかしな主義主張だという事は自覚しているが、紫水の呪いを解く前に死にたくはない。もし、呪いを解いた翌日に死ぬとしても、余り後悔はない。

全く、訳が判らないと自分でも思うが。

恐らくレピユスの、生きる最終目的が「紫水の呪いを解くこと」なのだ。それを失ったら、生きる目的も無くなるし、多分、気力も無くなると考えていた。生きるためではなく、死ぬために「死」の呪いを解こうとしているという、決定的な矛盾を持っている訳だ。

侵入計画（後書き）

投稿順を間違えました（汗）。1つの作品で1回はこのミスするんです……。書きためると駄目ですね。管理不行き届きで罰せられそうです。

大変申し訳ありませんでした……。

最終戦開始（前書き）

投稿順間違えてました！（汗）。大変申し訳ありませんでした。
直しました（12/1）

最終戦開始

「サツズ、どう？」

情報部に繋がっているボスの内線。

「今日中には盗めそうですよ」

アルド・ワークス本社のセキュリティ解除パスワードの事を言っている。

「ウチに比べると、ザルなシステムを使っているようですねえ。問題はないかと」

「それは良かった。なら、終わったらジャンニアの方へ」

「了解しました」

内線を切ると、ボスは目の前の人物へと意識を戻した。
ル力である。

「不服、なんだろうね」

「……どうしても、駄目なの？」

「駄目。これは、決定であり命令だ。

破るのは勝手だけど、相応のリスクがあるよ。……成功しても我々は身内として会う事はなくなる」

「……判った」

そう応じて背中を向けたル力が何について『判った』のか、ボスにも判断がつかなかった。

*

翌日。ジャンニアのところへ、セキュリティ解除パスとアルド本社内部図面が運ばれてきて彼女は最終決定の段階へと移っていた。

そんな彼女へ、ボスからの内線。

「どうなさいましたか」

「……念のために、ル力が言うことを聞かなかった時の想定をよろ

しく」

眉をひそめるジャンニア。

「彼はそこまで頭の悪い人とは思いませんが」

「頭が悪いんじゃない点……。人が好いんだ」

「成る程。よく判りました」

何らかの情に流されるということだなと理解した。当然、どんな情なのか、彼女の知るところではないが。

「それとボス、レピュスの事です。体調がまだ不安定な様ですね。2級のイザヤと戦わせることはできますか」

「……難しいかもね。君とラウンで組み、伐つというのはどう？」

「ではそうします」

*

3日後、夜。

「システム解除、完了しました」

ウォーレンがそう告げる。何の問題もなくオートロック式の自動ドアが開いて、侵入者達を招き入れる。

「おっと。今晚は」

先頭にいるラウンは偶然通りかかり、声を上げかけた数人を一気に気絶させた。

「多分、事務員だねー」

「計画通りに分かれる。イザヤが現れた場合、すぐ連絡を。レピュス、イザヤとの戦闘はお前は禁止だ。そして、ル力殿。くれぐれも個人的事情で動くなとボスから念押しがありました」

「……はいはい」

2手に分かれた。ラウン、ジャンニアと準幹部5名、魔導士部隊15名。レピュス、ル力と残りの準幹部、3級幹部。また同数の魔導士部隊。

ラウン達の前に早くも、戦闘要員らしき者達が現れた。

「何者ッ！」

「人の方の警備もやっぱりいたね」

応えず、ラウンは呟いてナイフを手にした。

「開戦かな、ジャンニア？」

「ああ。時間を掛けるな」

一斉に動き始める組織の者達。

「侵入者あり！ 戦闘の意思あり。至急、救援求……うわあッ」

ユダには後れを取ったラウンだが、魔導による治療もあって完全回復している上に小柄で小型武器を使う彼は狭い場所、正に現在戦っている屋内の廊下などで力をより発揮する。確実に、実績も実力もあるであろうアルド社員達も為す術無く、めまぐるしく宙を舞い、空を裂くナイフに動きや命を奪われていく。

ジャンニアの方は、乱戦の為、一番好む銃は使わず長く鋭い針のような武器で戦っている。恐ろしいほど、鋭い針だ。彼女が投げただけで額を貫通してしまう。一番威力を発揮する角度、速度、そして位置を狙って正確に投げる彼女の能力あつての殺傷力であるが。

その後ろでは準幹部が魔導士のサポートも利用しつつ善戦。魔導で一瞬動きを奪われれば、その瞬間に致命傷を受けている。反撃を受けた者は、即座に回復魔導で治療される。

「ウォーレン、死傷者」

静かになったところで、ジャンニアが短く問いかけた。

「死亡なし、重症1、その他は無事です。重傷者もあと2分で回復します」

「進む。ラウンは最後尾へ」

「オッケー」

「全く、迂闊だなアクラス」

肩から腰まで、ざっくりと斬られ、血を流していた男をシュタツヘルが軽く笑った。

「しょーがねーだろ、おっさん！」

「お前は直線的過ぎる」

ぼそりと言った男はクライヴ。

アクラスとクライヴは同期で友人だが、まるで対照的である。アクラスは言われたとおりに戦いも性格も直線的な熱血漢タイプ。組織にはなかなか珍しいタイプだ。がっちりした体格でウォーレンは重症と称したが、さっきまでの怪我くらいならば応えないように見える。

クライヴはそれと反対に慎重な戦法をとる。冷静な性格で、任務中のミスの無さには定評がある。割と細身で背が高い。

あれやこれやと、言い合いが始まりそうになったところ

「はいはい、ジャンニアさんに怒られますよー。私語厳禁！」

と、ウォーレンからもっともな注意を受けて黙った。機嫌を害したジャンニアへの対応の難しさは有名。その原因になるのは誰でも真っ平である。

「ジャンニアって天才なのかな」

ルカが言った。

こちらの、人数が多い方はまさに大人数を相手に開けた空間に立っていた。敵の集まり方にまで、ジャンニアは正確な予測を立てていたものと思われる。レピュスも頷いてルカに同意するしかなかった。「レピュスさん！ 体調がよろしくないなら、任せてくださいっ！」たのしく言ったのはルネア。

「いや、別に……」

「大丈夫です、ご心配なくっ！！ このルネアにお任せくださいっ」
レピュスにはちっとも原因が判らないのだが、ルネアはやけにレピ
ュスに懐いている。

「ね、ラズ！」

話を振られたラズは肩をすくめた。

「はいはい、じゃあ、お姫様は勝手に王子様をサポートしてなさい。
ま、ほんとに無理はすんなよな、レピュス」

「ラズ、何よ馬鹿にしてっ！」

「レピュス、もてるね。いいな」

「ルカ先輩まで巫山戯ないでください！！」

ぐるりと、アルド社員に包囲されたというのに、これである。相手
も、もはやばかーんとしている。

「ドライグさん、どーします？」

困った子供を見るようにしている女性がディアナ。背がすらりと高
い、なかなかの美人。長い槍を使いこなす。20代を主張している
が、経歴から考えると、まず30代であろう……関係ないが。

「どうするかねーえ。じゃあ、こっちで始めっか。適当に殺りゃい
いんだろ？」

だるつとした調子でドライグは剣を抜いた。

「お前ら、先に始めっぞ」

3級に命令し、戦闘を開始した。

イザヤ登場

「あ、始まった」

ルカは何でもない事のように言う。

「ドライグさん、せっかちですしねー」

同じ調子でラズ。

真面目なレピュスは早くも戦いに加わっていた。紫水は……置いてきていた。ハゾスに最大限の勇気を振り絞って紋様の件を相談したところ、呪いの源から離れば進行が遅れるのではないか、という考えを聞かされたのだ。イザヤと戦う事がないし、必要ないと判断した。紫水を持たず、戦闘に参加するのは初めてであったが……紅夜叉で事足りるだろう。それにもともと、紅夜叉の方が斬れ味が鋭く、更に血を吸えば吸う程、鋭利に、丈夫になつていくから多勢を相手にするのに相応しい。それに……横を見た。

レピュスは、体調不良を押し殺して来た意味があつたか、と考えてしまった。

この人は本当に人間か……。

同じ事を繰り返しつつ進んでいるラウン、ジャンニア。

不意に……。

驚愕の声がし、魔導士達が倒れていた。

「やっぱ、回復要員かなんかか。しっかり守れよ」

笑いを含んだ声で言い、ゆるりと背後に現れた女。

巨大生物の背骨のようなもの……刀を持っている背の高い女。肩までの金髪、蛇のように鋭い眼光の暗い茶色の瞳。にやりと持ち上がった唇は薄く、驚鼻……全体として恐ろしげな容貌。

「イザヤか」

ジャンニアが短く言うと、イザヤはそちらを見る。

「ああ。」

女もいるのか、いいね。ワタシは男の絶叫より、女の悲鳴の方が好みだ」

「私はどちらも願ひ下げる。五月蠅くて敵わん。殺すなら瞬殺に限る」

「いきなりの相違か。まあいいや」

イザヤが軽く刀を振ると、だらりと伸びていた骨のような刀の各部分がぴたりとくっついて通常の刀となった。

「ラユンさん。何で、“こっち”の女性ってこんなんばつかなんでしょ」

「言っちゃ駄目だよウォーレン。あーあ、ロデオ可愛かったなーあ」
ウォーレンとラユンは囁き合った。

「取り敢えず、ザコ5人から狩らせてもらうかね!」

イザヤが刀を持ち上げた。

「わ、ザコってばれてますよ」

ウォーレンの自虐的な言葉には構わず、イザヤの刀――東大陸大業物十工灰骨が伸びる。

躍り出たラユン。二本のナイフを交錯させて、刀を止める。

「じゃー5人、もう1つと合流してこっちがしばらく動けない事を連絡」

「はい」

エピヌがすぐに応じ、5人は走り去る。

ラユンのナイフを払いのけたイザヤは、にやりとする。

「しばらく、でいいのか?」

「んー？」

「一生かもよ！」

獲物に向かって身体を伸ばす蛇のごとく、灰骨がラウンに襲いかかった。後退しようと、迫ってくる。

『リーチが長すぎる』

ジャンニアは、顔をしかめた。

『東大陸大業物。何でも有りだな』

刃物の連結部分は、同じくらいに太くそして頑丈。それが当たっても、刃の部分に当たったのと同じ威力を発揮するだろう。

銃を手にしたジャンニア。

1つ1つ、破壊するに限る。

素早く狙いを定め、動き回る刀に弾丸を撃ち込む……が。

「すると思つたよ！」

余裕の表情で、ラウンの投げたナイフを灰骨の尖端で弾きつつ、刀の連結部分を一気に広くして弾丸を通過させる。

「“組織”の幹部はルカがないと何も出来ないのかい？」

「それは心外だ」

ジャンニアは言下に瞬間的に発砲して、イザヤを直接狙った。反応が僅かに遅れたが、頬にかすった程度であった。

「ま、私に傷を付けただけで褒めてやれるかな。血い流したなんて何年ぶりかな」

傷を手の甲で拭って言うイザヤ。

その言葉に嘘は無さそうだ。先程までの小馬鹿にした調子が減じている。

「敵の称賛など無用だ」

言い捨てたジャンニア。

そして、イザヤの怒濤の攻撃が始まった……。

蛇のように、予測困難な動きで宙を舞う灰骨。この巨大な刀を片手で扱うイザヤの筋力は恐ろしい。ラウンとジャンニアは攻撃を避けて動くうちに、何区画か進んでかなり開けたスペースに出た。

「ちよつと助かったかな」

と、ラウン。

狭い廊下よりも余程動きやすい……が。

それは、イザヤも同じであつた。

更に、大胆に刀を操り、銃弾を絶妙なタイミングで払いのけ、ナイフをもともせず、2人を殆ど同時に襲う。斬る事も、突き刺す事も、時には締め上げる事も灰骨には自由自在である。

「イザヤ殿！」

「援護か」

ジャンニアが迷惑がるような声で呟く。

「よし、お前らそこに立て」

「……？」

一瞬、考えたが、数人の社員達は一旦2人の侵入者の相手をしていくという命令だと判断してイザヤと侵入者の間に入った。……が。

「ぐはっ」

「！？」

ラウンは、攻撃を避け損なつた。まさか、こんな手に出てくるとは。イザヤは声を上げて愉快そうに笑っている。

1人の社員の身体を突き抜けた刃が、ラウンに到達したのだ。傷は浅いが、動転しかけた。灰骨を乱暴に死者から抜いたイザヤは大きく刀を振り回して、ラウンを刃で巻き付けようとする。それは、ジャンニアの対応が間に合い、二丁拳銃の連発を受けて刀の勢いが逸

れたのでラユニは抜け出す事が出来た。

「ごめん、助かった」

「……今のはやむを得ないだろう」
言っておけば、ラユニに第二撃を加えようとした時にも1人、犠牲になった。

社員達は、これ以上目隠し代わりにされても敵わないということの方々のていで逃げ出した。

「こりゃ残念。壁がなくなっただわ」

イザヤは何と言っこともなさそうに笑う。

「じゃ、力づくでいこうか？」

イザヤ登場（後書き）

こういう女性を書きたかった！（イザヤもジャンニアも）。

「ロマンス？ はあっ??」

そんな戦力の足しになるのかよ」って人々（笑）

決着と離脱

「あの刀をどうにかしないことには……」

数分、あれから経っているが怪我をしているのはラウンとジャンニアばかりだ。

ジャンニアの呟きを聞いてしばらくするとラウンは何か思いついたらしい。イザヤの攻撃を避ける次いでにジャンニアの隣に並ぶと素早く囁いた。

「……無茶を要求するものだ」

「できない？」

「愚問だ。やる」

「んじゃ、やりますか！」

イザヤはゆつくりと、蛇が舌なめずりするように……2人を見ていた。

明らかに、2体1でも自分の力の方が上。――しかし、それは油断に繋がった。

「もついいな！？」

刀を最長まで伸ばしてまず近い方にいるラウンを襲う。小柄な彼はさつと身を伏せるだけで避け、ジャンニアは後退。刀がラウンを追いかけて、背中につけるもまだ浅い。それを意に介する事もなく、ラウンはナイフを斜め上方向に投げた。

「外れ！」

天井に刺さったナイフ。イザヤは嘲笑と共に言う。刀身をラウンに巻き付けようと動かすが。このパターンは繰り返してあり、ラウンはイザヤがこの動きをするのを考えて策を練ったのだった。

ラウンを蛇――灰骨が絡め取る直前、見えぬ糸に引かれたようにその動きが止まる。

「!？」

先程、ラウンが投げたナイフにはワイヤーが付いていた。それが直接灰骨に影響を与えはしなかった、が。イザヤは灰骨でラウンを締め上げようとしたことで、自ら灰骨にワイヤーを巻き付けたのだ。そして、次の瞬間には灰骨の幅数センチという連結部分が弾け飛んだ。

ジャンニアが正確無比の狙いをつけて撃ち抜いたのだ。灰骨は見事、半分になった。

「――小細工をつ」

流石に2人とも、ここでイザヤの攻撃は止まると思っていた。しかし、彼女の戦闘意欲――勝利への欲求は尽きなかった。彼女は切り離された尖端から半分までに何の未練も持たず、床を強く蹴ってジャンニアに直上から斬りかかった。ジャンニアが銃で応戦したが、凄まじい反応能力を見せ、それを刀で払いのけた。

「らあっ!!」

獰猛な声を上げて刀を振り下ろした。しかし。

「無視は酷いね」

驚くようなスピードでラウンが2人の間に滑り込み、2本のナイフで灰骨を抑え込んだ。その機会の逃すジャンニアではない。

素早くイザヤの額を撃ち抜きラウンが僅かに身体をずらした隙間から心臓も撃った。

虚空を睨め付け、イザヤは倒れた。

「済まなかった。助かった」

ジャンニアが一息つくと言ったのでラユンは驚いてしまった。

「へ？ 今、なんて？」

「煩い。仕事が遅い、役立たずと言った」

「やー、照れ屋さんだー（笑）！」

ラユンが今なら大丈夫かとも思ってからかうように言つと。期待はそがれた。

「額と心臓、どちらがいい？」

それとも、胃を撃たれて身体の内部から徐々に」

「いやあつ！！ ごめん、ごめん！！」

軽く鼻を鳴らしたジャンニアは、しばらくしてから灰骨を見やった。

「……確か、レピュスは東大陸大業物を集めなければ命に関わるという事だったな」

「うん」

ラユンも、気付いた。問題に。

「壊れちゃったけど、いいのかな？」

「……レピュス」

ルカは大方片付いた周囲をぐるりと見た。

「行ってもいい？」

「しかし、ボスの命令では幹部4人で……。ジャンニアさんとラユン先輩はこちらに今、向かっているようです」

困惑したように言つレピュスを、ルカは真っ直ぐ見た。

「見逃して」

「……ルカ先輩」

レピュスは、ルカの瞳の中にまた、愚かな子供のような光を見た。しかし、その奥にある感情は子供ではとても持ち得ない、暗く沈んだものだった。

葛藤の末に、レピュスは言った。

「俺は手一杯でルカ先輩の行動まで見張ってられません」
その発言の意図を容易に察したルカは小さな声で

「ありがとう」

とだけ言うと、駆けて行った。実際、敵の数はきりがなし、幹部候補生というのも多いようでレピュス以外、余裕がある者はいない。
『せめて……戻ってきてください』

生きて帰って、6代目アルドを殺していれば、いくらでもレピュスが口裏を合わせる事ができる。謹慎処分くらいで済むかもしれない。

再会

ルカは、一つの場所を目差していた。今も忘れない。足が覚えて
いる。エリエルザの部屋。

平生なら、数キロ走ってもびくともしない心臓が強く脈打ち、掌が
汗で濡れる。きっともうすぐ会えるという希望よりも、会えなかつ
たら、という不安——そして、ヨナを殺した自分を果たして“
姉”は迎えてくれるのかという不安で絞め殺されそうだった。

懐かしきドアに手を掛け、オートロック式であつた事を思い出す。
強くドアを叩いた。
中で物音がする。

「——誰？」

「俺……ルカ」

途端に、ルカが前に倒れかけたほどの勢いでドアが開かれた。

「ルカ——……」

名前をくれた人。

初めて愛した人。

奪われ、取り戻そうとし、別れ別れになった人。

昔と変わらぬ腰までありそうな真っ直ぐ長いブロンズの髪。あまり
にも優しく美しい顔。その頬を涙が伝った。

「ああ……本当に、ルカ……」

「うん。“姉さん”」

「ルカ——……ルカ……！」

抱きしめてくれた“姉”の頭はもう、“弟”の胸までしかない。

ルカは抱きしめかえしたかったのに、手が震えた。

「姉さん……俺」

唇も震えた。心配そうに、ゆっくりとルカを見上げたエリエルザ。

「……ヨナを」

とうとう、床に墜ちた。

「殺した」

エリエルザも冷たい床に、そつと膝をついた。

それから、またルカをゆっくりと抱きしめた。壊れ物に触れるように、そつと優しく。

嗚咽を漏らし始めたルカの背をそつと撫でてやる。

「ヨナはどんな顔してたの？」

「……笑ってた」

「なら、いいのよ」

エリエルザは優しく微笑んで、幼き子供にそつするように頭を撫でてやった。

「ヨナは、ルカと違って何でも顔に出るから。」

笑ってたなら、ヨナは少しも怒ってないわ」

「……姉さんは？」

不安にまみれた子供のような声と瞳。

「ヨナが怒ってないなら、私も怒らない。それにね、ヨナが言っていたの」

「……なんて？」

『こんな生き方してて、碌な死に方出来るはずはねえからな。だから……どうせ死ぬなら姉さんかルカに殺されるわ、俺』

「ヨナはね、本当にあなたが大好きだったのよ。勿論、私もルカとヨナが大好き」

「……俺も」

こんな事を言うのが許されるのか、という気持ちがあったが。すぐに口から出てしまった。

「大好き。ヨナも姉さんも」

エリエルザは笑顔で頷いた。

「なら良いの。ほら、しっかりして」

「……うん」

「……それで、ルカ。今はどうなってるの？」

エリエルザの尋ねた現状をルカはざっと説明する。

「アルド・ワークスが“組織”に攻めてきたから、“組織”はアルドを壊滅させる。今、組織が会社を占領しつつあると思う。

姉さん、俺と逃げよう？」

その言葉により、エリエルザの脳裏に凄絶は記憶が鮮明に浮かんでくる。

それを察したルカは、微笑んだ。

「大丈夫、俺、強くなったから」

全て、この日の為だったのである。

ルカの瞳――深海のような瞳の奥にある揺るぎないものを見てエリエルザも微笑んだ。

「任せるね」

「じゃあ――6代目アルド、殺してくる」

「待つて」

エリエルザは言った。

「5代目アルドに毒殺疑惑があつてからというものの」

「……え？」

「6代目は決まった者しか部屋に入れないの。私はその、決まった者の1人。私が部屋を開けさせるわ」

ルカは驚いてしまっていた。

「まさか、毒殺つて……」

「私でもヨナでもない。」

「……多分、あの子だと思うの。誰もそんな事考えてもいないだろうし、ヨナにも言わなかったけど」

「あの子？」

エリエルザの口から出て来た名前は、大抵の者には意外とされるだろうが……ルカは驚かなかった。

「ユダよ」

ルカの脳裏に、ユダの最期が浮かぶ。最期の留めを差しただけだが、もう少し前から話を聞いていた。

ユダとレピユスは、似ていた。これは間違いがない。だが、違う部分もあった。それは、ユダがルカに似ていた部分だ。ルカとレピユスは、全く違う。

ユダはルカと同じだけ愚かで、そして孤独に責め苛まれていた。昔に数度、会っただけなのに。最近では死相を見ただけなのに、はつきりと判る。

エリエルザはゆっくりと言う。

「私……あの子を助けてあげたかった。だけど、どうにもできなかった……」

ルカはそれにこう応えた。

「姉さんが救おうとしただけで、その相手には救いになるから。」

「だから、ユダは5代目を殺したんだね」

「で、でもそれは確認した事じゃ……」

「姉さんが言うなら、太陽だって西から昇る」

「そういうところは変わらないのね！ 変な子！」

エリエルザはこんな時なのに、とても幸せそうに笑った。
ル力はもう、何でも出来る気がした。

早く6代目を倒してしまおう。

そして、“姉さん”を連れて帰ろう。

組織を除名されたとしても、大丈夫。

“姉さん”となら、どこでも生きていけるはずだ。

絶望と共に「アイ」は消ゆ

ルカとエリエルザはアルド社の中階まで行き、社長室の前に立った。

「準備はいい？」

「姉さんが大丈夫？」

先に聞いてきたエリエルザの方が余程緊張しているので、ルカは微笑んでしまった。だが、頷いてエリエルザがドアと向かい合ってからは顔つきをひきしめる。

「そうだ、待つて」

ルカは思い出して、止めた。

「どうしたの？」

「姉さん……俺に、何かあったら……金髪黒目のガキを頼つて」
エリエルザの表情がさっと険しくなる。

「……何か……つて」

「何があるか、……判らないし」

今にも泣きそうな顔をしたエリエルザだが、すぐに平静を取り戻し、“弟”の手をしっかりと握る。

「……判つた……けど。いなくなったり、しないかね？」

「うん」

エリエルザがドアをノックした。

「社長……私、エリエルザです。開けてください」

オートロックの外れる音が、あっさりと聞こえた。

「ルカ、そこに。私が入ってから、来て」

ルカはドアのすぐわき、中からは見えないところに背を貼り付けるようにして立った。エリエルザがドアを開く。

「どうした？」

さっきまで内線で連絡を取り合っていたのだろうか、片手に受話器を持っていた。顔をあげ、美しい妻を見たシモンの表情が凍り付いた。

「ヨナ！？……いや、お前は……ルカ！！」

固まった表情はどんどん青ざめる。

自分達親子への、ルカの持つ憎しみを知らぬわけではない。ルカの瞳の奥の憎しみの炎を見れば、彼が自分をどうするつもりなのかは自ずと知れた。

勝ち目が無い事は判っていた。

ルカは、そつとエリエルザをわきへ動かすと前に進んだ。

「……シモン・テラフイム……カナン・テラフイムの息子」

罪人の名を告げるように淡々としていた。

シモンの身体は震える。

「な、何故……！ イザヤ達は……」

「ウチの連中が始末した。」

あとは、俺がお前を殺すだけ」

死の宣告を受け、シモンはさすがのようにエリエルザを見るが、彼女が熱心に見ているのは自分ではなく死神の方だった。

この死神は、必ずや殺そうとしてくる。一縷の躊躇いさえなく。

だが、慌てる事はしなかった。

あるのは小さな不安。本当に「作動」するかどうか。

取り敢えず、1秒でも時間要る。

「……ルカ？」

「お前なんかと呼ばれたくない」

「そ、それは済まない……」

だが、君が私を殺す理由はどこにある？ 君からエリエルザを奪ったのは、私の父だ。

親の罪は子が被るべきだなどという、浅はかな思考の持ち主だとは思えないが」

ルカは、黙れという代わりにシモンの肩を一瞬で取り出した銃で撃った。

「うぐっ」

「やっぱり、名前だけの大将か。」

姉さん、こいつ、殺すよ？」

「……ええ」

エリエルザは決して目を反らさず、ルカへの全幅の信頼を持って再会を望み続けた“弟”と、望まなかった夫を見据えた。

その間、シモンはこっそりと引き出しを開けた。ここに「切り札」がある。

ルカが背負っていたものを下ろし、黒い包みを開いた。それは - 宝剣の6番目、雷電の牙であった。エリエルザの息を飲む音が聞こえた。

「ルカ……それは……ヨナの」

ルカはゆったりと振り返った。

「厭がるかな、ヨナ？」

エリエルザは目を閉じた。

「あなたに任せると思う」

「うん」

微笑んだルカは天使のように優しく、美しかった。

ルカは剣を持ち上げ、1つの躊躇いもなく振り上げ、下ろす。

全て終わったと信じた――のに。

あまりにも突然で……。

エリエルザは声も出せなかった。

彼女の目に映っているのは、彼女たち“姉弟”の人生を翻弄した
アルド社の最高責任者だけであつた。

ヒルナツビバック(前書き)

He·ll not be back.
ってことです。

ヒルナツビバツク

「ルカは……どこ？」

自分は今まで、夢を見ていて……実際にはルカと再会などしていなかったのが現実なのでは？ そうとさえ疑いたくなかったが。だが、まだ目の奥に愛する“弟”の微笑みが残っている。いつそ、夢だったなら、良かったのだらうか。

「ねえ」

最悪の事態が脳裏を駆け抜ける。
生暖かい雫が頬を伝う。

「ルカはどこ？」

シモンは薄く笑った。

「誰にも判らない。」

この部屋には『主』として登録された者が命の危機に瀕した時に発動し、加害者をこの空間から排除するという優秀な仕掛けがある」

「ルカを……ルカとヨナを返してっ！！」

悲鳴に近い。

「馬鹿な事を言う。ヨナを殺したのはルカだ」

「あなた達の所為よ……」。

こんな……こんな会社が無ければ。

あの組織と戦う事になれば、ルカとヨナが戦うことになるかと判っていたくせにっ！！」

その空色の瞳には、かつてない絶望と激しい怒りの色が現れていた。シモンは挑発するように笑う。

「全く！ 大した“姉弟”だ！ 私を見るその目、ルカにそっくりだぞ！」

「黙って、気安くあの子達の名前を呼ばないでっ!!」
エリエルザは、床に堕ちていた雷電の牙を引っ掴んだ。

振り上げた――時。

肩にそつと手が置かれた。

「エリエルザさんですね」

金髪、黒目の少年。

「……ルカ先輩は」

エリエルザは、脱力して剣を手から滑り落とすと、それに続くように床に膝を着いてしまった。

「消えてしまった――消されてしまった……ルカ……」
しばらく、嗚咽のみが静けさに充ちた空間を支配した。

破ったのはシモンである。

「組織の者か」

「――アルド社、社長……シモン・テラフィム？」

「その通りだ。だが、殺すのはやめておけ」
にたりと笑う。

「ルカの二の舞にな」

「ふざけるなっ!――!」

シモンが数センチ後退した程の鋭い怒声が言葉を遮った。

「あの人が……ルカ先輩が、お前みたいな奴に負けるはずがない。」

「答える、あの人はどこだ!？」

「気迫に押され、しどろもどろになるシモン。」

「わ……私も判らない! ほ、本当だっ!!」

「この部屋の、東方魔術で……」

レピュスは、風采の上からぬ小男の首を締め上げた。

「術士は誰だ」

「し、知らない! 先代からのものを、引き継いで管理しているだけで……」

レピュスはしばらくそのままにしていたが、急に馬鹿らしくなっ

て、シモンを床に叩きつけるように下ろした。

「うっ」

「ラズ、ドライグ」

後ろに控えていた2人を呼ぶ。

「こいつを拘束しろ。即刻、ジュリー殿へ引き渡す。」

ルネア、ディアナ、この人……エリエルザさんを頼む。ルカ先輩の大切な人だ。一時、組織で保護する。ボスへの説明は俺がするから」

後ろにいた女性2人も了解を示した。

「立てますか?」

ルネアが優しく声を掛けるとエリエルザは細く弱い声で

「ごめんなさい……」

と。

ディアナがすぐに横抱きにして持ち上げた。

未練ありげに部屋を睨み、ルカの行方を考えていたレピュスだが、ラズの声で意識を戻す。

「あっ！」

「どうした？」

と……みるみるうちに、シモンの顔は土気色に変わり……首がかくんとうなだれた。

「……脈」

レピュスの短い命令に

「無いですね」

と、ドライグ。顔をしかめたレピュスを見て、ラズが頭を下げる。

「注意が足りなかった……ごめん」

だが、レピュスは肩から息を吐いただけだった。

「自殺は仕方ない。口内に毒でも入れていたんだろ……」

……偽装の可能性もあるから、取り敢えずノエルに見て貰う」

「わ、判った……呼んでくる」

ラズは駆けだしていった。

ジャンニアとラウンが、入れ代わりでやってくる。

「どうなったの？」

ラウンがぐりとその場を見渡して問いかけた。

「……シモンは恐らく、服毒による自殺。ルカ先輩は……不明」

「不明、だと？」

ジャンニアが厳しく言った。

「シモンの言った事を信じるのならば、東方魔術で“どこか”へ送り出されたようです」

「……確認は？」

「不可能だそうです。術士が誰なのかも……」

そこでレピュスは、未だ冷めやらない怒りも、湧き上がる……
・恐らくは哀しみという感情も忘れた。

「何の音？」

ラユニが声に出した。

ガラガラ……と何かが崩れるような音がしたかと思うと、建物が揺れ始めた。

「まさか、……何かしたのか」

ジャンニアは、気を失っているシモンを睨み据えた。

「多分、ここが崩壊するんだ。」

急いで撤退命令を！

ラユニに言われるまでもなく、ジャンニアは無線全機へと命令を下した。

「生存者はこれで全部か」

ジャンニアの確認に、まだぼけつとしたままの者達は互いを見合つて頷いた。

イザヤにやられた魔導士部隊と、数名の3級幹部が犠牲になった程度であり入った時と人数は大して変わっていない。……人数は。

「ルカ……」

ディアナの腕の中にいるエリエルザは、喉が涸れてしまつのではないかと心配になるほど……ずっとその名を呼び続けていた。任務中でさえなかったら、組織の中にも泣き崩れていた者がいたかもしれない。空が彼らの代わりに生暖かい雨を、涙を降らせていた。

「レピユス？」

ラユンは、崩壊した建物に向かっていくレピユスを驚いて見た。

「ビルの中にいて、逃げ遅れたのかも」

誰の事を言っているかは判るが、冷静に考えればそんな事は、ありえない。

「レピユス、ルカさんは……」

「……」

レピユスは無言で、ひたすら瓦礫を動かしていた。雨に打たれて顔に張り付く髪も気にせず、ひたすらに捜していた。

誰一人として、手伝いに駆け寄る事も、無駄だからやめると声を掛ける事も出来なかった。

レピユスが動かす、崩壊したビルの破片が立てる音とエリエルザの切なくルカを呼ぶ声だけが雨空に響いていた。

彼は、戻ってこない。

ヒルナツビバック（後書き）

アルド編はこれにて幕。

少しの間、精神面の問題に当たった後、ダーク・ペガサス編（ルシエルとユウ中心）へいこうと予定しています。

搜索の手立て（前書き）

しばらく、派手な行動は無いです。

搜索の手立て

「ハゾス、これをどう見る？」

ボスの問い掛けにハゾスは数秒考えてから応える。

「恐らく、東方魔術があゝの建物全体にも仕掛けられていたのでしょう。」

それから、ルカの件ですが……魔導でいうところの、時空歪曲系魔導に似ていますね。

となると、彼は別の場所——又は、最悪別の時に転送されたということになります」

「つまり、搜索は非常に困難……か」

そう言ったボスをじつと見るハゾス。

「忘れていませんか？」

むしろ、ゆつたりと言った。

「彼は幹部でありながら、命令違反をし、その上での消失です。ここにいれば、除名処分を受けている状況なのです。その彼を搜索する、など」

珍しく、ボスは不意を突かれたような顔をした。

だが早くも平生の調子を取り戻し、苦笑した。

「鋭いね、ハゾス。」

言うとおりで……。我々は彼を捜すことができない

「我々以外、なら好きにできますがね」

ハゾスの言外に含まれた意図は明白だった。ボスはうなずいて呟く。

「彼女を頼ってみるかな」

それからハゾスに向き直った。

「忙しいところを悪かったね。戻っていいよ」

「あなたのお呼び出しとあればいつでも」

くすり……と笑い、ハゾスは退室した。

ボスはすぐにレピュスを呼んだ。

忘れかけていたが、彼が「彼女」のところに行く理由があるのだ。

「やあ、元気になったようだね」

レピュスは決まり悪そうに苦笑した。

「今回は本当に……情けないです」

「風邪なんて、君もひくんだねえ」

あの後、何時間も強くなるばかりの雨の中、搜索を続けて……その結果だ。

数日寝込んで、その間に何とか精神面も立ち直らせる事が出来た。

「まあ、それはいい。」

君に連絡と命令だ」

「はい」

レピュスは背筋を正した。

「まず、連絡。ロデオ——既に裏から足を洗っているんだから、ロザリアと呼ぶべきだね——から、東大陸大業物が手に入ったから取りに來いという話がある。

そして、命令。コレをロザリアに渡して、ローザバーク卿の情報網をルカ搜索に使ってもらえるよう頼んでもらって」

ルカ、という名にレピュスの肩がびくりと震えた。

大業物より、ルカに強い感情を示したのはボスにも意外であった。

「両方、いいね？」

「はい」

レピュスはきつちり頭を下げた。

組織でルカを搜索できない理由についてはレピュスも、説明されずとも判る。——ロザリアがどんな事情であれ、組織を抜けていて助かった。

*

ローザバーク邸……。少なくともレピュスは、ランカスター邸よりは余程好感を持った。静けさの広がる落ち着いた郊外にあるという事も理由の1つであるが、旧式のたたずまいで、装飾は少ない。高貴な印象ながら、さっぱりとした様子で、持ち主を表しているならローザバーク卿はなかなかの好人物に違いないと予想される。

扉も古い型のドアベルがついている。長い音が響くと、品の良い老執事がそれを開いた。

「連絡を入れていたロザリア殿の知人、レピュスです」

「お待ちしておりました。客室にご案内致します」

にこやかに、背広の似合う好紳士は案内をしてくれた。

廊下も外見を裏切らず、高品質を思わせながら余計な装飾のないシンプルな造り。木造の床、壁と調和した優しい明りで控えめに照らされている。

「こちらです。どうぞ、お入りください」

「どうも」

丁寧に通されたのは、きれいに整った大部屋。中央には円卓があり、椅子は6つ用意されている。どれにも細かい装飾が施されている。アンティークだろう。天井は飾り気の少ないシャンデリア。既に、紅茶が用意されていた。

椅子は既に4つ、埋まっている。

1つには老齡の紳士。どう考えても、ローザバーク卿だろう。優しそうな微笑みの、品の良い人。シャツにベストという、気取らない、ゆったりとした格好。

次は若い男。なるほどこれが、と思わせる父親と同じく品の良さにじみ出ている青年、ジュナス。シンプルなグレーのスーツがよく似合う美男。細くしなやかな体つきで、笑みも優しい。しかし、瞳の力強さから相当な芯の強さもうかがえる。父親を説得して、大貴族にも関わらず元殺し屋と結婚したのだから。意思が弱いわけはな

いが。

そして、隣が言うまでもない、ロデオ——ロザリア。以前まで着ていたのと殆ど変らない、動きやすさを重視したスタイル。ただ、長く美しいブロンズの髪はゆわかず、背中にまっすぐ垂らしている。正直、レピュスはロザリアがいきなりドレススタイルになっただけで安心した。

横には、相変わらず、クラウスがちょこんと座っている。彼女にしても今までのスタイルをそう簡単には捨てられないようで、大人の男物の服を使っている。ただ、フードで顔を隠すことはもうしないらしい。金髪の可愛いツインテールはおなじみだ。

「やあ、久しぶり」

スタイル
格好は殆ど変化ないが、口を開くと、どこかがやはり違う。何となく、何気ない一言が優しい——これが彼女の本性なのかもしれない。そうも思えた。

「どうも、……ローザバーク卿、ジュナス殿、“組織”のレピュスです」

バルフォアは微笑んだ。

「初めまして、レピュス君。いきなり失礼だが、そちらが紫水かな？」

武器に並みならぬ関心があるのは本当らしい。きらきらと、子供のような目で刀に注目している。ロザリアが、可能なら紫水を持ってくるようにと手紙に書いていたのはこういう意味があったようだ。

……こんな期待に沿うような刀ではないのに、と思いつつ頷いたレピュス。

「ふむ、一見すると普通の刀としか見えない、というのはここにあるものと同じだな」

そう言っ、バルフォアが示した刀。正直に言えば、レピュスはこちらに集中力を奪われて自己紹介の段階で気もそぞろだった。

「本物だと思うけど。確認してくれる？」

ロザリアに頷き、手に取った。鞘の色は黒。柄は白。静かに鞘から抜き放つと、刃はぼうつと光を帯びた。

「不思議だな！ 私が触った時は何ともなかったのに」

バルフォアの無邪気な驚きの声が聞こえた。

直刃の刀身を包むのは、藍色の光。長さでいうと、紅夜叉の3分の2程度。短刀と呼ぶほどではないが、短いほうだ。

「銘は……？」

「藍黄泉あきよみというそうだ。確かに、その光は藍色だな」

感心しっぱなしのバルフォアである。レピュスは刀身を鞘に収めた。「間違いないと、思います。」

わざわざありがとうございました」

レピュスが改めてバルフォアに礼を言うと、彼は微笑んだ。

「いやいや、私は珍しい武器が見られればそれでいいからね。年寄りの道楽が前途ある若者の役に立って、何よりだ」

前途ある——……。

あるのだろうか。

数日前、第五型を使用した時の呪いの進行は今までにないほど、大きなものだった。相手が大業物使いだったことや、レピュス自身の精神こころが大いに動揺していたことと関係がないのなら……。次に第五型を使えば、死ぬかもしれない。

「大丈夫？」

「……え」

ジュナスが心配そうに言ってくれたのだった。

「会って早々だけど。最初から顔色が悪かったよね」

「具合、悪いの？」

全く、人の良い夫婦である。

「いや、大丈夫……疲れてるだけ……」

「ならいいけど」

2つの「大切」(前書き)

大切なモノや人って、1つには絞りきれないと思うんですよね。

2つの「大切」

そこで、クラウドが口を挟む。

「あの話はしなくていいんですか？」

「そうだ、忘れるところだった」

ロザリアは笑った

「呑気な話で申し訳ないんだけどね。

私達、式は開かないで、この家で——まあ、ホームパーティーに留めるんだけど」

「てつきり、盛大にやるのかと思った」

レピュスが率直に言うのと、ロザリアは苦笑した。

「私の前歴の所為でね」

「まあ、手間が掛らなくていいよ」

笑ってフォローするジュナス。

「で、君に来てもらいたいって話」

「……へ？」

「何をそんなに驚くかな！」

あまりにも、レピュスがぼけつとしたのでロザリアとクラウドどころかジュナスとバルフォアまでが笑った。

「半分以上、レピュスのお陰なんだから」

「ええと……じゃあ、お言葉に甘えて」

「噂のガールフレンド、連れてきてもいいしね」

レピュスは、固まった。そして、苦い顔をしたのでロザリアは困った。

「ええと……ごめん？」

「いや、別に……。何というか……うん」

もう、口をきいてもらえなくても驚かない。彼女には本当に——申し訳なかった。

後悔の塊になったレピュスは自ら、強引に話を変えた。

「ええと、それで。」

めでたい話から申し訳ないんだけど、……頼みごとがあつて」

「私とクラウスだけのほうがいい？」

言い出しにくい事を的確に言ってくれて助かったと思いつつ、レピュスはうなずいた。

「なら、私達は外そうか、ジュナス」

「ああ、私らが動きますよ。」

おいで、レピュス」

ロザリアがさつさと動き出したのでレピュスも急いで続く。

ロザリアの私室は、驚く程にそつけない。当然、家具の類はローザバーク邸のものをそのまま使用しているから高級感のある代物ばかりだが、彼女の趣味で模様替えなどはしていないらしい。もしかしたら、これがロザリアの趣味かもしれないが。

ただし、広い部屋である。高級ホテルもかくやという広さ。ミニティア・ランカスターの部屋よりも広いかも。

ふかふかしたベッドにロザリアとクラウスが並んで座り、レピュスは綿密な細工が施されたアンティーク調の椅子を勧められた。

「で……頼みごとは、君の表情が浮かない事と関係があるのかな」

「紅夜叉を見つけた時と随分、様子が違いますね」

観察力の鋭い2人の女性。

「……そう、かな。」

悪いけど、すごく暗い話で特にあんたには不快かも」

「話してみて」

レピュスは決めていた。ルカが話してくれた彼の過去を、今日の頼みごと共々話してしまうことを。

「ルカ先輩のこと、なんだけど」

まず、昔話をした。

ヨナの事、エリエルザの事……。

ロザリアは優しく笑った。

「やっぱりね」

「……？」

些か、レピユスの想像とずれた反応だ。

驚くか、もしくは心に一番大切な女性^{ひと}——“姉”としてであっても

——を持ちながら自らへの愛を告げたことへ呆れるか何かすると思
ったのだが。

「そんな素敵な“姉さん”だとは思ってなかったけど。判ってたんだ。

あの人の一番は絶対、本人が例えそう思い込んでいても、私じゃないって。

不思議なものだけども、その人が自分を一番想ってくれてることはなかなか気づけないけど、その人の一番が自分じゃないって事にはすぐ気付けるんだよね。

経験あるんじゃない？」

ぎくりとしたレピユスに対し、ロザリアは優しく笑った。

「私、あの人が好きだった」

「——え？」

「昔の話だよ。会ってすぐから、2、3年。だけど、だから判った。この人の心はもう、誰か、私の知らない人が占めてるって。

だからさ」

なつかしむような瞳で続ける。

「あの人に好きって言われた時は、すごく嬉しかったけど、むかついたの。代わりにされるんだな……って。そんな意図はなかったと思うんだけどね。

あと、厭だった。一番、大事なものから目をそらしてほしくなかった。

ってことで色々とかちゃごちゃになって。逃亡したわけさ。やな女

だねー私」

笑って締めたロザリアだが。レピュスは驚いて、口もきけなかった。それから、何故か嬉しかった。

—— きっと、ルカの想いがただ踏みにじられたのではないと判ったから。

「それで？　なんで、その話を？」

「うん。こつからまあ……とんでもない話になるんだけど」

先日まで行われていた、対アルド・ワークスの戦いについて語り、ルカの現状を説明した。

「詳細は、これ」

レピュスから受け取ったボスの説明書類をロザリアは夢中で読み、青ざめた。

「—— 酷い」

「……うん」

「エリエルザさん、は？」

「組織で保護してるけど……。食事も殆ど喉を通らない状態で、言葉も最低限しか発しないらしい」

「酷い」

ロザリアは、うなだれた。

「何で……折角、会えたのに」

「それで、ルカ先輩は任務中命令違反を行ったから、組織を除名された。だから組織はあの人を捜せない」

ロザリアはうなずいた。

「私が探す」

「それを頼みに来たんだ」

「ローザバーク卿にも頼んでおくね。協力してくれるはず」

「……ありがとう。—— 本当に。」

折角組織を離れたのに、組織の事に巻き込んだりして……」
ロザリアは優しく告げる。

「この事は、全部任せてくれていい。心配しなくていいよ？ 『今』も『昔』も……私にとってはどちらも大切なんだから。少しも迷惑じゃない。」

だから、君は君の考えるべきことを考えればいいよ。あと」

いきなり——レピユスの頬をぐつと引っ張った。

「笑いなさい！ いいね？」

「……？」

「笑うと、楽になる」

不意に——レピユスの目から滴が落ちた。

ロザリアは微笑む。

「ごめん、痛かった？」

痛いから泣いているのではない事は判っているはずだ。鋭い彼女には。しかし、そう言ってくれた。

「……すげー、痛い」

「ごめんごめん」

こんな資格はないと思いながら。

レピユスは、ロデオがロザリアに戻れてよかったと思った。

彼女が幸せになれてよかったと思う。

いつか、こんな風に笑えたら……そうまで思って、目を閉じた。

まあ、いい。思うのは勝手だ。滑稽だろうと構わない。叶わぬ夢でも構わない。

和解と相談

ロザリアが了承したことを伝えるとボスはどうか - - 非常に珍しいことに - - ほっとした様子を見せた。

「良かった」

と、声にも出した。

「それから、1ついいかな」

「はい」

「エリエルザに会ってみてくれる？」

ルカが君に彼女を頼むと言ったように、彼女もルカに“金髪黒目のガキを頼れ”と言われたようだから

レピュスは、不安を感じつつ頷いた。

保護した時……あの、壊れてしまいそうな姿がやけにはつきり、目の裏に残っている。自分がどうこうできる問題でないと思える。だが、放っておくこともできない。

綺麗に整備された通路を歩き、教えられたドアを叩いた。医療部隊の至近にある建物である。彼女も、体調を崩していたらしい。それは快方に向かっているというが……。内側は、相変わらずしいとも聞いた。

「……はい」

しばらくすると、蚊の啼くような細い返事があったので

「レピュスです。覚えてますか」

と声を掛けると、ドアが向こうから開かれた。

「……どうしたの？」

もしかしたら、ルカの言葉もあって、レピュスにだけは幾らか心を開くつもりがあるのかもしれない。聞いていたよりも、しっかりとした態度。ただし、顔色が悪すぎる。それから、ここまで痩せてい

なかったはずだ。今にも折れそうな、小枝のようだった。笑顔は小さく、弱々しいを超えて痛々しい。無理に笑わなくてもいいと、言っ
てやりたくなる。

「ええと……その。どうしているかと」

何と、気の利かない台詞だろうと自分事ながら呆れた。

「……入る？」

「……どうも」

部屋は暗かった。電灯を点けていないらしい。窓の外の明かりし
がなく、薄暗い。中央のテーブルを挟んだ2脚の椅子のうち1つを
レピュスに勧めると、彼女も座った。

どちらも口をきかなかったが……エリエルザが小さく問いかけた。

「ルカはどこ……ですか」

レピュスは、冷たい銃口を突きつけられたような気さえた。何と
か、氣力を振り絞って答える。

「まだ……判りません。」

ですが、先輩の……知人が捜してくれています」

「そう」

エリエルザはレピュスを見て、微笑んだ。

「ごめんなさい、困ってるでしょ？」

「……いえ、ルカ先輩に頼まれた事です。あなたを、宜しく頼むと」

「ごめんなさい」

「……謝らないでください」

「ええ……」

それから数分、黙りこくった挙げ句、レピュスは退室した。

誰なら、彼女を救えるだろう。

自分では駄目だ。

ボスにも無理。

暗殺部隊の人間では駄目だ。

そこで、答えが出た。だが――それこそ、難問だ。

「……………“カレン”」

1日中、考えていた。

イリスと会って、話す必要がある。だが、どうやって会えばいい？
どんな顔をすればいい？

もう1日、無為な時間を過ごして、とうとう決心した。
何の決心がついたかといえば、レピュスは自嘲したことに、イリスに嫌われる決心をつけたのだ。

情報部へ向かって歩く。何回か、最悪のパターンを想定して心の準備をしていると……………。

「レピュス？」

「！」

数センチ、飛び上がったかもしれない。

「ご、ごめん、驚かせて」

「い、いや……………驚いてごめん」

イリスは、少し笑った。

「大丈夫だった？」

「……………何、が？」

「熱出して、寝込んでたって……………サツズさんが」

「あの人……………」

情報部局長サツズ……………何でも、レピュスの事情をイリスに話すくせ

は直して欲しいと彼は願った。

「お見舞いに行こうとも思っただけど……」
途端に気まずそうに笑う。

レピュスは……次の瞬間、自分のとった行動に自分が驚いた。

「ごめん！」

がばつと頭を下げた。

「……へ？」

「この前……折角……心配してくれたのに……その……」

「あんな事……」

すると、イリスは笑い出した。

「あははっ、はは……！」

「ええ……と？」

もはや、戸惑うしかないレピュス。

「そんなに……変？」

「そうじゃないの」

まだ笑いながらイリス。

「私、レピュスが頭下げて謝る、なんてするとは思わなかったから。
ボスなんかにはともかく……」

それは、なかなか心外であった。

「いや、俺だつて、謝るくらい……」

「というか、私がレピュスに謝ろうとしてたんだよ」

笑い泣きの涙を忙しく拭いながら言うイリス。

「……な、何で。」

悪いのは俺だつたし」

「余計な事、言っちゃったんだな……って後悔したの。怒らせちゃった……って。」

だから、謝りたくて声掛けたの。そしたら、謝られるんだもん」

笑ったイリスは、とても嬉しそうだった。

「安心したあ。こっちこそごめんね」

「イリスが謝る必要は無いよ」

「優しいね。」

ありがとう」

また言われた。

『何で……？？』

「それで、どうしてこっちに？ 珍しい、よね」

「実は、聞いてもらいたい話……というか、相談が」

「うん」

少々長くなるからと、地下内部にある食堂という名のレストランに入った。

話が終わるまでに、コーヒーは2杯必要だった。

「その、エリエルザさんと……私が？」

「嫌ならいいんだけど」

レピユスが慌てて言うといリスはううん、と首を横に。

「でも、上手い事、言えないよ？」

「いいんだ。とりあえず、俺よりはエリエルザさんも気が楽なんじゃないかと思うんだよな」

「うん、じゃあ、会ってみるね」

イリスは小さな溜息をついた。

「どうして……辛い事ばかりなんだろうね。」

ルカさん……あんなに、……」

その後は、どんな言葉が続けばいいか判らなかった。軽々しく、

数度関わっただけの自分が何か言っで良い気もしない。

「また、会えるといいよね」

それだけ言っで、レピユスは頷いた。

エリエルザとルカがまた、という意味でもあるようだし、レピユス
もきつと、またルカに会いたいのだろう。

和解と相談（後書き）

可愛い女の子を書くのが一番楽しい（笑）。次が綺麗な女の人かな（オイ）

対面

「じゃあ、連れてつてくれる?」

「……もう!？」

「善は急げ、つていうでしょ? 善、になるかは判らないけど」

そつえば、イリスは決断の早い人だったなとレピュスは思いだした。

「それとね」

食堂を離れ、歩き始めてからイリス。

「ロザリアさんにも会ってみたら……つて、提案していいと思う?」

「ロザリア?」

レピュスは、彼女の話も聞かせておいたのだった。

「上手く言えないけど……ルカさんの話するなら、私とより、ロザリアさんの方が良いと思うの。」

あ……でも、ロザリアさんをあんまり引っ張り回したら旦那さんが怒るかな?」

レピュスは思わず、噴き出した。

まだ慣れない。

世界に名を馳せた殺し屋がジュナス・レオ・ローザバーク夫人として扱われるのには非常なる違和感が伴う。

「笑ったら失礼だよ!」

見透かしたようにイリス。

「いや……うん」

これは、一方的に反省するしかないレピュス。

ただし、ジュナスの印象から言っておけば……。

「ジュナスさんは多分、気にしないと思う。」

てか、気が長くて温和で、辛抱強くないとロザリアとなんてやって

いけないよ」

「なにそれ！」

イリスは笑っているが……レピュスは真面目だ。

そうしている間に、エリエルザの部屋に着いた。

「え、えっと、紹介？　お願い」

流石にイリスも緊張しているようだ。

「判った」

レピュス本人も緊張している。

ノックに応じる声はやはり、耳を澄まさなければ聞こえない。

「レピュスです。今、大丈夫ですか」

「……ええ、どうぞ」

ゆっくりと中に入った。

相変わらず、レピュスが初めて入った時と部屋の様子は変わらない。そして、部屋の主は……。

「大丈夫、ですか」

とうとう、レピュスは問いかけた。

いつ倒れてもおかしくない痩せ方だ。

「大丈夫です」

どう考えても、嘘だ。

「そちらは？」

エリエルザは少しの関心を持って、イリスを見た。

「イリス……この組織の情報部所属で、俺の……ええと友人です。

勝手は承知ですけど、何か話して楽になるなら……。俺なんかとり、彼女の方がいいと思ったので」

「気を遣わせてごめんなさい」

また、見る者に涙よりも強く、絶望を伝える笑みを見せた。

「いえ……その」

「イリス、さん？」

「はい」

エリエルザはイリスをじつと見て……何か感じたのだろうか。少し、笑みから絶望を薄めた。

「よければ、座って？」

「は、はい！ えっと。じゃあ」

「俺は出てるから」

レピュスはさつさと外へ出た。何となく……上手く行く気がした。

「話……レピュスに全部、聞きました」

「そう」

「あの、私……ルカさんの事、全然判らないし、ヨナさんとは会った事もないし、エリエルザさんとは初対面ですけど……その……」

イリスが口ごもると、エリエルザはそつと促す。

「遠慮しないで？」

「は……はい。」

あの、お会いして……思っただけです。厭だ、って」

「厭？」

どこか、意外そうにエリエルザは首を傾げた。

……何日かぶりに、感情が戻ってくるのをエリエルザは実感していた。不思議と、この少女には興味を引かれるようだった。

イリスは、勢いに乗ったように続ける。

「エリエルザさんが、悲しんで……傷ついたままで……苦しそうに

笑っただけなんて、厭です。

私の大切な人がそんな風になったら――厭です。しかも、自分の所為で。

ルカさんも、きつと、そうです。――私をそんな風に思ってくれてる人はいないんですけど、でも思っんです。笑って、待ってて欲しいって」

「でも、ルカとヨナは――」

イリスは力を込めて言う。

「ヨナさんは、亡くなりました……けど、ルカさんは生きてます」

エリエルザは、はつと顔を上げた。

「だけど」

「本当です。どこにいるのか、判らないだけです。レピユス、言っ
てました。

彼は――そりゃあ、騙し討ちが真骨頂みたいところありますけど――

――そういう嘘はつきません！」

エリエルザは驚いた様子。イリスは慌てて弁解する。

「えつと、その……いきなり現れて勝手な事ばかり……ごめんな
さい」

恥じ入るように、申し訳なさそうに顔を臥せた。だが、エリエルザは優しい声でイリスの予想をかなり外れた、意外ともいえる事を口にした。

「イリスさんは、レピユスさんがとても好きなのね」

「えつと……ええっ?!」

「そうなんですよ?」

エリエルザが――笑った。

会ったばかりのイリスにさえ、これがどれだけ意味のある事かは理解できた。そして、本当に久し振りに笑ったのだろっ。どこか、ぎこちない。だが、笑った。

……きつと、――よく判らないし、自覚もないが役に立てたの

だろうと思った。

「そう……なんだと思います。だけど」

こちらは“苦”笑になってしまふ。苦い気持ちなのだから、仕方ない。

「レピユスの生き方――道には、迷惑でしかないんですよ。

優しいから、怒ったりしなかったけど……苛立たせてしまったと思います」

今度は、寂しそうな顔をするエリエルザ。

『私の事なのに……』

さっきまで、崩れ落ちそうだった彼女が、今はイリスの心配をしている。それがイリスには驚きであり、これだけで彼女が素晴らしい人なのだと思えた。情けない、申し訳ないという気持ちよりもその思い、尊敬の念が大きく感じられて、また自分の事を喋ってしまう。

「私……」

そんな必要ないし、聞かれてもいないが自身の生い立ちを話した。エリエルザに少しでも自分の事をよく知ってもらいたかったから……、という理由には後から気が付いた。

名前をくれた人

静かに聞いていたエリエルザは、

「良かったわね」

と優しく笑った。

イリスは、同情されるものと思っていた。

だが、「大変だったね」と言われるより、ずっと嬉しかった。自分で選んだ未来を、そつと肯定してもらえた気がした。

「はい」

素直に頷く。

「だから、全部……レピュスのお陰です。

きつと、そんなつもり無かっただろうけど……。私に前を向かせてくれたんです。

見るのをやめていたものを見て、決めるのを諦めていたものを決める……希望をくれました」

エリエルザは、優しくイリスを見つめた。

「レピュスさんは、幸せね。

イリスさんに、そんな風に言ってもらえて」

「そ、そんな……迷惑掛けてるだけです」

「いいえ。誰だって、誰かの為に生きられる事は幸せよ。

私は……結果的に多くの人を不幸にしたわ。私がいなければ、ルカとヨナは……」

「違います！」

こんなに大きな声を出したというのに、エリエルザよりもイリス自身に驚いた。

「あ、ごめんなさい。でも、……でも、違います。

私、聞いただけですけど……それでも、判ります」

イリスは微笑んだ。

「実は私、初めてルカさんに会ったとき……何を話したらいいか判らなくて。」

『ルカ』って名前、素敵ですね……って言ったんです」

「……ええ」

「ルカさん、その時……。」

エリエルザさんみたいに笑ってました」

不意を突かれたように、エリエルザは目を大きくした。

「凄く、綺麗で優しく……。天使みたいでした」

言ってから、顔を赤くした。

「すみません！ 変な事言いました！」

「……だから、ルカさんはエリエルザさんのくれた名前を何よりも大切に思ってたんだって。名前をくれたエリエルザさんが好きだった……いえ、今でも大好きなんです。」

だから、エリエルザさんは人を不幸にしてなんていないです。

ルカさんは……きっとヨナさんも、エリエルザさんに会えて、幸せになれたはずです。だから、エリエルザさんは自分を否定しないでください。ルカさんとヨナさんが悲しむと思うし……。初めに言いましたけど、私も厭です」

エリエルザはじつとイリスを見つめていたが、やがてすっと立ち上がった。

そして、イリスを抱きしめた。

「え……と」

「ごめんね、しばらく、こうさせて」

「……はい」

「ありがとう」

「はい……」

その後、エリエルザは思いついたように紅茶を淹れてくれた。とても、美味しかった。

「すごい美味しいです！ 教えてほしいくらい……」

「あら、いいわよ」

2人で笑い合った。

「じゃあ、今度、お願いします」

「…… なんだか不思議」

自分も紅茶を飲み、置いてあった茶菓子もつまみながらエリエルザはぼつりと言った。

「さっきまでね、どうやって死のうか、考えてたの」

「えっ、ええっ！？ だめ、だめです！」

イリスが必死に言うと、エリエルザは安心させるように笑った。

「もう考えてないわ。なんだか、元気になっちゃった……。イリスさんのお陰ね。」

本当に、不思議。…… どうして、こんなにイリスさんといると楽なのかしら」

ちよつと首を傾げてから、遠慮がちにイリスは

「…… 失礼ですけど……。ちよつと、似てるから？」と。

「ああ、そつか。…… そうかもね」

内面の方が、よく似ている2人。

「なんだか、嬉しい」

本当に嬉しそうに、頬を少し染めながら言ったイリスは思いついたように

「あの、よければ『さん』なんて、呼ばないでください。だめ、ですか？」

と。

「じゃあ、イリスちゃん、にするね」

「……はい！」

気軽に話せる、女性の友人がいたことのなかったイリスは、こんなふうに呼ばれるのは初めてで新鮮だった。

「それで、もう1つお話し……というか提案があつて」

「なあに？」

イリスはロザリアについて説明した。すると、彼女は大いに興味を持つたようだ。

「今は、結婚してる、のね？」

「式なんかはまだらしいですけど、事実上は。そのために、ジュナスさんのお父様が出した条件である、宝剣が必要で……。それを探すのに、レピュスとロザリアさんは手を組んでたんです。レピュスも刀を探してるから」

「そう……会つてみたい」

「そうですね！　じゃあ……誰に言えばいいのかな……。レピュス？　とにかく、頼んでおきます。きっと、大丈夫ですよ！」

「大変じゃない？」

「平気です……と思います」

「なら、お願いするわね。イリスちゃん」

「はい！」

*

「……という事になったんだけど」

大体の話を聞いたレピュスは、もはやイリスを尊敬した。あの状態だったエリエルザを何時間かで立ち直らせて外出の意欲まで引き出したというのだから。

「判った。俺からボスに頼んでみる。

それにしても……イリスに頼んで正解だった。ありがとう」

「お礼なんていいよつ。……私の方こそ、励まされちゃったし」

「どうかしたのか？」

「何でもないの！ - - - “今”は、まだいい」

首を傾げたレピュスに微笑んだ。

「“いつか”話すね！」

名前をくれた人（後書き）

全体を通しての、この話のキーワードのようなものがワタクシの中にはあって。その1つが「名前」という訳です。

過去の克服

「失礼します」

レピュスは早速、ボスのところへ行った。

「どうしたの？」

幸い、忙しいところではないようだ。すぐに話を促してくれた。

「エリエルザさんの事なのですが。あのあと、イリスに彼女と話してもらって」

「良い結果だったみたいだね」

「はい。その中でロザリアの事をイリスが伝えたところ、エリエルザさんが会いたがっていると。正直、俺が同伴するよりイリスが行った方が良いと思うのですが」

ボスは成る程、と呟いて少し黙っていたが、軽い笑みを作った。

「良い機会じゃないか。ロザリアとジュナス・レオ・ローザバークの結婚パーティに3人で行ってくれば」

「……え」

ボスはからかうようにまだ笑っている。

「いいじゃないか。若いカップルと美しい保護者だ」

「ボスまでロザリアのような事を……」

「ま、ロザリアに吹き込んだ張本人だから」

「！」

何故、ロザリアがイリスの事を知っているか、後で不思議に思ったのだ。発信源はボスだったとは……。

「じゃあ、一週間後、行つてらっしゃい」

*

「イリスー」

サツズは書類整理に勤しんでいたイリスへ呼び掛けた。

「はい？」

「ボスから伝令」

イリスは少し顔を引き締めて、サツズの方へ行った。

サツズは、ボスがレピユスに提案した事の全容を伝えた。

「良かった！ エリエルザさんに言わなきゃ」

とても嬉しそうにイリス。サツズもその様子に目元を和ませた。

イリスは作業が一段落したらすぐ、エリエルザのところへ向かった。

「イリスです、こんにちは！」

「いらつしやい」

ドアを開いてくれたエリエルザの顔色は、たった数日で回復してきた。まだ、健康そうとは言えないが今にも倒れそうだったの比べれば驚くほどの回復だ。

「この前、お話したロザリアさん」

イリスは、中に入れてもらい、言った。

「来週、会いに行く事になりました。」

レピユスも一緒に、ロザリアさんとジュナスさんの結婚パーティーに行くんです」

「私もいいの？」

「勿論ですよ！ ボスが、そうすればいいとおっしゃったみたいですよし」

エリエルザは微笑んだ。

「ありがとう。」

それにしても……ここのボスさんはとても慕われているのね」

「はい。」

会った事……？」

「まだないの。」

ルカの事も含めて、お礼を言いたいんだけど……」

「うーん……」

じゃあ一緒に、と気軽に会いに行くことは出来ない。用事があるならともかく、今のところはなにもないし……。

「レピユスに相談して……あ、何でも頼ったら迷惑ですよね」
エリエルザは笑う。

「こんな可愛い子に頼られたら、逆に嬉しいんじゃない？」

「かわつ……」

イリスは顔を真っ赤にした。ここまで美しい相手に正真正銘の笑顔で言われると、本気で照れる。

「まあ、あまり気にしないで」

そして、話はロザリアへ。

「イリスちゃんは、会った事あるの？」

「いえ、話に聞いただけで……。あ、でも」
笑みを作る。

「どこか、エリエルザさんに似てるそうですよ！
すごく美人みたいです」

困ったように笑うエリエルザ。

「でも、とっても強いんですよ？」

「レピユスより強いとか。」

ルカさんの愛弟子だったそうです」

「愛弟子……ふふ」

ルカの名前を出した時、イリスは少し心配になったが、どうやら平気らしい。例え、戦う力がなくても、強い人だ。

*

そして、一週間後。

「おや、スーツに着られてないね」

出発を知らせるため、ボスのところへ行ったレピュスはまずそう言われた。

「何で意外そうなんですか……」

「いやあ、女装とドレスが似合ってたから」

「……行きます」

「はは、じゃあロザリアにおめでとうと伝えておいてよ」

「はい」

女性2人とはビルの外で待ち合わせている。ローザバーク家の使いが車を出してくれているのだった。流石は大貴族である。

「あ、来た！」

手を振っているイリス。淡いピンク色のシンプルなドレスだが……相変わらず、何でもよく似合う。隣のエリエルザは瞳の色と同じ空色のロングドレス。とんでもなく美しい。

レピュスは自分が間違いないとおまけとして無視されるか、邪魔者として扱われる事を確信した。

「お早う」

と笑ったエリエルザに

「お早うございます」

と丁寧に返したが、反射的に赤面した。

一同、車へ乗った。

「ロザリアさんはどんな方？」

エリエルザの問いにレピュスは遠慮無く答えた。

「……色々と、無茶苦茶ですね」

「無茶苦茶？」

「とんでもなく強いし、いつでも強行突破だし……」
そこで、運転手が咳き込んだ。

「あ、すみません……別に悪口ではなく」

「いえ、失礼しました。笑ってしまつて」

「はあ」

初老の紳士は続ける。

「ローザバーク家へいらつしやつてからも、それが変わらないものですから。今や、侍女達の人気者です」

「変わらない……つて？」

イリスが問いかけると、次々に出てくる。

「まず、ドレスなどの女性らしい服装がお嫌い」

「……ああ」

「身体が鈍る、と毎日数キロは走つてこられて」

あの脚力についていける者はいないだろう。

「お部屋をお好みに作り替えると申し上げたところ、これでいいと無装飾のまま」

これはレピュスも見た。

「お着替えもご入浴も、お一人でさっさと済ませてしまわれて。侍女の仕事が無いに等しいのです」

苦笑するしかない。

「……でも、それを許してくれるローザバーク家は素敵ですね」
イリスが目を細めて言った。

自分のいた、あの不自由な世界を思い出しているのだろうか。

「……大丈夫？」

レピュスが尋ねると、彼女はにっこりとした。

「今はもう大丈夫。最近、思い出すことも殆どないの。」

一年くらいしか経ってないのに……不思議だよね。ずっと、昔の事みたい」

つまり、過去を克服したということだろう。

レピユスは羨ましく思った。

彼は未だに、全ての忘れたい記憶を昨日のことに思い出し、思い出したなら「大丈夫」でいられない。ほんの少しも、克服などできていない証拠なのだ。

また……エリエルザは、いつか全てを克服できるのだろうか。

過去の克服（後書き）

なんか最近、登場人物の女性率がとんでもなく高いw
絶対数が少ないのに、おかしいな

会場入り

ローザバーク邸に着くと、すぐにロザリアとクラウドが迎えに出て来た。流石に、元暴れ馬も上品な白いドレスに身を包んでいる。

「よく来てくれたね」

レピュスに微笑んでから、イリスとエリエルザを見た。

「こちらが？」

「イリスと、エリエルザさん」

「両手に花、ですね。レピュスさん」

クラウド……薄緑色のドレスを着た少女がにやりとした。

「お前さあ……そういう言い方……。ほんと、幾つだよ」

「ヒミツです。」

お2人とも、初めまして。クラウドです」

「ようこそ、ロザリアです」

大人しく笑っていれば、これほど見栄えのする光景も無いのだが……。

ロザリアはエリエルザの手を取った。

「お会いしたかったです。“ボス”からお話しは聞いてます。ルカ先輩のお姉さんって」

エリエルザは困ったように笑った。

「血のつながりはありませんけどね」

だが、ロザリアは

「寧ろ、それが驚きですよ」と。

「すごく、似てる」

レピュスが思わず

「どこが……？」

と言うと、ロザリア本人も首を傾げた。

「ええと、難しいな……。空気、雰囲気？　まあ、ダサイ言い方すると、中身が似てる感じがする」

「……嬉しい」

笑い合った2人の方こそ、そっくりに見えた。

「で、こちらがレピュスのガールフレンド？」

「だから……」

「レピュスさん、照れてますね？」

「私もそうかと思ってた」

「エリエルザさんまで！」

この3人相手では分が悪すぎるし、イリスが笑うばかりで否定してくれないので大層レピュスが困っていると助けが入った。

「はいはい！　玄関先で盛り上がってないで！　お客様を中へお通しする！」

「はい、義兄さん」

レピュスは初めて見る顔である。長い黒髪の青年は、呼ばれ方からしてジュナスの兄なのだろう。銀縁の眼鏡を掛けたなかなかの美青年だが、ジュナスとは余り似ておらず厳しい印象が見受けられる顔立ちだ。

中へ進みつつ、眼鏡の“義兄さん”は自己紹介した。

「ジュナスの兄、ナイゼルと申します」

レピュス達も各々が名乗った。

「成る程、組織の……」。

虹の雫の件では、お世話になりました。父は息子の結婚よりも喜ん

でいる始末で」

堅苦しいイメージだったが……そうでもないのかもしれない。肩をすくめて冗談めいた喋り方をしている。

「ナイゼルさんは、ご結婚は……」

イリスが言うつと

「いいえ、まだです」

と、ちよつと拗ねたように。

「義兄さん、最近、頭が薄くなってきたからねー。急がないと」

「ロザリア。もう一度言ってみなさい」

「……やめとく」

ナイゼルは、なかなかの殺気を放っている。

「いいかい？ ジュナスと私は同じ血が流れているんだからね。

私のはげ……いや、頭が少々寂しくなってきた気がするということ
は近いうちにジュナスもそうなるということなんだ！」

「だけど、お義父^{じい}さんも、薄くなってないでしょ？ 義兄さんだけ、
変異が……」

「言うなあつ」

義兄妹コントを呆然と見守る客達であった。

「ああやってますけど、とっても仲が良いんですよ」

クラウスが言う。

「……まあ、そんな気がするよ」

同意したレピュスだった。

「やあ、よく来たね」

レピュスを見付けるとすぐ、ローザバーク卿その人がやってきたの
で他の来賓達の注目の的となってしまうた一同。

「いやあ、虹の雫は本当に美しいよ。毎日見ても飽きないね」

「そ……それは良かったです、お役に立てて」

バルフォアはとても良い笑顔を浮かべた。

「楽しんでいってください。」

ところで、そちらの美しいお二方は？」

「こちらがイリスさん。レピユスのガールフレンド」

「ほっほう！」

「ロザリア、だから……」

「それで、こちらがエリエルザさん。例の、私の元師匠のお姉さん」
レピユスの微妙な反応はことごとく無視された。バルフォアは女性
2人にも感じよく微笑むと

「なるほど、どうぞごゆっくり」

と言ってさっきまで歓談していた来賓達の方へ戻っていった。

「さてと、それじゃあ」

ロザリアの視線を辿ると、女性に群がられて困っているジュナスが
いた。

「義兄さん、牽制に行っておこっか」

「必要なようだね。それでは皆さん、また後ほど」

冷たい気を^{オーラ}発して、ロザリアとナイゼルは“牽制”へ向かった。

「……ナイゼルさん、なかなかの殺気だよな。ロザリアはともか
くとして」

レピユスが呟くと、クラウスがこっさり暴露。

「あの人は……ここだけの話ですけど、裏社会ともかなりコネク
ションがあつて。ロザリアとジュナスさんが出会うきっかけを作っ
たのもあの人ですし。それからレピユスさんに渡した、藍黄泉の情
報を手に入れたのもナイゼルさんなんですよ」

目を丸くしたレピユス。

「てか、早く言ってくれよ。お礼言わないと」

「意外と、レピユスさんって律儀ですね」

クラウスの失礼な物言いにレピユスはムツとしたがイリスは大いに

頷きながら笑っていた……。

幸せな人

パーティが終わると、ロザリアがレピュス達の方へやってきた。そして、ロザリアから提案を受けた。

「良かったら、泊まっていけない？」

「そんな、悪いです！」

イリスが答えると、

「いやいや、こっちの我が儘だから」

とロザリア。

「出来れば、エリエルザさんとゆっくり話したくって」

「……ボス次第かな」

レピュスが言うと、ロザリアは携帯を取り出して、にんまりした。清楚な衣装でする表情ではないだろうに。

「許可なら貰ったよー。君ら次第ってわけ」

「根回しが早いよなあ」

「褒め言葉として受け取っておくね。で、どう？」

断る理由もなく、3人はそれぞれ頷いた。

そこへ、顔を出したジュナスが同じくになまりとする。

「じゃ、俺はレピュス君から“殺し屋ロデオ”の活躍でも聞こうかな」

「あ、判りました」

「判らなくっていい！」

ロザリアの制止には一切構わない方向で。

「なんだ、ロザリアも一応乙女心を持ってるんだ」

「イリスちゃん、こいつ舐けておいて！」

「え、わ、私がですかあ!？」

*

「まず、お礼を言わないとね。ありがとう」

エリエルザと2人になると、早速そう言われてロザリアはぽかーんとした。

「ええと……？」

「ルカを捜してくれているって聞いたわ」

「まあ……当然ですよ。あの人は恩人ですし」

ロザリアの微妙な苦笑から、言外に込められた言葉をエリエルザは読み取って笑った。

「あの子は、ロザリアさんが好きだったのね」

「ええっと」

困ってから、笑うロザリア。

「ま、エリエルザさんにはこれっぽっちも及ばずでしょうけどね」

「そうかしら」

「……これはクラウドが言ってた事ですけど。私とエリエルザさんの容姿が割と似てるのがその証拠ですって」

驚いたようにロザリアを見ていた。

「要するに、ルカさんの好みのタイプはエリエルザさんみたいな人って事ですよ。」

中身は全然違うんですけどね。こんながさつで」

あつはつはと豪快に笑うロザリア。

エリエルザは……イリスと話していた時とはまた別な意味で元気になってきた。エリエルザはもう30代になっている訳だがずっと限られたアルド社という空間の中で生きてきていた。その中に、こんなに心の底から明るく笑う人を見たことが無かったのだ。

いや、……随分昔には、“あつた”。

まだ幼い頃のルカとヨナはこんな風に笑っていた。だから……胸の内がほっと温かくなって、何となく泣きたくなくなってしまった。

「大丈夫ですか？ あ……なんか、余計な事」

慌てるロザリアが、また可愛らしいと、エリエルザは思った。

「ごめんね。違うの。」

何だか……見ていてほっとしたの。あなたが、あんまり幸せそうに笑うから」

ロザリアは赤面した。

「その……不謹慎ですみません」

「いいのよ。」

いつまでも、沈んでも仕方がないし。私も暗いままじゃ、あの子達に顔向けできないものね」

ロザリアは大きく頷いた。

「必ず、見付けますから。待っててください」

「ありがとう」

真摯な眼差しのロザリアを見て、エリエルザは、恐らくルカは単に自分に似ていたから彼女を好いていただけではないと確信したが、言わずにおいた。ただ、また泣きたくなくなってしまった。

「ごめんね、涙腺が弱くって」

「泣くのは大事ですよ」

ロザリアは、柔らかに笑った。

「笑うのと同じくらい……もしかしたら、もっと、楽になります。

感情を閉じ込めたって碌な事ありませんからね。どうせ私しかいないんですから、好きなだけ泣いてください」

泣いてくださいと言われると、今度は笑ってしまったエリエルザである。

「本当に、可愛い人」

「……は」

強いと驚かれる事はあっても、綺麗と褒められる事はあっても……

可愛いなどと言われた事は物心ついて以来皆無だったロザリアは驚いた。

「可愛い……ですか？」

「とつても。」

ジュナスさんは幸せね」

真っ赤になって、何も言えなくなったロザリアであった。エリエルザの前では、元最強の殺し屋も形無しである。

*

その頃、別の部屋では……。

「正面突破って！」

ジュナスは腹を抱えて笑っていた。

レピュスとクラウドからロザリアの物語を聞いていたのだ。時々イリスが

「そ、そんな事言っているの！？」

と突っ込むがクラウドは

「いいんですよ、どうせいつかはれます」と、笑うばかり。

「盗賊を脅して締め上げるのは、なかなか手慣れたもんでしたよ」「いやあ、俺も締め上げられないように気を付けないと！」

「まあ、あの分なら大丈夫でしょう。暴れ馬もちよつとは大人しく……」

「誰が暴れ馬だって！？」

「ロ……」

クラウドが腹をかかえて笑う。イリスは口元を覆って、声の主とレピュスを見比べた。

ちなみに、ロザリアの背後でエリエルザも大笑いしていた。ふくれ

面をしていたロザリアだが、それを見て怒るのはやめたらしい。

「レピユスの言うことは多分、半分以上の脚色があるからね？」

ロザリアがジュナスに言うも、

「いえ、殆ど事実ばかりでしたよ」

と、クラウド。

「~~~~っ」

「まあまあ、何だっていいよ。俺は何十人って数を1人で蹴散らしてる君に惚れたんだから」

ジュナスにそう言われて、ロザリアは簡単に機嫌を直したようだ。

……明らかに、一般的な事情と男女が逆だと思ったが。誰もが黙っていた。

幸せな人（後書き）

もしかしたら、ロザリアが一番、人間味のある子かも……？

敵の獲物は味方か（前書き）

前にご連絡した通り……これよりレピュス達はしばらくお休み。ダーク・ペガサスの皆様のお話となります。
あ、それからメリークリスマス

敵の獲物は味方か

組織とアルド・ワークスの対決が始まった頃、別の場所にて別の対決が幕を開いていた。

ダーク・ペガサス第2本部。ガレリアとその部下達により運営されているここに、黒塗りの高級車が現れた。運転席から颯爽と降り立ったのはユウである。当然、彼が開けた後部座席のドアから姿を見せたのはルシエル。2人ともスーツを身に纏っている。

警備担当の2、3人が近付いてきた。

「連絡を入れておいたルシエルだ。これはユウ。通してもらうぞ」
命令する事に慣れた口調のルシエルに、反射的に頷きかけてから職務を思い出した警備担当者達。

「失礼ながら、証明を……」

と、身長は彼らの胸くらいまで、年齢は半分以下の少女に半ばびくつきながら促した。

「ユウ」

面倒くさそうにルシエルが言うと、執事は即座に身分証明となる黒いペガサスの描かれたプレートを提示した。

「は、ありがとうございます。それから、武器をこちらへ……」

「ガレリアの命令か？」

「は……はい」

「奴は味方に殺されるような真似をしているわけか」

ルシエルは年相応とは口が裂けても言えぬ笑みを浮かべ

「ユウ、白炎を」

と命令した。

「はい」

白炎を受け取った者は……。

「……っ!!」

反射的に手を離し、それを判っていたユウによって白炎は受け止められた。

「何を……!!」

残る2人が武器を向けるとユウは

「ああ、いけない」

と、本気で――勿論演技であるが――うつかりしたような声を出す。ユウは済まなさそうに笑うが、その笑みに警備員の男達がどきっとしたというのは……彼らの名誉の為に門外不出の事項としておく。

「この刀は、私が許可をした者以外が触れると熱を発生させるので」

「な……なら、その許可とやらを先に!!」

「では失礼」

と……ユウが急に顔を近づけてきたから男は数歩下がった。ちなみに顔が真っ赤だ。

「な、なななにをっ!？」

「ですから、許可を」

「許可というのは……」

ユウは妖艶に微笑んで、自分の――男性のものにしてはふっくらとした魅力的な――唇に触れた。

反射的に甘んじて受け入れそうになった男は我に返って叫ぶように「とっ特例とします! お通りをっ」

と言った。

「ユウ、巫山戯が過ぎるぞ」

2人になると、ルシエルが呆れたようにユウを見た。

「申し訳ありません。ただ、刀が必要な場面が無いとも限りませんので」

「それもそうだな」

ルシエルは建物奥の一室のベルを鳴らした。ドアを開けたのは初老の男。小柄で人相が悪い、鼠のような男。ガレリアの秘書官サージエンである。

「どうぞ、ルシエル様」

「失礼する」

ルシエルとユウが入室すると、秘書官は主の横へ戻った。ガレリアは「私に話しとは？ ルシエル」と、早速促した。

どうやらその表情は緊張しているかのようで、元が凡庸だから気の弱い中年男にしか見えない。中肉中背の男の威厳は立ち上がってみても、ユウは愚か、少女という年頃のルシエルにさえ明らかに劣る。

「君は知っているのかどうか確認しておきたくてね」

対して、堂々とした風のルシエルは言った。

「カリギュラと黒の教会の密約について、そして黒の教会の要求について……」

ガレリアはぼーんと口を開け放った。

「黒の教会の目的は、東大陸大業物13工を集めてとあるモノの封印を解くこと」

「それは、黒龍の……」

「違うから、わざわざ言っているんだ。黒龍の能力というのは君が信じているような武力ではなく、寧ろ知力なんだ。カリギュラはこれを知り、隠していた。カリギュラの最終目的は人の心を覗き見る事の出来る力を手にし、“神”と呼ばれること」

「ぼけっとしているガレリアに、ルシエルは続ける。」

「そのために、我々は邪魔となる」

「な――何故」

ルシエルは、辛うじて「この馬鹿め」という罵りを飲み込んだ。

「黒龍の所有権は、もし今この状態で手に入った場合、3人で等分される」

「あ……」

「また、同時に黒龍のトリックを知っている者がいるのは“読心術”で神になろうとする奴にとって、最大の邪魔者。ついでに私は、カリギュラがそのような行動を始めたらやめさせる。3者の合意の上でなければ動けないのが現在のダーク・ペガサスだ。だから最後はあつさりとしめる。」

「近い内に私と君は殺される」

ガレリアは顔を赤くしたり青くしたりしたのち、大声を出す。

「そつそれを信じろというのか！？ 信じたとして、どうしろと！」
ルシエルは無表情で淡々と返す。

「信じてくれないか。そして、共にカリギュラを討とうじゃないか」

「は……そ……そんな」

そこで、サージエンが口を挟む。

「それが、あなたがカリギュラ様を討ちたいが為の偽りでないとの証明はあるのですか」

「そ、そうだ！ そちらこそカリギュラを……」

ルシエルは、冷たく笑った。

「なら、いい。私がカリギュラと同様、君を消す。さて、カリギュラが君を消すのとどちらが先かな」

そしてユウを見た。

「では、今日は帰ろうか」

「ま、待ってくれ！」

既に背を向けていた2人はゆっくりと振り返る。

「かつ……考える時間をくれ……」

「3日後にまた来る」

今度こそ、ルシエルとユウは出て行った。

敵の獲物は味方か（後書き）

緩急激しいですが、暫くまた、平穏な雰囲気は消え去ります。

you are my master (前書き)

英語をサブタイトルにすると、妙にテンションが上がる。私の場合、書き上げてからタイトルを決めるんですが。タイトルから作り始める派と、どちらが多いんでしょうね。

you are my master

「……どうなさるのです？」

サージエンの問いかけに、すぐには答えなかったガレリアだが、冷や汗を垂らして応じた。

「……逃げる。どこか……ルシエルにもカリギュラにも見付からないところへ……」

「手配致しましょう」

「た、頼む」

サージエンは部屋を出ると、屋敷の外で携帯を使った。

「……ガレリアは逃げる。……ええ、手筈通りに……」

「お待ちしています。」

ケイ殿をわざわざ……はい、ルシエルは……はい」

*

翌日、ルシエルの元へ、部下の1人が駆け込んできた。ガレリアの動向を探っていた者のうち1人。

「失礼致します！ 報告が」

朝食の最中であつたルシエルだが、すぐに顔をそちらへ向けた。脇に控えていたユウもそちらへ注目する。

「何か変化が？」

「はい……ガレリアが明朝、屋敷を離れたということ……。恐らく、逃亡でしょう。始末しますか」

ルシエルとユウは顔を見合わせた。それからルシエルは吐き捨てるように言う。

「放っておけ。殺す価値もない。2名のみ監視を続行、残りは戻れ」
「はい」

ルシエルは不機嫌そうに立ち上がった。

「ルシエル様……お食事は」

「食べる気にならない。――全く、頭に来る……」

「カリギュラ側に付かれなかっただけよしとしましょう。どうせ、味方にいようと、少しも役に立ちません」

「それもそうだが……計算が狂ったのに腹が立つ」
ユウは苦笑した。

主は、何と言ってもまだ子供である。手違いが起きたなら、計算しなおせばいい……と素直に認められないのだろう。

*

「本当に、ここは安全なのだろうな!？」

ガレリアが全くの余裕がない口調で問いかけると、サージエンは薄く笑う。

「ええ。どこよりも安全といえましょう」

彼らは今、都市部を離れた古い屋敷にいる。サージエンは自分が心配したのだと説明したが、事実は違う……。

ガレリアが少し落ち着いてきた頃、サージエンの携帯が鳴る。

「――少々、失礼します」

「まさか、カリギュラでは……」

「いえ、知らぬ番号です。出て来ます」

サージエンは外へ出る。

知っている番号である。

「ええ、予定通り到着していますよ、ケイ殿。私までを疑う心的余裕が無いようで。子供のようについてきてくれました。――ええ、後はお任せします」

*

「ルシエル様」

ユウが少々難しい顔つきで部下達との連絡交換後、ルシエルの元へ戻ってきた。

「どうした？」

気分（機嫌）を何とか直したルシエルはすぐに問い返した。

「念のため、ケイに見張りをつけていましたが……。奴をつけていた者達との連絡が不可となりました。また、最後の報告によればケイは単独行動をとり恐らくガレリアを追っている」と

「……殺害目的か」

「恐らくは」

ルシエルは数秒、思考してから指示した。

「カリギュラの側にケイがいないというのは好都合。本日中に計画を実行する。準備はどのくらいでできる？」

「昨日より整えておりましたので。あと、2〜3時間あれば」

「ケイの現在地を洗い出すように。半日以内に戻れる距離にいるならば、足止めを行う」

「かしこまりました」

恭しく礼をしたユウを見て、ルシエルはふと言った。

「私は……」

自嘲的に。

「お前がいなければ、唯の子供だな」

ユウは驚いたように顔を上げた。

「何を仰います。私はルシエル様のご命令に従っているだけです」

「いや。……それに、お前がお前でよかった」

「……は」

「ガレリアは恐らく、身内……多分、サージェンに裏切られたのだろう。」

ガレリアは馬の骨以下だが、サージェンの頭は悪くない。奴が本気でガレリアを守ろうとしたなら……カリギュラから逃れる事も出来

たはず」

わずかに、不安そうに顔をしかめたルシエルにユウは丁寧に愛情深く微笑んだ。

「ご安心を、ルシエル様。あなたが私の世界^{すべて}なのですから」

今度は照れたように目を泳がせたルシエルは、照れ隠しのためにむすつとした表情で言う。

「つまらない事を言っただな。作業に当たってくれ」

「仰せのままに、我が主^{my master}」

よりもよって（前書き）

記念すべき100話目は……主人公出て来ません（汗）。

よりもよって

屋敷の裏に停められた車からケイが姿を現した。いつも通り、武器は1つも持たず黒基調のラフな格好をしている。組織の幹部を暗殺に来たとは思えぬリラックスした様子で裏口から内部へ。……リラックスして当然である。この屋敷には、ターゲット以外に彼の敵はいないのだから。

「お待ちしていました」

サージエンがケイを迎えた。

「ははっ、それもおかしな台詞だぜ。お前、いつからカリギュラのパシリやってたんだ？」

「はじめからですよ」

ひゅう、とケイは口笛を鳴らして――固まった。

「まさか、ユウまでなんてこたあ……」

「それでは何か、あなたに不都合な事でも？」

「いや、なんつーか似合わねえなと」

サージエンは良く判らない、という表情をしつつ

「まあ、そういった話は聞きませんね」

と返答した。

ケイはガレリアが嫌いである。自分の意思を持たず、幹部でありながらカリギュラに隷属しているつまらない男。サージエンも好きではない。物事を利益でしか考えぬ、つまらない男。

その点、カリギュラと対立する――ゆくゆくは処分するために重役にまで上りつめたルシエルは面白い。ユウは同国人ということもあるし、彼の一本気な性質がかなり好きだ。

ただやはり、彼が一番に優先するのは黒龍への興味。その為には、

ルシエル、ユウと敵対することになるがカリギュラの側にいるのが一番なのだ。

ケイはサージエンに案内されてガレリアのところに着いた。面倒な脅しや説得をするつもりは一切無いし、そういう指示は出ていない。

サージエンが呼び掛けると、明らかに極度のストレスで疲弊しているような返事が聞こえた。

「失礼致します」

ここに来て、これっぽっちも様子を変えないサージエン。……最初から裏切っていたというのは本当らしい。

サージエンが中に入ったのを見届け、ケイは面白半分……残忍とも言える悪戯心で暫く様子を伺っている事に決めた。ガレリアを宥めて落ち着かせる努力が聞こえる。サージエンは苛々ともせず、実に大人に振る舞っているようだ。ケイは妙なところに感心した。

様子見にもそろそろ飽きてきたのでケイは徐に入室した。ガレリアのポカンと空いた口に何か投げ込んでみたい衝動を抑え、殺し屋らしく鷹揚に振る舞った。

「よお、ガレリアさん」

「お……おまえは」

「知ってるだろ？ ダーク・ペガサスのアイドル、ケイ様だよ」

ケイのおふざけに構っている余裕もないガレリアである。真っ青になり、唇を空気を求めて喘ぐ人のように開け閉めしつつサージエンを見た。

「どう……どういう事だ?! 安全と……」

すると、ケイはサージエンの意図を理解して笑った。

「なる。確かに安全だわさ。」

おまえがこれから逝く先はな！ ガレリア」

「や……やめ……」

ケイは薄く残忍に微笑んで……指を鳴らした。

サージエンには、何が変わったのか判らない。しかしガレリアはいきなり絶望の甲高い悲鳴を上げると、飛び上がるようにして立ち上がり……。

自ら、窓を突き破って飛び下りた。

「最上階にしろ、というのはこういう訳でしたか」

特に驚きもせずにサージエンが言う。

「呪術じゃ人を殺せねえからな。二次災害で死んでもらうしかねんだ」

「彼は、何故？」

「ヤツが何を見たかは俺にもわかんねえよ。さっきの術は対象者にとって最大の恐怖を見せるもんだ」

ケイの答えを聞いてサージエンは薄く笑った。

「全く、彼には効果の高そうな術だったわけですね」

ケイはじつとサージエンを見て、それから溜息をついた。

「ったく、俺が馬鹿みてーだぜ」

「……と言われると？」

「なに、お前のこつちに協力的な言動は演技で最終的にはガレリアを餌に俺をおびき寄せて殺そうだなんて算段してるんじゃないかとな。考えてたわけよ。ところが、にこにこしやがって」

サージエンは、笑みを深めた。

「私としては、あなたの方が心配ですよ。」

いつ、カリギュラ様を裏切るのかとね」

ケイはあんぐりと口を開けてサージエンを見たが、元に戻ると肩をすくめた。

「ま、確かに俺のカリギュラへの忠誠心は偽物だが。」

黒龍への興味と黒の教会の本当の目的への興味は本物だぜ。それを見届けるまでは、裏切りなんてしねーよ」

「……その後は？」

「好きにするつてのがカリギュラとの契約さ」

信じがたいものを見るようにしていたサージエンだが……ここでケイと問答しても仕方がないし、直接争っても勝ち目がない事が判っているから大人しく黙っていた。

「それじゃあ、俺は帰るぜ。お前はこれからどうすんだ？」

「ここの後始末をしなければなりませんので」

「なーる。ご苦労さん」

ケイは颯爽と出て行った。

「さてさて」

ケイは数キロ車を走らせ、人気のない林に入ったところで停めた。

当然、目的地ではない。

車を降りた。

「追いかけてこはそろそろ止めにしようや。」

誰だ？」

ケイの振り返った先に一台の小型車が停まっている。そこから出て来たのはケイもよく知る者だ。

「久しぶりですね、ケイ」

「よりにもよって、お前かよ」

ユウを見て、ケイは眉間に大きく皺を寄せた。

よりもよって（後書き）

時々、書きすぎになって思いますが。

まあ、生活に支障が出ない程度にじっくり書いていきますよ。

教会で大暴れ（前書き）

強行突破がお好きな女性が多いです（笑）

教会で大暴れ

「ルシエル様……ユウを動かしてよろしかったのですか」

「ユウはケイの手の内を知っているからな。呪術師を相手にする場合、知っている事は何より重要だ」

「……はい」

まだ心配そうにしているのは、背の高いスーツを着た男。黒い髪を短くし、シンプルな眼鏡をかけている真面目そうな印象の者。「公」……ダーク・ペガサスにおいての部下ではなく「私」……アレクシエル家としての部下である。普段は身なりを裏切らない、ルシエルの単なるボディガードとしての働きをしているが有事の際にはユウに続く実力を持つ戦闘要員となる。彼はシファンという。

ルシエルは、さっきまでの間にダーク・ペガサス幹部としてのルシエルしか知らぬ部下達に自分の目的、本来の立ち位置を聞かせていた。反発するか、去る者がいると予想していたが、そのような気配は一切無く、裏表、どちらの部下もつれてカリギュラ討伐に動く事となった。

「意外な事だ」

ルシエルがそう呟くと、シファンは口元を綻ばせて

「ユウはこうなるだろうと言っておりましたよ。かくいう私もそう思っていました」
と。

「？」

訝しげにシファンを見上げたルシエルに、はつきりと微笑んだシファン。

「ダーク・ペガサスの者でも……あなたが、組織の幹部だから従っているのではなかった、という事ですよ」

「お前もユウも……何か狙っているのか」
「本心です」

ルシエルはつんと顔をそむけたが、シファンは滅多に見られない主の微笑みの瞬間を見逃さなかった。

*

「俺を殺すってか？ ユウ」

ケイは動かぬまま、じつと相手を見ていた。

「ルシエル様には、ケイを止めるようにと命令されました。君が全て片が付くまで、ここにいてくれるというのなら私がする事はありません」

「さもないければ？」

ユウは口では答えず、軽く白炎に触れた。

ユウは、ケイが自分に対して勝ち目が無いと判断している事が判っていた。そして、それでも敢えて仕掛けてくる程カリギュラに対しての誠意も無ければ、負けず嫌いの性質も持っていないと確信しているのであるが。

「じゃあ、判断の為にいくら聞く事にする」

「どうぞ」

「お前らはカリギュラを殺した後、どうするつもりだ？ 具体的には黒龍の扱い」

「ルシエル様は、僅かにもそれに関与するおつもりはないようです。ダーク・ペガサスを解体し、黒の教会との縁は以後、持つことが無くなるでしょう」

ケイは小さく唸った。

「俺は、そいつが見たいんだよ。黒龍が」

「知っています」

「単独で教会に乗り込んで、はいはい見せてもらえと思うか？」

「まず無理でしょう」

「だよなあ。とすると、やっぱり交換条件を満たすしか無い訳だ。それでもって、それにはカリギュラがないとな」

その瞬間……。

ユウの身体が不自然にぐらつき、彼は膝を着いた。

酷い目眩のような感覚。立ち上がる事が困難で、視界が酷く乱れる。

「悪いな。交渉決裂だ、ユウ」

「……そのようですね」

ユウはよろよろと立ち上がった。白炎を抜いた。白い炎のような光が、瞬く間に刀身を覆う。

ケイは軽く舌打ちした。

やはり、ユウは呪術への耐性がある。普通ならば、この術を受けて立ち上がるはずはない。

「ったく、お前とだけは戦いたくなかったぜ！」

*

ルシエル達は、人気のない崖にぽつんとある教会の前に揃い踏んでいた。既に、何名かのカリギュラの部下が彼らの足下に崩れている。門番達だ。一切迷うことなく、彼らは強行突破を選択していた。「異変はすぐに伝わるはずだ。こそこそ動く必要もない。ケイがない以上、厄介なものは殆どない」

ルシエルはあっさりそう言うと、中へ踏み出した。

黒いペガサスのタペストリーが飾られた聖堂を突っ切り、階段を

上がる。途中に出会うカリギュラの部下達は、シファンを中心に簡単に打ち倒していく。シファンの武器は細身の西洋剣である。また、時にはルシエルも細腕で拳銃を使いこなして戦闘に加わる。

「2手に別れる。シファンと第一部隊は私と来い。」

我々が動きを止めている間、残りはなるべく敵を引きつけておけ。出来るだけ短時間で片付けたい」

各隊長が丁寧な一礼で応じ、言われたように動き出す。ルシエル達は、先程占領した一室に身を潜めた。すぐさま、轟音が聞こえてくる。

「……ランの奴が調子に乗ってるな」

ルシエルは呟いた。ダーク・ペガサスとしての部下から、一転、アレクシル家の部下に転向した1人。……爆発物が大好きな人物である。

「厭でも殆どを引きつける事でしょう」

苦笑しつつシファンは応じた。

教会で大暴れ（後書き）

戦力差にものを言わせすぎですね（汗）

思いがけぬ強敵（前書き）

明けましておめでとございます。正月とは全く、かすりもしない話ですが（笑）。

思いがけぬ強敵

「ルシエル様のご決定とはいえ、この刀を失うのはやはり、少し惜しいな」

ユウは呟いて白炎を鞘に収めてから少し先へ目をやった。

予想通りに早く片が付いた。ユウは自身の力を味方に見せた事が今までに無いから……ケイも勝負になると思っていたかもしれない。だが、結果は数分でユウのあっさりした勝利となった。

留めを差すつもりは無いが、動ける傷ではないし放っておけば自然と事切れるかもしれない傷だ。呪術での幻覚も疑ったから簡単に手足は縛っておいた。

『レピュス殿にはああ言いましたが』

我々の出身国の者は、義理と人情なんて言葉が好きでしょう？ と言った。

だが、任務……ルシエルの命令下においては義理と人情など何の意味も無いものとなる。

ケイには目もくれず、さっさと車に戻ってルシエルの元へ向かう。

まだ、ルシエル達がカリギュラの居る教会に入ってすらいない頃である。

*

「大暴れ、ってとこですね」

ルシエル達の前に、1人の男が現れた。灰色のスーツを着た、まだ若い人物。茶の髪は短くしていて、爽やかな好印象さえ与えるかも

しれない。背は余り高くなく、体つきも標準。顔は男ながら可愛い、に分類される事だろう。青い瞳は大きくはつきりしていて、肉付きの薄い小さな顔。

「……メドウ」

「ご記憶いただき、光栄です。ルシエル殿」

軽やかに笑ったメドウだが、瞳は油断無く目の前の者達を捕らえて動かない。

「目的は判りきっているので聞きません。ですから、私がどう動くかも今更聞かないでくださいね」

そう言つて彼は剣を抜いた。

シファンが

「待て！」

と止めるのを聞かず、前にいた2人が迎え撃つ……と。

自分に向けられてくる剣を軽やかなステップでかわし、あつという間に片方の敵の懷に潜り込んだ彼はあっさりとその胸を切り裂いた。鮮血と苦痛の声が同時に上がる。素早く剣を持ち替えたメドウは、隙を狙つて振り下ろされた剣を簡単に止めると肩から一気に相手の腹まで切り裂いた。

「私が戦えるなんて知らなかったでしょう？」

にこにこと、メドウ。

「能ある鷹は爪を隠すですよ……ルシエル殿。あなたの大事な執事君のようにね」

ルシエルは失敗を悟った。ケイ以外、カリギュラをともに守れるような人物はいないと思っていた。だが……よく考えれば判った事だ。

自分の命が狙われていると判っている者が、簡単に自分の持つ最大戦力を外へやるか。

カリギュラの一番の武器はケイではなかったのだ……。

シファンがゆっくり前に出る。メドウも剣を構え直す……と。

「お待たせ致しました、ルシエル様」

心地良いテノールが朗々と響き渡った。

「ユウ……！ お前……」

「間に合ったようですね」

メドウは顔をしかめた。

「あなたはケイを追っていたのでは」

「ええ。追っていました。行動の自由を奪って、放ってきてしまいました」

「こんなに早く……」

ユウは微笑み、シファンを後ろへ下げた。

「ルシエル様、どう致しましょう」

しばらく、ぽかんとしていたルシエルだが平静を取り戻して、命令する。

「さつさとメドウを片付けろ。終わったら、カリギュラの元へ同行するように」

「かしこまりました」

そんな悠長なやり取りを聞き流すほどにメドウも大人ではない。苛ついたような声を出す。

「その命令が完遂されるとでも？」

「私はルシエル様の命令を裏切らないのだけを信条としていますので」

「勝手に言っている……」

メドウが剣をかまえ、ユウもすかさず白炎を抜いた。ルシエルの執事とカリギュラの従僕の戦いが始まった。

思いがけぬ強敵（後書き）

結局、ユウが使いたいただけだったりして（汗）

白い炎の蛇

ユウもメドウも……互いに、自らの力を隠し通してきた者達である。それゆえに、始めの内はどちらも慎重に相手の力量を量るような戦いをしていた。何割かに力を抑え、単調というべき攻撃を繰り返す。だが単調というのを感じているのは戦っている本人達だけである。

外から見ていると、既にこの2人が全力を賭して戦っているようにさえ見える。戦いに慣れたシファンでさえ、そうだった。

狭い廊下でまるで舞踏のような足さばきで剣を、刀を振るい何度も位置を入れ替わる。時に刃が相手の喉に伸びるも届かず、息を飲むような大振りも止められる。

この2人は、互角に見えた。

だが……より一層、余裕を持っているのはユウのほうであった。なにせ、彼の刀は東大陸大業物13工の白炎である。まだ、その刀に込められた東方魔術を解放していない。

そして、早くもユウは勝負を決めにかかる。

「……！」

本当にダンスでも踊っていたかのように、つかず離れずだった2人の戦士であるが、メドウは僅かな動揺と同時に飛び退いた。

ユウの白炎は初めから白い光を纏ってはいたが、その光量が倍増し炎のように揺らめいた。更には周囲の温度が上がるほどの熱を持った。

「成る程、白炎というだけある」

メドウは目を細めて、白い炎の刀を観察した。

「少し、急がせてもらいます」

「……余裕とでも言いたいのか」

「ええ」

ユウは爽やかに微笑んで、大きく踏み込んだ。真正面から刃を受け止めたメドウ。瞬間的に汗が出る程の熱であるが、火傷の恐れがある程ではない。炎を刀が纏ったからといって、ユウの剣技が劇的に向上するわけではない。

『刀の攻撃力が上がったというだけだろう』

メドウはそう判断した。

それはしかし、短慮であつた。

「……ちっ」

僅かに、白炎がメドウの肩をかすつた。ジュツという音と共に、服が焦げる。皮膚も軽い火傷を負つたようだ。

その隙を狙ってくる……と思いきや、ユウは突然、あっさりという言葉が似合う調子で距離を置いた。

『何故……。彼に不利な状況ではないのに』

また、訝しむような視線を投げたメドウに再びユウは微笑んで告げた。

「もう、終わりです」

「な……」

言葉と同時に、ユウは白い炎揺らめく刀を真横一文字に振つた。その軌跡の上から、幾筋もの炎が形を持って現れる。それは、1匹の蛇である。

蛇はまっしぐらにメドウを目指す。だが、恐るべき早さというのでもない。メドウにとって、よけるのは容易い。しかし、メドウが蛇を避けてもユウは相変わらず悠長に微笑んでいる。

「なにを……」

「後ろ」

「は」

メドウは驚きのあまり、転がるようになって背後から迫ってきたものを避けた。かわしたはずの炎の蛇が……戻ってきていた。

「ソレは、ターゲットに当たるまで消えません」

「ターゲットだと……」

「白炎の炎を受けた者」

蛇の動きは、時間が経てば経つほど速くなる。メドウがかわせば、かわすだけ速くなる。そしてとうとう……。

悲鳴が上がり、消えた時にはメドウの胸の辺りが炭の色に変わっていた。

「それでは参りましょう、ルシエル様」

「ああ」

ユウとそれに並んだルシエルを先頭に、メドウには見向きもせず彼らは真っ直ぐにカリギュラのところへ向かった。

白い炎の蛇（後書き）

辰年だから蛇じゃなくて龍にしようかと、ちらりと思ったんですけどね。短絡的過ぎるんでやめました。

……図々しい男

彼らは、とうとうカリギュラの執務室まで辿り着いた。ここにいう保証は無いが……メドウがここへ続く通路を塞いでいたという事は、その可能性を高くしている。一切の遠慮なく、ルシエルがドアを開いた。

「……メドウは負けたか」

動じる事なく、ルシエル達を眺めたのは中年くらいの男。細身だが、険しい顔立ちで決して弱そうには見えない。焦げ茶色の瞳は驚のような鋭さで、気の弱い者ならば見据えられただけで姿勢を正してしまっただろう。同じく暗い茶色の髪を短く切っている。

ルシエルを見て、それからユウを見た。

「ケイの相手をしていたのではなかったのか？」

「早く済みましたので」

「あいつめ……本気でかからなかったな」

軽い愚痴のように言って、立ち上がった。

「さて、ルシエル嬢」

追いつめられているというのに、堂々としたものだった。

「私をどうするつもりかな」

「色々と聞くこともある。取り敢えずは、我々の本部まで連行する。それから、今日この時を以てダーク・ペガサスは解体だ」

軽く笑ったカリギュラ。

何かするつもりか、とユウ、シファンがルシエルの前に出たが彼は前に進み出ただけだった。

「この期に及んで、無駄な抵抗をするような惨めな者に成り下がりはたくない」

「良い判断だ。ユウ、シファン……捕らえろ」

「「はい」」

あまりにもあつさりした幕引きに、ファントム達とはかく、元々ダーク・ペガサス組織員としてルシエルの下にしていた者達は呆氣にとられていた。

*

「これから、どうなさるので？」

「カリギュラの元にあった金品については、事情を説明の上でそれぞれの持ち主に戻す。信者名簿に布施の金額が明記されているのは助かった」

ルシエルは徴収した書類の1つを示した。

「混乱になりそうですね」

ユウが少し眉間に皺をよせる。

「だが、このままにしておくわけにもいかないだろう。不当に集められた金をそのまま使えば、我々が不当に金を集めたのと同じだ」

「仰る通りです」

アレクシル家という大貴族だけあって、ルシエルは金品への欲が非常に薄い。ユウも金の為に働いているのではないから、特に文句はない。もう少し下の位の者達はがっかりするだろうが……致し方ない。

「黒の教会は」

「……考えたのだが」

ルシエルは溜息をついた。

「あれが存在する限り、第二、第三のカリギュラは容易に生み出されるのではないかと」

「……成る程」

「人の記憶を知るといのは、一見すると何の役にも立たないが……使う者にとってはこれほど興味深い代物もないのだろう。それに、黒の教会の知る秘密だ」

「ニホンコクの」

「そう。東大陸大業物13工……あれを早々にこの世から消してしまいたいくらいだ」

ユウは軽く自らの刀を見て、それからレピュスを思い出した。

「レピュスに言っておきましょう」

「……そうだな。そうしてくれそうな人物か」

「彼は、東大陸大業物13工自体への興味は無いのだと思います。ただ、呪われし刀を全て集め……自らの呪いを解きたいというだけ」
「それを信用するか」

「カリギュラが、2本……大業物を隠し持っていたな」

「ええ」

「それを餌に、組織に黒の教会壊滅を強力させる事は可能だろうか」
ユウは目を大きくした。

「しかし……」

「すぐには出さない。あとから、偶然出て来たように見せかける。今回のやり取りが、過去の出来事となった頃に話を持ちかける」
ユウの言うことは決まっている。

「ルシエル様の意のままに」

そして、その日。もう1つ、問題が持ち上がった。

ルシエルの部屋がノックされる。

「失礼します、ルシエル様……お時間よろしいでしょうか」
「どうした」

困った様子で、侍女が姿を見せた。その後ろには……。

「どーも！ ルシエル様」

「な……んだと」

さしものルシエルも目を点にした。その声を聞きつけて、ユウが廊下の反対側からやってきた。そして、ユウまでもが同じ顔をした。

「ケイ」

「よお、ユウ！ いやあ、お前があんなに強かったとはな！ お陰で3日寝込んだぜ」

そして、ケイは驚いた事にこう言った。

「悪いが、行き場が無いんだわ。俺、雇ってくれねーかな？」

世にも図々しい男は呆れる主従には気付かないふりで、大きく笑った。

…… 図々しい男（後書き）

あっけない終戦でした。そして、なんつー変わり身の早さ……（笑）
。ダーク・ペガサスのアイドル（爆）ケイ君はもうしばらく活躍？
しそうです。

“ 2つ ” の土産

ルシエルが再び、組織のボスのところへ現れたのはダーク・ペガサスの内乱が終わってから一週間ほどが過ぎた頃だ。

「上手く行って何よりだね」

ボスが微笑みかけると、ルシエルとユウは礼儀正しく頭を下げた。

「約束の通り、白炎をお渡しします……レピュス殿に直接渡した方がいいでしょうか？」

ルシエルがそう言うと、ボスは軽く笑って首を横に振った。

「そうした方が良かったんだろうけど、生憎不在でね……。きちんと渡しておく」

「では、お預けします」

そして、ルシエルとユウは顔を見合わせてから相手の方をもう一度見た。

「それから、1つご相談がありました」

「言ってみて」

気軽に返されたので、少し安堵した気分でルシエルはドアの方を振り返った。

「実は、カリギュラのところから厄介事が舞い込んできています」

「厄介事ってのはないぜ！ ルシエル様」

堂々と姿を現したケイを見て、ボスは……噴き出した。

「な、……あんたってそういう笑い方するのか!？」

「いやいや、余りにもおかしくって」

ボスは口元を軽くひきつらせながら、かつて自分の庭に潜入してきた恐れ知らずの呪術師を見た。

「どういう厄介事が、当てようか？」

「……はあ」

「その愉快的な呪術師君は、今までの主……カリギュラが駄目になった途端ころつとルシエル派に寝返った。拒否しても、無言で退去を命じても図々しく動かない彼の扱いにほとほと困り果てたあなたは試しに、ここへ押しつけてみようと考えた」

「……付け足す言葉もありません」

ルシエルは決まり悪そうに頭を下げた。

「おう？ ルシエル様の低姿勢なんて見る日が来るとはな！」

「ケイ、少し黙りなさい。レピユスさんに渡す為に刀は磨いておいたのです。君を真つ二つにするためではありません」

ユウに刃物そのもののような鋭さを持った言葉で袈裟斬りされて、さしものケイも黙った。

その様子をまた笑って見ていたボスは、あつさりとした返事をする。

「まあ、いいよ」

「……え」

「彼は、この組織の恐ろしさを身を以て体験済みだしね。そうそう裏切らないだろう。ハズスの下にでもつけようかな。呪術と魔導の融合だとかなんだとか……よく判らない研究をしているようだし」

「それ、面白いな！」

ケイは即座に食い付いた。

「ハズスって、あのとんでもねー黒魔導士だろ？ いいね！ ナイスアイデア、ボスっ」

ルシエルとユウは、ケイの変わり身の早さに呆れるばかりだった。

そして、あつさりケイは組織に残されてルシエルとユウは去っていった。

「それでよー、ボス」

「何かな」

「レピュスは外出中だろ？ ルカ様もそーなのかな？」

その瞬間、図々しさとふてぶてしさを売りにするケイでさえ『まずい事を言ったのか』と背筋に寒気を覚えたほどボスの表情は凍り付いた。

「彼は……」

「え、えつと辞めたとか？」

「……いや」

「まさか、死……」

「消えたんだよ」

その言葉が何を意味するかは判らなかったが、それ以上聞いてはいけない事だけは判ったからケイは即座に話を移した。

「それで、俺はハゾスの部下になるわけか」

「うん。他はともかく、彼の事はちゃんとハゾス様と呼ぶようにね。そうでないと、本人じゃなくてその腹心に殺されるから」

「あー、あの……」

ケイは男だか女だか未だに確信を持てずにいる黒魔導士の腹心を思い出した。笑顔で、美しい唇からおぞましい黒魔導の呪文を紡ぎ出す様は中々見応えがあったなと。

“ 2つ ” の手土産（後書き）

ダーク・ペガサス編はこれにて幕。とはいっても、ルシエル嬢とユウはまた姿を見せる予定ですので今後とも宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1130t/>

Eastern-Cursed-Man 【東の呪われた男】

2012年1月4日15時53分発行